

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Texts of tape-recorded conversations in Japanese dialects (Volume 1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002270

方言談話資料(1)

—山形・群馬・長野—

国立国語研究所資料集 10

国立国語研究所

1978

方言談話資料(1)

——山形・群馬・長野——

国立国語研究所

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所では、昭和49年度から同51年度にかけて、「『各地方言資料の収集および文字化』のための研究」という題目の下に、全国各地で方言による談話を録音し、その文字化（標準語訳・注つき）を行った。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料とすることを目的としており、当研究所地方研究員の協力を得て実施された。

その成果は、機を得て、順次刊行する予定であるが、その第一集として、今回本書を刊行することにした。

本書に収めた録音・文字化資料は、専ら、矢作春樹（山形県）、上野勇・杉村孝夫（群馬県）、馬瀬良雄（長野県）の四氏の尽力によるものである。また、話者として、佐直きえ、高梨八太郎、佐直まさゑ（以上山形県）、小林弥太郎、小林よ志ゑ、星野富司、小林喜市（以上群馬県）、清水悟郎、片桐としゑ、小池千勢（以上長野県）の各氏の協力を得たほか、現地教育委員会や有志の助力があった。記して深く感謝の意を表する。

昭和53年3月

国立国語研究所長 林 大

方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部長

飯 豊 毅 一

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

徳 川 宗 賢（現在、大阪大学教授） 佐 藤 亮 一（室長） 真 田 信 治（研究員）

沢 木 幹 栄（研究員） 白 沢 宏 枝（研究補助員）

国立国語研究所地方研究員（五十音順）

秋 山 正 次	愛宕 八郎康隆	五十嵐 三 郎	井 上 章	井 上 史 雄
今 石 元 久	岩 井 隆 盛	上 野 勇	遠 藤 潤 一	大 島 一 郎
大 橋 勝 男	岡 野 信 子	奥 村 三 雄	寛 大 城	加 治 工 真 市
加 藤 信 昭	加 藤 正 信	金 沢 直 人	川 本 栄 一 郎	神 部 宏 泰
剣 持 隼 一 郎	後 藤 和 彦	小 松 代 融 一	斎 藤 義 七 郎	迫 野 凌 徳
佐 藤 茂	佐 藤 虎 男	清 水 茂 夫	杉 山 正 世	田 尻 英 三
種 友 明	玉 井 節 子	近 石 泰 秋	土 居 重 俊	日 高 貢 一 郎
日 野 資 純	広 戸 惇	廣 濱 文 雄	北 条 忠 雄	本 堂 寛
馬 瀬 良 雄	松 本 宙	三 浦 芳 夫	虫 明 吉 治 郎	村 内 英 一
室 山 敏 昭	谷 開 石 雄	矢 作 春 樹	山 口 幸 洋	山 本 俊 治
和 田 實				

「方言談話資料」（1）編集担当者

飯 豊 毅 一 佐 藤 亮 一 真 田 信 治 沢 木 幹 栄 白 沢 宏 枝

収録・文字化担当者（協力者）

山形…矢 作 春 樹 群馬…上 野 勇（杉 村 孝 夫） 長野…馬 瀬 良 雄

目 次

刊行のことば	3
まえがき	7
凡 例	10
I 山形県西村山郡河北町谷地	11
解説	13
1. 冬の藁仕事	19
2. 冬の水汲み	33
3. 山仕事	37
4. 叔母さんの卒倒	48
5. 萱野刈り	53
6. 肥やし金と給金	59
7. 蚕の収入	65
8. 草履作りと小遣い	70
9. 子守り	79
10. 手足による農作業	83
11. 旅行	102
12. 植樹と日照権	107
13. 都市計画と移転	112
14. 田螺と蝗	118
15. 小正月の行事	126
16. 田楽焼き	132
II 群馬県利根郡利根村大字追貝	137
解説	139
1. 雨乞と天気祭	152
2. 壮健芝居	170
3. 干草刈り	189
4. 薬	197
5. 昔の商店	210
6. 昔の菓子・飴売りのおばあさん	217
7. 病気見舞の品物	229

8. 出稼	236
9. 荷の運搬と牛の扱い	242
10. 狼	250
11. 配給と兵役	256
III 長野県上伊那郡中川村大字葛島	279
解説	281
1. 縞手本の話	294
2. 幼いころの遊び	309
3. 昔の嫁入り	332

まえがき

研究の経過

この研究は、昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし、全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い、その結果に基づいて、次年度以降の計画を立案した。

50年度は、全国的視野のもとに重点地域を定め、23の府県から各1地点を選定して、老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化することとした。

51年度は収録地点を4地点減らし、19の府県について、原則として50年度と同一の地点で、(a) 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話、(b) 老年層の男性と若年層の男性との対話、もしくは、両者を含む3人の話者の会話、(c) 場面設定の会話、の3項目についての録音・文字化を行い、収録可能な地域では、付録として、民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については、「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を、全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は、すべて国立国語研究所で整理し、保管しているが、当研究所では、このうち、50・51両年度分について逐次刊行していく予定である。今回は、50年度に収録・文字化を行った老年層話者による談話資料のうち、「山形県西村山郡河北町谷地」「群馬県利根郡利根村大字追貝」「長野県上伊那郡中川村大字葛島」の3地点分について、オフセットにより複製印行する。

話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

1. 老年層話者による談話(50年度)

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が比較的短い人で、日常生活でもっぱら方言を用い、また、録音機を前にしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって、よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が得られないときには、近隣地から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は、原則として収録時において60歳以上とし、やむをえないときは、55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ、高齢者でも差し支えないが、話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また、話者相互の地位・身分関係も、ほぼ対等であることを原則とする。

2. 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話(51年度)

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は、改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをね

らって設定したものであり、対話の具体的な人物像として、たとえば、旧地主階層の人物対旧小作階層の人物、僧侶対その壇家にあたる人物、その土地出身の教員（校長など）対その土地の一般的職業（農業・漁業など）に従事している人物などを候補として示したが、地域の事情もあると思われるので、この点は各地の担当者（地方研究員）に一任した。なお、目上にあたる人物として、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので、在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

3. 老年層男性と若年層男性との談話（51年度）

老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20～30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

4. 場面設定の会話（51年度）

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に、場面に応じて、種々の演技的対話をしてもらった。

5. 民話

特に条件はつけず、その土地で生まれ育った民話の語り手であれば可とした。

司会者

主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し、かつ、司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に、特に条件はつけなかった。

録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量（51年度については、各項目平均20分、合計60分程度）について文字化を行うこととした。また、内容の豊かな文字化資料を得るために、文字化すべき録音量の数倍を録音し、その中から適切な部分（話がとぎれず、しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ、話題の展開が自然であること、など）を選択して文字化することとした。

文字化原稿の作成・表記

1. 将来のオフセットによる複製印行に備えて、一定の様式の文字化用紙を作成し、担当地方研究員に配布した。
2. 文字化は原則として表音的カタカナ表記によることとした。これは、利用者の便宜、文字化作業の能率などを考慮してのことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記も可とした。なお、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については、各担当者が「解説」の中で説明することとした。
3. アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含めて担当者の判断にま

かせた。

4. 聴き取りが困難な箇所や、言いよどみ、言い重なり、言い直し、笑い声などについては、これらを一定の符号で表わすことにした（凡例参照）。

文字化には、標準語訳、および、場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお、標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え、訳が問題となるような箇所については、できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

収録方言・表記・収録内容についての解説

文字化原稿とは別に、収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には、原則として次の事項を記すこととした。

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名
2. 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）
3. 収録した方言の特色
 - ①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係
 - ②音声・音韻上の特色
 - ③文法上の特色

B. 表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての説明など

C. 収録内容の概説

1. タイトル
2. 録音年月日
3. 録音場所
4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など
5. 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

凡 例

1. 場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注は各章の末尾にまとめて記し、該当箇所を本文のそれぞれの位置に番号（かっこつき）で示した。

2. 発言や録音が不明瞭なため聞き取りが困難な箇所には~~~~~線をつけた。

例 エッダクテ エッダクテ。(28ページ12段)

3. 最終的に聞き取り不能の箇所には~~~~~線のみを記した。

4. 言いよどみは、その末尾に-----線をつけた。

5. 複数の発言が重複した場合には、重複部分に_____線をつけた。

例 O ムカシワ ムギコムギ ウント (Kソーイエバネー) ツクッタカラサー。

(153ページ7段)

6. 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分にxxxxxxをつけた。

例 ジベン ジベ ジベタオ フカーク ホッテ (316ページ6段)

7. 笑い声、咳ばらいなどは、(笑)、(咳)のように示した。

8. 同席者の短い発言や突然の訪問者のことばなどは文字化していない場合がある。その際や、録音テープを編集して談話内容の一部を削除した際には、該当箇所に*の符号をつけた。

I。山形県^{にしむらやま}西村山郡^{かほくまちやち}河北町谷地

収録・文字化担当者 矢 作 春 樹

A 収録地点とその方言について

1 地点名 山形県西村山郡河北町谷地

2 収録地点の概観

位置——山形県のほぼ中央部、山形盆地の北西に位置し、山形駅から北へ約20km。

交通——山形駅から奥羽本線で下り約30分、神町駅下車、バスで西へ8km約20分。山形駅から左沢線で下り約30分、寒河江駅に下車、バスで北へ8km約20分。国鉄の駅はないが、バスは、谷地を始点終点として四方に通じており、山形行きのバスなら約1時間で、山形市に達する。

地勢——山形盆地の北西、西は出羽山地、東は最上川に接し、寒河江川の北に位置した寒河江川扇状地で、大体菱形に近い土地を占めている。この東半分(全地域の約7割)が肥沃な平野部で、ここに集落が形成されている。四方を山に囲まれているため、典型的な内陸性気候で、全国最高気温を記録しており積雪量も多い。

行政区画——この地は平安時代の初期に開発され、江戸時代には米・紅花・生糸等の集散の中心地、舟場として発展していた。明治22年に市町村制が実施され、合併前の形をととのえた。続いて昭和29年10月1日、谷地町・西里村・溝延村・北谷地村が合併して、河北町が誕生、翌年、元泉地区の編入などがあり、現在に及んでいる。

戸数・人口——昭和51年1月現在 世帯数 約4,900戸
人口 約22,400人。人口は減少の傾向がある。

主な産業——米づくりが盛んで、昭和43年には米作県一位賞を受賞し、反当収量も全国最高といわれる。また農家の副業としての草履表は全国一の生産高を誇っていた。さくらんぼ・りんご・桃・ぶどうなどの果実の生産、出荷も盛んである。

3 収録した方言の特色

①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

山形県の方言は、北奥方言区に属する庄内方言と、南奥方言区に属する内陸方言とが大きく対立している。内陸方言では、最上地方・村山地方・置賜地方との間に、わずかの対立が見られる。たとえば、「かわいそうだ」の分布の場合、庄内方言はメジョケネ、最上はムゾサエ、村山はムンツコ(サ)エ、置賜はモゴサエ といった分布になっている。

調査地点は、村山地方の方言区に属している。この地域は、江戸時代の政権交替や群雄割拠の影響もあってか、比較的複雑な方言分布を示している。

②音韻上の特色

- (1) 「イ」と「エ」の混同がはなはだしい。「息」も「馱」も「エギ」、「鯉」も「声」も「コエ」であり、「椅子」も「石」も「エス」、「絵馬」も「居間」も「エマ」である。
- (2) 「ス・シ」は「ス」(S ü)に、「ツ・チ」は「ツ」(tS ü)になり、「ズ・ジ・ヅ・ヂ」の区別がなく、すべて「ヅ」(dzü)である。したがって、「煤」も「獅子」も「寿司」も「スス」であり、「梨」も「茄子」も「ナス」、「筒」も「乳」も「ツツ」である。また、「辻」も「地図」も「知事」も「ツ^(ツ)ツ」となる。総じて、「イ」段の母音があいまいで、「ウ」段の母音もややあいまいなため、歯ぎれの悪い発音になっている。
- (3) 「シュ・ジュ・チュ」は「ス・ヅ・ツ」になり易い。そのため、「十二」は「ツーニ」、「主人」は「スツン」に、「手術」は「ス^(ツ)ヅヅ」になり易いが、それほどひどくはない。
- (4) 「冬」を「フヨ」、「雪」を「ヨギ」、「露」を「ツヨ」のようにいう ユ ヨ の現象が、古い年代に残っている。
- (5) 連母音の「アイ」や「アエ」は、庄内・最上では「エー」であるが、村山・置賜では融合を起こさず「アエ」と発音する。したがって、「塀」と「蠅」を「ヘー」と「ハエ」とに言いわ

けている。

- (6) 語中、語尾のカ行子音・タ行子音の有声化が盛んである。
「柿」は「カギ」、「的」は「マド」、「味方」は「ミガダ」と発音される。これは若い世代でも盛んである。
- (7) 語中、語尾のガ行音・ダ行音・ザ行音・バ行音は、鼻濁音となり、「鍵」は「カギ」[kaŋi]、「窓」は「マンド」、「数」は「カンヅ」、「壁」は「カンベ」のように発音される。しかし、若い世代では、聞かれなくなっている。
- (8) 「セ」「ゼ」を「シェ」「ジェ」と発音し、最上では「シェ」よりも「ヘ」に近い。この地点では、「背中」は「シェナガ」、「先生」は「シェンシェ」、「風」は「カジェ」であるが、使役の「……せる」は、「泣ガシエル」とも「泣ガヘル」ともいうようである。
- (9) ハ行音を「ファ」「ファイ」「フェ」「フォ」と発音する現象の中では、「桑・鋏」の「クファ」、「塞ぐ」の「クフェル」が顕著に表われている。
- (10) 「家」や「良い」は「イエ」[je]と発音されるが、[je]音は、山形市を中心に根強く残っている。
- (11) ヤ行子音が摩擦化する傾向があり、「山形」が「シャマカダ」に聞こえる。また、[je]も多少摩擦化する傾向が見られる。
- (12) 「行く」[ŋgu]、「動く」[ŋgogu]のように[ŋ]が語頭にあらわれることがある。
- (13) ニ重子音 [ʃʃ]が語頭にあらわれることがある。
「白い」「シショエ」、「冷える」「シシエル」、「知らない」「シシャネ」、「仕余しする」「シシャマスル」など。
- (14) 濁音が清音化する傾向がある。
「短かい」「ミンツカエ」、「案じ事」「アンツコド」
「座布団」「ザフトン」、「書初め」「カキシメ」など。
- (15) 長音や撥音・促音を十分に発音しない傾向はこの地域にもあり、「在郷」「ザエゴ」、「五合」「ゴンゴ」、「走った」を

「ハシタ」、「食って」を「クテ」という。

(16) アクセント

山形市を中心とする村山地方（北村山郡の大部分を除く）と米沢市を中心とする置賜地方（小国町を除く）には、一型アクセントが分布している。「箸」も「橋」も、「雨」と「飴」も全く区別しない方言である。すなわち、アクセントという概念を持ち合わせていないので、一般には、無アクセント地帯と呼ばれる。収録地点も、一型アクセント地帯に属している。

③文法上の特色

- (1) 推量・意志の助動詞は「ベ」であり、終止形に接続する。したがって「読モー」という形がないので「五段活用」はない。
- (2) 四段活用以外の動詞、ラ行四段活用の動詞の連体形に「時」「事」が接続するときは、「着ッドギ」「来ッゴド」のように「ル」が促音化して「ッ」になる。
- (3) 尊敬命令法「～なさい」の意味で「～シャエ」を使う。
- (4) 「～しなければならぬ」は「書ガンナネ」「生きランナネ」のように、「ンナネ」「ランナネ」を使う。
- (5) 「タ」を過去のほか完了として特に現在のごとに使う用法が著しい。大過去や過去回想のときには「タケ・ダケ」を使う。
- (6) 自然にそうなったことを表わすには「ラテ・ラタ」を使う。「朝5時に起きラタ」（自然に起きる結果になった）
- (7) 上一段・下一段活用の動詞に続ける使役の助動詞は、「植エラシエル」「着ラシエル」のように、「ラシエル」を使う。
- (8) 可能の助動詞は、「レル・ラレル」も用いるが、「来るエ」（来られる）「見るエ」（見られる）「笑うエ」（笑える）のように、終止形に「エ」をつける用法が特に盛んである。
- (9) 主格を示す「が」「は」、対象を示す「が」「を」などは、使わない。対象を強調して、「俺バ叩ぐな」とも言う。
- (10) 連体修飾語を作る「の」は「ナ」や「ヌ」に変化し易い。「俺ナ手」「お前ナ本」「松ヌ木」「桑ヌ木」など。

- (11) 場所・方向を示す「サ」の使用は盛んで、「山形サ泊まる」「学校サ行く」のように使うが、目的の用法は使わない。
- (12) 理由表現は「サゲ」「ハゲ」と「カラ」を併用しているが、「サゲ・ハゲ」が古いと思われる。
- (13) 仮定表現は「読めバ」はほとんど使われず、「読ムゴントラ」「見ッゴントラ」「見ッコントラ」「読ムゲバ」などが盛ん。
- (14) 一般に、形容詞の活用が退化して不活発になっている。
- (15) 下ねい表現の「甘ごいッス」「行くッス」のような「ッス」が多く使われる。
- (16) 強意の助詞には、「ハー」「ザー」「シタ」などがあり、複雑なニュアンスをもっている。
- (17) 「ホニ」「ヤッパリ」「ホレ」など、間投助詞に転成しかかっているものが多い。

4 地点選定の理由

- ① 昨年の予備調査の際に、方言保有量が大で、記憶も確かであり、発音がはっきりしている しい話者を得られたこと。
- ② 地方研究員（文字化担当者）が生まれ育った土地なので、文字化や標準語訳しやすく、確かめやすいこと。

B 話者・録音環境など

1 昭和50年12月1日 録音

2 山形県西村山郡河北町谷地庚21(下小路) 佐直まさゑ宅

3 話し手

A 佐直 きえ (女) 明治36年生まれ 農業

谷地生まれの谷地育ち。現住所は録音場所(佐直まさゑ宅)の隣で名子。若い頃から大人にまじって農作業に従事していたため、方言保有度がきわめて高く、話題も広く記憶力が抜群で話し好きである。声に張りがあり発音もはっきりしている。マイクにも慣れており、語尾で自問自答するのは、古い方言調の語り口で、得がたい方言の話し手である。語り調子は早口ぎみである。

B 高梨ハ太郎 (男) 大正3年生まれ 農業 建設会社社員

谷地生まれの谷地育ち。16歳の年から10年間、佐直まさゑ宅に住み込みで下男奉公、結婚後は筋向いの生家に居住。その後も同家の農作業を手伝っていた。その間、佐直きえ、佐直まさゑと一緒に農作業をしており、話し好きで話題が合う。年令に比べ方言の保有度は高いが、やや早口で口の開きが小さいせい、わずかにとちりの口調がみられる。

C 佐直まさゑ (女) 明治34年生まれ 農業

村山市湯野沢生まれ、結婚以来現在地に居住。隣接市のため方言上の差異は目立たないが、話の引き出し役になってもらった。長寿の家系にあるため方言保有は高いが、ややインテリ的である。担当者のお伯母にあたる。

4 録音環境

- ・同席者は、話し手と文字化担当者の4人。
- ・同席者は、全員が気のおけない者同志なので、話はスムーズに進行した。しかし、仲間うちすぎるために、あいづちが多く、疑問や聞きかえしなどの語形が出にくかった。指示語の出かたが多かったのも、そのせいであろう。
- ・部屋が道路に近いので、車の音がしばしばはいつていた。

1. 冬の藁仕事

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
B 高梨八太郎 男 大正3年生まれ
C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A フヨナノ ナエデカンドー⁽¹⁾ ホレハ⁽²⁾ ユギ フッド アレダッス⁽³⁾
冬 など 何はともあれ ほれ 雪^(か) 降ると あれだし
シャキショーシューダ ワラスゴドツダナ オドゴデモ
百姓衆達^(は) 藁仕事だよな 男 でも
オナゴデモ。
女 でも

B ンダー ハゲゴ⁽⁴⁾ アンダリ ホレー ミヌ アンダリ (A ンダ)
そう 藁かご 編んだり ほれ 蓑 編んだり (そう。)
タラ アンダリ ダケッダナナー。
俵 編んだり だったよな。

A ンダダレッス⁽⁵⁾。ホダーナ オラダモ ンダケチャー。アノ
そうですよね。 そんな 俺達も そうだったな あの
オドツァ⁽⁶⁾ チャ アエデナテ ホノ アサゲ ハヤーク オギデ
父親 に 相手^(に) になって その 朝 早く 起きて
ワラ ブダンナネケヅー。 (C ンダモナエヤー) ホリヤー
藁^(を) 打たなければならなかったな。 (そうだよな。) ほら

ドゴ⁽⁷⁾ダテ ホノ ドンカ⁽⁷⁾ェンコジヤ フツタベ シェン⁽⁸⁾ニー。
どこ(の家)でだって その 藁打ち は 打ったろう 昔 (は)。

(C ンダ。笑) ハエツ⁽⁹⁾ コンド テーサ シビ⁽⁹⁾ キツデナレ
そう。 それ(か) こんど 手に ひび きれてな

コンド (笑) フラブツスッドヨ ホレ。 (C ヒビギデナ⁽¹¹⁾エ)
こんど 藁打ちするとよ ほれ。 (響きで ね)

ホリヤ ドゴソゴデ⁽¹⁰⁾ イェノマエデナー⁽¹⁰⁾ フラ ブツテダハナテ⁽¹¹⁾
ほら どこそこで 家の前(の家)でなど 藁(は) 打っているよなんて

ヤッデ⁽¹²⁾ ホシテ。 ナエ⁽¹²⁾ダテ ミナ アノ ツツボード⁽¹²⁾ アオデ⁽¹³⁾
言われて そして。 なんだって みな あの 槌棒と 掛矢で

ブダネゲバ⁽¹³⁾ フラ ツカワンナエナダモナヤ。 フラブツキカエナテ
打たなければ 藁(は) 使われないんだものな。 藁打ち機械なんて

(B ンダ) ナエッス ホレ。
(そう) ないし ほれ

B アエツ⁽¹⁴⁾ オ ヤッパリ シタリ オドゴ エダ⁽¹⁴⁾ イエーデナノ
あれ お やっぱり 二人(の) 男(か) いる 家でなんか

ナエデカンデ⁽¹⁴⁾ ドンカ⁽¹⁴⁾ェンコヨナエハ。
何はともあれ 藁打ち よね

A ンダー オラ オナゴダテ テツダ⁽¹⁵⁾エ サヘラッダツ⁽¹⁵⁾ー。 アサケ⁽¹⁵⁾
そう 俺は 女なのに 手伝い させられたな。 朝(方)に

イエー エダドギヨ⁽¹⁶⁾ー ハヤーク オゴサッデ⁽¹⁶⁾ ホシテ オラエノ
(笑)家に いたときよ 早く 起こされて そして 俺(の)家の

カガサ⁽¹⁵⁾ ママツメデ⁽¹⁶⁾ オレ ホレ フラブツ サンナネケツ⁽¹⁶⁾ァナエ。
母親(か) 炊事 で 俺(か) ほれ 藁打ち しなければならなかったわけよ。

(C 笑)

B アオ タガテガー。

掛矢(佐) 持ってか。

A ンダー。 テヅ ンダ^スエスロナテ ヤッデ^ス ホシテ。ホシテ コンド
そう。 手伝いしろなんて 言われて そして。そして こんど

ニナ ナウナナテ ユード ホリヤ アノ。 *ホレガラ アノリヤ
荷縄(佐)なうのなんて 言うと ほら あの。 それから あのあれ

ミヌ ツグンナ ミゴ。 (C ンダー ミゴナヤ。) アエツナノ
藁(佐) 作る 藁(佐)。(そう 藁(佐)しべな。) あれなんか

ホダナ ナンカエモ ブダンナネデ。 サンカエモ ブダンナネデ。
そんな 何回も 打たなければならぬだろう。 三回も 打たなければならぬだろう。

エツ⁽¹⁷⁾ンドゲ⁽¹⁷⁾ ホダエ ヤッコグ⁽¹⁷⁾ ホダエ ブダンナエモ。
一度で そんなに 柔かく そんなに 打てないもの。

B ブダン ブダンナエ ケモナエ。
x x x 打てなかったものね。

A ンダー エツ⁽¹⁷⁾ンドエ……
そう 一度に

B エギデ⁽¹⁸⁾ キテ ワガンナエ ケモ。^{*}
生きて きて だめだったもの。

A ン ンダー。 ホレガラ ホレ ゴデ⁽¹⁹⁾ナ ナウナ ミゴ⁽¹⁹⁾デ
ん そうだ。 それから ほれ 細縄(佐)なうの 藁(佐)しべで
サンナネケドレ。 タラ アム ゴデ⁽¹⁹⁾ナ……。
しなければならなからたろう。 俵(佐) 編む 細縄

C ミナ ミゴ⁽¹⁹⁾ダケモナエ ホンテ……。
全部 藁(佐)しべだったものね ほんとに

A ハゲゴ⁽¹⁹⁾ アムナ ナヤ。 ミナ ホレ ミゴ⁽¹⁹⁾ナワジャ ナッタ
藁(佐)かご(佐) 編むの なあ。 みんな ほれ 藁(佐)しべ 縄は なった

モノヅダナ ンダゲ。⁽²⁰⁾ ンー。 ホレガラ オゴサマノ リヤ コー
もんだよな だから。ん。 それから 蚕の ほら こう

ナワアミ リヤー (ン) アエツモー アレダケデ ワラ ンデ
縄網 ほら (ん) あれも あれだったろう 藁で

コー コンデナ ナッテ ホシテー マロコグ コー コヘダ⁽²¹⁾
こう 細縄 (糸) なって そうして 丸く こう 作った

モンダダレ イェ ンデ。(ンダ ンダナ) ンー。 シトーフユ
もんだものな 家で。(そう そうだ) ン ー 冬(中)

ワラスゴドヨ。オドゴシューダテ ホダナ ワラ ンヅノ ホダナハ
藁仕事だよ。男衆でも そんな わらじの そんな

シトナヅ サンニンモ ヨッタリモシテ ハッコロ ミナ ツクテ
一夏 三人も 四人も で 履くぐらい みんな 作って

オガンナネナダハゲナヤ。(ンタンートナー)
置かねばならないんだかな。(たくさんあ。)

B ンダ。ツマゴワラ ンヅガラ⁽²²⁾ ナニガラダケハゲナヤ。
そう。爪掛わらじはじめ 何もかも だったからね。

A ンダ。タガジョナテ⁽²³⁾ ナエッス エッソー⁽²⁴⁾ ワラ ンヅダドレ。
そう。地下足袋など ないし すべて わらじだものね。

(ンダ) ハゲゴガラ ミヌガラ ニナガラ ミナ ナッテ
(そう) 藁かごから 蓑から 荷縄から みんな なって

オガンナネドレハ。⁽²⁵⁾ニナナエナテ ユード ドゴンデモ ホダナ
おかねばならないものな。荷縄ない なんて 言うと どの家でも そんな

ワラブヅナヤ。(ンー) (笑)
藁打ち(だよ)な (ん)

B ンダ ホシテー ニナナエテ ユード リヤ キューショーガヅノ
そう そうして 荷縄ないって いうと ほら 旧(の)正月の

ジューエツニツーダモナエ。

十一日 だものね。

A ンダ シシテ ンデ (Bン) ナワンナネナダケモナエ。
そう 一日 で (ん) なわなければならなかったんだものね。

B ホシテ ン トーガノ ヒー ミナ ブツテデ ホリヤ (Aンダ)
そして ン 十日の 日に 全部 (藁) 打っておいて なあ (そう)
ツカラモツ⁽²⁶⁾ クテナレ (笑) (Aホンダ) キナゴモツ クテリヤ
カ餅(を) 食ってな (そう) 黄粉餅(を) 食ってな
(Aンダー C笑) ホシテ ハダツナダモナエ。(Aンダー ホシテ)
(そう) (そして とりかかるんだものね (そう (そして

ホノヒデ ニナダーゲ ホノヒ ミナ ナウケナヨ ドゴデモ。
その日 で 荷縄だけ(は) その日(で) 全部 なうんだったよ どの(家)でも。

A ンダ マエガラ ワラ ブツテ オガンナネケツ ヤッコグナヤハ。
そう 前 から 藁(を) 打って おかねばならなかったよ 柔かくなあ。

(Bン一) ホシテ ホレ ジューエツニツ シシテ ンデ ホレ
(ん) (そして ほら 十一日 一日で ほら

エツネン ツカウナ シトナツ ツカウ ニナ ペロット ミナ
一年で 使う分を 一夏 使う 荷縄(を) すっかり 全部

ナワンナネナダド。 デ ミンツカエナガラ ナンガエナガラナヤ。
なわねばならないんだもの。 短い のから 長い のから なあ。

(Cン一) ダエーブ ナワンナネケチャ オレ ホダナ。
(ん) (かなり なわねばならなかったな 俺 そんな。⁽²⁷⁾

C ンダッダナー。
そうだよなあ。

A ニナダテ ジュー スゴホンモ ナエゲバ タンナエケベ。^{*}
荷縄 だつて 十四・五本も なければ 足りなかったろう。

C バガハゲゴナ⁽²⁸⁾ ナンボー コシエツケ オマエ。(A ンダー)
大藁かごなど いくつ 作ったもんだ おまえ(は)。(そう)

B バガハゲゴナ アリヤ クファ⁽²⁹⁾ ヘレンナ バガハゲゴナエ。
大藁かごなど あれ 桑(を) 入れるの 大藁かご ね。

(A ン オッキナ) シト シト⁽³⁰⁾ ハエルエクラエナ。(笑)
ん 大きな $\frac{\times}{\times}$ 人(が) 入れるくらいの。

A シト ハエテ ネデルエクラエナナヤ オツケナ バガハゲゴ
人(が) はいって 寝てられるくらいの な 大きな 大藁かご(を)
ナンーボモ。
いくつも。

B ジューゴガンメガラ ニヅツカンメグラエ (A ンダ) ハエンナナエ。
十五貫目 から 二十貫目 ぐらい (C そう) はいるのをね。

A ニヅツカンメグラエ ハエツケモナヤ アノ バガハゲゴ
二十貫目 ぐらい はいったものね あの 大藁かご

オツケナ。(C ンダー) ハエーツ アンデ オガンナネッスホレ
大きい。(そう) それを 編んで おかねばならないしな

コンド コダナ ツツチャエナ ホリヤ ホノ アレ ママ モテ
また こんな 小さな ほら その おれ ご飯(を) 持って

アラグナガラ (B ベントハゲゴナー) イェ アンバエナ⁽³¹⁾ コンド
行くのから (弁当 藁かご な) 手頃な こんど

ホレ チュークラエナガラ ホレ スコス オツケナガラ
ほれ 中くらいの から ほれ 少し 大きいから

C スコス オツケ ハゲゴガラナ。
少し 大きい 藁かごからな

A ンダー ハゲゴダテ ヨードリモ エツドリモ ホレ
そう 藁かごだけで 四通りも 五通りも ほれ

アマンナネドレナヤ。

編まねばならないものね。

B マメ マグ⁽³²⁾ ハゲゴナ ツチャコーク(笑) コシエデ
豆(肉) まく 藁かごなどは 小さく 作って

オガンナネケッスナ。

おかねばならなかったしな。

A ンダ マメ マグナナ チェツチャエナ (B ン) マダ
そう 豆(肉) まくのなど(は) 小さいの(か) (ん) また

エツダッス ホレ。ホナーテ ショッデンナ ミナ
必要 だし な。ほんとに 昔は (なんでも) みな

ワラザエグデバリ シテ ホレ マンニヤワシェツダナツア ホレ
藁細エ だけばかり 作って ほれ 間に合わせていたんだよな

ヒヤクショノ ドークワナヤ。 ミヌダテ スケナクテ
百姓の 道具は な。 藁だつて 少なくつても

シトリチャ ホレ シタツツツツワ ツグランナネケッス ホレ。
一人に ほれ ニつ ずつは 作らねばならなかったし。

B ンダ ヌツダ ドギ コーダエ サンナネヅ (A ンダ) スナナ。
そう 濡れた ときに 交代 しなければならぬから (そう) (交代) するの。

A カ カワンナ ナエクテジャナヤ。 ヌツダ ドギ キンナ
代わるの(か) なくつて はね 濡れた とき 着るの(か)

ナエクテ。 ホーダハゲ ホダナ エッケンノ イエーデ
なくつて たから そんな 一軒の 家で

サンニンモ ヨツタリモ トモデサ デハテ エンナダモノ
三人も 四人も 野良に 出て いるんだもの

ホダナ ハエツバリモ タエヘンダド ホレ。 ミヌツグンナバリモ。
そんな それはばかりでも 大変だよ な。 藁作るの だけども。

ホ^ンダ^ーハゲ ヨスゴドジャ サンナネケツダナ ショッデー^ン。
だから 夜仕事は しなければならなかつたんだ 昔は

B ^ンダ^ー ヨスゴド^ン サンナネケツ^ダナナエ。
そう 夜仕事(を) しなければならなかつたもんだよな。

A ^ン ジューツ^ン コロマ^ンデ^ンナー マエバン^ン サンナネケドレ。
ん 十時 頃までは 毎晩 しなければならなかつたものだよ。

^ンナエゲバ^ン ハル トモデ^ンサ デハルマ^ンデ^ン ワラスゴド^ン デネケモ。
そうでないと 春(に) 野良に 出るまで 藁仕事は 終わらなかつたもの。

タラダテ^ン ナンジュー^ンダラド^ン ホレ アンデ^ン オガンナネツ^ダッス
俵だつて 何十俵と ほれ 編んで おかねばならなかつたし

ホレ。*

ほれ。

B タラ アンデ^ン ハゲゴ^ン アンデ^ン (A ^ンー) ミヌ アムド^ン
俵(を) 編んで 藁かご(を) 編んで (^ん) 藁(を) 編むと

ヤッパリ ミヌ デネ ドキ アッケツ^ハ。
やっぱり 藁(が) 完成しないとき(が) あつたもな。

A ^ンダバ^ー (B ^ンー) ヤッパリ ミヌジャ^ン アエツ^ン テマ
そうだろうな (^ん) やっぱり 藁^ッつて あれは 手間(が)

カガ^ンモナヤ^ー。

かかるもね

B テマ カガルナヤ (A ^ンー) ナンボ^ン エッショケンメ^ニ ナタテ
手間(が) かかるな (^ん) いくら 一生けんめいに なつても

ヨッカグラエ^ニ カガツケモナ。 (A ^ンダバ^ー) アマゴエサ^ニ
四日ぐらい(は) かかるんだつたものな (^ん そうだろう) 首の部分に

ヒシテハンカ (A ^ンダバ^ー) フツガ^ニ カガツケモ。 スコース
一日半か (^ん そうだろう) 二日は かかるんだつたもの。 少し

キレニナ スッド マル フツガ カガツケモナエヤ。
きれいになんかすると まる 二日 かかるんだったものね。

(A ンダベナー) アノリヤ ウツシヨノ ホーノ コー カヅリ
(そうだろうな) あのほら 後ろの 方の こう 飾り

ツケンバー (A ンダー) アエツダド フツガ カガツケジェ。
つけるだろう (そう) あれだと 二日(は) かかるんだったもの。

A ンダベナー ヤッパリ。
そうだろう やっぱり。

C ホシテ コンド ハエツ ユギサ コー ツケデナエー⁽³⁵⁾。(B ン)
そして こんど(は) それを 雪に こう 浸けてな (ん)

B スグ⁽³⁶⁾ ヌゲデナエ。(A ンダー) ホノママ⁽³⁷⁾ キッド アリヤー
洗(を) 抜いてな (そうだ) そのままで 着ると あれ

アガグ⁽³⁸⁾ ナテ (A ンダデレナヤ) ミンツァ⁽³⁹⁾ ツケネド アノ
赤く なって (そうだもな) 水に 浸けないと あの

ミゴノ スグデヨ (A ン) アガグ ナンナヨネハ。
蒸(べ)の 洗(で)よ (ん) 赤く なるのよなあ。

A ンダー。 ミゴ アエツ ヤッコグ ブダネド ホレ
そう 蒸(べ) あれは 柔らかく 打たないと ほら

ワガエモナヤ ミヌモ ヨワクテ。(C ン) ンダゲ ヤッコグ
だめだものね 蒸(も) 弱(く)って。(ん) だから 柔らかく

ブダンナネケドレ ミヌ ツグンナー。

打たねばならなかったんだ 蒸(を) 作るのは

B アノー ハルサギ⁽⁴⁰⁾ キテ アラグド ダンダエ オダレツケモネ
あの 春(先) 着(て) あるくと だんだん 折れるんだったものね

カダエドネハ。
堅(い)と ね。

A ンダ。 カッタエド ミナ モゲデナハ。
 そう。 堅いと みんな もげてしまってなあ。

B ホンデモ ヤンダクテ ホダナ ミゴブツ ヤンダクテ カッタグ
 それでも いやで そんな 藁バ打ち(が) いやで 堅く
 ブダラネナヨナヤ。⁽⁴¹⁾*
 打たらないのよな。

A アノ ドンケンコ オラ イェエ エダ ドギ テツダエ
 あの 藁打ち は 俺 家に 居た とき 手伝いを
 オドツァチャ サンナネクテ。(笑) シビー コゴラ ミナ⁽⁴²⁾
 父親に しなければならなくて。 ひび(が) この辺(に) みんな
 キッデナヤ。(B 笑)
 切れてなあ。

C ヒビギデナヤ。(A ヒビギデ) ンー (A ンー)*
 響きで なあ。(響きで)

A ンー ホシテ ヨルー コンド ユサナノ ハエッド スモテ⁽⁴³⁾
 ん そして 夜(は) こんど 風呂になど はいると 滲みて
 コンド。 ハネアガッコロ エツダクテナヤ。(笑) ホーシテ
 こんど。 跳び上がるほど 痛くて な そうして
 コンド テーデバ ミナ オマエ ワッデ リヤ。(C ンダー)
 こんど 手といったら みな おまえ 割れて リヤ。(そう)
 アレー ヨル ネッドギ アガギリノ コーヤグ コンド(笑)
 あれ 夜 寝るとき(に) あかぎれの 膏薬(を) こんど

ツケデ ネランナネケドホレ ホダナ エツダクテ エツダクテ。
 つけて 寝なければならなかったもんだ そんな 痛くて 痛くて。

B アグド アダリア (A ンダ アガギリ) オドゴシト ホダンデ
 かかとの 辺は (そう あかぎれ) 男の人(は) それほどでも

ナエゲント オナゴシトダケツナエ ドツツガテ ユード
ないけれど 女の人だったよな どっちかと いうと

アガギリ キラスナナヤ。⁽⁴⁴⁾

あかぎれ(を) 切らすのはなあ。

A シーダ アエツ アレダ⁽⁴⁵⁾ベ ナベ アロエ スツサゲ ホレ。
そう あれは あれだろう 鍋 洗い(を) するから ほう。

アグー アエツ……

灰は あれ(は)……

B ア ススー (A ン) ミダ⁽⁴⁶⁾エナデ ノアエツデガ……
あ 煤 (ん) みたいので のあれでか……

A アグ^x アグ^x ツケツケデ^x アリヤ (B ンー) キアグ ツケデ^x ナベ
灰(を) つけるんだった ありゃ (ん) 木灰(を) つけて 鍋(を)

ミガツケデ^x ハガ⁽⁴⁷⁾マ (B ンー) アエーツ アノ アグ スモウ
磨いたもんだろう 釜 (ん) あれは あの 灰(は) 滲みる

モンダモナ (B ンー) アノ ワツダ ドゴサ⁽⁴⁸⁾
もんだものな (ん) あの 割れた ところに

注

- (1) 「何でも彼でも」が原形。何はともあれ・何はさておき・とにかくといった意味であるが、しょっちゅうの意味もある。
- (2) 間投助詞 語勢を添える。相手の関心を呼びおこすニュアンス
- (3) 屋外の農作業はできないし というつもりだったとのこと。
- (4) 農作業をする時に使う籠。腰に下げる小さなものから背負ったり車で運んだりする大きなものまで、さまざまの大きさがある。水田地帯では藁を原料にし、山村ではマタタビやあけびづるなどで作る。また竹製のものもあり、庄内では魚籠(びく)をハケゴという。
- (5) 語尾の「ッス」は、敬語(丁寧)の意をふくむ終助詞。内陸一円に分布し、使用頻度が高いが、仲間うちの方言には出てきにくい。
- (6) オドツァは、「お父さん」の意の位相語で、おとうちゃん・とうちゃん・おっちゃん・おどつぁ(おっつぁ)・おど・ちゃん、などの順に家格が下がるとされていた。チャは、格助詞「に」にあたり「サ」と同じ。村山地方・最上地方一円に分布。
- (7) 藁を二人で打つ時の音から、藁打ち のことをさす。
- (8) 「先(せん)に」が原形であるが、「皆は」という意に使われる。
- (9) 間投詞的用法 語勢を添え、語調をつける。
- (10) 両隣のうち、玄関側の隣家を イエノマエ、裏側の家を ウラ(ウラノイエ)という。
- (11) ブッテダは 過去や完了でなく、現在「打っている」という意味である。マダ ハシッタ は「まだ走っている」ことで、オレモ ミッタ は「私も見ている」ことである。「た・だ」の変則的な用法であり、誤解をまねきやすい。
- (12) 藁を打つ木槌、直径20~30cmぐらい 座って使う。
- (13) 柄が長いので立って、あいづちを入れる。
- (14) 「た」の現在的用法。
- (15) 「お母さん」の意の位相語。「サ」が「さん」にあたる敬語。
- (16) 「ママジマイ」ともいう。
- (17) 一時にが原意。
- (18) しめり気をふくんできて繊維が硬くなって

- (19) 藁しべでなった細縄。太さ3mmぐらいで左ないにした。小手縄?
- (20) 自分でうなずいている。古風な語り口で、この人の特徴である。
- (21) 拵えた
- (22) 爪先に藁でつまをかけたわらじ。冬や萱蒔りなどのときにはいた。
- (23) 刺子の足袋で、昔、鷹匠がはいたことから名称が出たと思われる。
- (24) 一層が原意。
- (25) 背負い縄をなう年中行事。荷縄は、縄の中程を直径3cmほどに大きくし、左ないのない方で、三本ないにした。
- (26) 荷縄ないの前に食べる餅。力が出るように、そして、いい荷縄がなわれるように縁起をかついで命名したもの。
- (27) 望ましくない気持ちを相手に印象づけるために添えるような用法。
- (28) ばかでかい という感じで、特大の藁かごのこと。
- (29) kFa クは無声音。Fa は古音の残存と思われる。
- (30) ハエルエの「エ」は可能の助動詞。「ネルエ」は「寝ることができる」「ハスルエ」は「走ることができる」であり、終止形の動詞に接続する。
- (31) 「良い按配」・適切な などの意。
- (32) 豆まきのときに、種豆を入れて腰にさげる。
- (33) 「時」であるが「場合・こと」の意で使うことが多い。
- (34) 藁の首のあたりの飾りをつけた部分。ひょうたんや草花の模様など作り手それぞれが、独特な編み方で、腕を競ったものである。
- (35) 雪の上にさらして、渋を抜いたり、白くしたりする。
- (36) 「ヌゲデナエ」は「ヌイデナエ」のねじれ。
- (37) 渋を抜かないで の意。
- (38) 下着や衣服が赤らむこと。
- (39) 「ミヅサ」の縮音。
- (40) 藁しべが折れてもげてしまうことをさしている。
- (41) 堅くきり打てなかった というべきところが ねじれたもの。
- (42) 手の甲を指しながら
- (43) 「ユ」は、湯も風呂もさす。

- (44) 「キレルノワナヤ」のねじれ。
- (45) 鍋洗い・釜洗いは、毎日の女性の仕事であった。木灰で磨いて光らせておくのが、女性のたしなみであった。
- (46) 鍋・釜の尻にこびりついた煤。方言では「ヘソビ」という。
- (47) 「齒釜」が語源。釜のこと。
- (48) あかぎれ のこと。

2 冬の水汲み

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

B エマミデ⁽¹⁾ ユギー スクナエド イェーゲント ムガス (A^{ンダー}。
 今(は)みたい(に) 雪(が) 少ないと 良いけれど 昔(は) (そう
 C^ンー) ウガエモンダハゲ⁽²⁾ ホダナ サンダンモ ヨンダンモ (笑)
 ん) 多い もんだから そんな 三段も 四段も

(A^{ンダ}) オッデッテナ⁽³⁾エ コンドナヤ。
 (そう) 降りて行ってな こんどね。

A ンダ (C^ンー) カワバダ⁽⁴⁾サ カエダン ツケデナヤ。 (C^{ンダ})
 そう (ん) 川端に 階段(を) つくてな。 (そう)

エマ コダエー ホンテ ユギ スクナクテ ラグエ ナタゲント
 今(は) こんなに ほんとに 雪(が) 少なくて 楽に なったけれど

コラエ ホンテ……。

これは ほんとに……。

C ンデモ マエニ ホレ ジドーシャナテ アラガネーケハゲ⁽⁵⁾テ……。
 でも(は)前に(は) ほら 自動車なんて 通らなかつたから……。

(A^{ホンダ})
 (そう)

B ンダ バシャーダケハゲナエ (A ンダー) バゾーリ。 ンダハゲ……。
そう 馬車 だったからね (そう) 馬轆(とか)。 だから……。

A フロダテ ナエダテ ミナ カワガラ クンデ ワガサンナネケドレ
風呂でも 何でも みんな 川から 汲んで 沸かばならなかったもの
ムガスナヤ。
昔(は)なあ。

C テオゲデナー。
手桶 でなあ。

A ンー テオゲ シテ アダーナ オモダエナ。(C 笑) バケツナテ
ん 手桶 そして あんなに 重たいの () バケツ なんて
ナエケッサアレ テオゲデ。(C 笑)
なかったしね 手桶で。()

B キンナ ミダ⁽⁶⁾エダド アエ نداケツナヤ (A ンー) アノリヤ
昨日 みたいたと あれだったよな (ん) あのほら

バケツン ナガハ ミナ コーリデ (A ンダー) ホンテ シシャグ
バケツの中などは みな 氷で (そう) ほんとに ひしゃく(が)

ハエルクラエトカ (A 笑) ナエ^x ナエクテナエ。(C ンダ) (笑)
はいるぐらいきり () (開いて) なくてね。(そう)

A アッ⁽⁷⁾ツグ⁽⁸⁾ スカ^o ハツテナヤ。
厚く 氷(が) 張ってね。

B ン スカ^o ハツテ。 シテ ドゴンデモ アリヤ ソラ イエード
ん 氷(が) 張って。 そして どの家でも あれ 天気(が) 良いと

ソドサ ダシテナエハ (A ンダー) トガスケデハー。
外に 出してね (そう) 解かすんだったものな。

A ソドサ ダシテ トガスケダレ。 テンピサ アデデナヤ。
外に 出して 解かすんだったな。 天日に あててなあ。

B ホッダナ……。
そんな……。

A ホダナゴド エマ ナエモナヤ。
そんなこと 今はないものね。

B ン トガスナテ⁽⁹⁾ オンスエキナテ ナエッス (A ホ^x ホダー)
ん 解かすなんて 温水器⁽¹⁰⁾なんて ないし (そ そう)
ヤガンサ シトヅグ⁽¹⁰⁾ラエ。ヤガンダテ シトヅトカエ ナエケテ
やかんに 一つぐらい。やかんだって 一つきり なかったもの
ショッデンナナヤ。(A ン^ーダー ン^ー) シタツツモ ミツツモナテ。
昔などには なあ。(そう ん) ニつも 三つもなんて。

ポットナテ ナエッス。(A ン^ーダー)
ポットなんて ないし。(そう)

C テヅノ (A ナ^エ デカンデモ……) ⁽¹¹⁾チャカスナー。
鉄の (いっつもきまって) 湯沸し(で)なあ

A ン^ー シ^ー タエデ⁽¹²⁾ ワガシテナヤ エロリサ。ホ^ン^ーテナヤ^ー。
ん 火を たいて 沸かしてなあ いろりに。ほんとになあ。

C カグマデ⁽¹²⁾ ゴハン タエデナエ。(A ン^ー)
小柴で ご飯を 炊いてなあ (ん)

注

- (1) 近年雪が少なくなっているので、近年のように という意味。
- (2) 雪の階段の段数。平地の積雪が1m50ぐらいあった。
- (3) 「落ちて」と「降りて」の語形が同じである。
- (4) 水汲みや炊事用具洗いなどは、すべて、表通りに沿った小川でやっておった。そこをカワバタと言っていた。
- (5) 通りで働いていても危険ではなかった と続けるつもりだった。
- (6) 昨日は冷えこんでマイナス11度であった。「すごく冷えこんだときには」という意味
- (7) すごく厚く という意味。強意の表現なので促音を強く言う。
- (8) 氷一般をさすが、水面にはったものをいう。村山地方、置賜地方に分布している。庄内・最上・北村山北部では ^{つら}氷柱をスガという。
- (9) 「解かすにしても」の意。「トガスナテ ユテモ」のねじれ。
- (10) 言いかけ であって、「……湯を滞して解かす」という意味のことを言うつもりだったという。
- (11) 鉄びんのこと。元来は「茶沸し」→チャワガス→チャーガス→チャガス と変化したと思われる。
- (12) 「……大菱だった」の言いかけ。
- (13) 杉の小草や小柴や笹などを刈り集めたもの。杉の葉や松の葉も混じっており 干してかまどの焚き物として好適であった。

3. 山仕事

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治 36 年生まれ
B 高梨八太郎 男 大正 3 年生まれ
C 佐直まさゑ 女 明治 34 年生まれ

B タギモノ ショエダラ エガンナネケツダナ ナヅナエ
焚き物 背負いには 行かねばならなかったもんだな 夏(になると)ね。

⁽¹⁾
ンダゲナエ。
だからねえ。

A ンダー ヤマサ。ヤッパリ オラエデナホレ オラエノ
そう 山にね やっはり 俺家でなんかね 俺家の
ジツカデナー ヤマ ナエケハゲテ ホレ タナギー⁽²⁾ジャ
実家でなんか 山(が) なかったから ほら まき(薪)は
カウケツダナナヤ。(B ンダ タナギ^o) ホレ ヒト フヨ⁽³⁾……。
買ったもんだよな。(そう まき) それ 一 冬

C ヤマデナー。
山でね

A ン⁽⁴⁾ ヤマデ^o カツテ。(C ン^o) ヤマデ^o カウド
ん 山で 買って。(ん) 山で 買うと
ヤッスエナテヨ。(C ン^o) ホシテ ホレ オラ^oンダ
安いなんてよ。(ん) そして ほら 俺達(は)

エガンナネケツー ホノ アエマニ ホリヤ。ターノ スゴド
行かなければならなかつたな。その 合い間に ほら。 田の 仕事(巻)

シタ アエマニ。(C ンー) エガンナネナ キー ショエ。
した 合い間に。(ん) 行かなければならぬの 木(巻) 背負いに。

(C ンダンタ) ンダード オメ ホダナ ショエダスナデ⁽⁵⁾ コゴラ
(そうそう) そうすると お前 そんな 背負い出すので このへん

シェナガ ムゲツケツ オラ ホン……。
背中(か) 剥けるんだつたよ 俺 ほん……

C ンダナエ キー……。 (B ンダ。 A 笑)
そうね 木(巻)……。 (そう。)

B タノ クサ トリアゲッド ヤマダケモナエ。(A ンダ) ナヅテ
田の 草(巻) 取りあげると 山(仕事)だったものね。(そう) 夏って

ユード (A ナエデカンド) ドッゴデモヨーハ
いうと (何はともあれ) どこの家でもよ

A シマサエ アッド ヤマサナヤ (B ン) ショッデン。 スパー
暇さえ あれば 山になあ (ん) 昔は 柴(巻)

ショッタリダベ ホレ。テスバナノ ミナ ヤマデ⁽⁶⁾ カッテナレ。
背負ったりだろう ほら 手柴など(は) みな 山で 買ってね。

(C ンダナエー) ン。ホシテ ショエーダサンナネケツ。 オラ
(そうだなあ)⁽⁷⁾ ン そして 背負い出さねばならなかつたな。俺(は)⁽⁸⁾

アノ ユワギノ ナベヤリサダラ エッタナ キーショエ。
あの 岩木の 鍋遣⁽⁹⁾ には 行ったなあ 木背負いに。

(C ンーナー) イエー エダドギ。 アソゴ ショエーダスナ
(ん ん) 家に 居たとき。 あそこ 背負い出すの(に)

トガクテナレー ホダナ。(C ン) シルママデ⁽¹⁰⁾ ニンドグラエツケ
遠くってねえ そんな。(ん) 昼まで(に) 二度ぐらいきり

(10)
 アラガンナエケンナエガツ オラ (C ンー) シランカラ
 歩けなかったじゃないかな 俺 (ん) 午後から
 エッペンクラエ ショエダシテ アド クルマサ ツケテ
 ーペンぐらい 背負い出して あとは 荷車に つけて
 クランナネドレハ ヤッパリー。 アノ ナバーヤリサダラ
 来なければならぬたろう やっはり あの 鍋遣になら
 エッタナー (B ン) ンー。
 行ったな (ん) ン。

B オランダ ユワギヤマノ ホーサ ホダエ エガネハゲ
 俺達は 岩木山の 方には そんなに行かないから
 ワガンナエモナエ。(C ンダナエ)
 わからないものな。(ん そうだね)

A ンー ホレガラ テスバ ホリヤ キューリノ テスバダ
 ン それから 手柴 ほら きゅうりの 手柴だ(10)
 ササキノ テスバダノテ アダナ ミナ ヤマデ カッテ ホレ。
 ささげの 手柴だのって あんなのは みな 山で 買って ほら
 スバ マロテ コンド ショッテナヤ。 ショエダシテ ホレ。
 柴を 束ねて こんど 背負ってな 背負い出して ほら

C カヤシイ エッタツァナヤ タギバサワサ。(11)
 萱背負い(12) 行ったもんだな 滝葉沢に

B ンダ ヤッパリー カ カヤーブギダケハゲ ナエデカンデモ
 そう やっはり 萱葺きだったから どんなことがあっても
 カヤデ (A 笑) フガンナネハゲ カゲ……。
 葺で (ん) 葺かねばならないから

C オラエノ ヤマンナ カヤ ナンガクテーナヤ アソゴナヤー
 俺家の 山の 萱(は) 長くてな あそこなあ

ナガサガ⁽¹²⁾ (A ンー) ノボンナ コワエッタラ コワエッタラ (笑)。
長坂(を) (ん) 登るの(は) 疲れること 疲れること

A ヤマジャ コノー ノボリクダリ アッサゲー ホナーテ
山は この 登り下り(か) あるから ほんとに
クタビレンモナヤー。(C ンダー) ンー。
くたびれるものね (そう) ん

B ンダ アノ ドンドゴ⁽¹³⁾ノ サガヨナエ。(C ンダー。 A ハアー)
そう あの ドンドコロの 坂よね。(そう はあ)

ミログツ⁽¹⁴⁾ヤマサ エッタゴド ナエケガー。
弥勒寺山に 行ったこと(は) なかったかい。

A ミログツヤマナテ ホダエ エガネナ。オランダ タエーデ
弥勒寺山なんて そんなに 行かないな。俺達(は) 大抵(は)
イエー エダドギワ ユワギ (B ユワギヤマダケモナエ) ン
(実)家に 居たときは 岩木 (岩木山 だったものね) ん
ユワギヤマダケモ カウナ。(C ンンー) ンー。
岩木山 だったもの 買うのは。(んんー) ん。

B ドンドゴ⁽¹⁵⁾ロノ サガヨ ノボルエナエ。
ドンドコロの 坂(か)よ 登るのにね。

C ナガクテナヤー。(A ハ ンダツダー)
長くなってなあ。(は なるほど)

B ノボーリデ⁽¹⁶⁾ ホッダナ。クルトジュー ヤッパリ ニンジェン
登りで そんな。来る途中(で) やっほり 荷休息棒(を)

カゲデ エッカエ ヤスマネド (C ンダ) ナエツタテ
使って 一回 休まない (そう) どうしても

ノボランナエ ナダケ ホゴマデナエ。(C ナエ。 A ンダガー)
登られないんだった そこ(峠)まではね。(ねえ。 そうだったか)

コワクテ。(A ヤッパリナー) ンダガドテッド コンド クダリデ
くたびれて。(やっぱりなあ) そうかと思うと 今度は 下りでは

アス プルプルプルプルテ (笑) (A ホダヅダ) クダリダド
足(が) ぶるぶる ぶるぶるして (なるほど) 下りだど

ショエモノ ショッテ アス プルプル ナテナエ。

荷物 (を) 背負って(る)で 足(が) ぶるぶる なってね。

A ンダ クダリジャ ンダモナエ。(B ンー) アエツ シンドエ
そう 下りは そうだもんね。(ん) あれは ひどい

モンダモナヤ ヤッパリ。

もんだものね やっぱり。

B ノボリエガテモ ラグンナエ ナナエ。(A ンダー) タント
登りよりも 楽でないのね。(そう) たくさん

ショッテ ンダラヨ。

背負ってならよ。

A オカナクテヨ ⁽¹⁷⁾ ヤッパリナヤ。 ⁽¹⁸⁾ ターント ショッテ クランナネハゲ
おっかなくってよ やっぱりな。 たくさん 背負って 采なければならぬから

ホレ。ンー。

ほら。ん

B アドガラ シタノ ホーガラ ミヅ ツエダケゲントナヤ。(A ンー)
後年 下の 方から 道(が) できたっけけどな。(ん)

ハヤグナノ……。 (C アソゴサ……) エ エマ コーチャエンノ
以前など……。 (あそこに……) x 今 興ちゃん家の ⁽¹⁹⁾

ホソギナー⁽²⁰⁾ アエツ⁽²¹⁾ スッドギ アンドギ マダ ミツ
細丸太など(各) あれ するとき あのとき(は) まだ 道の

シェンバエドゴ⁽²²⁾ ホゴ サガ ノボタンダモナエ。

狭いところ(各) そこ 坂(各) 登ったんだものね

C ンダナー アノ ナンガエナ ホレ (A ンー) ショツタンダゲナ⁽²³⁾
そうだよな あの 長いの(各) ほら (ん) 背負ったんだからな
ミナ (A ンダツダー) ンー アレマデ⁽²⁴⁾ (A ホンテナエー) アノー。
全部(各) (そういうわけだ) ん あれまで (ほんとにね) あの

B ツ ンガエ モンダハゲ コノ スコス クホミサ ハエッド
長い もんだから この わずかの 窪みに はいると
ツカエテ。(笑)(A 笑) ンダハゲテ コンド ホゴシテヨー (A ンー)
つかえって。 () だから こんどは ほぐしてよ (ん)

オツランナネケツ (A ジャー) シタマデ サケテ。(A ンダツダー)
下りなければならなかったんだよ (まあ) 下まで 下げて (なるほど)

ン。ナリツツチャエ モンダベツス (A ンー) ナガエモンダモノ
ん 背丈が低い もんだし (んー) 長いもんだもの

トプント ハエンナヨ。

とぷんと はいるのよ。

A ンダツダー ヤッパリ ナエヤー。

なるほど やっぱり なあー。

C ホナーテ オラエノ コースケダナンダラ アダナ エッポンダテ
ほんとに 俺家の 輿輔たちなら あんなものは 一本だって

モテクランナエ。(A ンー) ミロ ムガエノ ジーチャンダ ミナ
持って来れない。(んー) 「見ろ 向い(の家)の 爺さんたち (か) 全部

ショツタンダテ。⁽²⁶⁾ ホンダゲ ホゴ ミナー アノ ソガギ⁽²⁸⁾
背負ったんだ」って。 だから そこ みんな あの 雪囲い

スンナ ミナー ショットンダダレー。 (A ンダツダー) ダエブ
するのを 全部 背負ったんだものねえ。 (そういうわけだ) かなりの

ネン ナルネハー アノ (A ンー) ホソギ モテキテガラ。
年数に なるねえー あの (んー) 細丸太を持ってきてから。

B ンダー アエツ シツシャスエナー。 ナンネングラエナツカ。
そう あれ(は) 久しいなあー 何年ぐらいたったかな。

C ヨンジューネンテ キカネガ⁽²⁹⁾ー。
四十年で きかないか

B ヨンジューネンナ ナルナハ。
四十年など なるな。

C ナルナー。
なるなー。

A ヤマワ ホンテ ナンギ サンナネ ヤッパ⁽³⁰⁾リナヤス。
山は ほんとに 難儀 しなければならぬ やっぱりな

C ンー ユノサワアダリダド (A ンー) ホレ ツツカエハゲテ
んー 湯野沢あたりなら (んー) ほら (山が) 近いから
ホダンデ ナエケツ。
そんなでも なかったな。

B ンダ ミツ イエーケツスナー。 (A ンー)
そう 道(か) 良かったしなあー。 (んー)

C ンダゲヨ コツツサ キテ マツガダサ エツテ カエテ ナンギ⁽³²⁾
だからよ こっちに 来て 町の方に 行って かえって 難儀
サンナネドー オモテツケ オラー。 (A ンー) ヤマ ンダーゲ。
しなければならぬって 思っていたもんだ 俺は。 (んー) 山 だけ(は)。

A オラダナ ホレ ホダナ タナギ カッタドギドカ スバ
俺達など(は) ほら そんな 薪 (を) 買ったときとか 柴(を)

カッタドギツカエ ヤマサナ エグゴダ ナエハゲナ。 (C ン一)
買ったとききり 山などには 行くことは なかったからな。 (ん一)

ヤマナ ナエハゲ オラエノ イエーデ ホレ。
山など なかったから 俺の 家で(は) ほら。

C ンダゲテ ア アノ (A ン) タナキ° ショウドギ° カマス チェット
だから あ あの (ん) 薪(を) 背負うとき(は) 吠(を) ちょっと

(33)
コー タデデ° ホシテ (A ン一) ショウド イエーナダッスー。
こう 立てて、そして (ん一) 背負うと 良いんですよー。

(A ハー ンダガ) ンダド アダラネ (A ン一) カマスバ
(はー そうか) そうすると(骨) 当たらない (ん一) 吠(を)

シタツツエ オツテナレ。 (A ンダツツダ°)
ニつ (に) 折ってな。 (なるほど)

A ハエツ ホレ スンケ° (34) ショウハゲテ ホレ シェナガ オマエ
それ(を) ほら じかに 背負うから ほれ 背中(か) お前

ムゲツケツ° ホダナ。 (C ムゲルー) エツダクテ コンド ヨル
剥けるんだったよ そんな (剥ける一) 痛くて こんど 夜

ユサ ハエツドギ° ピリピリテヨー。(笑) ホーシテ コンド
風呂に はいるとき(に) ひりひりしてよー。 そして こんど

(35)
ハスメデ° ホリヤ ヤマサナ エツタドギナ コンド ツギノ シ
最初の日(に) ほら 山などに 行ったときなど こんど 次の日

(36)
アガリバン オツランナエナヨ。 コンド コムラカエリシテ。(笑)
上り框(を) 降りられないのよ。 こんど 豚返りして

B コムラカエリシテ ンナエガ。 (A ンダ° 笑) アエーツ
豚返りして じゃないの？ (そう) あれは

ヒドエモナエ° コムラカエリワ。
ひどいものね 豚返りは。

A ンダー ンデモ マエニヅ エグドヨー (B ミッ
そう でも 毎日 (山) 行くとよー (x x) ナレデハー
(C ナレルー)
慣れるー)

B ミッカグラエガラダド ホダンデ ナエナヨー。
三日(目)ぐらいからだ と そんなでもないのさー。

A ミッカヨッカ ホントデ ナエモナヤ。コムラカエリシテ。
三、四日は 本調子で ないものな 豚返りして。

C ホンテナヤー。 (A ンー) ヤマ トツガエド タエハンダ。
ほんとになあー。 (んー) 山(か) 遠いと 大変だ。

注

- (1) 山から切り出した小柴でご飯を炊くという話をうけてこう言った。
- (2) 棚木。雑木の山に木棚を作り、伐り倒した一定の長さに切った木を積み重ねた焚き木。櫓が多かった。
- (3) 「フヨ」と言う人はほとんど生きていない。古い発音？語形である。
- (4) 「山で買う」には二通りある。①山の立木で買い、秋に伐採し適当な長さに切って乾燥させておき、後日、家に運ぶ場合。②棚木になっているものを、山で買いとって 後日、家に運ぶ場合。つまり、①山ごと買う のと ②山に於て買う のと 二通りである。①が最も安く、ついで②が安く、家に運んでもらうのがいちばん高く、この買い方をするのは裕福な家と言われた。
- (5) 背中をさして
- (6) えんどう豆・きゅうり・ささげ・朝顔などに使う支柱用の柴。
- (7)(8) 地名。録音地の北方2~4kmの山村。
- (9) 実家に。
- (10) 厘べなかつた という意。
- (11) 地名。録音地の西北4kmの山地。
- (12) 地名。
- (13) 地名。ドンドゴロが正しい名称。
- (14) 地名。
- (15) 地名。
- (16) 息棒。荷棒。背負い運搬や荷ない運搬のとき、背負ったまま小憩するために荷を支える杖。この地域では普通桐の股枝で作る。「ニンジェンカゲル」は、上のようにして小憩する意。
- (17) 背負ってころんだら怪我をするし、ひとりでは起き上がれないほどの荷物を背負うのが常であったから、ころぶのはこわかった。
- (18) 「タント」を強めた言い方。すごくたくさん。
- (19) 話し手C佐直まさゑの子息が興ちゃん。録音地点宅であり、話し手Bの若い時の奉公先。佐直興輔宅のこと。
- (20) 杉の梢つきの細丸太。もとは直径15cmぐらいのもの。雪囲いや

仮設小屋等に使う。

- (21) 運搬すること。
- (22) 狭いところ を強めた言い方。
- (23) ほんとうは、かついだのだという。
- (24) 麓のところ、広い道路のあるところまで。
- (25) 荷をくずしてほごしたという意。
- (26) ……」って語って聞かせているのだという意。
- (27) 植えこみの樹木。
- (28) 雪折れを防ぐための雪囲い。ソガキの語源としては、粗朶囲い・柴垣・粗垣・粗囲い・外囲い などが考えられる。
- (29) ……以上になるか という意。
- (30) 敬意を表わす「ス」は助詞なので、共通語に訳せない。
- (31) 地名。村山市湯野沢。話し手Cの生まれたところ。山添いの村落。
- (32) 谷地。婚家である現住地。
- (33) 手まねをして。
- (34) すぐに → スグエ → スゲエ → スンゲ
- (35) 清音化している
- (36) 土間から座敷にあかるところに、一尺五寸中ぐらゐの縁をつけておくのが農家の一般的な上がり板であった。

4 叔母さんの卒倒

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

C オバサダ⁽¹⁾ アエツ アノ タギバサワノ⁽²⁾ サギ オラエノ ヤマノ
 叔母さん達(か) あれ あの 滝葉沢の 先 俺家の 山の

サギノ ホーデダベ タオツダナ アリヤ。 (A ンー)
 先の 方でたろう 倒れたのは あれ (んー)

B ンダ アエツ オランダ⁽³⁾ カヤノン ドゴデ。
 そう あれは 俺達(か) 萱野の 所で。

C カヤノン ドゴデ。 (A ンー) ンー。
 萱野の 所で。 (んー) んー。

B オレド ホレー スンサクサド⁽⁴⁾ エッタ ドギダゲナ。 (A ンー)
 俺と ほらー 新作さんと(か) 行った ときだからな。 (んー)

C ンー) シューエツツァエノ⁽⁵⁾ カガサド⁽⁶⁾ ホレ (A ンー) オバサド
んー) 周ーさんの家の 母親と ほら (んー) 叔母さんとか

エッタ ドギ。 (A ンー ンー)
 行った とき。 (んー んー)

C アオモノトリ⁽⁷⁾ ホレ オカゲデ エツタンダケベ⁽⁸⁾ チャエ。 (A ンー)
 山菜採り(に) ほら ついて 行ったんだっ たろうね。 (んー)

- B オランダ スギオゴス⁽⁸⁾ エッテ (A ン一) オバサド ホレ
俺達(か) 杉起こしに 行って (ん一) 叔母さんと ほら
シューエツツァエノ カガサ アオモノトリ シッタンダケ。
 周一さんの家の 母親(か) 山菜採り(を) していたんだった。
- A ン一⁽⁹⁾ダツダース ン一。
 なるほど ン一
- C ホシテ ンダテ チョンドシテ。アラテ モカエタナ ンナエ ベー。
 そして だって じっとして。歩いて(て)倒れたのではないんだろう。
- B モッカエタナ ンナエ ナヨー。 オランダ⁽¹⁰⁾ ホレ シタリシテ
 倒れたので(は) ないんだよ。 俺達は ほら 二人で
 スギオゴシッタベー (A ン一) シタエバ オバサ アンベハー⁽¹⁰⁾
 杉起こししてたろう (ん一) そしたら 叔母さん(か) 帰ろう
 アンベハーテ エダナヨ。 (^c笑 A ン一) ホゴ オランダ⁽¹⁰⁾ ニモツ
 帰ろう って (言)ていたのさ。 (ん一) そこ(の) 俺達(か) 荷物(を)
 オエッタ ドゲ エデヨー。 (A ン一) アンベハー アンベハーテ
 置いてった 所に 居てよー。 (ん一) 「帰ろう 帰ろうって
 ナエダ キタバンデ⁽¹⁰⁾ アンベハザ⁽¹⁰⁾ アンマエ チャエナテ オランダ⁽¹⁰⁾
 どうしたんだ 来たばかりで 帰ろうなんて あるまいに」なんて 俺達
 シタリ エダナヨ。 (A ン一) アンベツァー アンベツァーテナレ
 二人(か) いたのよ。 (ん一) 帰ろうよ 帰ろうよってね
 (A ン一) ナエッーダガ ア アンベ アンベテ ナエダバナ ドテ
 (ん一) なんだか ^x 帰ろう 帰ろうって なんだろうな と思って
 ホシテ キタレバ ホレ (A ン一) シコス クヅ マワラネミダエ
 そうして 来てみたら ほら (ん一) 少し 口(か) もつれるみたいに
 ナッタナーケ。 (A ア一 ンダーガー) ンダゲ オレ コダゴド
 なってたんだった。 (あ一 そうか) だから 俺(は) こんな具合に

ナツタハゲハ シエデ アンベハーテダケデー。 (A ンー ホーガー)
なってしまったから 連れて 帰って ったったな。 (んー そうか)
ンダラ ワガンナエツダナーテ ホレ オンプロテ キタナツダナ。
これじゃ だめだなあって ほら おんぶして 来たんだよな。

A ンダーツダ。
なーるほど。

C ホンテナー アダナ オツケナバ。
ほんとにな あんな 大柄な(人)を。

B ホシテー スンサクサバ ホレ イエーマンデ エー リヤカトリ
そして 新作さんを ほら 家まで え リヤカーを取って

キテケロツタナツァナエ。 (A ンー) オランダ アエデツタ
来てくれと言ったんだったよ。 (んー) 俺達 (注) 歩いて行った

モンダモ ホレ。 (A ンー) ショッデン ツテンシャ ナエッス
ものだから ほら。 (んー) 昔は 自転車(か) ないし

イエガラ ミナ アエデ エガンナネケデー。 (A ンダ ンダー)
家から みんな 歩いて 行かねばならなかったもの。 (そう そう)

デー トニカグ エギャウマンデ オンプロテ ングハゲー。(A ンー)
でー とにかく 行き合うまで おんぶして 行くから。(んー)

リヤカ モテキテ ケロハーテ (A ンー) リヤカトリ
リヤカー(を)もってきて くれって (んー) リヤカーをとり

ヨゴシタケナヨー。(A ンー) ンデ モッカエタナデワ
よこしたんだった。(んー) んで 倒れたのでは

ナエガタナヨー ン。(A ハー ンダツダ) タダ コエンズッテ
なかったのよ ン。(はー なるほど) ただ こんなにして

ホノママ ホレー (A ンー) スコス アエツ ナタンダベ アレナ。
そのまま ほら (ん) 少し あれ なったんだろう あれな。

A キモヅ ワレグ ナタンダベチャーナーッス。
気分(か) 悪く なったんでしょ うねえ。

B キモヅ ワレグ ナタナヨー。
気分(か) 悪く なったのよ。

C タダンナググモ ナタケナ ンナエ ベガー。
立たれなくでも なったのでは ないだろうか。

B ン タダンナエ ケナヨハ。 (A ンー) ンダ ドエツト コダア
ん 立てなかったのよ。 (んー) そ ばたりと こんなに

モカエタ アエヅ ンナクテ ホレ ツブンガハ (A ンー)
倒れた あれじゃ なくて ほら 自分が (んー)

ガンツエダンダベ アレ。 (A ン ンダベ) ンゴガンナグ ナタナ。
気付いたんだろう あれ (ん そうだろ) 動けなく なったのを。

ンダハゲ アンベハー アンベハーテ ユタンダベ アレー。
だから 帰ろう 帰ろうって 言ったんだろう あれ 。

(A ンー)
(んー)

C ナ ンテ キタミロハナテ オランダ エダベシター。 (A ンー)
な なんだって もう帰ってきたなんて 俺達は 考えていたわけよ。 (んー)

注

- (1) オバサワと言うべきところがねじれている。
オバサには次のような意味がある。①妹・次女以下の娘 ②弟嫁
③伯(叔)母 ④出もどり女 ⑤婚期を逸した女 ⑥おろかな娘
オバともいう。
- (2) 地名。録音地点の北西3~4kmの浅山
- (3) 地名。 同上
- (4) 人名。話し手C 佐直まさゑ宅の分家の主人。
- (5) 人名。 同上
- (6) カガサ ①母親 ②(子どもが呼ぶ) おかあさん
- (7) アオモノ 山菜の総称。庄内の海岸をのぞく県内全域で使用。
- (8) 雪で倒れた杉の若木を起こす作業。
- (9) 敬語の「ス」
- (10) ア>ベは「行こう」という意味だが、ここでは「帰ろう」の意。
- (11) かがむしぐさをして。

5 萱野刈り

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A シェンニ ホリヤ ミナ クサヤネダケハゲテ オランダモ
 昔は ほら みんな 草屋根だったから 俺たちも
 アギー スポド⁽¹⁾ スマウド リヤー ノーカリジャ エッタツー。
 秋(に) 仕事(を) 終わると あれ 萱野刈りには 行ったなあ。

(C ノーカリガー) シー ヨース アリヤー。 (C シー)
 (萱野刈りか) んー 算を ほら (んー)

B カツギザワシュー⁽²⁾ ンダケッダナナー アッツノ⁽⁴⁾ ホーナー。
 勝木沢の人たち(は) そうだったよな あっちの 方はなー。

A ンダ アソゴラシューダ⁽⁵⁾ ミナ ホレ (C シー) アノ⁽⁵⁾ ノーテ
 そう あの辺の人たちは みんな ほら (んー) あの 野で
 カウナダケ⁽⁵⁾ ンダナレ。 (C シー ンー) カーッテ ホシテ
 買うのであったんだな。 (C んー んー) 刈って そして

ホリヤー……。

ほら……。

C ナン⁽⁶⁾ーガクテナヤー。
 長くってなあ。

A ンダー ヨス ナンーガクテ (C ナンーガクテ) ナヤ。
そう 葺(か) 長くて (長くて) なあ。

C イエーケデー。(7)
よかったものね。

A ホーシテ コンド ワラ ホレ ウッショノ ホーサ コー
そうして こんど(は) 藁(を) ほら (体の) 後ろの 方に こう
アレシテ。(9) (C ンー) ホシテ イエアンバエ イエアンバエ(10)
あれして (んー) そして 適宜 適宜に
タバネ タバネナヤ (C タバネデナヤ) ホシテ コー タデデ(11)
束ね 束ねてな (束ねてな) そして こう 立てて
クンナダケデハ (C ンー) アノー カッタ ドゴサヨハ タバネデ。
来る んだ た もの な (んー) あの 列 った 所 によ 束ねて。
ホシテ ハル ホリヤー コンド ヤネフギ(12) クルナテ ユード
そして 春 に ほら こんど 屋根 葺き(か) 来る なんて 言う と
ツケラ ナネツア(13) コンド ハエツナヤ。
運 ば な けれ ば なら な かつ た も ん だ こんど それ を な あ。

C ンダナー ナンガ°エナナー
そうねー 長いのをなー

A ンー ヨス コンド クルマン ドゴマデ(14) ショエダシテ。
んー 葺(を) こんど 車の 所 まで 背負 い 出 して。

オラダモ(15) ナリ ツッチャエハゲ コノ ナンーガエナ (笑)
俺 も 背 文 (か) 低 い か ら こ の 長 い の

ホツツ ヨスノ ホーノ ホー ホレ ヅルヅル シパラテ(16)
そ ち 葺 の 穂 の 方 (を) ほら ず る ず る (と) 引 き ず っ て

コンド (笑) シ タツア ナヤ ハエツ (笑)。ホーシテ コンド
こんど 背 負 つ た も ん だ よ それ を 。 そう して こんど

ホレ ヤネ フェデ⁽¹⁷⁾ モラワンナネナーデ⁽¹⁷⁾ コンド ハエン デナヤ。
ほら 屋根(を) 葺いて もらわねばならないんだから こんど それを使ってな。

C ンデモ アエツ ヨッポド シトキリイエガ⁽¹⁸⁾ シタキリプラエ
でも あれ(は) よっぽど⁽¹⁸⁾ 一切以上 ニ切り ぐらい
ヨゲー ヤマンナユリ⁽¹⁹⁾ アレダ⁽¹⁹⁾ ンナエガー。
多く 山のものより あれじゃ ないか。

A ナンガ^oエハゲナー。
長いからな

B ンダ ナンガ^oエゲント ジョーブンナワ ホレ ヤマンナノ ホー
そう 長いけれど 丈夫なのは ほら 山のものの 方(か)
ジョーブンダテ ユークツダナエ
丈夫だって 言うんだったよな

A ンダツダナエ カヤ⁽²⁰⁾ー-----
そうだねえ 萱

B カダエハゲー
堅いから

A カヤガ^o カツダエナツダナー。ホ^oンデモ オラエンドゴ シューナ
萱が 堅いんだよなあー。それでも 俺家の近所(の) 人達など(は)

ミナ ヨスー アノ ノー^oンデ^o カツテナレ キョー^oンドー^oシテ
みんな 葺(を) あの 一野 で 買ってさ 協同で

ミナ カツテヨ。 (B^oン^oン) ホシテ ホレ ノーカリ エグ^oンダケ。
みんな 買ってよ (ん^oん) そして ほら 萱野刈り(に) 行くんだった。

(B^oン^o) デハ ウッショサ コー ワラー サシテナレハ
(ん) で (体の)後ろに こう 藁を さしてさ

(C^oンダ^o ^oンダ^o) ホシテ チェツ^oチェド ニサンボンツツ コー
(そう そう) そして ちよくちよく ニ、三本ずつ こう

又エデ^レ ホシテ カリナガラ (B タンバネデナ) コレ^レ グラエ⁽²¹⁾
抜いて そして 刈りながら (束ねてな) これぐらい (に)

タンバネデナヤ。 (C ンー) ホシテハー コンド グルーット
束ねてねえ (んー) そしてさ こんど^レ ぐるっと

ナワー マシテハー⁽²²⁾ ホシテ アノ フユ ホレ ホサ タデデ
繩(を) 廻してさ そして あの 冬(は) ほら そこに 立てて
クンナヅ^レ ダナハ。

来るんだったよ。

C ン ハルサ ナテガラ ホシテ ショウナ。
ん 春に なってから そして 背負うのな。

A ンー ハルサ ナテガラ コンド ショッテナヤ。 (C ンー)
んー 春に なってから こんど^レ 背負ってな。 (んー)

ホーシテ ツルツルド オランダナー ホダナ (笑) ナリ
そうして ずるずると 俺なんか(は) そんな 背丈(か)

ツッチャエハゲ ホノ ミーナ シッパラツツ^レ ダデ^レ コンド
低いから その みんな 引きずってしまうんだよな こんど

ホレ ホッツ⁽²³⁾ ウラノ ホー。
ほら そっち 末の 方(か)

C ヤンダナテ ヤネ^レ デ^レ ホレ ナヤー⁽²⁴⁾*
いやだなんて いわないで ほら なあ

注

- (1) 野良仕事。
- (2) 河北町内の小字名、話レ手Aの生まれた所。
- (3) 萱野刈りには行ったもんだ ということ。
- (4) 勝木沢の方面。
- (5) 生えたままの葦を野ざと(買う)。
- (6) ナンーガクテはナンガクテ(長くて)の強調した言い方。
- (7) 良い材質だったという意。
- (8) 葦を束ねるための藁。
- (9) 手まねをしなから……腰にさげて という意。
- (10) 「イエアンバエ イエアンバエ」がイデオム。
いい塩梅・いいかげん・適当・適切・手ごろに などの意。
- (11) 立てるしぐさをしなから。
- (12) 屋根葺き職人。
- (13) 車につけて運ぶこと。
- (14) 葦は湿地に生えているため、荷車が近くまではいくこめないの。
- (15) 複数の「だ」(違)を用いているが、この場合は「俺なども」の意。
- (16) 自然に引きずるような状態になって という意。
- (17) 葦を用いて
- (18) 屋根を葺くときの葦葺の長さ。50cmぐらい。
- (19) 萱・茅・オガルカヤのこと
- (20) 同上
- (21) 直径5~7cm ぐらいの束を手で示して。
- (22) 葦の束を直径2~3m ぐらいの円錐形状にまとめて立てて、縄をまわしてしばっておくのであった。
- (23) 末・梢のこと。ウラポ、ウラポエともいう。
- (24) どんな労働もやったもんだ というつもりだった由。

6 肥やし金と給金

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A オラエノ アネサ ガッコ⁽¹⁾ ソツキョースツド アッチャ リチャー
 俺家の 姉さん(は) 学校(を) 卒業すると あっちに あれ
 アノ エドトリコーバサ⁽²⁾ (C アーン) エッタハゲハ (C ホーガ)
 あの 糸取り工場に (あー) 行ったから (そうか)
 ホシテ ムガスザヨ ヤッパリ アレンドケデ アノー オー
 そして 昔はね やっぱり あれだったもの あのー
 ホダナ ワレワレミダエ ミンヅノミヒヤキショーテ ユタラ
 そんな われわれみたいな 水呑み百姓って 言ったら
 イェーガ ホーユー シトナナレー (C ンー) ヤッパリ ターサ
 いいか そういう 人などはな (んー) やっぱり 田に
 コヤス⁽³⁾ ヘレンナ ホノ コヤスカネテ ユナ ツグランナネケナヨ。
 肥料(を) 入れるのに その 肥し金って いうのを 作らねばならなかったのよ。
 (C ン) ダレガ カレガ。 (C ンー) ンダゲテ ホリヤ
 (ん) 誰か 彼かか。 (ん) だから ほら
 ゲジョドガ (C ン) コンモリドガテ ミナ ツッチャエ ドギガラ
 下女とか (ん) 子守りとかに みんな 小さい 時から

(Cン) ヤラッダドホレ ミナ。
(ん) やられたもんだ みな。

C ンダツンダ。
なるほど。

A ハエツ コンド ダンナガラ ホレハ マエキン カッデハ
それが こんど 旦那から ほら 前金を 借りて

(Cン) ホシテ ホレ (Cン) コヤスガネジャ ホレ (Cン一)
(ん) そして ほら (ん) 肥やし金は ほれ (ん一)

コヤスジャ カッタ モノヅナ ムガス。(Cン一) ハエツ
肥やしというのは 買った もんだよ 昔(は)。(ん一) それが

ホレ オラエノ イエーデナノ ホレ オラエノ オドツァニ
ほら 俺家の 家でなんか(は) ほら 俺家の 父親の

シャデ ホレ アツツエ エダケハゲ エゲグロエ。(Cン一)
弟(が) ほら あっちに 居たっけから 池黒に。(ん一)

ホレ エマノ ナンヨーシリャ。(Cンン) アソゴワ ンート
ほら 今の 南陽市 だね。(んん) あそこは 非常に

ホレ エドトリノ アレンダケデ サガンナ ドゴンダケドレ。
ほら 系取りの あれだったろう 盛んな ところだったもの。

C ンダツンダ。
なるほど。

A オッケ コーババリ アツテ ホレ タシエーナテ ユーナナヤ。
大きな 工場ばかり あって ほら 多勢 なんて いうのなどな。

(Cン一ン) ホゴサ ホレ オラエノ オンツァエノ イエーサ
(ん一ん) そこに ほら 俺家の 叔父さんの 家に

トマテ (Cン一) オラエノ アネサワー ガッコ ソヅギョースツド
泊まって (ん一) 俺家の 姉さんは 学校を 卒業すると

ホレハー (Cン) エドトリ エッタ モンダハゲナヤ (Cン)
ほら (ん) 系取り(に) 行った もんだからなあ (ん)

ホンダゲ オラエノ イエデジャ ホノ コヤスガネー ジャ
だから 俺の 家では その 肥やし金は

フジュスネケツ。(Cハー) オラエノ アネサ ホレ ボン
不自由しなかったのよ。(はー) 俺家の 姉さんは ほら 盆と

ショーガツ ジェネ ナエデカンデ モテクツケハゲナレ。
正月には お金(を) きまって 持って来たもんだからな。

(Cンー) ホシテ ホレー アノー エドトリ ジョーヅデー
(んー) そして ほら あの 系取り(か) 上手で

ナナヒャグニングラエ エダケベアレ オラエノ アネサ
七百人ぐらい(も) 居たんたらう(か) 俺家の 姉さん(か)

ハエッタ コーバデ (Cンー) エヅンターダ⁽⁶⁾テ ユートーシェーデヨ
勤めている 工場(で) (んー) いつでも 優等生(で)よ

(Cン) ヤッパリ ニバンドガ エヅバンドガ ホレ
(ん) やっぱり ニ番とか 一番とか ほら

サンバントガテナレ (Cンー) ヤッパリ ジョーヅナダケナ。
三番とかになつてな (んー) やっぱり 上手だったんだな。

アダナ ワガツニスル シトダハゲダガ ナエダガ エドガ° ホレー
あんな 若死にする 人(だ)ったからか どう(か) 系(か) ほら

フットエ ホッソエ ナクテ タエーラナダケド。(Cンー)
太い 細い(か) なくて 均(じ)んなんだ(ら)ったそう(だ)。(んー)

ハエツデ ジョーヅンダテ ユナンデ ホレ ホービ マエネン
それで 上手(だ)って いう(の)で ほら 褒(ほ)美(び) (を) 毎年

モラウケツ。(Cンー) ショッデン ホリヤ ニジューゴエンナテ
もう(う)んだ(ら)った。(んー) 昔(は) ほら 二十五(円)なん(て)

ユード タエーシタ⁽⁷⁾ ホダナ (C ンダバー) オナゴシューノ
いったら たいした そんな (そうだろう) 女性の

アレナテ ユド ホービツァナヤ (C ン) アダリマエ ホレ
あれなんて いったら 褒美だよなあ (ん) あたりまえに ほら

⁽⁸⁾
テマ モラタ ホガエ
手間賃⁽⁸⁾ もらった ほかに

B ニジューゴエンナダラ ンダッダナナヤ⁽⁹⁾
二十五円なら そうだよな。

A モラウナダーゲナヤ。
もらうのだからな。

C ユエノー モラウ コロ⁽¹⁰⁾ ンダモナハ。
結納(として) もらう 金額だものな。

A ホンダドレ オマエ ニジューゴエンナテ オラ⁽¹¹⁾ ンダ
そうさ おまえ 二十五円なんて 俺など(ほ)

サンジューエンデ キタンダドホレナヤ。(笑)
(結納) 三十円で 来たんだものね。

B サンジューエンデテ。オレー コーチャエンノ⁽¹¹⁾ イエーサ⁽¹²⁾ キタナ
三十円だなんて 俺など 奥ちゃんの 家に 来たのは
エツ⁽¹³⁾ ンバン ハヤグノ トス サンジューゴエンダケテ。(A ナツ
一番 初めの 年は 三十五円だったものな (なあ

C ナーエダ⁽¹³⁾ イエー⁽¹⁴⁾ イエガラ イエーガラ シコムドギ⁽¹⁴⁾
なんと ××× ××× ××× ××× 家から 身を引くとき

ハツジューエン。(笑) ホノ アド ブッカ グングン アガテ
八十円(だった)。 その あと 物価(が) ぐんぐん 上がって

キタベ。(A ンダー) カガチャ ユエノー ヤル ゴジュ
来たら。(そう) 妻に 結納 を やる(のに) ×××

ゴジューエン。(C ンー A.C 笑) コノ ゴジューエンタテ
五十円(だろう)。(ンー) この 五十円といっても

エツネンハンモ カガンナダデナエ。
一年半も かかるんだものな。

A ホンダツンダー。ゴジューエンダラ イエー ホーヅァナヤ。
そういうわけだ。 五十円なら いい ほうだよなあ。

B エマノ シトナー ラーグ⁽¹⁵⁾ナツアッ ユエノーナテ ユタテ。
今の 人なんか 楽なんだよな 結納なんて いっても。

A サンジューエンナテ オマエ タダ.....
三十円なんて おまえ ただ.....

B ヒヤグマンナテ ユタテ ラグッダナネ。オランダ エツネンハンモ
百万(円) なんて いっても 楽だよな。 俺など 一年半も

カガテ (A 笑) ユエノー ヤランナネナ (A 笑) ホダナ エマノ
かかって () 結納 (を) やらねばならないのに () そんな 今の

シト エツネンモ (A 笑) カガラネデハ。(C ンダナー)
人(は) 一年も () かからないもの。(そうだね)

A ホダナ⁽¹⁶⁾ンダドレナヤ。ハエツ オラエノ アネサ ンダ オマエ
そんなもんだものね。それが 俺家の 姉さんは おまえ

アダリマエ ゲツキュー モラタ ホガエ ヤッパリ エツネンデ
あたりまえに 月給(を) もらった ほかに やっぱり 一年で

ショーヨテ ユーナナレ (C ンー) ニジューゴエンゴラエ
賞与って いうのをね (ンー) 二十五円ぐらい

マエネン モラウナダケ。(C ンー) ホノ ホガエ ホレ
毎年 もらうんだった。(ンー) その ほかに ほら

キョーダエドガ ナニドガテ スナモノデ モラタ モノヅァナヤ。
鏡台とか 何とかって 品物で もらった もんだよな。

(C ン一) ンダゲテ オラエノ ツッカ ンデジャー アネサ
(ん一) だから 俺家の 実家では 姉さんが

ジェネ モテクッサゲ ホレ オランダ イエー エル ウツワ
お金(を) もってくるから ほら 俺(が) 家に 居た ちは
コヤスカネテ ユナ シャッキン スッゴダ ナエガッタズ。ン一。
肥やし金(と) いうのは 借金 することは なかったもんだよ。ん一。

C ンダ⁽¹⁷⁾ハゲ カシェ ガンナネケッ ダナナー。
だから 縁がねばならなかったわけだよな。

A ンダー。ンダゲテ ムガスナテ ホリヤー ミナー アノー
そう。 だから 昔などは ほら みな あの
トツタゲ⁽¹⁸⁾ノ ハンブンモ ネング⁽¹⁹⁾ ハガラ ンナネハゲテ
取った分の 半分も 年貢(を) 納めなきゃならないから

(C ン一) イエサ ノゴッ ドコジャ ナエナーデ コメナヤ。
(ん一) 家に 残る ところは ないんだよな 米はなあ。

(C ンダ ンダー) ンダゲ クンツ
(そう そう) だから 屑

C クンツバリ クテランナネケナヤー。
屑(米)ばかり 食べていなきゃならなかったな。

A ン一。ホンダゲテ ホダナ ナツゴ⁽²⁰⁾メ アソゴノ イエーデ
ん一。だから そんな 夏米(を) あすこの 家で
ニジュ⁽²¹⁾ーダ⁽²²⁾ラ シイデ⁽²³⁾ ウツタドナテ ユーナ ンダラ ホー ンテ
ニ十俵(を) ひいて 売ったそうだなんて いうのなら ほんとうに
ダンナ⁽²⁴⁾シユーダケ。(C ン ンダナー) ⁽²⁴⁾ムラ ンデ⁽²⁵⁾モ エッケンカ
金持ちだった (ん そうだ)な 地区でも 一軒か
ニゲングラエダケ。(C 笑) ナツゴメナ ホレグラエ ウル シトナノ*
ニ軒ぐらいだったな。() 夏米を それぐらい 売る 人など。

注

- (1) 小学校六年生
- (2) 製糸工場。まゆから糸をとる工場。
- (3) 金肥。
- (4) 地名。南陽市池黒に製糸工場があった。
- (5) 工場主の姓。
- (6) 「いつだって」が原形。エツダテ（いつでも）を強めた形。
- (7) たいした を強めた形。
- (8) 給金。
- (9) 大変な金額だよな。
- (10) コロ は くらい の意。ここでは「-----くらいの金額」の意。
- (11) 佐直興輔。話し手Cの長男。話し手Bの奉公先。
- (12) 来たとき、住みこみで奉公したとき の意。
- (13) 奉公先から
- (14) 「引っ込む時」が原形。シコムには、①引っ込む ②引退する ③身を引く ④卒業する などの意味がある。
- (15) ラクナ（楽な）の強調形。
- (16) 「そんなにも給金が少なくて、現金収入が少なかった」ということ。
- (17) だから、姉さんの恩に報いるためにも、姉さんのかわりに
- (18) 米の総収穫高
- (19) 年貢を納めることを 年貢ハカルといった。旦那の家の番頭が、升で米をはかり、あるいは重さをはかって、検査を受けて納めた。
- (20) 粃で保存しておいて、夏の端境期に、脱穀精米する米。
- (21) 俵（たわら）を タラという。
- (22) 脱穀して。
- (23) ホンテ（ほんとうに）の強調形。
- (24) 旦那衆が原形。お金持ち、素封家、金満家。
- (25) 部落 町内会にあたる範囲の地区、区域。

7 蚕の収入

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A オゴサマジヤ サンド ヨガエリグラエ オツケハゲナ (C ンー)
 蚕というものは 三度も 四度も 飼ったからな (んー)

ンダタテ ホレー ヤッパリ オゴサマノ カネナノ コンツガエ
 だって ほら やっぱり 蚕の 金など(お) 小遣い(に)

ナテスマタリ ナニモカニモ (3) カワナネンダツマ オランダ
 なってしまったり いろんなものを 買わなければならぬんだし おれたちは

ホレ ハツニンモ キョーダエ エダンダゲ ガギンビラチャ (4)
 ほら 八人も 兄弟が いたんだから 子どもたちに

カッテケランナネバツス ホダナ オゴサーノ ジェネナー (5)
 買ってやらなければならぬだろうし そんな 蚕の 金など

ノゴラネツンダツ ホレ。
 残らないわけだよな

C ハツニンナー エダンダガ。 (A ンダー) ンダガー。
 八人もねえ いたのか (そう) そうか

A ホダナ ホレ タマリ (6) ンダ ナエンダテ (C ンー) ネンージュエー
 そんな ほら 醤油だの 何だのって (んー) 年中

カヨエ⁽⁷⁾ンデ クテッドレ。(C ホンダ ホンダ) ハエツ コンド
 通い帳で 食っているだろう。(そう そう) それが コンビ
 (C ネヤー) オゴサマ⁽⁸⁾ ウツタドギ ミナ (C ン) ナサンナネドレ。
 (ねえー) 蕪 (を) 売ったとき(に) 全部 (ん) 返済しなければならぬだろう。
 (C ン ンダー) サゲンダテ ナエンダテ ミナ カヨエンダケド
 (ん そう) 酒 でも 何でも 全部 通い帳でだったもの
 ムガス。(C ンー)
 昔(は) (んー)

B ンダモナエ アノー (A ンーダ) ボント ショーガツンダケモナエ
 そうだね あの (そうだ) 盆と 正月だったものな

カンジョナテ ユナ。

勘定(する)なんて いうのは。

A ン ボン ショーガツカンジョーデナレ。

ん 盆と 正月の勘定でなあ。

B エサンバヤンデモ ドゴンデモヨ。(A ンダデー) ホレマンデ
 海産物商でも どこでもさ。(そうねー) それまで

ジェニ ハエラネ モンダモナエ。

金(か) はいらない もんだものね。

A ンダー ジェニ (B ンー) ハエラネゲ ジェニ ハエタ ドキ
 そう 金(か) (んー) はいらないから 金(か) はいった とき(に)

ナスナツンダナナヤー。(B ン) サゲンダテ ホリヤ ホダナ
 返済するんだったよなあ。(ん) 酒 だつて ほら そんな

エツネンジューデ ダエンブ ノムドレナヤ。(C ンー)
 一年間で だいぶん 飲むものねえ。(んー)

タマリンダテ……。

醤油 だつて ……

C ナンボ ヤッスエタテナー。
いくら 安くったてなあ。

A ンー。 クーッス ホレ ホダナ ミナ ボン
んー。 食うし ほら それも 全部 盆(と)

ショーガヅ カンジョーデ ホレ。ンダゲ^{~~~~~} ナヅカエゴナノ
正月(の) 甚か定で…… ほら。だから 夏蚕など"を

ウッタテヨハ ボンノ スハラエ⁽¹⁰⁾ンデハ……。 ホレ サガナ^ダテ
売ったってよ 盆の 支払いでさ……。 ほら 魚だって

ンダ^デー ミナ カヨエダケドレ。(B.C. ン^ダー) ンー。 ツネニナヤ。
そうだもの 刃な 通帳(を)だ^らたもの。(そう) ンー。 つねにね。

(C ンー) ホシテ カヨエ^ンダド ドーシテモ アレー ホンドギ
(ンー) そして 通帳だ^と どうしても あれ そのとき

ジェネ ダサネゲ クンダレナー。⁽¹¹⁾
金(を) 払わないから 食うんだよなあ。

C ン クーモナー。(A ンー) ン。
ん 食うものなあ。(ンー) ン。

A ホレー ミナー コンド オゴサマナー ウッタ⁽¹²⁾ダテ スハラエ
ほら 刃な こんど" 蕪なんが 売ったって 支払い

サンナネデ" コンドナヤ。 ホレ バンシューサンナノ オエ^ダテ
しなければなら^{ない}だろう こんど"は。 ほら 晩秋蚕など" 飼^った^{って}

コンド スコーヅツカエ オガネッス。 ホダナ ホレハ
こんど" 少ししか 飼^わないし。 そんな それ

シェンダグスルー⁽¹³⁾ナダ^ハーナテ ン オドゴシュー⁽¹⁴⁾ダ" アデ
選択するのだ なんて ン 男の人たち(を) あてには

サンナエナ^ダナテ ホダナ ゴド ユテ ホレ オナゴシューノ
できないんだ"なんて そんな ことを 言^って ほら 女の人たちの

ホンマツンダ オゴサマナテ ホダゴド ユテ オグナダケドレナヤ。
へそくりだ 繭(の金は)なんて そんなこと(を)言って 飼うのだったよな。

バンシューナテ ユードヨ。 シテ サンドモ ヨガエリモ
晩秋(蚕)なんて いうとさ。こうして 三度も 四度も

オゴサマ オエダテ ジェニナー エツモンダテ (笑) カツカツテ ⁽¹⁵⁾
蚕(を) 飼っても 金などは 一文だって(なくて) かつかつで

ホダナ (C 笑) ノゴラネナツアネー。
そんな () 残らないのだものね。

B ハエツバン⁽¹⁶⁾ダモノ ンダツー。^{*}
そればかりだもの そうだよ。

注

- (1) 「四返り」(四サイクル)が原形。
- (2) 蚕を飼うことをオゴサマオグという。
- (3) 「何も彼にも」が原形。
- (4) 「餓鬼びら」が原形。子どもは、いつも腹をすかしてがっがっしていることからの卑称らしい。「びら」は人間の複数を表わす「達」
- (5) 銭だけでなく、お金の総称。現金というふくみもある。
- (6) 元来タマリは、自家製の醤油のしぼる前に自然にたまる上質の醤油の称であったが、自家製が減って商品が出まわるにしたがって醤油の総称となった。
- (7) 掛け買いで。代金あとばらいの約束で商物を買って。
- (8) 繭を売ることをオゴサマウルという。
- (9) 鯨屋(いさばや)。魚屋。海産物を籠に背負ったり、リヤカーにつけたりして一軒一軒売り歩く行商であった。
- (10) …… は、「すっかりなくなってしまう」という気持ち。
- (11) たくさん 食うんだよなあ。という意。
- (12) 売ったとしても。
- (13) 削減する。精選する。少しだけ飼う。
- (14) 男衆達
- (15) いつもぎりぎり。古語「かつがっ」の変化か。どうにかこうにかやっとなににあう意。
- (16) 現金収入はそれきりない、養蚕の収入だけだということ。

8 草履作りと小遣い

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A ジョーリナ ツクタテ ヘッゲナ エッパ⁽¹⁾ ジューサンシェン
草履など 作ったって そんなものは 一把で 十三銭'
オドゴジョーリ⁽²⁾ ツクテ ジューサンシェンナ ジューニシェンナテ
男(物の)草履を 作って 十三銭とか 十二銭(だ)なんて
(C ン一) ホダナダ' モノナヤー (C ン一) ホダーナ⁽³⁾ ナンボ'
(ん一) そんなもんだ' ものね (ん一) だ'から いくら
エッシュケンメ ツクタタテヨ ホダナ ヨエ タヅコロ⁽⁴⁾ ホダエ
一生懸命(に) 作ったって そんな 用に 立くほど' そんなに
(笑) ヤッパリー。
やっぱりー。

B オラエノ バンサ エダ ドギンダド' ナンボ' エッパ
俺家の 婆さんが 生きてたときだ'と いくら(かな) 一把
ニジューヨンシェンダケガヤー。
二十四銭だ' たかな

A ン一 ンダド' ホレグラエ スッドギモ アッタンダ' ンデモナ。
ん一 そうすると それぐらい するときも あったんだ' それでも。

(C ンー) ダンダエ アガテナヤ。
(んー) だんだん(に) 上がってな。

B ンダテ エツ ホンドギ ナエデモ⁽⁵⁾ ヤッスエテ ユーモノノ
だって そのとき 何でも 安いって いうものの

(A ンダー) エツパ ツクルニ エツニツダデナヤ。
(そうー) 一把 作るのに 一日だものな。

A ンダー ホダナ ミナカガリシテ⁽⁶⁾ フス⁽⁷⁾ ヌエダリ (C ンダー)
そう そんな 全員総出で 節⁽⁸⁾ 抜いたり、そうー
フス⁽⁸⁾ キツタリナヤ。(C ンダナヤー) ンー。^{*}
節⁽⁸⁾ 切ったりな (そうだったな) んー。

C ンデモ ムガス セーカツホジョ ナテ アンナダケガツー。
でも 昔は 生活補助なんて あったんだらうか。

A ナエケ。(B ナエナヨ) ホダナ ゴドナ ナエケ。ホ ンダーハゲ
なかった。(ないのさ) そんな ことなど なかった。だから

ホレ ホダナ……。

ほう そんな……。

B タエヘンナダケツダナナエ。⁽⁹⁾
大変だったんだよな。

A ガギビラ ンー サンニンモ オガッ⁽¹⁰⁾デ テーシュナー
子どもたち⁽⁸⁾ ンー 三人も 置かれて 亭主などに

スナツダリ ビョーギナ サツダリ スルンダラ ホンーテ
死なれたり (亭主が) 病気に なったり すれば ほんとに

ホダナ カガ ナンヅエガ⁽¹¹⁾ ナッコロ ホレナヤ (C ンー)
そんな 妻は どうか なるほど ほう (んー)

ヤッパリ ナンギシテ ガギビラ オガシ⁽¹²⁾タナテ ユナ
やっぱり 難儀して 子どもたち⁽⁸⁾ 育てたなんて いうことも

アンナツアン。ンダゲ ムガスナ ホリヤ ジョーリ ツクテ
あるんだよな。だから 昔などは ほら 草履(を) 作って

アノ コメ カッテ カヘダ シトナ ナンボモ エンナツンダナ。
あの 米(を) 買って 食べさせた 人など 何人も いるんだよな。

(C ンダベ一) ン一。
(そうだろう) ン一。

C ユギノサナ ⁽¹³⁾ ンダッテ ユーケデ。ナワ ナッテ (B ンダ A ン一)
ゆきのさんなどは そうだつて 言つてたつて。縄(を) なつて (そう ン一)

アレンドアド ホレ ナワ ナッテ ホシテ ジョリー ツクテ ア
あれだ"そうだ" ほら 縄(を) なつて そして 草履(を) 作って

オヤヅチャ ⁽¹⁴⁾ サゲ ノマハダーテ。 (A ン一)
夫に 酒(を) 飲ませたつて。 (ン一)

B ン オヤヅ ホレ ホダエ カランダ ジョーブンデ ナエケッス
ん 夫(は) ほら そんなに 体(が) 丈夫で なかつたし

ヤスンデバリ エッケハゲナヤ。 (C ン A ン一ダナヤ一)
体んでばかり 居つたからなあ。 (ン そうだねえ)

C ドガダ スルエ
土方(を) するの

A ⁽¹⁵⁾ アノ シト ンダラ カシェーダナツダナナヤ一。 (A ンダーナー)
あの 人だつたら 縁いだんだよなあ。 (そうだね)

ホンデォ ⁽¹⁶⁾ ジョーリ ツクテ ママ カヘデ オクナテ ユーナナ
それでも 草履(を) 作つて 飯(を) 食わせて おくなんて いうのは

アノ メヅラスグ ナエケ。ンデモ ムガス。 (C ンダナ) ン一。
あの 珍しくは なかった。それでも 昔(は) (そうだね) ン一。

(C ン一) エ一マ ⁽¹⁷⁾ ホダナ ナンボ シタテ ジョーリナ ツクテ
(ン一) 今(は) そんな どんなに したつて 草履なんか 作つて

コメ カッチ ホダナ カシェランナエ ベー。エマ ジョリ
米(を) 買って そんな 食べられないだろう。今(は) 草履(は)

ヤッスエッス シテ ホダナホレ。 (Cンダ) ホダナ シェーカツ
安いし そして そんな 。 () そんな 生活を

シテル シト エネドレ エマ。 (Cン) ンー。
している 人(は) いないだろう 今(は)。 (ん) ンー。

B シテー エマーノ シト⁽¹⁸⁾ンダテ ジェニトリー シトリバーリ
そして 今の 人(は) だって 現金収入 一人(は) ばかり(の)

ジェニトリナテ ユード コレモ タエヘンナンダモナエ。
現金収入なんて いえは これも 大変なんだものな。

(A.Cンーダ) ン。アド ホレ ナエショグドガ ナニガ ミナ
(そうだ) ン。あと(は) ほら 内職とか 何か(を) どこでも

シテッサゲ エгентナエ。 (Cン Aンダー)
しているから いいけどね。 (ん そうだ)

A ホナーテ ハエツ ヤッパリ ンダゲ ムガスナノ ジェニ
ほんとに それは やっぱり だから 昔などは 金は

ツカワンナエ ナダケツァナヤ ナクテ。 (Cンー ンダナ) ンー。
使えなかったんだよなあ 貧乏で。 (んー そうだね) ンー。

C シェンバ アガ⁽¹⁹⁾ッシャエ。
せんべい(を) おあがりなさい。

A ホナーテ ホダナ ンダケー。アッヤ ハルカエゴナノー ホレ
ほんとに そんな そうだった あれ 春蚕など ほら

ホンデモ マエナノ ウッド ヒヤグエンサツナ ミルエ⁽²⁰⁾ゴド
それでも 繭など(を) 売ると 百円札などを 見られる ことが

アッタゲノ ヒヤグエンサツナ ミランナエナケモナヤ (Cン)
あったけど 百円札などは (普通) 見られないんだったものね (ん)

アノ シェツ (B ンダナ) ホダナ エヅネンジュー (咳ばらい)
あの 時節(は) (そうだね) そんな 一年中

カシェーダテ ヒャグエンサツナ ミランナエナダケ。 オゴサマ
稼いだって 百円札なんか(は) 見られない なんだ。 爾(を)

ウツテリヤ マエナノ ワダズド ホリヤー ヒャグエンサツナ
売ってさ 爾など(を) 売渡すと ほら 百円札などを

モラテ キタナテ ホシテ オイエ バツサマサ アゲロ マヅナテ⁽²¹⁾ ⁽²²⁾
もらって 来たなんて そして お恵比須さまに 供えろ まずなんて

ホシテ コンド (笑) ミンナチャ ヒャグエンサツ タカガヘテ
そして こんど みんなに 百円札(を) 持たせて

メシェダダテ ヒャグエンサツナテ コダエー ネウツ アンナダ
見せてだらう 百円札なんて こんなにも ねうち(か) あるんだ

コリヤナテ (笑) ホシテ オラエノ オドツァナノ。(笑) (C 笑)
これはなんて そして 俺家の 父親なんかは。

アリガダクテ ホノ ヒャグエンサツ ホレ (C ン) ンー。
ありがたくて その 百円札を ほら (ん) ンー。

B ヒャグエンサツナノ ワレワレ⁽²³⁾ ミランナエケモナ ホンデモ
百円札などは われわれ(は) 見られなかったものな そんなでも

オランダナノ……。
俺達など……。

A ミランナエ ホダナ (B ンー) エヅネンジュー カシェーダテ
見られない そんな (んー) 一年中 稼いだって

ミランナエ。
見られない。

B ヨッポドナ⁽²⁴⁾ シト ンナエド。(A ンー ンー) ナダ
よっぽどの 人で ないと。 (んー んー)

ゴツガエナテ ユタタテ ゴシエンカ ツッシエンダデナエ。
小遣いなんて いても 五銭か 十銭だものね。

(A ンーダ) オマツナテ ユタテ。
(そうだ) お祭なんて いても。

A ンダー。ハツガツノ オマツナテ⁽²⁵⁾ ユタテ ホレ ゴシエンナノ
そう。(旧暦)八月の お祭なんて いても ほら 五銭など

オランダナノ モラウド ヨローゴンデナヤ ホダナ。
俺達など(か) もらうと 喜こんで なあ そんな。

ゴシエンナテ ツネニ モラタ ゴド ナエナードレ。
五銭なんて 常には もらった こと(か) ないんだもの。

エッシェンカ ゴリントガテ (笑) ホダナバンデ。
一銭か 五厘とかって そんな(金額)ばかりで。

B オランダドモ マダ ジューネングラエモ ツカウハゲナ。(A ホンダ)
俺達とも また 十年ぐらいも (年代が)違うからな。(そうだ)

* オレー エツネンデ リヤ コーチャエンーノ イエー エダ
俺(は) 一年で あれ 興ちゃんの 家に 居た

アダリダド ジューエン アッド エツネン タクサンダケハゲナエ。
頃だと 十円 あれば 一年 充分だったからな。

ツボン カッターリ (A ハーホンダガナー) コンツガエシタリ。(A ヤッパリ)
ズボン(を) 買ったリ (はーそうかな) 小遣いにしたり。(やっぱり)

タバコモ ノマネハゲナレ。(A ンー) ナエデカンド ボンニ
タバコモ 飲まないからな。(んー) 毎年きまって 盆に

ゴエントヨー (A ン) ホレガラ ホレ ショーガツ ゴエン
五円とよ (ん) それから ほら 正月に 五円を

カリツケナヨー (A ンダツダー) ハエツ ホントワダド
借りるんだったよ。(なるほど) それが 本当は

エラネゲント ホレ ショーガツテ ユード ナエンデカンデモ
いないけど ほら 正月って いうと 毎年きまって
アリヤ アニキ ドゴサ ンケハゲ ホレ。(A ン一) カマフツツア。⁽²⁶⁾
ほら 兄貴(の) 所に 行くけから ほら。(ん一) 釜淵に。

(A ンダ ンダ ン一) ンダハゲ ジューエン エッケナヨー。
(そう そう ん一) だから 十円(が) 必要だったのよ。

A ン一。ヤッパリ ンダモナヤー ムガス ナエンデモ ホレ
ん一。やっぱり そうだね 昔(は) なんでも ほら
ヤッスエクテ ホレ。 ヤッスエгент カワンナエナダケ
安くって ほら。 安いけれど 買えないんだった
ンデモ。

でも。

B カワンナエケナ (A ジェニ) ジェニ トランナエケモ。
買えなかったな (金) 金(が) とれなかったもの。

A ンダ トランナエツス ナエナダケモ ヤッパリ ジェニ。
そう とれなかったし ないんだったもの やっぱり 金が
エマミデ ジェネマワリ ワレツスナヤ。(B ンダ) ン一。
今みたい(には) 金回りが 悪いしなあ。(そう) ん一。

B オナゴ シトノ ジニトリナテ ユーナ ナエケモノナエ。
女の 人の 金とりなんて いうのは なかったものね。

(A ナエケー) ジョーリックリノ ホガニワヨー。(A ンダ一)
(なかった) 草履作りの ほかにはさ (そうだ)

A ンダゲ ドゴーデモ ホダナ ジョーリジャ ツクタナツア
だから どこでも そんな 草履は 作ったんだよな
ムガス一。^{*}
昔(は)

狂

- (1) 十足で一把。
- (2) 巾三寸で作にくいが、女物（巾二寸八分）より、ねだんが高い。
- (3) ホダナ（だから）の強めた形。
- (4) 生活費のたしになるほど。
- (5) どんな品物でも。どんな商品でも。
- (6) 全員の協力によって草履ができた。草履ができるまでの手順は、
①わらしごき ②節ぬき ③みごし（米のとぎ汁）つけ ④水洗い
⑤節干し ⑥節切り をして「節」を作る。そのあと ⑦草履編み
⑧槌でたたく ⑨金棒でのす ⑩十足ずつ束ねる。
一方併行して縄ないをする。①わら打ち ②縄ない ③燃りかけ
④こすりかけ ⑤丸める
以上の仕事のために、家族全員が手わけして、手伝った。
- (7) 藁の節
- (8) ストローを切る。節と節との間のストローの部分き切る。
- (9) 生活が苦しい、経済的に苦しい ということ。
- (10) 残されて
- (11) ナンズエガ ナッコロ で「ひどく」という意味
- (12) オガス は ①育てる ②ふくらます ③茂らす ④繁茂させる
- (13) 近所の主婦の名。
- (14) オヤズ は ①父親 ②男の成人 ③夫
- (15) ゆきのさん
- (16) ママ カヘデ オグ で「生活を支えている」「生計を立てる」
- (17) 「もう」というニュアンス。
- (18) ①現金収入（者） ②生計主体者 ③稼ぎ手 ④お金とり
- (19) 話題の流れとは関係なしに、茶菓をすすめている。
- (20) ミルエ の エ は、可能をあらわす。
- (21) 神仏に供えること
- (22) マヅ 間投助詞的はたらき。
- (23) 俺達 という意味だが ひらきなおったりしていうときに使う。

- (24) よっぽど裕福な
- (25) 旧暦八月十五日を中心に行なわれた谷地八幡神社の例祭。近在でももっとも賑やかな祭りで、昔は一週間もの間続いたので、谷地のバカ祭りとも、ドンガ祭りとも呼ばれ、無形文化財の谷地舞楽と凱旋奴（ふり奴）が有名である。現在は、九月十四日から三日間行なう。
- (26) 地名。最上郡真室川町の釜淵。
- (27) 「良くないしな」のねじれ。
- (28) ジェトリ ①お金とり、②現金収入 ③収入を得るための仕事。

9 子守り

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A ヤッパリ ジュンジュント ホレ コンドモ ホレー アレ
やっぱり 順々と ほら 子ども(を) ほれ あれ

オンバンナネクテ ホレ (Cンダー) ンー。
おんぶしなければならなくて ほら (そうだ) ンー。

B ゴログニンナ⁽¹⁾ アダリマエナダケ (笑)。
五六人などは あたりまえなんだった

A ホンダー ゴログニン スツハツニンナ (Bン) アダリマエ
そうだ 五六人 セ八人などは (ん) あたりまえ
ミダエ ダケハゲナヤ。 (Cン) ンダハゲテ ホダナ⁽²⁾ コンドモーバ⁽³⁾
ぬたいだったからなあ。 (ん) だから そんな 子どもを
コンドモ オガシテ ケランナネミダエナ モンダケドレ ムガス。
子どもが 育てて やらなければならぬぬたいな もんだったよな 昔は。

B ンダケ エツンバン オッキナナ コ^x コンモリツア
だから 一番 上の子などは 子守 だったよな
ヅーット⁽⁴⁾ ナエハ。
ずうっとね。

A ンダ ヅーット コンモリヨハ ヤッパリ。
そう ずうっと 子守だったな やっぱり。

B デハテングド⁽⁵⁾ コンド ホノ シタンナ コンモリ シテ (Aンダ)
出ていくと こんど その 下の子(が) 子守(を) して (そう)
バツツノ ホーバ オバンナネケッス。
末っ子の 方を おんぶしなければならなかったし。

A ジューン⁽⁶⁾グ⁽⁶⁾リナヤ (B笑) ダン⁽⁶⁾ーダエ。 オレーワ ンデ⁽⁶⁾モ
順繰り(に) ねえ () だんだんに。 俺は それでも
コンモリワ スネーナ。アノー ツツチャエガラ⁽⁷⁾ トモデサ
子守は しないな。あの 小さい(時)から 野良に
デハテアラテ。オレンデ トシヨリーシタリ エダケハゲ。(Bン⁽⁷⁾ー)
出て歩いて。俺の家で 年寄り(が) 二人 居ったから。(ん⁽⁷⁾ー)
ンデ トシヨリバンチャド ホレ ホノ アレード ホレ
んで 年寄り婆さんと ほら ほの あれと ほら
ヤッパリ ワガエ バンチャド シタリ エダケハゲナ。ホノ
やっぱり 若い 婆さんと 二人 居ったからな。その
シト ンダ⁽⁷⁾ コンモリ シテ ケツケハゲ ホレ。 ンダゲ
人達(が) 子守り(を) して くれたから ほら。 だから
トモデサバリ デハテ アラタツダナー。
野良にはっかり 出て あるいたんだよな。

B オラエノ フンジ⁽⁸⁾コナノ ンナエナー。ヤッパリ エツンバン
俺家の 富士子などは そうでないな。やっぱり 一番
オッキハゲヨ (A ンダ⁽⁸⁾ベ⁽⁸⁾ー) ガッコガラクッド ナエ ンデカンデ⁽⁸⁾モ
上の子だから (そうだろう) 学校から 帰ると いつもきまって
オンボコオンビヨハ。 (A ンダ⁽⁸⁾ー ナヤ⁽⁸⁾ー) ホシテ バン
子ども おんぶさ。 (そうだよなあ) そして ×

バンカダ⁽⁹⁾ ホレ ママヅマエシテ オゲナハーナテ ヤッデナレ。
夕方に ほら ご飯の仕度して おけよな なんて いわれしてさ。

A ンダー ホシテ ショッデンノ シトナ オバンナネ カンージョ
そう そして 昔の 人など おんふしなければならぬ つもり
シテナヤー。
してねえ。

B ンダ スル カンージョ シテナエハ。 (A ン ー ンダー)
そう する つもり してなあ。 (そう そうだ)
ドゴンデモ オッキナハ コンモリ シテ (A ンダー) ママヅマエ
どこの家でも 大きい子が 子守 (を) して (そうだ) ご飯の仕度(を)
サンナネケツナ。 (A ンダー) ガッコガラ クッド (A ンダネヤ)
しなければならなかつたよな。 (そうだ) 学校から 帰ると (そうだ) ねえ
アデ シテル モンダモネハ。 (A ンダナ) *
あてに してる もんだものね。 (そうだね)

注

- (1) 子どもの数、きょうだいの数、について言っている。
- (2) もう子どもなんかは というややなげやりなニュアンス。
- (3) ……をば…の残存か。
- (4) 何年もの間、長らく。
- (5) デハル（出張る） ①家を出る ②勤めや奉公に出る ③野良仕事に出る。
- (6) 第一子が、第二子第三子をおんぶし、第二子が第四子の子守をし、第三子が第五子の子守をするというぐあいに 順送りにすること。
- (7) ①小さい時から ②小さいという理由で の二つの用法があるが、①の方は古老の使用法である。
- (8) 話し手B 高梨八太郎の長女（第一子）。
- (9) ご飯仕舞い とも。

10 手足による農作業

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A エッソー テアスンデ スネゲンバジャ ホレ キカエ
 すべて 手足で (作業)しなければ ほら 機械は
 ナエッスナヤ。 (C ンー) *
 ないしなあ。 (んー)

B ンダゲ オランダガラ カンガエッド ヒヤキシヨ一 ヤンダナテ
 だから 俺などから 考えると 百姓 (が) いやだなんて
 ユナ ナシテ ヤンダテ ヤンナネミダエナ モンダモナエ。
 言うの なぜ いやだって 言わねばならないみたいなものね。

A エマ ナヤ。ラグデナヤー。
 今 なあ。 楽でなあ。

B ナンニモ ゴミモ カガッゴダ ナエ (C ンダデー) キカエデ
 なにも ごみも かかること(が) ない (そうなものね) 機械で

(A.C ンダデー) ホダナ ヒシテ フツガデ オワル
 (そうなものね) そんな 一日か 二日で 終わる

スポド ンダデナエ タエデナエ。 (C ンダ A ンダーナヤース)
 仕事だろうにね たいていはね。 (そう そうですもんね。)

オラーダナノ アエツナ⁽²⁾ ドギ ホダナ トーガモ ハツガモ
 俺達など あれの ときは そんな 十日も 二十日も
 ホレ (Cンダナエー) ターチョス⁽³⁾ シテランナネ。 オッカゲ
 ほら (そうだね) 田の仕事(注) していなければならぬ。 次から
 オッカゲナエハ (Cンダー)
 次に ねえ (そうだ)

A ターウナエナノ ホダナー ヤッパリ エッシューカンカ
 田起こしなど(注) そんな やっぱり 一週間か
 トーガクラエナ スルンダラ ミナ ユービ スカグエ
 十日ぐらいも したら みんな 指(か) 四角に
 ナッケジャエ。(Bンダー) ンー。
 なったもんだ。(そうだ) ンー。

B ンダゲ オランダナ (Aンー) コゴ コー タゴエッテハ。(Aンダ)
 だから 俺なんか(は) (ンー) ここ(か)こう 胼胝になつてさ。(そう)
 カツダクテ (Aマ) マメナテ デネケデハ。
 堅くって (マ) まめなど 出なかつたさ。

A ンー ンダベハ ヤッパリ ホダナ エマナノ エマノ シトナ
 ンー そうだろうよ やっぱり そんな 今など 今の 人など
 グンテ カゲデナバリ ミナ スッサゲンダゲノ ショッデン
 軍手(注) かけてばっかり 何でも するからだけど 昔は
 ホダナ ナエッスホレ アレダデレ。ホダナハ トーガクラエナ
 そんなものは ないしね あれだろう。そんな 十日ぐらいも
 タウナエ スルンダラ ミナ スカグエ ナテハ ユービ ホーダナ。
 田起こし(注) したら みんな 四角に なって 指(か) そんな。
 タウナエジャ アエツ ツツカラ⁽⁵⁾ エル スゴドンダモナヤ。
 田起こしは あれは 力の 要る 仕事だものな。

B ツッカラ エンナヨーナヤ。 (A ンダー)
カ (か) 要るのよねえ (そうだ)

C ンダゲ オナゴシューナ ラグデナエッダナナヤ。
だから 女の人など(は) 楽でないんだよなあ

A ラグデナエ オナゴシューナノ ンー。
楽でないよ 女の人など(は) ンー。

B タウナウド コンド ホレ アメ フラレッドニバンカエステ
田を起こすと こんど ほら 雨(に) 降られると ニ番返しといって
(笑)(A ンダ) コー マダ カエサンナネナヨ (A ンダー)
(そう) こう また 起こさなければならぬよ (そうだ)

カワガネハゲー。

乾かないからー。

A ツツ シネド⁽⁶⁾ツット コンド ツンブンナエ ハゲナ⁽⁷⁾ ヤッパリ。
土(か) 乾かないと こんどは (土が) 碎けないからな やっぱり。

B ホシテ コンド マサガリデリヤー (A ンダ) タツンブスナエ⁽⁸⁾。
そうして こんど まさかりでさ (そう) 塊打ちね。

(C ンダ A ンー) ホノ タノ スゴドデ タツンブス エツバン
(そう ンー) その 田の 仕事で 塊打ち(か) 一番

テマ カガツケナエ。

手間 どのもんだったな。

A ンダ⁽⁹⁾ アエーズワ テマカガツケ。
そう あれは 手間どのもんだった。

B ツンブサンナエナヨナエ。 (A ンー) エツニツ
碎かれないのよね (ンー) 一日に

ゴシエ ブグラエトケ (A ンダ) ヒヤグゴツツ ツボグラエトケ
五畝歩ぐらい きり (そう) 百五十坪ぐらい きり

ツンブサンナエケモナエ。

砕かれなかったものね。

- A アエツワ ンダー。ンダゲ ミナ (B ン) ⁽¹⁰⁾ ヨエシテ ムガス
あれは そうだ。だから みな (ん) 共同して 昔(は)
ツンブシタ モンダダレー。(B ンダ) ターツンブス
砕いた ものだよな - (そう) 塊打ち(は)

テマカガッ サゲ。

手間どる から。

- C シトリバリナンダドナエ (A ンー) コツツァラ コワクテハ。
一人ばかりなどだとね (んー) ⁽¹¹⁾ ことさらに 疲れて な。

- A ンー ムサクテナ。 (C ンー)
んー はかどらなくてな。 (んー)

- B ホノ アドガ アリャ コンド ンマ ンデ アノー。
その後か あれ こんどは 馬で あのー。

- A ンー ⁽¹³⁾ クレキ^oリ
んー 塊切り

- B ン クレキ^oリ シ スンナ アックス タツンブステ ユナー
ん 塊切り(を) ^x するの(か) あった 田潰して いう

キカエ ハヤタ (笑) キカエテ ムガスノ キカエツアナ (A ンダー)
機械(か) 流行した 機械って 昔の 機械だよな (そう)

ゴロゴロゴロゴロド コロバシテ アラグナリャ。(A ンダー)
ごろごろ ざらざらと 転がして あるくのな。(そう)

アエツ デデガラ ラグエ ナタケゲントナエ。

あれが 出てから 楽に なったっけけどね。

- A ンダ ンダー。 マサカリデ ミナ ツンブサンナエケモナヤ。
そう そうー。 まさかりで みんな 砕かなければならなかったものな。

(C ンダ) ンー。
(そう) ンー。

C タツンブスマサガリテ チャントハ (A ンダー) ソロエデ
塊打ち用 まさかりって ちゃんとさ (そう) そろえて

オグケハゲ。(A ンダデレハー)
おくんだったから。(そうだったものね)

A カロクテモ アエツ ツンブンナエス ダモナヤ。
軽くってても あれは 砕けないし だからね。

B ツンブンナエデナエー。
砕けないものなあ。

A オモダクテモ マダ (B ン) エツニヅ ⁽¹⁴⁾ヌシャゲデ
重たくってても また (ん) 一日(中) 振り上げて
エランナネナダゲ (笑) コレモ (B 笑) ラグデナエ ホナーテ (笑)
居なきゃあならないから これも () 楽でない ほんとに。

アエツヨ チェット シトナ ミッド ラグミダエダゲント
あれはね ちょっと 他人の(笑) 見ていると 楽みたいだけれど"
ホナーテ。^{*}
ほんとに。

C ウワツツラバリ ツンブシテ エランナエスナ
表面ばかり(を) 砕いて (は) いられないしな

A ホンダー ナガマンデ コー ブートルクラエ
そうだ 中まで こう つき通るくらい

ツンブサンナネデナヤー。(C ンダー)
砕かねばならないものね。(そうだ)

B コンド ツンブンナエード ⁽¹⁵⁾ゴマガサレッド コンド タウエン
こんど 砕けないと ごまかされると こんどは 田植の

ドギ シッショ カゲネクテリヤ。
とき(に) 代掻きが(うまく)できなくてね。

A ゴロゴロテナ
ごろごろしてな

B ナエ ゴロゴロテ (A.C ンー) タウエ スンツラクテ
ね ごろごろして (ン) 田植(か) しにくくて
ワガンナエ ナナエー。
だめなんだよな

A ンダー ンダーゲ タツンブスジャ ホレ コー コマク
そう だから 塊打ちは ほら こう 細かく
ツンブスド イエナツナ ホレナヤ。 (C ンー) ンー。オランダノ
砕くと 良いんだ よな (ン) ン 俺達の
アダリナノ ホダナ ンマナノ エダ⁽¹⁶⁾ イエデナノ…… ホンテー
あたりなどで そんな 馬など 居る 家でなんか…… ほんとに
ホダナ ムラデモ エッケンカ ニゲンツカエ ナエハゲテ
そんな 地区でも 一軒か 二軒 しか ないから
オラエデナノ ホレ テーデバリ サンナネケツ。 クレキリモ
俺家でなど ほら 手でばかり しなければならなかったな 塊切りも
テーダケツ (B ンダー) ミナ。
手でだったな (そうだ) みな

B タエデー アエンダケモナエ。 (A ンダー)
たいていは あれだったものね。 (そう)

A クリキリデバ マダ ホレ クファ⁽¹⁸⁾ サンボン⁽¹⁸⁾グワ ホッ チャド
塊切りといえは また ほら 鋏^{x x} 三本鋏(を) そっちにと
コツチャ ホレ チェツチェ チェツチェド (B ンダナ) コンド
こっちに ほら ちよくちよく ちよくちよくと (そうだね) こんど

⁽¹⁹⁾
スカエラン-----。
持ちかえ-----。

B アエツ ⁽²⁰⁾ コー コー ニンドシテ マダ スング コー トカエテ
あれは こう こう =度やって また すぐ こう 持ちかえて

(A ホーダ) コー サンナネナダモナエ。 (A ホーダ C 笑)
(そうだ) こう しなければならぬんだものね。 (そうだ。)

A アエツ ⁽²¹⁾ コンド アゴノ ツリヨー ⁽²²⁾ ハラダダド (笑) (B 笑)
あれは こんど 歩(中)の 運び方が でたらめだと

コンド (笑) アス キッテナヤ。
こんど 足(を) 切ってな。

B アッチャ ⁽²³⁾ コッチャ ナテガー。(笑)
あべ こべ に なってか。

A ホーダ ⁽²⁴⁾ ホッチャ コッチャエ ナッド スンヅラエダレ
そうだ あべ こべに なると しにくいものね

アエツナヤ。ンダーモ (C 笑) アダナ マネシテ ムガス
あれなあ。 そうだね () あんな ことをして 昔は

シタナツダツナヤ。ホナーテ (C ナヤ) サンボンゴワデ
したもんだよなあ。ほんとに (なあ) 三本鉋で

ナエデカンデオ クレキリ マダ。 (C ン) アッゲナ クレキリナ
何でもかんでも 塊切りも また。 () あんな 塊切りなんか

ホレ タエシタ ホダエ テマ カガラネゲド。

ほら たいした そんなに手間 どのらないけど。

B ンダ アエツ ダド バエ スルエケハゲナ。

そうだ あれだと (塊打ちの) 倍は できたからな

A スルエケハゲナヤ。*

できたからな。

B ナエ^ンデ^カン^デモ エネナノ イエサ ショッ^テン^ダケ^ハゲ^ナエヤ。
何はともあれ 稲など(は) 家に 背負って(来^て) だったからな。

(A ン^ダー ミナ ショッ^テ C ン^ダ) ジェ^ンブ^ナエ。
(そう 全部 背負って そう) 全部 ね

A ムガスナヤ。

昔は ね

C ナ^ンー^キシ^テ (A ン^ー) ウエマ^ンデ^ン アケ^デナ^ア。
難儀して (ん^ー) 上まで 積みあげてな。

A ホシ^テ マロガ^ネン^デナ^{バリ} オラ イエ^ー エ^ダ ド^ギ
そして 束ねないでばかり 俺(が) 実家に いた とき(は)

マロガ^ネン^デナ^{バリ} ショッ^タハ^ゲテ^ヨー。ヤッ^パリ ヨー^グ
束ねないでばかり 背負ったからよ。 やっ^ぱり よく

ホン^デモ ワリア^エニ^ナヤ ザ^グザ^グテ ヤ^ネケ^ヅ ア^レ
それでも 割合いにね ざ^くざ^く し^なか^った よ

ホン^デモ^ナヤ。 ホ^ダナ マロ^テル テマ^ンデ^ン ショッ^タ ホ
それでもねえ。 そんな 束ねている 手間で 背負った 方(が)

イエ^ーナ^テハ オラ^エノ オド^ッア^ダ (B ン) ホシ^テー……。
良い なんてさ 俺の家の 父親たちは () そして ……。

B ツッ^カエ ド^ゴン^ダド ン^ダケ^モナ^エ。*

近い(田の) ところだと そうだったものね。

オ オ^レー ショッ^タ ゴ^ド ナ^エケ^デレ コー^チャ^エン^サ キ^タ
x 俺(は) 背負った ことが な^かったものな 興^ちゃ^んの^家に 来^た

ド^ギ(笑) (A 笑 ン^ダゴ^デヤー) ヤ^シェ^ンマ^サ ホ^ノ
とき (そう^だらうよ) 背^負い^梯子^に その

ナ^ラビ^ガダ^モ (32) ワ^ガン^ナエ^ナッ^ダナ^エ。
並^べ方^も わ^から^なか^った^んだ^よな。

C ハエツ ジョーツエ ナテ。 (Bン) マロガネンデ
それが 上手に なって。 (ん) 束ねないで

ヨンジュエグラエ ショウケハゲナー。*

四十(束) ぐらい 背負うんだったからな。

タン⁽³³⁾ント⁽³³⁾ダモノナエ タント⁽³³⁾ショウモノ。

たくさんだ"ものね たくさん背負うもの。

A ワングリント ウエサ コー ヨーハンツ ナラネド アエツ⁽³⁴⁾
湾曲して 上に こう 両端(か) ならないと あれは

ンマグ" ナエハゲナエ。

うまく ないからねえ。

B ンマグ" ナエモナエ。

うまく ないものね。

A ハエーツ オランダモ イエー エダ" ドギ" マロガネデ"
それよ 俺たちも 実家(に) いた とき 束ねないで

ショッタツ一。 ホダーナ ニーツグリ ハダ"ダド" ダメダ。
背負ったなー。 そんな 荷作り(か) 下手だ"と だめだ。

ヅルヅル シッ⁽³⁵⁾パラテ" コンド アンゴ" ツランナグ"ナテ(笑)
ずるずる 引っぱる状態になって こんど 足(を) 運ばなくなって

(C 笑)

B ヨッポンド" アノ カケン アルモナエ。

よっほ"ど" あの 加減(か) あるものね。

A ンダ" ヨッポンド" アエツ" ニノ ツグリヨー アンナヨ一。

そう よっほ"ど" あれは 荷の 作りよう(か) あるのよ。

B ヤシエンマ ヤシエンマ"デ"ダド" ヨッポンド" イエーゲント

背負い様子 でだ"と よっほ"ど" 良いけれど"

ニナンデ スングエ スンナダド (A ンダ) アエーツ カゲン
荷縄で 直接に するんだと (そう) あれば 加減が

アンナヨナエ。 (A ンダー)
あるのよね (そう)

C アンブラツンツァ⁽³⁶⁾ ジョンダケツナヤ。
油屋の爺さんは 上手だったよな。

B ンダー ツンツァダラ ンダー。 (A ンー)
そう 爺さんなら そうだ。 (んー)

C スコースツツダゲント。
少し ずつ だけど"

A スメデ⁽³⁷⁾ナヤ (C ン) スメデ コー ワングリーント コー
締めてな (ん) 締めて こう 湾曲させて こう

ナルヨーニ サンナネハゲ。(C 笑) エツエツ シェナガンデバリ
なるように しなければならぬから。() いちいち 背中で ばっかり

ショッテ サンナネケドレ ムガス ヨーグ ホンテ。 ムガスノ
背負って しなければならぬからものね 昔は よく ほんとに。 昔の

シトナテ カラ ンダ ツツエダツナヤ ホンデモ。
人は 体(か) 続いたよなあ それでも

B ンダ ホレタゲ ジョーブン…… (38) ホーユー ウンドーバリ
そう それだけ 丈夫 そういう 運動ばかり

シテッサゲ ジョーブンナダベナエー。
してるから 丈夫 なんだろうな。

A ンダナ ンー。^{*} ンー ンダ。 コヤデ ホレ コンド エネ
そうね んー。 んー そう。 納屋で ほら こんど 稲(を)

コエデナヤ。ホシテ コンド アメー フラーネド ホレ ソドデ
扱いてな。そして こんど 雨(か) 降らないと ほら 屋外で

コッケント ン アメ フッド コヤノ ナガンデ (C ンダー) 扱くけれど ン 雨が 降ると 納屋の 中で (そうだ)

コガンナネハゲ (C ンー) ハエツ アメ フッドギ スマツスナー 扱かねばならないから (ンー) それは 雨(か) 降るとき 処理するのを

ハエツ ホレ カグゴシテ エネ ヘツデ オグナツアッ コヤン それを ほら 覚悟して 稲(を) 入れて 置くんたよな 納屋の ナガサハ。

中にさ。

C ハエツ コヤ ナエ シト ンダ イエーサ アノ ミナシテ (39) それを 納屋(か) ない 人たち(は) 家の中に あ の 又なして

(A ンダ) タケツツナエ。(A ヘレツケダレナヤ) ボーボード (40) (そう) だったよね。(入れたもんだよね) ほうほうと

ヤシエデ。

させて。

A ンダド アメ フッドギ ホレ スゴド ナエワゲダ ホノ エネ だと 雨(か) 降るとき(は) ほら 仕事(か) ないわけだ その 稲(を)

ヘツデ オガネド。(C ンダ) ンダゲ* アメフリンドギ ハエツ 入れて 置かないと。(そう) だから 雨降りのときに) それ(を)

コンド ナガンナ ハエツタナ コンド コガンナネツアナヤ。 こんど 屋内の 入れてあるのを こんど 扱かねばならないのよ。

(C ン) ホーシテ コンド エネ コギアゲッド コンド (ン) そうして こんど(は) 稲(を) 扱き終えると こんどは

モミヨス ンダドレ ムガスナヤ。(C ンダー) モミー ヨシテ 粃打ち だものね 昔はな。(そう) 粃(を) 打って

ホーシテ シェンニ アダナ ノゲス⁽⁴¹⁾ネナバリ ウェツケモナヤ そうして 昔は あんな 芒稲 などばかり 植えるんだったものな

ホシデー。

そして

B ンダーナ コメ デッケハゲダ ンナエガヤー。

そうだな 米(か) 多くとれたからでないかなあ。

A ンダバ アレー ノゲスネ ハンブングラエ オラエノ イエーデナ
そうだろう あれ 芒(か) 稲(を) (作付の) 半分ぐらい 俺の 実家などでは

ウェッケハゲダー。(C ン) ンダド ホレ ハエツ⁽⁴²⁾ ヨスエ
植えるんだったからさ。(ん) そうすると ほら それを 打つのが

タエヘンデ ノゲ ミナ モゲルクラエ ヨサンナネドレ コンド。
たいへんで 芒(か) 全部 もげるほど 打たねばならないものな こんど。

C モ モゲッケツナエ ホンデモ。

もげるもんだったね それでも。

A ンダ モゲッケ ホンデモ ン。ホンデモ アダナ

そう もげるもんだった それでも ン。それでも あんな

アエコグナテ⁽⁴³⁾ ユナダド ノゲー……。

愛国なんて いうのだと 芒(か)

C ンダ アエツー アエツー ンダケナー。

そう あれは あれは そうだったな。

A ミンツカエケハゲ ホダンデ ナエゲノ アリヤー シギシマドカ⁽⁴⁴⁾
短かったから そんなで ないけど あれは 敷島とか

トーゴ⁽⁴⁵⁾ナテ ユー エネダド ノゲ フットクテ
東郷なんて いう 稲だと 芒(か) 太くって

ナンガクテナヤー (C ン) ナガナガ モゲネクテ。

長くってなあ (ん) なかなか もげなくって。

C エラーポエ⁽⁴⁶⁾ オモエバリ シタツアナヤー。 (A ン) ン

ちくちくする 思いばかり したもんだなあ。 (ん)

- B オレ アエコグテ ユナダド オボエツ⁽⁴⁷⁾ダナー。(C ンー) ンマダ
俺は 愛国って いうのだったら 覚えているなあ (んー) 旨く
ナエ コメダケナヤ アエツ。(C ンマダ ナエナ)
ない 米だったなあ あれは。(旨く ないの)
- A ンダ アエツ ンマダ ナエゲド (B ン) コグドリアルテ ンート⁽⁴⁸⁾
そう あれは 旨くは ないけど (ん) 収穫量があるって たくさん
ウェ ンナダケデ。(C ンダー)
植えるんだったな。(そう)
- B モカエネ⁽⁴⁹⁾ケモ。
倒れなかったもの。
- A ンダー モカエネクテ カラ カッダクテ ホシテ ホレ ノゲ
そう 倒れなくて 籾殻(か)堅くって そして ほら 芒(か)
ミン ツカエケモ アエツダド。
短かかったもの あれだと。
- B ンダ スコス アガエーミダエナ。
そう 少し 赤い 及たいな
- A アガクテナヤ。ンダー。ンー。
赤くってなあ。 そう。 んー。
- C アエコグダラ ンマダ⁽⁵⁰⁾ ナエケモナヤ。(B ンマダ⁽⁵¹⁾ ナエナヨ)
愛国 は 旨く なかったものな。(旨く ないのよ)
- A ンマダ ナエ。ホンデモ タント デルッテ ミンナ
旨くなかった。 それでも たくさん できるって 双んな
ウェ ンナダケダレ アエツ。
植えるのだったよなあ あれを
- B ンデモ ムガスナノ ホレ ネングナテ ンマエノ ンマダ
でも 昔など ほら 年貢なんか 旨いとか 旨く

ナエノテ (A ホンダ ホンダ) カマネケハゲ イエーナダケツダナ
ないとかは (そう そう) かまわなかったから 良いたったよな

(C ンダー) ナエ。 エマミダ^エヨー……。
(そうだ) ねえ 今 みたいによ……。

A ンダ コメツ⁽⁵²⁾ラサエ イエゲバナヤ (B ン) ホンデ ゴーカグ
そう 米の外見さえ 良ければな (ん) それで 合格に

ナタンダゲ ホレ (B ン) ハエツ ホレー アノー アエコグノ
なったんだから ほら (ん) それか ほら あの 愛国の

マエヨ⁽⁵³⁾ シギシマドガ トーゴーナテ ユナダド ノゲ
前よ 敷島とか 東郷なんて いうのだと 芒が

フットクテ オマエ ムギミダエダケツ (C ン) ハエツンダラ
太くって お前 麦みたいだったな (ん) それだったら

ノゲ フットクテ ナンカクテ。(B ン) ホダナ ヨレネクテ⁽⁵⁴⁾
芒が 太くって 長くって。(ん) なんとも もげなくて

ヨレネクテナレー。ナンギ サンナネケ アエツンダド。

もげなくてなあ。難儀 しなければならなかった あれだど。

C アリヤ トヨク⁽⁵⁵⁾ンダノ カメノ⁽⁵⁵⁾オ⁽⁵⁵⁾ンダノ (A ンダ) テユナ アエツ
あれ 豊国だの 亀の尾だの (そう) っていうの あれは

ンマエケツナエ。(A ンダー)
旨かったよねえ。(そう)

B ン フス フスワ⁽⁵⁶⁾ラーガレ。
ん 節藁 かね。

C ン フスワラナンナ。
ん 節藁になるの。

A ン アエツンダド ⁽⁵⁷⁾ボーズンダハゲナー (C ン) ホダエ
ん あいつだど 坊主だからなあ (ん) そんなに

アレダテ ホレ。ホンデモ ムガス シェンバンデナバリ
あれだって ほら。それでも 昔は 千歯扱きなどでばかり
コエダ⁽⁵⁸⁾ゲ カゲマ⁽⁵⁹⁾ダバリ アッテ ホレ エ ホダナヨ……。
扱いたから 穂つき扱 ばかり あって ほら え そんなだよ……。

B スグロヨス ⁽⁶⁰⁾ タエヘンダケッダナナエ。

選り残り打ち^(が)たいへんだったよな

A ン ヨサネデ⁽⁶¹⁾ トサンナエケダレ。 (C ンダ) ナエドカンデモ
ん 打たないでは 篩にかけられなかったもんだ。 (そう) ともかくも

ヨシテガラ トスナダケダレ。 *

打ってから 篩にかけるんだった。

B ホシテ ⁽⁶²⁾ ボンゴナスデ⁽⁶³⁾ コレ サンナネナヨナエ。(A ホダ) ホシテ
そして 唐竿で これを しなければならぬのよね (そう) そして

コンド ホノ カスバ⁽⁶⁴⁾ コンド マダ トンバシテナエ。(A ンダ)
こんど その かすを こんど また 飛ばしてさ (そう)

カジエ アッド⁽⁶⁵⁾ ホレ コー (笑) トンバシテヨ。

風^(か) あると ほら こう 飛ばしてな。

A ンダ ハエツバ マダ ヨサンナネドレナヤ。 ボーゴナスデ
そう それを また 打たねばならないものね。 ボーゴナス といって

ドゴ⁽⁶⁶⁾ダテ コー ワングリント シタナ (B ンダ) コー ホレ
とこの家にも こう 湾曲 したのが (そう) こう ほら

アッケツダナ。(B ンー) ンー。 ハエツデ コー サンニンモ
あったものよ。(ん) ン それで こう 三人も

ヨッタリモシテ コシテ タダガンナネツンダナ (B ンダ) ホレ
四人もして こうして 叩かねばならないんだよ (そう) ほら

ナヤ ンー。

な ンー。

C ヨッタリグラエシテダド⁽⁶⁷⁾ ハガ エンケント シトリシテナンダラ
四人 ぐらいで なら はか(が)行くけれど 一人で など

ナガーナガ。

なかなか

A シトリシテナンダラ ヨレルモンデナエ。

一人で なら もげるもんでない

B ヨレネクテナヤ。(C ン一)

もげなくってな (ん一)

A ホダゲ ムガスジャ ホレ カナエジュー ミナ ホレ アデ
だから 昔は ほら 家内中 みんな ほら あてに

サッデ デハタ モノッダナ トモデサナヤ。(C ンダナー) ン一。
されて 出た もんだよな 野良になあ (そうだな) ん一

ミンナシテ サンナネナダドレー ン一。*

みんなで しなければならぬんだものん。

注

- (1) 言いたくなる という ニュアンス
- (2) 農繁期や野良稼ぎの時をさしている。
- (3) チョスは「いじる」意であるが、ここでは仕事のこと。
- (4) 手の平を指して
- (5) ツカラ(力)の強めた表現。
- (6) シネ(干ない、乾かない)
- (7) ツブス(砕く)
- (8) 荒起こしした田の土塊を、塊割りなどでたたいて細かに砕くこと。
- (9) アエツワ(あれは)の強調した表現。
- (10) ユイ。各家相互間の互助的な労働力の交換による共同労働。
- (11) コワイは「疲れた状態にある」意味の形容詞。
- (12) ムサイは、①減らない ②減りにくい ③消滅しにくい 意味の形容詞。反対語は オケナイ。
- (13) 塊打ちで砕けなかったところを、さらに細かく鋤などで切り割る。
- (14) ノシャゲテ(伸ばして)が原形。
- (15) 塊打ちをいっかげんにして、ごまかされると。
- (16) エダの夕は、継続や存続をあらわす。
- (17) アエンはアレと同じだが、やや強調して示すニュアンス。ここでは「手による労働」を指している。
- (18) 田畑の荒起こしに使う鋤で、身が三本にわかれている。
- (19) スカエル ①とりかえる ②すりかえる ③持ちかえる。
- (20) 鋤でさくる手まねをして。
- (21) アエゴとも。歩中のこと。ここでは「足の運び方」アゴツリ。
- (22) ハラダクサイとも。ハラダは①嘘 ②でたらめ ③まずい の意。
- (23) 足の運びと三本鋤の持ちかえが、正しい方向にならないこと。
- (24) (23)に同じ。
- (25) ジェンブ(全部)の強めた表現。
- (26) 雪国のために、稲はコヤと呼ばれる納屋兼作業場に収納するのであった。土間床が普通で、かなり大きな建物を作っていた。

- その農舎の上の方まで稲を積み上げることさしている。
- (27) 稲の七株ぐらいを刈り取って稲束にし、それを六つ（六把）ぐらい一まとめにした大きな稲束にするのが常で、それを一束といった。そこでは、「大きな束にしないで」
- (28) 束ねないにもかかわらず、背負っても稲はくずれなかったこと。
- (29) 下男奉公先の家に来た年は。
- (30) やせ馬。やせた馬が背負うほどの沢山の荷物を背負えるという意。
- (31) 稲の。
- (32) ナラベガダモのねじれ。
- (33) タント（たくさん）を強めた表現。
- (34) 荷作りを指す。
- (35) 自然に「引っぱるような状態になって」という意。
- (36) 話し手Cの分家の老人。油売り行商であった。
- (37) 荷縄で荷物をきりりと締めて。
- (38) 農作業に適する
- (39) 稲を運び入れて積み重ねて
- (40) ボンボントとも。①ごみやちりの舞い上がる形容。②炎が盛んな形容。③草などが勢いよく繁茂する形容。
- (41) 芒（のぎ。稲・麦などの果実の外殻皮の先にある堅い毛）の長い稲。
- (42) 芒の長い稲
- (43) 稲の品種名。
- (44) 〃
- (45) 〃
- (46) 粃殻や芒や藁屑などが下着にささって、ちくちくと肌を刺す感じ。イラッポイが原形。イラは、いらいらする・いら草・いらだたしいいら立つ・いららぐなどの「いら（苛）」と同じ語源であろう。
- (47) 継続を表わす。
- (48) 石取り であろうか 穀取り であろうか
- (49) 稲が倒伏しない性質であった。
- (50)(51) シマクナイ（旨くない）の強めた表現。シマッグがより強い。

- (52) コメヅラ (米面)。米の外観、見ばえ
- (53) 愛国という品種が作られようになる以前。
- (54) ヨレネ (選れない)。唐竿でたたいても籾粒が藁しべからばらばらに取れない。籾だけを取り出すための作業だったから「選る」といったものか。
- (55) 稲の品種。
- (56) 藁丈が高くて、草履の材料 (フス) をとるに適した稲の品種。米は旨いが、収穫量が少なかった。
- (57) ボーツ (坊主)。芒がない品種の総糸
- (58) コエダゲ (扱いたから) コイタとハケの融音。
- (59) カゲマダ 藁しべから籾粒がばらばらに散らないで、籾がくっついたまま穂ごとむしりとられたもの。篩 (籾通し) にかけても、篩の中に残り、さればとって、捨てるわけにもいかず、再び叩かなければならなかった。欠け又 であろうか。
- (60) スグロ 藁の外皮などとカゲマダとが混じり合ったもの。スグル (えりすぎる) →スグリ→スグロ か。
- (61) トサンナエ 篩 (籾通し) にかかけられない。
- (62) ボンゴナス。唐竿、連枷、麦打ち棒のこと。こなし棒が原形か。「こなす」は、穀物の穂から果粒 (穀粒) を切りはなす。脱穀すること。
- (63) 唐竿で打つまねをして
- (64) 風でごみやわらを飛ばして、カゲマダを選別する。
- (65) 飛ばすときのしぐさをして
- (66) どこ (の家) にだつて
- (67) ハガエグ ① 仕事が順調に進む ② 結果がどんどん進行する。

II 旅行

話し手

A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ

B ツエンブン ホツツコツツサ コンド サンガツアダリダド
ずいぶん そっちこちに こんど 三月あたりになると
アラグエ⁽¹⁾ ナンナダ⁽¹⁾ ンデモナエ。(A ンダ) ニガツ サンガツダド
行くようになるんだ それでもねえ。(そう) 二月 三月だと
エツンバン イエーテ⁽²⁾ ユナダモナエ。(A ンダツダー) ジキドシテ。
一番 良いって いうんだよね。(なるほど) 時期としては。
(A ンー) ヒロツサダ⁽³⁾ テンド⁽⁴⁾ テンドナテ ホツカエドーサ
(んー) 弘さん(は) ××× 天童じゃない 北海道に
エングテ エダ⁽³⁾ ンナエガヤ。(A ホンダベチャ アレナー 笑)
行かって(話している) じゃないかな。(そうだろうよ あれな)
(笑) ナナカツダナテ。(A ンー)
七月だって。(んー)

A ホツカエドーワ アタガエ ドギ ンナエド ワガンナエベナ
北海道は 暖い 時でないと だめだろうな
ヤッパリ。(B ンー) ホツカエドーワ ンダド ンデモー
やっぱり。(んー) 北海道は すると ても
メーサエニ ミルダ⁽⁵⁾ラ トーガ カガルテ ユーナダンデォナ
明細に 見るならば 十日 かかるって いうんだ てもな

(B ン一) ホッカエドモ。
(ン一) 北海道も。

B コツツサ⁽⁶⁾ エカネ ゴンタラー エンカーナ⁽⁷⁾ ナテ エダ⁽⁷⁾ンダケゲント。
こっちに 行かない ならば” 行こうかななんて いたんだっけど”。

A (笑) ンダ ヤッパリ アノ ワガエウツ エッテ キタ ホ
そう やっぱり あの 若いうち(に) 行って 来た 方(か)
イエーナダ。トスエングド ホダナ クタービッデ⁽⁸⁾ ツカッデ
いいんだ。年(か) 行くと そんな くたびれて 疲れて
アラガンナエモ ホダナハ。(笑) オダクサンアダリア チョード
歩けないもの そんな 。 お宅さんあたりが ちょうど
イエアンバエナ トスゴロダ。アラギアンバエダッス。
いい具合な 年頃だ。 行くには絶好です。

B マンダ ハヤエベ^{~~~~~}ナー。(笑)
まだ 早いだろうや。

A ハヤ⁽⁹⁾グナ ナエベツハ ホダナ エマミナ ワガエ シトバリ
早くなんか ないだろうや。そんな 今(は) 又(も) 若い 人(ば) ばかり
タント アラグデ トショリ イエガ。(笑)
多勢 行くじゃないか 年寄り よりも。

B ツエブン アラグエ ナタンダ ホンデモナエー。
ずいぶん 行くように なったんだ それでもねえ。

A アラグー。
行くねえ。

B ワッガ⁽¹⁰⁾エクテデ。
若くても。

A ンダーッス。
そうです。

B コツツ ヤヅシューナノー トスエッタナバリ ミデンダゲントモ
こっち 谷地の人など 年いった人ばかり みたいだけど

サンバダ⁽¹²⁾シューナ イェアンバエ ワガエナバリミダエダナー。
沢畑の人など かなり 若い人ばかりみたいだな。

A ンダベース エマ ワツガエ シトバンダ アラグナ ミナー
そうでしょう 今は 若い 人ばかりだ 行くのは みな
ンー。ヤッパリ ゴジューダエ ログジューダエダド アレダゲンノ
んー。やっぱり 五十代 六十代 だと あれだけど

オランダミダエ スツジュノ ウェー ナッドハ ホダナハ(笑)
俺なんか みたいに 七十の 上に なるよ そんな

オモヤミデ⁽¹³⁾ トツガエ ドサナ アラガンナエモナヤ。
心配で 遠い 所になど 行けないもの ね。

B ンダゲ ホユナ ナナジューダエダラ ナナジューダエクラエナバーリ
だから そういふ 七十代なら 七十代 ぐらいの人ばかりの

コー トスンナバ コー(笑)ズカン カゲデ シェデ アラグド
こう 年の人を こう 時間(を) かけて 連れて 行くと

イエーナダベナエー ホントワ。(A 笑) ハエツ ワツガエナド
いいのだろうね 本当は。() それが 若いのと

トショリッタナ⁽¹⁴⁾ マンザツサゲ ホレ (A 笑) タエヘンナヅアナエ
年寄った人(とが) 混じるから ほれ () たいへんなんだよな

トスー アエツナ⁽¹⁵⁾ シトナエ。 ホノ トス トスニ アエツ
年が あれな 人はね。 その 年令別に あれ(を)

スッド ホダンデ ナエナ ンナエガヤ アエツァ。
すると そんなで ないの でないかね あれは

A ンデモ オランダミデナ ナテガラハー イェノ シトモ
でも 俺達みたいに なってからは 家の 人も

ヤッパリハ ホダエハ トツガエ ドサナノ ダシテ
やっぱり そんなに 遠い 所などに 出して

ヤッダガラネハゲナ ンデモナ ヤッパリ。
やりたがらないからな でもな やっぱり。

B ンダゲ ホユー (A ンー) トスダエノ シトヨ ナナジューダラ
だから そういう (ん) 年代の 人 さ 七十なら

ナナジューダエノ シト エグド (A 笑) ミンナ ホユナダモノ⁽¹⁶⁾
七十代の 人(が) 行くと () 全員が そういうの(だ)もの

イエーナ ンナエガヤー。 (A 笑)^{*}
いいので ないかな。

A ホンデモ ツブンナガラ ンデモ コレハ ン スヅジューノ
それでも 自分ながら でも これは ン 七十の

ウエナ ナッド アンマリ トツガエ ドサナ ヤッパリー
上などに なると あんまり 遠い 所になど やっぱり

エングダグ ナエミデダモナヤー。 ホンテ ツンブント タエデ⁽¹⁷⁾
行きたく ないみたい(だ)ものな。 本当に 自分と たいして

ツガワネミデナ シト ホリヤー ホッツデ スンダ コッツデ
違(わ)ないみたい(な) 人(が) ほら そっちで 死(し)んだ こっちで

スンダナテバリ ユーハゲテ。^{*}
死(し)んだ(な)んて(は)かり いう(か)ら。

注

- (1) 旅行(ここでは観光旅行)に行くように。方言のアルクは共通語の歩くよりも、意味範囲が広いようである。
- (2) 観光旅行をするには、もっとも適しているということ。
- (3) 話し手Aの甥で、話し手Bと同じ職場の人。
- (4) 将棋のまち天童市(温泉地)のこと。
- (5) 見るつもりならば。古い言い方。普通は、「ミルキダラ」という。
- (6) 九州一周旅行
- (7) 北海道に行こうかなということ。
- (8) クタビッデ(くたびれて)を強調した表現。
- (9) ハヤグナ(早くなんか)を強調した表現。
- (10) 若くっていても。「若いくせに」というニュアンスがある。
- (11) 地名。河北町谷地。録音地。
- (12) 地名。河北町谷地の小字名。録音地の西方1.5 Km。
- (13) 思い病み が原形。
- (14) トショツタナ のねじれ。
- (15) 年老いた
- (16) 老人だもの
- (17) 大抵

12 植樹と日照権

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A イエアンバエ⁽¹⁾ オツケナダモ ンデモ マツヌギッタテ ホダナハ
 ななり 大きいのだもの でも 松の木といつても そんな
 ンダナ コノ⁽²⁾ タガサイエガナ ヅット タツガエナダ ンデモ
 そうだな この 高さよりも ずっと 高いんだ でも
 ンー。(B ア マツヌギガ) ンー マツヌギ ナニマツドガテ
 ンー。(あ 松の木か) ンー 松の木(は) 何とか松とか言って
 チェット ン カワタ マツドガテ ユナダケツ。ンダゲ
 ちょっと ン 変わった 松だとかって 言うんだった。だから
 エダマスエドテ⁽³⁾ オレ ウエデ ケダモナナテ エダケハゲヨ。^{*}
 惜しいと思って 俺(が) 植えて やったものななんて いたけからよ。
 コノ トスエ ナテ ハツジュバリナテ ンー ヨー アダエ
 この 年に なって 八十にもなって ン よ あんなに
 ワツガエ⁽⁴⁾ モノニ ゴシャガッテ ナテ。(笑) (B 笑) オモシヤグ
 若い 者に 叱られて なんて。 シャくに
 ナクテ⁽⁵⁾ カダツケゲヨ。(C クーダモナエヤ) ンー
 さわって (そう) 語ってたからよ。(九 だものなあ) ン

ンダデ クーダ。(Cン) カゾエドス ナナジュークーダモ。
そう 九だ。(ん) 数え年(の) 七十九 だもの。

C ナナジュークーダドレハー。
七十九 だものな

A オラエノ ツンツァ⁽⁷⁾ダド オナエドスダハゲ ホレナ。(Cン一)
俺家の 爺さんなんかと 同年 だから ほら (ん)

B ホシエ ワレノ ヤスギサ ウェダナダラ ゴシャガレッコドモ
そして 自分の 屋敷に 植えたのなら 叱られることも
ナエケベナヤ。
なかったろうがなあ。

A ンダケベゲントモ アレアド イエダ カエテ⁽⁸⁾ オカッド
そうだろうけど あれだって 枝(を) 払って 成長すると

オラエノ ハダゲサ シカゲ ナルテダド (C笑) ンダゲテ
俺家の 畑 に 日陰に なるってだって () だから

ゴツエテ⁽⁹⁾ モラワンナネテ ホレ ヤッダテダー。ホダナ ユギノ
根こぎにして 貰わなければならないって ほら 言われたっていうんだ。「そんな 雪の

ウエテ⁽⁹⁾ コツエテ⁽⁹⁾ モラワンナネナテ ユタテ エマナ
上だから『根こぎにして 貰わなければならない』って 言ったって『今なんか

コツガンナエハゲテ (笑) ユギ ナグナテガラダテ オレ
根こぎにできないから 雪(か) なくなってからだ』って 俺(は)

ユタナテ (笑) (C笑) エダケ。(笑) (C笑)
言った」なんて () (言っ) いたっけ。

B ホダナンダゴンタラ タゲヤニ⁽¹⁰⁾ ゴシャガレンナヨー。ワレノ⁽¹¹⁾
そんな(言い分)だったら 竹谷に 叱られる 論法だよ。「お前の

イエー タツガエハゲ シカンゲ ナッサゲ (笑) ヒックグ
家(か) 高いので 日陰に なるから 低く

シテケロナテ ヤレルヨーナ モンダ¹¹ベチャエナエ。(笑)
してくれ」なんて 言われるような もんだろう やな。

A ンダベナヤ。アソゴ¹⁰ ダエブ シカ⁹ンゲ ナテッダレ ナヤッス。
そうだろうな。あそこ だいぶ⁸ 日陰に なってるじゃないかね。

B ダエブ⁷ シカ⁶ゲ ナテルナ ワガン⁽¹²⁾ナエ モンダ⁵モナヤ (A⁴ ン³ダ²)
だいぶ¹ 日陰に なってるの(か) わからない もんだもなあ (そう¹だ²)

A フミヨッ⁽¹³⁾サエンナ モモヌギ¹²ダテ アレ コツツノ ホ シカ¹¹ゲノ
文義さん家の 桃の木だって あれ こっちの 方 日陰の
ホ ナエ¹⁰ダガ シェー ワレ (B⁽¹⁴⁾ ワガン¹³ナエ) ミダ⁹エ⁸ダ⁷ダ⁶レ
方(は)なんだか 勢が 悪い (だ⁵め⁴だ³) み²た¹い⁰だ⁻¹もの⁻²ね

オカ⁰ラ⁻¹ネ⁻²ク⁻³テ。

大きくならなくて。

B オラ⁽¹⁵⁾エンナ デハリノ ハダ¹⁴ゲ¹³モ ンダ¹²シ¹¹モ (A¹⁰ ン⁹ー⁸)
俺家の 村はずれの 畑も そう⁷だ⁶もの (ん⁵ー⁴)

ブン⁽¹⁶⁾サク¹⁵サエ¹⁴デ¹³ ク¹²ファ ツー¹¹ット ウエ¹⁰デ⁹ オグ⁸ハ⁷ゲ⁶ナ⁵レ。
文作さんの家で 桑(を) ず⁴う³と 植²えて 置¹くから⁰ね。

(A¹⁸ ン¹⁷ー) ヤッ¹⁶パリ エッ⁽¹⁷⁾ケン¹⁵ドー¹⁴リ¹³プラ¹²エ ナ¹¹ン¹⁰ー⁹ダ⁸テ⁽¹⁸⁾
(ん⁷ー) や⁶っ⁵ぱ⁴り 一³間(1.8m) 巾²ぐ¹ら⁰い(は) 何⁻¹を⁻²植⁻³え⁻⁴ま⁻⁵って

ワ⁰ガ⁻¹ン⁻²ナ⁻³エ⁻⁴ナ⁻⁵ヨ。

だ⁰め⁻¹な⁻²の⁻³さ。

A ン¹⁸ダ¹⁷ベ¹⁶ー ヤッ¹⁵パリ ア¹⁴エ¹³ツ (B⁽¹⁹⁾ ワ¹²ガ¹¹ン¹⁰ナ⁹エ シ⁸カ⁷ゲ⁶ン⁵ ド⁴ゴ³)
そう²だ¹ら⁰う や⁻¹っ⁻²ぱ⁻³り あ⁻⁴れ⁻⁵は (だ⁻⁶め⁻⁷だ⁻⁸ 日⁻⁹陰⁻¹⁰の 所⁻¹¹(は))

シ¹²カ¹¹ゲ¹⁰ ナ⁹ル⁸バ⁷リ⁶ン⁵ナ⁴グ³ ツー² ス¹ウ⁰ハ⁻¹ゲ⁻²ダ⁻³モ⁻⁴ナ⁻⁵ヤ。(B⁽¹⁸⁾ ン¹⁷ダ¹⁶ナ¹⁵ー)
日¹⁴陰¹³(に) な¹²る¹¹ば¹⁰か⁹り⁸で⁷なく 地⁶カ(を) 吸⁵う⁴か³ら²だ¹もの⁰ね (そ⁻¹う⁻²だ⁻³ね⁻⁴)

ン⁰ー。 オ⁻¹カ⁻²テ⁻³ガ⁻⁴ラ ホ⁻⁵レ ホ⁻⁶リ⁻⁷オ⁻⁸ゴ⁻⁹ス⁻¹⁰エ タ⁻¹¹エ⁻¹²ヘ⁻¹³ン⁻¹⁴ダ⁻¹⁵ ン⁻¹⁶ー

ん⁻¹⁷ー。 「大⁻¹⁸き⁻¹⁹な⁻²⁰て⁻²¹か⁻²²ら ほ⁻²³ら 堀⁻²⁴り⁻²⁵起⁻²⁶こ⁻²⁷す⁻²⁸の⁻²⁹に 大⁻³⁰変⁻³¹だ⁻³²」 ン⁻³³ー

ハゲテ ホレ アノ ハヤグ ユテ モラテ
から ほら あの 早く 言って 貰って

イエガッ タツダゲドヨナテ (B ンー) ツンツァ エダケナ。(笑)*
良かったんだけどよ」なんて (んー) 爺さん(か) (言っていたっけな。

C ホゴ⁽²¹⁾ アレノ ミサチャエンデ⁽²²⁾ アノ クファ⁽²³⁾ (A ンー)
そこの あれの 美佐ちゃん家で あの 桑(か) (んー)

オラエノ ハダゲノ ンダナー エッケンハングラエマデ コー
俺家の 畑の そうだな 一間半(2.7m)ぐらいまで こう

エンダ ノビデ クンナダケデー。(A 笑) キッ × ×
枝(か) 伸びて くるんだったものね。(んー) 切っ

タオシタモノエハ。

倒したもののな

A ンダガハッス。ン ミナ キッタガハッス。(C キッタハ) モドガラ
そうですか。ん みな 切ったんですか。(切っちゃった) (根)本から

(C ン モドガラ) ホーガレ (C ン) ンー。
(ん (根)本から) そうかな (ん) んー

B アノ クファ ヌギガ。(C ンー) ンー。
あの 桑 の木か。(んー) んー

A ンデ⁽²⁴⁾ イエー
そりゃ 良い

B アソゴ ロソーダケガレ。
あの木は 魯桑だったっけ。

C ンダー ロソー。マエネン オラエデ カッテダンダケドナヤ。
そう 魯桑だ。毎年 俺の家で 買ってただけどなあ。

(A ンー)*
(んー)

注

- (1) いい塩梅にが原義。ここでは、かなりの意。
- (2) 天井をさして
- (3) 痛ましい(心が痛む状態)が原形。
- (4) ワガエ(若い)を強めた表現。老人の北隣に住んでいる工藤某、四十六歳の男をさしている。屋敷の境に近く松を植えて、工藤氏にしりをもちこまれたことをいっている。
- (5) おもしろくなくって
- (6) 年令を言うときに、一位数だけで言う習慣がある。八十歳などの場合は、チョードと言う。
- (7) 夫のこと
- (8) 掻き取って高く伸ばす
- (9) 根ごと引き抜く
- (10) 竹谷氏。工藤某は、竹谷氏の南側に二階建ての大きな家を屋敷ぎりぎりに建てている。そのため竹谷氏の畑は終日日陰になって、迷惑をこうむっている。
- (11) 工藤某をさす
- (12) 自分のことは わからないものだ という気持ち
- (14) ワガンナエ ①分からない ②だめだ ③いけない
- (13) 工藤某の家の日陰になっている桃畑の持主の名
- (15) 出張り。町・村 部落などのはずれ。出張りの対語はスグ(宿)。
- (16) 人名
- (17) 一間通り
- (18) ナンダテ(何でも)を強めた表現。
- (19) 地力。作物を成長させる土地の力。
- (20) 松の木を植えて、しりをもちこまれた老人。
- (21) すぐ南隣りの
- (22) 話し手Cの南隣りの家の人名
- (23) 魯桑。葉は巨大で柔らかく水分が多く養蚕に適する。巨木だった。
- (24) 日陰にならなくなっ て よかった という こと。

13 都市計画と移転

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさる 女 明治34年生まれ

A ナエ>ダガナヤー ドサー キラル モンダガ.....
 どうなるのかねえ どこに(道が)切れる のか

B アエヅ キラルーテ ユード タデラシエネハゲナエハ。⁽¹⁾
 あれ (道路が)切れる、ていうと 建てさせないからな。

(A ンダベナハ) タデラシエルタテ アリヤ (A キマレバナ)⁽²⁾
 (そうだろうな) 建てさせるとしても あれ (決まればな)

ジョーケンツギダド。(A ンー ンダガー) ン。
 条件つきだそうだ (んー そうか) ん

A ホンダゲ アリヤ アノ ショーエヅロサエノ ター アソゴ⁽³⁾
 だから あれ あの 正一郎さんの家の 田(は) あそこ(を)

ウツタナノ ンダゲ アダエー ニスノ ホー リヤー
 売ったのなど だから あんなに 西の 方 あれ

(B ン ミナ ウラタデハ) アゲデ⁽⁴⁾ アレ シタデアレナヤ。(B ン)
 (ん 全部 売れてしまったな) あけて あれ したじゃないか。(ん)

イエー タデダデアレ アソゴ。アレタゲ ミヅ ヒログ
 家を 建てたじゃないか あそこ。あの分だけ 道(が) 広く

ナッサゲテ ホレ アゲラヘダンダベ ヤッパリ。
なるから ほら あげさせたんだろう やっぱり。

B ンダ アエツノ ホー ヒガスノ ホー ミナ ウラタナヅァナハ。
そう あれの 方 東の 方は 全部 売れたんだよな。

A ンダベナエハッス ンー。
そうでしょうね ンー。

B アラダ⁽⁵⁾メガラ クッ ドゴ ホレ ガッ⁽⁶⁾コノ ホーサワ ミナー
改目から 来る 所 ほら 学校の 方へは みな

アソゴ アゲルエ シタンダゲネ。ウ カッタ^xンダッスヨ ミナハ。
あそこ あげるように したんだからね。 ^x 買収したんだしよ 全部。

(A ハー ンダツダ) キョ ネナノ ハル ミナー ウツ^xタ^x
(はー なるほど) 去年の 春に 全部 売った

ウツタツダガ (A ンー) カッタナヅダナナハ。
売ったというか (ンー) 買収したんだよな。

A ンダツダナ ナハ。ミナ キマ⁽⁷⁾タンダベハゲナハ。
そうだよな。 全部 決まったんだろうからな。

B キマタンダハゲ。 (A ンー)
決まったんだから。 (ンー)

C ナンツエ ナルンダガナエ。
どんなに なるのかね。

B ンデ アイナ イエー タデルッ⁽⁸⁾タテモ ホレー ン ホゴサ
んで ああいうのは 家⁽⁸⁾ 建て⁽⁹⁾てるっていても ほら ン そこに
ドーロ キラルテ ユー⁽⁸⁾ ワガッテ⁽⁹⁾ッド ケーガグシ⁽⁹⁾テッド
道路⁽⁸⁾ 切れ⁽⁹⁾るって いうのが わかっていると 計画していると
ホーユー バアエ⁽⁹⁾ダド イテンスルドガ イテンヒドガテ
そういう 場合だと 移転⁽⁹⁾するとか 移転費⁽⁹⁾とかは

ケネ ゴドエ シテ スンナ⁽¹⁰⁾ダツタデネ。^{*} ンナエド ホダナ
 呉れない ことに して (建築)するんだ そうだよね。 でないと そんな
 ツロエナバリ エルテアデ⁽¹¹⁾。ワラワラ ミヅ キラルテ ユド (笑)
 ずるい人ばかり 居るっていうんだ。 急いで 道^(か) 切れるって いうと
 エラネ モノモ ウエダリ マツタリ⁽¹²⁾ スルテヨ。
 いらぬ ものも 植えたり 何か するってよ。

A (笑) ホダ ホンダー ホンダモナヤ。
 そう そう そうだものな。

B ンダテ タヅギサー ホジョー ツグナダゲナエ。
 だって 立木に^(も) 補償金^(か) つくんだからね。

A ンー ンダツダー。ンダー アソッカラ マッスケ キラル
 んー なるほど。 そう あそこから まっ直ぐ 切れる
 キラルテ ハナス アツタンダツナヤ。
 切れるっていう話^(か) あったんだよな。

B キララネモナヤ。^{*}
 切れないものね。

A ンダ アソゴ スロサエ⁽¹³⁾ンドツカラ マッスケテ ユード ンデモ
 そう あそこ 四郎さんの家の所から まっ直ぐって いうと でも
 ダエブ イェー タカガンナネナ アンベモアレナ ホンデモー。
 大分 家^(を) 移転しなければならぬ家^(か) あるだろうからなあ それでも。

B アソゴ ゴンスケガラ⁽¹⁴⁾ アソゴ マーッスケ⁽¹⁵⁾ オッキリミツツァ
 あそこ 権助の所から あそこ まっ直ぐに 押切道に
 キラル⁽¹⁶⁾エ ナンナンナエガ (A ハー ンダガ) ケーカグワ。
 切れるように なるんでないか (はー そうか) 計画は。

(A ンー) ナエ アソゴラサ キランナダガ スンナエナ。
 (んー) ね あのへんに 切れるのかも 知れないな。

A ンダレバ アソゴダレバ ホレ イエー ナエハゲナヤ (B ンダ)
そんなら あそこならば ほら 家(か) ないからな。 (そう)
ターバンダゲ イエー ツダナナヤ。アノ ミヅ ヒログ
田ばかりだから 良いんだよな。 あの 道(か) 広く
ナンナダベ ンダラ。
なるんだろう では。

B ヒログ ナンナダガ スンナエナ。
広く なるのかも 知れないな。

A ン アソゴワ イエー ツダアレナ。ヤッパリ イエー タガ⁽¹⁷⁾グテ
ん あそこは 良いんだよあれは。やっぱり 家(を) 移転するって
ユード カネ カガツヅァ ナヤ。
いうと 金(か) かかるんだよね。

B ンダ ジェ⁽¹⁸⁾ニール ケルテ ユー モノノ……。 (笑)
そう 補償金(を) 呉れるっていう ものの……。

A ンダー ホダナ。ケンナナ サンブンノエツモ ホダナ ケー
そう そんな。呉れるのなど(は) 三分の一も そんな ^x_x
ダサネモノ⁽¹⁹⁾ ホダナ。 (笑) (C 笑)
出さないもの そんな。

B ケツキョグ ホゴシテ モテグノ ナンノッタテ イエグ
結局 (家(を)ほごして 移転するの なんのっていったって 良く(は)
エカネツダッスネヤ。
いかないんだしね。

A ンダデーハス。 コシエーンタテ イエー ドゴナバリ コンド
そうですもんね。 拵えなくって(も) 良い 所などはかり こんど
コシエランナネグ ナテナ。エコガシエバ ホレ。 ンダゲー
拵えなければならなく なってな。移転すれば ほら。 だから

ヤッパリ イエー タカグテ ユーナワ カネカガルンダ
やっぱり 家(を) 移転するって いうのは 金(か)かかるんだ

ヤッパリナ。

やっぱりな。

B フルエナ モテッテ タデンナダラ アダラスグ タデダ オ
古い家も もって行って 建てるんなら 新しく 建てた 方(か)

イエーモナエハ。(A ンダナハ) ヘッゲナ ワツガノ サデナ。
良いもねえ。(そうだね) そんな わづかの 差でな。

A ンダ。ホダナ カネ カガタ ワリアエニ イエーグ
んー そう。そんな 金(か) かった 割に (は) 良く(は)

エカネハゲナヤ ヤッパリ。フルモノ シシヤゲデジャ ヤッパリ。
いかないからな やっぱり。古物(を) 仕上げて は やっぱり

(B ンダデー) ンー。
(そうだよな) んー。

注

- (1) 都市計画の道路予定地には建造物を建てさせないという話題。
- (2) 路線が決定すると
- (3) 人名。
- (4) 道路の予定地を空地にして
- (5) 地名。河北町の小字名。録音地の北方1km。
- (6) 谷地中部小学校のこと。改目から谷地中学校。谷地中部小学校のすぐ西側にバイパス道路が出来ると予定になっている。
- (7) 買収済みになった
- (8) ユーナ と言うべきところ
- (9) 理由にあたるものを、三回も言い表えている。
- (10) サセンナダッタデネ のねじれ。
- (11) ワラワラ は副詞。ワラワラド・ワラワットとも。ウエダリに係る。
- (12) ……したりなんか。……シタリ マッタリ が慣用句
- (13) 人名。
- (14) 人名。
- (15) 地名。録音地の東方1kmの部落。
- (16) 道路が接続するように。道が通じるように。
- (17) タガグ ①持つ(手掛く) ②携える ③持ち上げる ④持ち運ぶ。
⑤移転する
- (18) ジェニ 銭だけではなくお金の総称。ジニ・ジェネとも。カネは、やや改まった言い方。
- (19) 補償金を支払わないもの。

14 田螺と蝗

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
- B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
- C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

C アノ ツンブ⁽¹⁾シェメー リヤ シェック クッドギ⁽²⁾ハー
 あの 田螺 捕り ほら 節句(か) 近づくと

(A ン) アノ アレダケ⁽³⁾デー。シェメッダ⁽⁴⁾ シト ホッツ
 あの あれだったな。捕っている 人(か) あっち

コツツエ タンボエ エッ⁽⁵⁾ケ。(A ン)
 こっちに 田圃に 居た⁽⁵⁾け。(ん)

B ツンブワ ンマエモナエ。ンデモナエ。
 田螺は 旨いもんね。なんといっても

A アエツ⁽⁶⁾ ンマエヤー。(B ン) オカスケナ ハマグリナー アレナー
 あれ(は) 旨い や (ん) おかしな はまぐりなど あんな

アサリエガナー ンマエモナヤ。(B ン) ン。
 浅蜷 よりも 旨いものな。(ん) ン。

B キョネナ オランダ⁽⁶⁾ ソンデサギーノ ツヅミニ (A ン) アソゴン
 去年(に) 俺達(か) 袖崎の 堤に (ん) あそこの

ドゴ スポド シテデ⁽⁷⁾ ア ツンブ エダ⁽⁷⁾ ンデ ツンブ
 所(で) 仕事(を) して「あ 田螺(か) 居る。じゃあ 田螺を

シエメデ アベヤナテ シエメデ キテヨ (Aン) ホシテ ニデ
捕って 行こうや」なんて 捕って 来てさ () そして 煮て
クタツ。(A ジャッ) タガジェギンデヨ。⁽⁸⁾
食ったよ。(まあ) 高関(の事務所)だよ。

A ターガラガッス ターガラ。
田からですか 田から。

B ンナエ。ツツミサ (A ジャー オー) エダンダ。タンート
いや。堤に (まあ おう) 居たんだ。沢山
エダンダケナ。
居たんだっけな。

A ナエーダ ヨグナヤ ホダエ。
なんだって よくね そんなに。

B ツンブツルデモ シテ ケーヤナテ ホシテ (Aン) モテ キテ
田螺汁でも 作って 食おうやなんて そして (ん) 持って 来て
クタケ (A ン) ヤッパリ アンツ イエーナー。
食ったっけ(か) (ん) やっぱり 味(か) 良いなあ。

A ヤッパリ ツンブ ンマエモナヤ。
やっぱり 田螺(は) 旨いものな。

B ンマエナー。
旨いなあ。

A ミソスルナー シテ クード シタ⁽⁹⁾ンツ⁽⁹⁾ ンマエダレ (Bン)^{*}
味噌汁など(を) 作って 食うと 汁 (か) 旨いものね (ん)
ツンブド ナンゴ⁽⁹⁾ンダラ ホン⁽⁹⁾ーテ メケランナエナヤッス。
田螺と いなご なら ほんとに見付けられないですね。

C ナンゴ⁽⁹⁾ンダラ ミランナエ。
いなご なら 見つからない。

B ンダナ オバナザワ⁽¹⁰⁾ ホーサ エガネド ワガンナエ モナエ。
そう 尾花沢の 方に 行かないと 見られないものな。

(A ンー) アツダテ ショードグ シテンナ ンダベゲントモ
(ん) あっちだって 消毒 (を) してるんだろけれども

(C ナンシテ ンダハゲヨ⁽¹¹⁾) エルナエ。
(どうして だからよ) 居るな。

A ミナ ヤマサ ネゲンナダッタ ンナエガツ⁽¹²⁾。
全部 山に 逃げるっていうんで ないかい。 (C ナ ナ)

B ホダテ ヤマツタテ ホダナ チョード ハナパスナ ンダラダゲント*
だって 山といったって そんな ちょうど 間近かなど ならだけど
カワー アソゴ アッサゲ カワサデモ テーボアダリサデモ
川 (が) あそこ(に) あるから 川 にでも 堤防あたりにでも
ネンゲデ ネエツド アユニ エギデンナダガ ナエンダガ。
逃げて いると? あんなに 生きているのか なんだか

A ドーユー モンダガナヤー。ンデモ (B ンダテ) アツツノ ホーデ
どういう ものかなあ でも (だって) あっちの 方 (に)
エルジャヨ⁽¹³⁾。
居るってのはよ。

B ホダナ⁽¹⁴⁾ カンジョシタラ⁽¹⁵⁾ サバダ⁽¹⁶⁾アダリエモ エランナネナツァナエ。
そんな 考えでいったら 沢畑 あたりにも いなければならぬんだよね。
ヤマアダリサ (笑)
山のあたりに

A ンーダナー ヤッパリ。
そうだね やっぱり

B ネゲデ ングナ。ハエツ サバダアダリモ エネデー。
逃げて 行くのが。それが 沢畑あたりにも 居ないだろう。

A ンダーナヤー。

そうだね。

B アツツ オバナザワノ ホーバリ エンナダモナエ。 (A ンー)
あっち 尾花沢の 方(に)ばかり 居るんだものね。 (ん)

C アレノ ホエ エネガヤ。アノ ス⁽¹⁷⁾ツダノ ゲンカエスツ⁽¹⁸⁾ノ
あれの 方に 居ないかい。あの 志津だの 玄海 志津の

ホーナノ……。

方など(に)

B アツツ アツツノ ヤマテノーエ エネツ。ン。マザワノ ホー⁽¹⁷⁾
あっち あっちの 山手の方に(は)居ないんだ。ん。間沢の 方に(は)
ミランナエユーダツ。^{*}マザワノ ホーエ ナンゴ エダナテ ユー
見られないようだな。 間沢の 方に いなご(が)居たなんていう

ゴド ナエナ。 (A ンー C ンー)
こと(は)ないな (ん ん)

A ホノ トツニ アンナツンダガナヤナエー。

その 土地に (根拠が) あるのだろうかなあ。

B ナリゴ⁽²⁰⁾ノ ホーエ エルツタ ンナエガヤ。
鳴子の 方に 居るといふ じゃないかい。

C フン ー ミヤキケンノ ホーダラ エル (B ンー) ガスシナエナ。
ん 宮城県の方なら いる (ん) かも知れないな。

A ンダド アガグラノ⁽²¹⁾ ホーナ (C ンー) ン アツツノ ホ……
そうだって 赤倉の 方など (ん) ン あっちの方

B コドス ズエンブン ナガルルマン ホーサ シエメ エツタテ
今年(は) ずいぶん 方に 捕り(に) 行ったって

ユナダナ。 (C ンー)
いうんだな。 (ん)

A オラエノ ホンケノ オッカダモ⁽²²⁾ ニンド エッタナテ
 俺家の 本家の 嫁たちも 二度 行ったなんて
 キョネナノ アギ。(C ン一) ホーシテーノ ホリヤ コッツガラ
 去年の 秋⁽¹⁰⁾ (ん) そうして ほら こっちから
 エグニ ヤッパリヨ一 タップリ ニツカン カガッド
 行くに やっぱりよ たっぷり ニ時間 かかるそうだ
 ヤッパリ。(C ナエ一) アガグラサ エグエ。
 やっぱり。(なあ) 赤倉に 行くに。

C クルマンデナー。
 車でだろ

A ン一 クルマンデ。 ンダゲテ ヤッパリ アサゲ クラエ ウヅ一
 ン 車で だから やっぱり 朝 暗い うち⁽¹⁰⁾
 (C ン) エツテ ホシテ アツチャ エツテ シエメネテ
 (ん) 出発して そして あっちに 着いて 捕らないでは
 シエメランナエテ ユナダナ。(B ンダベナエ) アタカグ
 捕られないって いうんだな。(そうだろうね) 暖かく
 ナテガラナ シエメランナエチャ ハヤクテ。(C ン一) ブンブド
 なってからなど 捕られない よ 速くって。(ん) ぶんぶんと
 トンデ アラテ。(C ン一) シタレバ^{~~~~~} ホレ エネカリ シッタ
 跳び 歩いて。(ん) そしたら ほれ 稲刈り⁽⁸⁾ している
 シト エダケテダテ ナエーダ アノ オマエノ ホーデ
 人⁽⁴⁾ 居たっけというんだ 「なんたって あのお前の 方で
 ナゴナノ クナダガーテ ホレ ユタテ。(C ン一) ホシテ ナンゴ
 いなご など 食うのか」って ほれ 言たって。(ん) そして いなご
 クーナダテ ユタエバ オラホデ カネテダケ ナテ。ホシテアノ
 食うんだ」って 言たら 「俺方で⁽¹¹⁾ 食わない」ってだっけなんて。 そして

ラエネンモ シエメ ゴザッシャエナテ ツカエモラテ⁽²³⁾ (笑)
「来年も 捕りに いらっしやい」なんて 招待されて

キタテ ンダデ。(笑) *

来たって言うんだな。

C ヨーグ タ コカレンナ⁽²⁴⁾ マ マダ^x キテケラッシャエナテ
よく 田(畠) 踏みこまれるのに また 来てください なんて

ユーチャー。

言うことね。

A ン ホゴラー-----
ん そこ

B アツノ ホー ンダゲ ホダナ タント ン^x
あっちの 方は だから そんな 大勢(は)

ンガネナダベチャエナア。

行かないんだらうよなあ。

A エカネナダドー。ンー。 エネカリ シッタ シト
行かないんだって。ん。 稲刈り している 人が

エダケテダドレ。(C ンー) ホシテ-----。
言ってたっていうんだ。(ん) そして

B ハエツ ニツヨーテ ユード オバナザワアダリナノ オマツリ
それが 日曜なんて いったら 尾花沢 あたりなど お祭り

ミダエダデナエハ。(C ンー A ンダベー) ミナ クルマテ^x
みたいだよな。(ん そうだらう) みんな 車で

エツテホレ。(C ンー A ンー) ンダゲ スゴドモ サンナグ
行ってほら。(ん ン) だから 仕事も できなく

ナルテダケナ。

なるってだったな。

C ンダツンダ。
なるほど。

A ンダゴテナ ヤッパリ。 エネ カリヅラグ ナテナ。 (Cン)
そうだろうな やっぱり。 稲(か)刈りにくく なってな。 (ん)
ンー。
ん。

注

- (1) 桃の節句。田螺とアサツキの酢味噌あえを供えるのが慣例だった。
- (2) 「来る時は」が原義。
- (3) あとの文の内容をさす。
- (4) シェメツダは 現在進行・継続をあらわす。
シェメダは 過去・完了をあらわす。
- (5) 居たもんだった 昔は というニュアンス。
- (6) 地名。村山市袖崎
- (7) 現在
- (8) 高関は地名
- (9) 下地。煮物などのしる。
- (10) 地名。尾花沢市。
- (11) なぜ 尾花沢の方面にばかり 蝗がいるのか と言っている。
- (12) なるほど そうかい という気持ち。
- (13) 鼻端。間近かの意で、ハナサギ、ハナノトツツァギ も使う。
- (14) 蝗が山に逃げこむという考え。
- (15) 勘定
- (16) 地名 録音地点の西方1.5 KM、山添いの村落。河北町
- (17)(18) 地名 西川町。月山の登り口にあたる
- (19) 地名 西川町。志津・玄海などへの入り口
- (20) 地名 宮城県鳴子温泉。蝗は山形県と宮城県の県境一帯に多く住んでいるという。
- (21) 地名 山形県最上町赤倉温泉。宮城県境付近。
- (22) おかあさん(主婦)の普通称。オッカア。
- (23) お使い状(招待状)をもらって が原義か？
- (24) 稲田にふみこむ。漕ぐ。ぬかるみや雪、草木などで歩みにくいところを、踏みわけて歩くこと。川をコグともいう。

15 小正月の行事

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさる 女 明治34年生まれ
 D 矢作 春樹 男 昭和 6年生まれ (研究員)

D ムガシノ コー ネンチューギョージデネ (A ンー) ミーサ
 昔の こう 年中行事でね (ん) 箕に

カナモノ ミナ アゲデナテ ユナァヨ (A ンー) ナガナガ
 金物(を) すべて 上げてなんていうの(は)よ (ん) なかなか

ハナスシテケル シト エネナヨ。

話してくれる 人(は) いないのよ。

A ンダ ハエーツワ ドゴデモ ンデモ……。

そう それは どこでも でも

B ンダ ミナ ミナ シタモンダモナエ。

そう すべて やったもんだものね。

A ショーガツワ ミナナヤ。(B ンー) ホダナ モツー アゲ……
 正月は すべてなあ (ん) そんな 餅(を) 供え

ナリトリモツ コー シトグミンツツ ホレ。(B ン)
 お供え餅(を) こう 一組 ずつ ほれ (ん)

アゲダナツダナナヤ。

供えたもんだよな。

B カナモノー。(A ンー) ⁽¹⁾ワレダバリ ヤスンデ ワガンナエテ。
金物 (に) (ん) 自分達ばかり 休んで だめだって。

カナモノモ カシエーダ^ンダ^ゲ ヤスマシエランナネーテ
金物 (も) 働いたんだから 休ませなければならぬって (お供え)

シタモンダモ。

したもんだもの。

A ン ネンジュー ホレ ツカウモノヅダナ (C ジェンブナ)
ん 年中 ほれ 使う物をだ^な (全部な)

ホエジョドガ コガダナドガ ホレ カワムギドガ ホレ
庖丁とか 小刀とか ほれ 皮むきとか ほれ

ナニドガテヤナ フラエパントガテ ホレ.....*
なにとかってね フライパンとかって ほれ

B ヤッパリ ツゴグモ ホレ カマノ フタモ ミナ アグナダハゲ。
やっぱり 地獄も ほら 釜の ふたも みな 開くのだから。

A ンーダ^ン ジューログニヅワナヤ。
そう 十六日 はなあ。

B ヤスマシエンナダ^テ ユナデ^ン (A ンー) ホユー イミニ
休ませるんだって いうので (ん) そういう 意味に

トツタンダベ ムガスナァ。

取ったんだろう 昔はなあ。

A ンーダ^ン ンダ^ゲ ツネニ ツカウ ドーグチャダテ ホレ モツ^ン
そう だから 常に 使う 道具にだ^{って} ほら 餅(を)

カヘランナネーテ ユー ワゲ^デ (B ンダ^ン) ホレ ミナナヤ。
食わせなければならぬって いう わけで (そう) ほら 全部にね。

C カギサモ ⁽²⁾(A ン ンダ^ン) モツ クツケデ^ネ (A ンー) ユツテ。
鉤にも (そう そう) 餅(を) 結おえつけてね (ん) 結って。

A ユツテナヤ カミサ ツヅンデ。
結ってな 紙に 包んで。

B ンダゲ アリヤ サンボングワナ クワナ モテ クランネベ。
だから あれ 三本鋏など 鋏などは 持って 来られないだろう。

ンダゲ コー スカゲデ オグ ドゴサ ミナ (A ホンダ³ ミナ
だから こう 引掛けて おく ところに みな (そうだ⁴ みな
モツ コーナヤ) ヒスモツニ シテ リヤ (C ンダ) ミナ ミゴデ⁵
餅を こうね。) 菱餅 (に) して あれ (そう) みな 藁いばで

ユツテ ナレ (A ホダ ユツテナヤ) カミサ クルンデ⁶ シテ
結って なあ (そう 結ってなあ) 紙に くるんで そして

(A ホシテ ミナ) カシエデ オグナダケ。
(そうして みな) 食わせて おくのだった。

A ンダゲ アドノ ショーガツジャ モツ⁷ ンート エッケツ⁸ ンダナ
だから あとの 正月というものは 餅(か) うんと 必要だったんだな
ムガスナヤ。

昔はな。

B ハヤグンナ イエガテ⁹ ナヤ。
早くの(正月) よりも ね。

A ショ ドーグサ ミナ ホレー アゲランナネモノ。
諸道具に すべて ほら 供えなければならぬもの。

B ジェンブダ¹⁰ モノ。
全部だもの。

A ンー エマナノ ホレ オラエノ ジュンイチダ¹¹ ナー ホレ
ん 今など ほら 俺家の 純一たち など ほら

ヅドシャナノ アゲデル アレ。(C ン) ン。
自動車など(に) 供えてる あれ。(ん) ン。

C ヅドシャダテ ホレ カジエガシエテ オグナダハゲ
自動車だって ほら 働かせて おくんだから

A ンダー ンダハゲテ
そうだ だから

B アドノ ショーガヅナテ ユタテハ モヅナ ツカネヅハ。(笑)
あとの 正月 なんて 言ったって 餅など つかないな。

オラエデナ ツカネハ。
俺家でなど つかないな。

A ンダー ヤッパリ ンダヅ エマナノ アドノ ショーガヅナテ
そう やっぱり そうだ 今など あとの 正月 なんて

ツカネハー ヤッパリ。(B ンダ) スンノ ショーガヅド キューノ
つかないなあ やっぱり (そう) 新暦の 正月と 旧暦の

ショーガヅ グラエナ モンデヨハ。(B ン) ン。 ンダゲ
正月 ぐらいの もんでよ。(ん) ン。 だから

キューノ ショーガヅ キューノ ガンヅヅ ホレ ミナー ホノ
旧暦の 正月 旧暦の 元日(に) ほれ みな その

ヅンドシャサデモ ナエデモ アゲダヅダナ (B ン) オラエデナ
自動車にでも 何にでも 供えたよな () 俺家でなど

ホレ。(C ン) ミーサ ヤッパリ ホレ ナニモカニモ アツバデ
ほら (ん) 箕に やっぱり ほら 何もかも 集めて

(7) コヤサ オエデ ホシテ (笑) モヅシテ.....
納屋に おいて そして 餅 そして(3)

B オラエデナ ホダナ スネナハ。(A ンダガ) ヅドシャサバリ
俺家でなど そんなことはしないな。(そうか) 自動車にはかく

アゲデハ。*
供えてさ。

A オラエノ ジュンイチナ ホダナ ゴド シテ バンチャ
俺家の 純一 など そんな こと(を)して お婆さん(は)
ヘッゲナサ⁽⁸⁾ アゲッゴダ ナエベチャエ ナニモナテ。(笑)
そんなものに 供えることは ないだろうよ なにも なんて。

B ナンニモ ナラネ ミダエナダゲント ナエ。
なんにも ならない みたいなんだけど ね。

A ウサ⁽⁹⁾ ネンージュ ホダナ ツカテ エンナダ モノ ショーガツ
お前 年中 そんな 使って いるんだ もの 正月
グラエ モツ カヘランナネベツテ ホシテ ホレ ミナー
ぐらいは 餅(を) 食べなければならぬだろうよって そして ほら みな
キューノ ショーガツ シタモハ。(Cンー) ンー。(Cンー)
旧暦の 正月に やったもの。(ん) ん。(ん)

注

- (1) 人間どもばっか の意
- (2) 自在かぎのこと。
- (3) 結わえるしぐさをして。
- (4) 切り餅にして
- (5) 話し手 A の孫
- (6) あらゆる農機具・日常具・台所用具を集めて 箕に入れて感謝の意を表わした。これは、五穀豊穡を祈る行事であったと同時に、釜・庖丁・まないた・自在鉤・鍋などを休ませることによって、家族全員の骨休めを徹底させる庶民の知恵であった。この行事は、正月も休めない嫁たちへの最高のおくりものであったろう。
- (7) 雪国であるため、農作業場兼物置が、自作農の家にはあった。
- (8) 卑めた言い方 「そんなくだらないものに」の意
- (9) 第二人称の卑めた言い方 ウサ・ンサ・ソナダなどは同じ。

16 田楽焼き

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

- B ホシテ⁽¹⁾ コンド ヨルサ ナッド ホレ デンガグツヅ⁽¹⁾ナエ。
 そして こんどは 夜に になると ほら 田楽だよねえ。
- A ンダ デンガグ シテ (B ン) ジューゴニツナヤ。
 そう 田楽(を) して (ん) 十五日 なあ。
- B モツー ミ ミソ ツケデ (A ホダ) ミソサエ ツケレバ
 餅(に) 味噌(を)つけて (そう) 味噌さえ つければ
 デンガグダーテ。(笑)
 田楽だ って。
- A ンダ ユベナ ホンダケツダナ ホレ ジューゴニツノ バンデ。
 そう 昨夜(が) そうだったよな それ 十五日の 晩で
- B ユベナヨー ハエツ デンガグモナニモ ナエデハ。
 昨夜よ それが 田楽もなんにも なくなったものね。
- A ンダ ドゴ^デモ ホレ トーフサ ホレ クルミミソナ
 そう どこ(の家)でも ほら 豆腐に ほら 胡桃味噌など
 サ^ショ ミソナー スツテナヤ ホシテ (C 咳) ホレ エロリサ
 山椒味噌など 搦ってな そして () ほら いろりに

シー オエデ アンプテ ホレ クタモンダ エツ……

火(を) おいて あぶって ほら 食べたもんだ

B シェンシェ⁽²⁾ダモ オベツダベ。ンダテ アノ (A ンー) コッコーテ
先生たちも 覚えてるだろう。だって あの (ん) コッコーって
アラグナナエ。(A ンダー) オランダナ アエツ……
歩くのはねえ。(そう) 俺達など あいつ

C ユベナダケツダナ アエツナヤ。(A ンダー) コッコー。
昨夜だったけな あれはね。(そう) コッコー。

B ンー アラタゲヨー。 フ ウツワサ アリヤー (A ンダ)
ん 歩いたからよ。 藪(を) 団扇に ありゃ (そう)
ネンギド フー (A ンダ) シツツゲデナレ (A 笑 C 笑) フーフ⁽³⁾
葱 と 藪(を) (そう) くっつけてな () 夫婦
アエワスナテ (A ホダー 笑) トモニ スラガノ ハヤルマ ンデ
相和すなんて (そうだ) とともに 白髪 の 生えるまで
ナテ。(A 笑 ンダー) (笑)
なんて。(そう)

C トスユワエノ シト ンダ アラタツダナナエー。(B ンー A ンダー)
年祝いの 人たち(は) 歩いたもんだよね。(ん そう)

B ホレァ シェンリョーバゴナ コシエデナエ (A ンダー) タラ
ほら 千両箱 など 作ってね (そう) (福)俵(を)
コシエダリ。
作ったり

C ドーッサリ マエゴンダナテナ。⁽⁴⁾
どっさり 舞いこんだ なんてな。

A ホンダ ンー ホシテ ヤッパリ ホレ ダンゴイェガ モヅ
そうだ ン そして やっぱり ほら 団子よりも 餅(か)

イエーナテ ミナ (C 笑) アラタ モノヅァ ナヤホレ (B ンダ)
良いなんて みな () 歩いた ものだよなあ。 (そう)

コッコ。 ハエツモ コノゴロ コネハ。

コッコ(は)。 それも このごろは 来なくなったな。

C コネナ シトツツモ。(5)
来ないな さっは^り

A シトリーモ アラガネ。
一人も 歩かない。

B ガッコデ アラグナテ ユタナンデモ ナエナダ^ガヤ。
学校で 歩くなって 言ったので ないのかね。

A ンダド ガッコデ ユタンダド (B ン) アラグナテ。
そうだって 学校で 言ったんだって、 (ん) 歩くなって。

B アユナ ⁽⁶⁾ナグスッ ⁽⁷⁾ドゴ ナエベネヤ。(笑) (A 笑)
ああいうの(を) なくする こと(は) ないだろうにね。 ()

A ムガスノ (笑) ブンカザエ。(笑)
昔の 文化財。

B ブンカ ^{x x x} ブンカザエミダエダ。(笑) (A 笑)
文化財 みたいだ。

A アダナ ⁽⁸⁾ホエドミダエデ^ミ モラテナ アラグナ ホダナ ゴド
あんな 乞食 みたいで もらってなど 歩くのなど そんな こと(は)

スンナテ ガッコノ シエンシエ ユタンダ^ツタドレナヤ。(C ン)
するなって 学校の 先生(が) 言ったんだってそうだ (ん)

ホレガラ ナグ ナタンダド。
それ以来 なく なったんだそうだ。

B アエツァー タンダ^ミ モラテ アラグナテ ^{x x x}コンツ ムガスノ
あれは ただ^ミ もらって 歩くなって 昔の

(A ンー) モラエモスド⁽⁹⁾ ツガテ シトツノ ナエ (A ンダ ンダヤー)
(ん) 乞食 と 違って 一つのね (そう そうだねえ)

ギョーツミダエナ モンダデー。

行事みたい な もんだよなあ。

A イミ アッテ アラグナヅナホレナ。(C ンダナ) ンデモ
意味(か)あって 歩くのだよな (そうだね) それでも

オラエノ カヅキザワノ⁽¹⁰⁾ アダリジャ アエツ アラガネツ
俺家の 勝木沢の あたりでは あれ 歩かないんだ。

(B ンー) オラ コッチャ⁽¹¹⁾ キテ ハスメデ⁽¹²⁾ アダナ (B ンダガ)
(ん) 俺(は) こっちに 来て 初めて あんな (そうか)

コッコナテ ユナ ワガタンダチャ。(C.B ンー) オラェンドゴ
コッコなんて いうの(を) 知ったんだよ (ん) 俺の(実家の)所(では)

アラガネモ。(C ンー) ンー。コッコナテ。
歩かないもの。(ん) ン。コッコなんて。

C マヅノ ウヅデモナー。

町の うちでもなあ。

A ンー アラガネ。(C ンー) ホダナ オラ キエダ ゴド
ん 歩かない。(ん) そんな 俺(は) 聞いた こと(か)

ナエモ。イエー エダ ドギ
ないもの。実家に 居た ときは。

B オラエン ドゴ ダド アラッケナ。

俺家の ところ だと 歩いたっけな。

C アラタナエ。(B ドンードド) ゾロゾロド。
歩いたねえ。(ん どんどんと) ぞろぞろと。

注

- (1) 旧暦の正月15日の晩に、豆腐の田楽焼きを食べる行事があった。そして、この晩は、「コッコー ダンゴイエガ モヅイエー」といって、家庭を訪問する。子どもや年男たちは、それぞれ袋を持って餅や団子(まゆ玉にして終わった団子など)をもらい歩くならわしであった。かけ声からこの風習を「コッコ」と言った。コッコーという音からいうと、鳥おいやかせ鳥や火伏せの系統であろうか。生理的には、餅で腹いっぱいになった体への植物蛋白質の補給であり、運動不足を解消する行為として適切なものであった。
- (2) 研究員(矢作春樹)に向かって言っている。
- (3) お祝いの行事なので「めでたいもの」を手にして訪問する年男が多かった。千両箱とか 福俵、米俵とか
- (4) 「アギノホーガラ(吉方から)シェンリョーバゴ ドッサリ マエゴンダ」などと言いながら、千両箱を座敷に投げこんだりした。
- (5) 「ひとつも」が原義。少しも、ちっとも、さっぱりの意。
- (6) 田楽とかコッコとかの風習・行事
- (7) 原義は「所」であろうが、この地方では「事」との混乱が見える。
- (8) ホエドは内陸地方に分布。庄内地方はヤッコ。
- (9) 「貰い申す」が原義。河北町を中心に2,3町村に分布。
- (10) 地名。河北町の中の小字名。話し手Aの生まれた所。
- (11) 現在の居住地。婚家のあるところ。
- (12) ハジメテ → ハシメテ のように清音化する。ザフトン(座布団) カキソメ(書初め) ホドント(殆ど) などがある。

II. 群馬県利根郡利根村大字追貝

収録・文字化担当者 上 野 勇

同 協力者 杉 村 孝 夫

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名

群馬県利根郡利根村大字追貝

2. 収録地点の概観

①位置

東経139度45分，北緯36度53分，標高約670m。

②概観

西に片品川溪谷で知られる吹割の滝があり，南に赤城山が眺望出来，周囲には千メートル以上の山がっらなる。山間高冷地帯である。

③交通

国鉄上越線沼田駅下車，国道120号線をバスで約40～50分，車で約30分。

④地勢

片品川・栗原川の合流地点で，川の浸蝕によって出来たと考えられる三段階の丘陵をなす地帯であるが，その丁度二段階の位置である。

⑤行政区画の変動

昭和37年9月30日東村赤城根村二村の合併により現在の利根村が設置される。

⑥戸数・人口

(利根村) 昭和50年12月1日現在 世帯数1,771戸 人口6915人 {男3,411 女3,504}。

⑦主な産業

農林業が主体である。

3. 収録した方言の特色

① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

当方言は、方言区画上、この地を含む群馬県の大部分や埼玉県中部以西などとともに西関東方言にはいる。ただし西関東方言の特徴としてあげられる推量を表わす「ダンバー」(だろう)は、当方言では「ダッペー」となっており、これは千葉県、茨城県や福島県の浜通り南部や中通り南部の推量を表わす形式とも通ずる。ところが、これは②の音韻上の特色の項でとりあげるように、撥音に有声音が続くとき一齊に促音と無声音になるという現象の一つであり、他の文法的特徴、例えば形容詞の活用などでは前記地域とは異なっておりまさしく西関東方言的特徴を有している。

終助詞「ムシ」は昭和五十年録音の会話にはあらわれていないが、少なくとも話し手達の若い頃まではよく用いられていた。「ムシ」およびその変化形である「ムサ」、「ム」の分布がみられるのは群馬県でも北部山間地域が主であり(南部山間地域及び埼玉県西部にもみられる)、西関東方言域の中でも分布の限られた終助詞である。

② 音韻上の特色

(イ) 拍の種類

共通語の拍(例えば服部四郎博士の記述などにみられるもの)の他にツォ [tso]、ツァ [tɕa]、チェ [tɕe]の拍がある。また、三十歳代以下の場合にはデマ [dja]の拍を持つ者もある。

例

ツォ ロッソオク(六束)

ツァ サッツァ(さんざん)、オッツァレタ(叱られた)、マサイツァン(政一【郎】さん)

チェ チッチェー(小さい)

デマ トーダッタマァー(どうだったのだよ)

【補説】若い人の「デマァー」の形は、断定を表わす助動詞「ダ」と終助詞「マ」の融合したもの。他に、終助詞「カ」と「マ」の融合した「キマァー」もある。老年層では意志を表わす助動詞「ベァー」と終助詞

「マ」の融合した「ビマ-」がある。

(ロ) 拍の結合 (音節構造)

CV, CVE, CVN, CVQ CSV, CSV E, CSV N, CSV Q (ア行は /a, i, u, e, o/ で CV 構造とみる。ヤ行とワ行は /ja, ju, jo, wa/ で CSV 構造とみる。C は子音音素, V は母音音素, S は半母音音素, E は長音音素, / は撥音音素, Q は促音音素) の他に, N, CVE N, -VE Q, CSV N Q および CVNE という構造の音節がある。

- 例
- | | |
|-------|--|
| CVEN | 「それで」の第一音節, 「シラ-ン カオ (知らん顔) の第二音節, イゲバ-ーンニ (行けばいいのに) の第四音節, ヤリテ-ンデ (やりたいので) の第三音節, ヒクッテ ユ-ン (引くと言うの) の第四音節 |
| CVEQ | ケ-ッテ キテ (帰ってきて) の第一音節, マ-ッテ フレル (回ってくる) の第一音節, モ-ッコ (黄い子) の第二音節, イ-ッショケンメ (-生懸命) の第一音節 |
| CSVNQ | イマンッテ ユ- (慰安と言う) の第二音節 |
| CVNE | ドン-ナニ (どんなに) の第一音節 |

【補説】 この他 CV // Q などの構造もありそうである。ただし、以上にあげた音節構造は当方言でも体系の周辺の存在である。「ンデ」は「それで」の弱まり形である。長音音素は連母音の融合長音化したものの後半部, または強調のため挿入されたものであり, 撥音音素は助詞「ノ」の弱まり形である。最後から二番目の例は引用を表わす「ッテ」の前に撥音音素で終わる語が来る場合にだけあらわれる。連母音の融合, 長音音素の挿入, 弱まり形の基底には非融合形, 長音音素の挿入されない形式, 明確な形式があり, より基底のレベルではこれらの音節構造も解消される。そこで, 一方ではこれらの構造を避けるために長音音素の脱落現象などもみられる。

C V E Q ⇒ C V Q ダセネッテッテ (出せないと言うので)

C V E N ⇒ C V N オメンチ (おまえの敵), アレダネンカ (あれではないのか)

(ハ) 連母音の融合はさかんである。「アイ」, 「アエ」; 「アウ」; 「オイ」, 「オエ」, 「イエ」は「エー」; 「オー」(ただし動詞のみ); 「エー」のように融合長音化する。また, 「アワ」, 「オワ」のように半母音 [w] をはさんで母音が続く場合にも「アー」, 「オー」のように融合する。後者について例をあげる。

例 アワ: アー カーラ (河原), ネバザー (根羽沢【地名】), アーメシ (粟飯)

オワ: オー モノッコーシ (物壊し), ゲンノーナンガー (玄翁・アーなどは), コンダー (今度は)

【補説】 「アエ」, 「ウエ」などは「ハイテ」(生えて), オシロイ ヂチュイバ (おしろいと言えは) のように「アイ」, 「ウイ」となることもある。

(ニ) 母音, 子音の共通語との対応で目立つものは次の通り。

イ: エ エバツタ (威張っていた), メックッテ (見つかった), エシタ オシロイ (入れたおしろい)

オ: ウ アスコ (あそこ), ゴマナンズー (胡麻などを), スンナノ (そんなもの)

ヒ: シ シト (人), ハシゴッベ シッテ フレ (梯子尻をひいてくた), シトフユジュー (一冬中)

(ホ) ラ行音

ラ行音は, 撥音化, ラ行子音だけまたはラ行音全体の脱落, 弱まりなど変化が著しい。

ラ: シ マンナクッチャ ナンネー (やらなくてはならない), フンネート (降らないと), ツクンネン (作らないの)

レ：ン クルカ シンネー（来るがしれない），ワンネー（くれない）

【補説】ラ行音の撥音化は主に動詞，助動詞，補助動詞の語系でおこり，後に否定を表わす「ない」，禁止を表わす「な」，終助詞の「なあ」などがくる場合である。

レ：イ ソイダカラ（それだから），ツイテガレタ（連れていかれた）

ラ：∅（子音のみ脱落）ヒッパラエチマッテ（引っばられてしまって），
ダカー（だから），セツダケード（説だけれども）

レ：∅（レの拍脱落），ソデ（それで）

(ハ) 促音

関東方言が促音を好むことは有名である。当方言においても促音化，促音挿入は盛んにおこなわれる。促音の挿入は形態素のつなぎ目^(例1)におこなわれるほか、形式の第一拍めと第二拍めの間^(例2)にもおこなわれる。促音化は、撥音に有聲子音 *o*、*z*、*b* などが後接している場合におこる。撥音が促音化し、有聲子音は無聲子音 *t*、*c*、*p* となる。^(例3)

例1. ヤマツキ（山着），ワケッチ（分け地），イギツツイテ（行きついて（行き着いて）），マルクッテ（丸くて），オレツキリ（俺だけ）

2. ヨッポド（よほど），ヤッパリ（やはり），ブツツケテ（ぶつけて），オッソロシカッタ（恐ろしかった），イックラモ（いくらでも）

3. サツツァ（さんざん），コッター（今度は），タッポ（田圃），ビッポーグジ（貧乏籤），ソノタッピニ（その度に）
なお、「ダンペー」も「ダッペー」（だろっ）となる。

4. その他 オッキー（大きい），ソツツギ（その次），ダセネッテッデ（出せないと言うので）

(ト) 撥音・長音音素の挿入も盛んである。長音音素は、強調表現の場合形式の第一拍めと第二拍めの間^(例2)に挿入される。

例1. アンマリ シナカッタ（あまり為なかった），ミンナ（皆），

オラナンゾ (俺など)

2. デーッケー (大きい), ホントニ (本当に), テンテ (てんで), フターリ (二人), チャーント (ちゃんと)

ただし, 次のように第二拍めと第三拍めの間の場合もある。

シラーンカオ (知らん顔), ドーナニ (どんなに)

【補説】一方, 長音の短呼化 (長音音素の脱落) もみられる。これには常に短呼化され, 固定しているものと, 発話の速度や感情によって長音になったり短呼化されたりしてゆれているものがある。はじめの二例は固定しているもの。第三例はゆれているものである。

ハンタラ (半俵), イッジョケンメ (一生懸命), ヒラガワ (平川

【地名】は)

(子) その他, 母音の無声化や脱落も盛んにおこる。アクセントの山のはじまりの部分でも無声化がおこる。また, i, e のような狭い母音のみならず, e, a, o などの広い母音でさえも, 文末で文勢が弱まった場合や速度の速い発話の場合, 無声子音の後で無声化することがある。

k, t, p は気音を帯びてするどく聞こえる。

が行子音は語中ではおおむね摩擦音の [ɣ] である。

「キーチャーナ」(喜【市】ちゃんは), 「サイキンナ」(最近は) のように撥音で終わる語に助詞「は」が続くときは連声によって「ナ」となる。

アクセントは東京式であるが, 三拍名詞の第五類に属する語には東京語の頭高型に中高型が対応するものがある。

③ 文法上の特色

(イ) 「ユッタッケ」(言っただけ) のような形式の過去を想起する言い方のほか「キカシタッタヨ」(聞かせたものだったよ), 「アキネーガデキタッタヨ」(商店ができたものだったよ) という形式もある。

(ロ) 活用

カ変動詞は「ツイテキラレタ」(連れてこられた), 「モッテキサ

シテ、(持ってこさせて)のように共通語の未然形に相当するところに連用形と同じ形があらわれる。

サ変動詞では「クラク シルツチュート、(暗くするというと)、「シルケド」(するけれども)、「シレバ」(すれば)のように終止、連体、仮定形が連用形と同じく語幹が「シ」で始まり、一段化の傾向がみられる。

形容詞「ない」は「ネカッペー」(無かろう)、「ツノデ ネータッテ、(角でなくても)のように未然形、連用形が終止形と同じ「ネ(-)」の形になり無活用化の傾向がみられる。

助動詞「だ」の仮定形は「イットーダラ」(一斗なら)のように「ダラ」である。また、次の例は連体形の「ダ」であるとみられよう。「ケンガ デキル トキダデ」(憲【三】が生まれるときなので)

動詞「落ちる」や「歩く」などが「マ」に続く形は「オッテ」、「アルッテ」のように促音便となる。

使役の助動詞「セル」の過去形は、「クワシタ」(食わせた)、「ムカシガタリ シテ キカシタ」(昔語りをして聞かせた)のように「シタ」である。

(ハ) 語の接続

助動詞「ダ」やその連用形「デ」は助詞「ノ」を介せず直接動詞、助動詞に接続する。

例 くるダカラ (来るのだから) , イグダカラ (行くのだから) , アクルヒ フッタデ (明くる日に降ったので)

共通語の「の」にあたるところにそれが用いられないことによって、形容詞連体形と主格助詞「ガ」、様態の助動詞「ヨーダ」の連体形と逆接を表わす助詞「ニ」、動詞の連体形と目的を表わす助詞「ニ」、名詞と名詞などが直接接続する。

例 デッケーガ アッタイネー (大きいのがあったよね)
クレーヨーナニ イグダカラ (暗いようなのに行くのだから)
コメー ハカルニ (米を量るのに)

ジューニサン トキ (十二・三歳のとき) , オメー セワン ナ
ル (おまへの世話になる) , ソン メーニ (その前に)

(二) 助詞の脱落

当方言において脱落する助詞は「ガ」, 「オ」, 「ニ」の三者である。
助詞が脱落するかわりに体言の末尾拍が長呼される。

例 ① ガ: Ø キューヤサン ナクナッタ (久弥さんがなくなった)
クリーム デタ (クリームが出た)

オ: Ø ナニ トッダ (何をとりた)
アタマ オサエチマッタ (頭を押さえてしまった)
ダンボ ツクッテル (団圓をつくっている)

オ: E コメー ハカルニ (米を量るのに)
ハダギー マッタ (肌着をやった)
ヨクー カイテ (欲をかいて)

ニ: Ø ビルマ オーエンニ イグ (ビルマに応援に行く)
シューセン ナッタ (終戦になった)
トコ マッタッペ (どこにやったろう)
ヘータイ デネーカラ (兵隊に出ないから)

ニ: E オラガ ウチー クル (赤の家に来る)
ミー クル (見に来る)
ナシー イッテ (返しに行つて)

(ホ) 共通語の「に」に相当する当方言の助詞は「エ」である。

例 ② シタエ ダイブ ミセガ デキテ (下にだいぶ店ができて)
ニグラノ マンナカエ ロップ ハサンドイテ (荷鞍の真中に口
のロープをはさんでおいて)

(ハ) 待遇表現を発達しておらず, 男女でも年齢の差のあるもの同士でもほとんど同じ形式を用いる。ただし, 「ネンカイ」(無いのかね), 「アッタイネー」(有ったよね) に見られるような「イ」, 「ネ」は

「ネンカ」, 「アッタナー」 というそれらのない形式とくらべるとより待遇品位が高い。また, 外来者に対しては丁寧度の高い共通語の形式を用いることにより、待遇品位を高めると同時に疎遠さをも表明している。その他, 老年層によって「シヤル系」の助動詞が「クツケラッサイ」(おつけなさい), 「ウソーイワッシヤルナ」(嘘をお言いなさるな)のように用いられている。

4. その他

①地点選定の理由

純粋な群馬県の方言をよく残している地点であることと調査者の身近な者があり, 方言収録の便が得られ, また協力体制が整えやすいことによる。

②協力者の氏名

○C. 3 話し手に同じ。
○C. 4 話し手に同じ。
○C. 5 話し手に同じ。

○C. 6 話し手に同じ。
○C. 7 話し手に同じ。
○C. 8 話し手に同じ。

○C. 9 話し手に同じ。
○C. 10 話し手に同じ。
○C. 11 話し手に同じ。

○C. 12 話し手に同じ。
○C. 13 話し手に同じ。
○C. 14 話し手に同じ。

○C. 15 話し手に同じ。
○C. 16 話し手に同じ。

B. 表記について

文字化は簡略音声表記的カタカナ書きによっておこなった。特に注意すべき、カタカナの表わす具体音声の範囲、その他の符号について説明する。

(イ) パ・タ・カ行の子音は概略形式の頭位では鋭い気音を帯びているが、中・尾位ではそれ程めだたない。〔p^h~p, t^h~t, k^h~k〕

(ロ) ザ行の子音は概略形式の頭位では破擦音の〔dz〕, 〔dʒ〕, 中尾位では摩擦音の〔z〕, 〔ʒ〕。

(ハ) ガ行子音は概略形態素の頭位で破裂音〔g〕, その他の位置では摩擦音の〔ɣ〕である。

(ニ) ラ行子音は概略形式の頭位では破裂を伴い〔dʒ〕, その他の位置では弾き音〔ɾ〕である。ただし、この音は無気作な発音では弱まりやすく、古が歯に達しないことも多い。

(ホ) エ段音は「アイ, アエ, オイ, オエ」など連母音の融合長音化したものの前半部を占める場合は半広母音の〔ɛ〕, 母音「オ」, 「ウ」の後では半狭母音の〔e〕, その他の位置では〔ɛ〕よりもやや狭い〔ɛ₁〕である。

(ヘ) 「ー」は長音の後半部〔:]を表わし, 「-」は半長音の後半部〔ː]を表わす。

(ト) カタカナの下の「。」は母音が無声化または消滅していることを表わす。この記号は時に「ささやき声」をも表わす。

(チ) カタカナの上の「ˊ」はアクセントの山を表わし, その部分が記号のない部分よりも高発話されることを示す。ただし, 文節ごとの分

が書きであるため、文節と文節の間の横線の切れめは高さの変化を示すものではない。例えば「ミヤノ ジョ ガイ マッタンサ」(窓の裏にやったのさ)では「ミヤノ」と「ジョ ガイ」は同じ高さであることを表わしている。また、文字化資料に付された符号は派生アクセント節(二つ以上の基本アクセント節からなるアクセント節。基本アクセント節はほぼ文節や語に相当する。)につけたものである。これは、日常の会話が文単位で発話され、文節ごとにくぎって発話されるわけでは無いという事実からの当然の帰結である。

(リ) 文末あるいは文節末の「ノ」, 「マ」は上昇調 下降調を表わす。平板調は特にアクセント記号と区別しなかったが、例えば「ハ。」などというのは平板調である。「マ」はいったん特に高くなってから後下降することを表わす。

C. 話者・録音環境など

1. 録音年月日

昭和50年8月15日

2. 録音場所

群馬県利根郡利根村大字追貝861番地。小林弥太郎氏宅。

3. 話し手の氏名・性・生年・職歴・居住歴・言語的特徴など

小林弥太郎 (男)

現住所 群馬県利根郡利根村大字追貝

生年 明治40年12月6日

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

兵歴 なし

職業 農業, 神主

言語的特徴 方言をよく保有している。

小林与志恵 (女)

現住所 群馬県利根郡利根村大字追貝

生年 明治41年7月19日

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

職歴 農業

結婚 昭和1年旧東村大字千鳥から旧東村大字追貝に嫁す。

言語的特徴 方言をよく保有している。話し好きで聞いたことについても直接話法を使って臨場感あふれるように話す。

星野 富司 (男)

現住所 群馬県利根郡利根村大字追貝

生年 大正9年1月27日

最終学歴 青年学校本科卒

兵歴 昭和15年12月25日出征 昭和21年6月15日帰還。

職歴 農業(自営)

言語的特徴 方言を比較的よく保有している。説明文では詳しい注釈が
つくためにはよみこみが多い。

小林 喜市

現住所 群馬県利根郡利根村大字追貝

生年 昭和15年11月10日

最終学歴 群馬県立利根農林高等学校卒

職歴 農業

主な役職(公職) 利根村議在職中

言語的特徴 年齢にみあった方言保有度。共通語と方言の使いわけに習
熟している。

4. 録音環境

①同席者

上記話し手の他、調査者上野勇、お茶の接待に小林喜市氏の妻、録音
担当者杉村孝夫が同席。

②話の進行状況

あらかじめ用意しておいた話題(昔の生活、遊戯、旅行、天候など)
を小林喜市氏が進行役を務め、話題の提供をおこなった。しかし、かな
らずしも用意された話題ばかりではなく、関連して出てくる話題につい
ては自由な進行にまかせた。

③場の雰囲気

小林弥太郎氏と小林志忠氏は夫婦、小林喜市氏はその息子。星野富
司氏は近所の人である。星野氏に小林氏宅までご足労を頼んだ。

時計、風鈴、テレビなどはすべてとめた。窓も閉じ、外からの雑音を
遮断しようとしたが、鳥の声、自動車の音などが時々聞こえる。

夏の午後の一時、茶を飲みながらごまかに話が進行した。

④録音機・テープ

ソニー オープンデンスケ, 19 cm/秒

1 雨乞と天気祭

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

K イママデニワ アレダネー オトトシガ ヤッパリ コーアッタノ
今までには あれだね、一昨年が やはり このような状態
アッタ⁽¹⁾ンカイ。
だったのがね。

T アー オトトシワネー トーモロコシガ ヨレタネー。⁽²⁾
一昨年はね、玉蜀黍が 枯れそりになったね。

K ヨレタイネー。(間) ズーット ムカシモ ソーインガ アッタン
枯れそりになったね。 ずっと 指も そういふことが あったの
ケア⁽³⁾。
がい。

A ムカシダッテ アッタヨ。アマゴイ スルッテ テンキマツリ ス
昔だって あったよ。雨乞を すると信たり、天気祭を
ルナンテ ユッタカラ。
する などと 言ったから。

0 アマゴイ シタリ テンキマツリ シタリ オーサーギ ヤッタヨ
雨乞を したり 天気 祭を したり 大騒ぎを したよ。

ー。

A テンキマツリー ズイブン ヤッタヨ。
天気 祭を 随分 やったよ。

T ムカシノガ シンコクダッタヨーダネ。
昔の方が 深刻 だった ようだね。

A シンコクダッタイナー。ハー コノクレー (ムカシワ) スレバ
深刻 だった よな。 もう このくらいに (昔は) なれば

ハー ホントニ アマゴイ スペーナンテ オーサーギダイナー。
もう 本当に 雨乞を しようなどヒ 大騒ぎ だよな。

0 ムカシワ ムギコムギ ウント (ソーイエバネー) ツクッタカラ
昔は 大麦 小麦を たくさん (そういえばね。) 作ったから
サー。 (ソーイエバ コナイダ イッテタヨ トモジューサンガ)
さ。 (そういえば このあいだ 言っていたよ 友じいさんが)

ムギコムギガ ハエルツチュンテ テンキマツリ シナケリヤ ド
大麦 小麦が 生える ところなので 天気 祭を しなれば

ージョモネッテ テンキノ ビリビリ シテルノニ ミノカサテ
どうしようもないヒ 天気が ビリビリ しているのに 蓑笠で

アノー ヤルンサネー。

やるんさね。

T アノー イチバン ヤルンガ ヒラガノ オフドーサマネ。(A シ
ー 巻 やるのが 平川(地名)の お不動様だね

ー。)(ソーサー。)オフドーサマー ミズン ナケー イレルト
(そうさ。) お不動様を 氷の 中へ 入れると

アメガ フルツチュー ワケデネー。

雨が 降るといふ わけでね。

A アメガ フルナンテ。

雨が 降るなどと。

K ヨク オバーガ アレダネンカ。オレンチニ アル オフドーサマ

よく おばあが あれではないのが。俺の家に ある お不動様に

ニ ミズ カケテタ。

水を 掛けていた。

O オラー ヨクヨクダラ ショーガネーガ アノ ハイリックチニ

私は よくよくなら 仕方がないが、 入口に

オフドーサマが アルベ⁽⁷⁾。アレー ソソノ ホーカラ ダンダン

お不動様が あるどころ、 あれに 裾の 方から だんだん

カケテ シメーニャー アタマツカラ バシヤ⁽⁸⁾ント カケルン

【水を】掛けて しいには 頭から バシヤンヒ 掛けるの

サ。ソースト マー ハー サツツァ アキテツカラダカラ フル

さ。もうすこ もろ さんざん 飽きてからだから 降る

(間) トキニ ナルダカモ ワカンネーケド フルヨ。

ときに なるんだかも わからないけれども 降るよ。

K ヒラガノ オフドーサマワ ナニ アノ ゴホンゾンオ ツケルン

平川の お不動様は なに ご本尊を 【水に】漬けるの?

(⁰ タキー) (^T タキツボ イレル ワケ。) アノ タキツボ イレ

(滝に) (滝壺に 入れる わけ。) 滝壺に 入れる

ル ワケノ。

わけ?

T シ↓。

うん。

O タキー ショイコム ワケネ。
滝へ 背負い込む わけね。

K ハー。

O ソースト アメガ フッテ クルツチュ マー イーツタエガ ア
そうすると 雨が 降って くるという 言い伝えが
ルンカーネー。
あるのさね。

T ソレカラ⁽⁹⁾ コナイダネー オーハラニ カジガ アツタイネー。
それから この間ね 大原(地名)に 火事が あったよね。

(^Aン^v)アノ カジガ アツタ カジノ アクルヒ アメガ フ
(らん。) あの 火事が あった 火事の 明るる日 雨が 降

ルツタカラ アメー マツテタケド フラナカッタネー。
ると言ったから 雨を 待っていたけれど 降らなかつたね。

A フッタッペー。
降ったろう。

T フッタツケカ。アントキ アメ フッタツケ⁽¹⁰⁾ チョット。
降ったっけか。あの時 雨 ちょと 降ったっけ。

A フッタッペー。スットッキ⁽¹¹⁾ アントキ (⁰フッタッペ) カジガ ア
降ったろう。 あの時 (降ったろう。) 火事が

ツタカラ フッタツチューデ。
あったから 降ったというので。

K チョット フル……。
少し 降る

T アントキ カジノ アトダツタカネー。
あの時 火事の 後 だったかね。

O アト アト。
後 後。

A アト アト。
後 後

T アト カイ。
後 かね。

A バー サ マト ユッ タ ダ モノ ナー。(0 ア ー ヤッ パリ フ ラ ー ッ テ ユ
バ ア シ マ ト 言 っ た の だ も の な。(あ あ ヤ ッ パ リ 降 る な と
ッ タ ン。) ヤ ッ パ リ ア メ ガ フ ラ ー チ ユ ッ テ カ ジ ノ ア ト ニ ア
言 っ た の。) ヤ ッ パ リ 雨 が 降 る な と 言 っ て 。 火 事 の 後 に 雨
メ ガ フ ン ネ ー ト マ タ カ ジ ガ ア ル ゾ イ チ ユ ッ タ ラ フ ッ タ ナ
が 降 ら な い と ま た 火 事 が あ る ぞ と 言 っ た ら 降 ら な
ー ナ ン テ フ ッ タ ン。(0 ダ カ ラ ア ノ マ エ ノ ヒ ニ モ ア レ
な ど と 。 降 ら な の だ よ 。 (だ か ら あ の 前 の 日 に も) あ れ
ガ フ ッ タ キ リ テ イ ッ ユ フ ラ ネ ン ダ 。
降 ら な き り ぐ 【 そ の 後 】 ま た く 降 ら な い の だ 。

K ア ノ マ エ ノ ヒ カ カ ジ ガ ア ル ト イ ツ モ フ ア メ ガ フ
あ の 前 の は 、 火 事 が あ る と い つ も 雨 が
ル ッ チ ユ ノ ワ オ ラ ハ ジ メ テ キ ー タ ヨ 。
降 ら な い ら う の は 俺 は 初 め て 聞 い た よ 。

T ム カ シ カ ラ ユ ッ テ ル ダ。(A ム カ シ カ ラ ユ ッ タ ダ。) (0 カ ジ ガ)
昔 か し 言 っ て い る の だ。^{皇1} (昔 か ら 言 っ た の だ。) ^{皇1} (火 事 が)

カ ジ ガ ア ル ト ア メ ガ フ ル。
^{皇2} 火 事 が あ る と 雨 が 降 る 。

O カ ジ ガ フ ッ テ サ ー ア ノ ー カ ジ ガ ア ッ テ ミ ッ カ イ ナ イ ニ
^{皇2} 火 事 が 火 事 が あ っ て 三 日 以 内 に

アメガ フンネート (T マタ アル。) (マタ アル。) マター アト
雨が 降らないと (また ある。) (また ある。) また 後を
ー ヒクッテ ユーン。(A ソーイコトー イッタ。) ソーシタラ ア
引くと 言うの。(そういうことを 言った。) そうしたら

クルヒ フッタデ (A フッタン。) コリヤー ヨカッタッテ ジーサ
明る日 降ったから (降ったの。) これは 良かったと じいさま
マバーサマデ ハナシタンサ。
ばあさまで 話したのよ。

K アクルヒ フッタカナー。
明る日 降ったかな。

T アー ソカ チョット フッタダネ。
あゝ どうか ちょと 降ったのだね。

A チョット フッタ (T シー シー。) ナカラ フッタンダヨ。
ちょと 降った (りん りん。) かなり 降ったのだよ。

T ナカラ フッタダ。(A コレダカラ) ニジスギダイネ。
かなり 降ったのだ。(これだから) ニ時過ぎだよね。

A ー。
そうだ。

T チョット フッテ マタ ソン ツギ。
ちょと 降って また その 次。

A チョット フッテ 又レックワ クレルナンチュデ オランチガ
濡れ 祭を【蚕に】やるなどし言うのじ 俺の家が

(15)
オーヨメゴト。

大泣き。

K ソーソーソソソソ。(16)

そう そう そうそう そうそう。

- 0 オーヨメゴトサ。 (^A ~~~~~) キーガ アクルヒー (⁽¹⁷⁾ 間) ダカー ⁽¹⁸⁾
 大 泣 き。 喜 が 明くる日 , だ だ
ムイカニ フッタンサ。 ナノカニ キーヤンゾガ アスコイ (^K
 六日に 降ったのさ。 七日に 喜達が あそこへ、
ン。) アレダ カイスイヨクニ イグンデ (^K ア ソダ ソダ ソ
 あれ、 海水浴に 行くので (ああ そだ そだ そだ
ダ ソダ ソダ。) ソイデ ムイカニ アノ オジーガ ハヤク イ
 そだ そだ。) それで 六日に おじい が 早く
ゲバ イーニ オソクッテ マー フリタッテカラ イッダカラ ⁽¹⁹⁾
 行けば 良いのに 遅くなって まあ 降り始めてから 行ったから
ビショ ヌレノ クワオ ウーント トッテ キタデ マーズ ア
 びしょ濡れの 桑を たくさん 取って きたので まず あ
⁽²⁰⁾
コンラ コマツナー。 ソイデ キーヤンゾガ カイスイヨク
 これは 出たな。 それで 喜達が 海水浴に
イッテル ウチニ オジーニ
 行っている うちに おじいに
K モットモ ソレマデワ フッテ ナカッタンダイ。
 もっとも それまでは 降って いなかったのだね。
T カッパピア ⁽²¹⁾ イッタンダイ。
 カッパピアに 行ったのだね。
0 ソー。 カッパピア ジャネン。 (^A ニーガタエ) ニーガタエ (^T ア
 そろ。 カッパピア ではないの。 (新潟へ) 新潟へ (ああそろか
ニーガタエ。) ン イッタン。 ソノ マエノ ヒニ フッタン。 ダカ
 新潟へ(行ったのだったのね)らん 行ったの。 その 前の 日に 降ったの。 だから
⁽²²⁾
ムイカニ フッタンダ。
 六日に 降ったのだ。

- O ジンジャ イッテ ジンジャノ キー アレシテ (K^ン-) ドンド
 神社ハ 行ッテ 神社の 木を あれして (らん) ビンビン
 ン モシテサ-。
 燃やしてさ。
- K タイコナン⁽²⁰⁾ ハタイタジャネン。ヤッタジャネン。
 太鼓なんかを たいたのではないの。 やったのではないの。
- O オラガチデ ク^クチョーノ ト^{xxx} シガ ソノ テンキマツリダッタッパ。
 私の家が 区長の 年が 天気祭だ、たろ。
- K ハー ダカラ ナンネンマエン ナルンダ。
 もう だから 何年前に なるのだ。
- T ンートネー。
 ええとねえ。
- A ニジューハチネン。
 ニ + 八年 だえ。
- K ショーワ ニジューハチネンカ。
 昭和 ニ + 八年 か。
- O ニジューハチネンニ ヤ^{xxx} ク^クチョー シタン。
 ニ + 八年に 区長を したの。
- K ソレカラワ ゼンゼン ネン^ン。
 それからは 全然【天気祭は】無いのか。
- A ソレツカラ イッコー ヤンネー。
 それから 全然 やらない。
- K ソンナコトワ シナカッタイナー。
 そんなことは しなかったよな。
- O ソレカラ テンキマツリッテ シネン。
 それから 天気祭というのは しない。

T テンキマツリ シナカッタネー。

天気祭は しなかったね。

O アントキ サケダケ サキー ヤットイテ イガネー ッ チュンテ

あのとき 酒だけ 先に やっておいて【区長が】行かないというので

マー コンダ クチョーガ イッタ トキヤー ハー モ ミズ

まあ 今度は 区長が 行った 時は もう

ブクニ ヨッパラッテ ミンナガ。ナタテ クチョー キットバ

へべれけに 酔っ払って 皆が。 金で 区長を 切りたおせ

セ オソク キヤガッタカラナンテ オツツアレル サーギダツタ。

遅く 来やがったから などと しかられる 馬鹿ぎだった。

(↑ハ) アノ カミノ サトーゲンガ (↑ン) ダーラ オレガ

上の 佐藤源が だから 私が

オコッテ シモノ イチニ コトワリー イッタコトガ アル。

怒。下 の ーに コトワリを 言ったことが ある。

イックラ ヨッパラッタッテ クチョー ナタテ キットバスッテ

いくら 酔っ払ってても 区長を 金で 切りたおすという

ユー イーグサガ アルカッテ。イチガ アママリー キタダッテ

言い草が あるかと。 ーが 謝りに 来たってよ。

ヨ。

K ダケド ドッチカッチュエバ イママテ アレカネー テンキマツ

だけども どちらかといえば 今まで あれがね、 天気祭で

リ オフドーサマ ツケタナンテノワ アンマリ キカネーマナー。

お不動様を【滝に】漬けたなどというのは あまり 聞かないやね。

A ハ ユノゴロワ (↑ド) ダローネー。サイキンナ ヤンナク ナッ

もう この頃は (どうだろうね。) 最近では やらなく

タイナー。

なつたよな。

O サイキンワ ヤンネー ジャネーカ。

最近は やらないのではないが。

T キーチャンナ ⁽³³⁾ソー オボエワ ⁽³⁴⁾ネーカナー。オレワ ナンカイカ
喜ちゃんは それほど 覚えは 無いかな。 俺は 何回か
キータヨ。ヒラガーデ オフドーサマー タキツボ イレタカ
聞いたよ。 平川で お不動様を 滝壺へ 入れたから
ラ フルダローツテ。

【雨が】降るだろと。

K ハー ハー。

そらがね。

O オレガ 4ドリニ イル ジブンワ ヨク ヤツタンサナー。ダ
私が 千鳥(地名)に いる 時分は よく やったのさな。

ケド コッチー キテツカラ ハナレテルカラ ヤルカ ヤンネー
だけれども こちら【魚貝】に 来てから 離れているから 【千鳥では】やるか やらないか

カ ムラガ 4ガツテルカラ ワカンネーケド。
村が 遠っているから めからないけれど。

A ムカシモノワ ホラ シンコーベー タヨリニ シテタカラ スグ
昔者は 信 仰 ばかり 頼りに していたから すぐ

モー ハー テンキマツリ スベア アマゴイ スビャーナンテ
もう 天気祭を しよう 雨乞を しよう などと

ヤツタンダイナー。？ 4ョーサマエ モーシコンデ アマゴイ ス
やったのだよな。 区長様へ 申し込んで 雨乞を する、

ル テンキマツリ スルツテ ソノ タツピニ ヤツタンダヨ。
天気祭を すると その 度に やったのだよ。

O イッ コー ソノ カンケーノ ネー ジトガサ コレー ジブンノ
 まったく 関係の 無い 人がさ これを、自分の
 ？チー (皆笑) ヤリテンデー (クアー ソーカー) ソレー ア
 ロ【飲過】を やりたいので (ああ ぞうか) それを
 レサー (クイー キックカケモ アルカラナ) シー イー キックカケ
 あれさ (いい きっかけも あるから な。) うん いい きっかけで
 デ ソレー シレバ コレガ ヤレルカラ。サトーゲンナンガ ソ
 それを すれば、これが やれるから。 佐藤 源 などは
 レデ モー ズブロクニ ヨッパラッテ、
 それで もう へべれけに 酔っ払って。

K モットモ ムカシワ ソーユ トキデモ ナキヤー ナカナカ イ
 もっぴも 昔は ぞういう 時でも なければ、 なかなか
 マミテーニ バンジャクダトカ ソーユノモ スクナカッタダッペ
 今のようには 晩 酉だヒガ ぞういうこども 少なかつたぞう ^{重1}
 カラネー。
 からね。

T ナカッター スクナカッター。
~~××××××××~~
^{重1} 無かつた、 ^{重2} 少なかつた。

O ソイデ ナター フリアルッター アブナカッター ソイデ ソ
^{重2} それで 金を 振りあるいたりして 通なかつたので それで
 ノ トシガ ホラー イマワ シューカイジョーデ ショーボー ナ
 その 年が ほら 今は 集会所で 消防の
 ニ シルケド ？チョーデ ヤッタッペ。ダカラ ソントキ オレ
 何を するけれビ【その当時は】区長で やつたぞう。 だから その時 私が
 ガ アノー サケノ ヤドワ ⁽³⁶⁾ スルケド テンキマツリ トキ ミ
 酒の 宿は するけれビも 天気の 時の

タヨ - ニ ナター フリアルツター ソレ ユー コトワ⁽³⁷⁾ ゴメン
ように 鉈を 振りあるいたり そのような こじは 御免

ダカラ ムチューテ ブンダンチョーニ オコトワリ シタダツタイ。
だからというので 分団長に お断りを したのだったよ。

ソシタラ コンド キオツケマス⁽³⁸⁾ ナンテ ユーンドツチュワ。
そしたら 今度は 気を付けます なじヒ 高うのだそつだよ。

K ダー ヒトツワ ソーユー アレダネ アツイ ジキノ ヤッパ
だから ムヒツは そいう あれだね 暑い 時期の ヤはり
リ ナンカネ セーカツ シテグ ナカデノ コラ ナンチュンダ。
何かね 生活 していく 中での これは 何というのだ。

タノシミミテナンモ フクマレテ (↑ソ - ナツタンダネー) ナ
楽しみのようなこじも 含まれて (うん、 なったのだね。)

ツタンダネー。ヤッパリネー。
なったのだね。 ヤはりね。

O ハヤク イエバ ナンニモ ゴラクガ ネーカラ。(↑ソ - ダネ
早く 言えば 何も 娯樂が 無いから。(そつだね。)

一。) ゴラクツチュンダカ イヤンツテ⁽³⁹⁾ ユンダカネー。ソynaヨ
娯樂というのだから 慰安と いうのだからね。 そのような
ナ。

T デモ ムカシワネー。ムカシワータツテ マー センパイガ イル
ども、 昔はね。 昔はヒ言つても まあ 先輩が

ンダカラサー (A.O. 笑) オレガ ムカシツテ コター ネーケドサ
いるのだからさ 俺が 昔という こじは 無いけれどもさ。

二。(40) オレヨリ ムカシガ ツエンダカラ。(41) ソレデモ コーユ キセ
俺より 昔が 強いのだから。 むみども こういふ

ツ キセツニネー アノー ハルゴガ⁽⁴²⁾ スンデ コムギカリ スム
季節 季節にね 春蚕が すんぞ 小麦メリが すむ

ト ヒトキマリ ツイテ チョット イキ ツク マガ アッタイ
ひときまり ついて ちよっと 息を つく 間が あったよね。

ネー。(Kソ- ソ- ソ- ソ-) イマジヤ ノベツマクナシ
(そう そう そう そう。) 今では のべつまくなしに

ユキノ フルマデネー (皆笑)。

雪の 降るまでね。

0 イマワサー イロイロ ツクルカラサー。(Tソーダネー) ムカシヤ
今はさ、いろいろ 作るからさ。(そうだね。) 昔は

一 シューコ⁽⁴³⁾ カウ シトモ タント ナカッタン。クワガ イタ
秋蚕を 飼う 人も たくさんは いなかった。桑が 痛む

ムッチュンデ。ハルゴ カッダケダッペ。(Kシー) ソイデ エ
というので。春蚕を 飼っただけだろう。(うん。) それで

ダマメッチュナ イッサイ ツクンネーシ トーモロコシモ アレ
枝豆というのは 一切 作らないし、 玉蜀黍も

ダッペ ジブンデ クーダケシカ ツクンネン。(Tンマノ⁽⁴⁴⁾ エサ
あれだろう、自分で 食うだけしか 作らない。(馬の 餌と)

ト) エダマメジャ - ネンダモノネー。(Tエダマメジャ - ネーヤ
枝豆では ないのだからね。(枝豆では ないよね)

ネー。) (Aエダマメワ⁽⁴⁵⁾ ネーダ。) ソダカラ ヨーガ ナカッタンサ。
(枝豆は ないのだ。) そうだから 用が 無かったのさ。

A ダカラ ムギコムギガ⁽⁴⁶⁾ カタズイテ マメー キッカケガ オイレ
だから 大麦小麦が かたづいて 大豆の 砂寄せが 終われば

バ ソイデ ヒトッキリ ヒマダッタモノ。
それで 一時期 暇だったもの。

T ヒトッキリ ヒマダッタイネー。
一時期 暇 だったよぬ。

A シー。ソイデ クサトリモノーデ マメン ナカエ クサトリー。
うん。 むねで 草取 仕事 で 豆の 中へ 草取り。

O イマー ハー ソレガ ソー ज्या ネンダイ。イロイロ ハルゴ
今は もう それが そうでは ないのぢぬ。 いろいろ、 春蚕 を
カッテ シューコー カッテ ⁽⁴⁷⁾バンシュー カッテ ソノ アイサ
飼って 秋蚕 を 飼って 晩秋 を 飼って その 間に

ニ エダマメダー トマトダノネー。(T トーモロコシカラネー。)
枝豆や トマトやぬ。(玉蜀黍 からもぬ。)

⁽⁴⁸⁾トーモロコシダカラ テーンテ。
玉蜀黍 からも しても。

A ダカラ ソノ カン イッジョケンマーニ クサカリバー セッセ
だから その 間 - 生 懸命に 草刈 はかり せさせ

セッセト ヤッテタンサ。
せさせと やっていたのさ。

O ノベツマクナシ。
のべつまくなし。

T ソーダイナー。
そうだよな。

注

1. 「コーアッタノ アツタンカイ」 「雨が長く降らない状態だったのかね」の意。「コーダッタノ ダツタンカイ」とも聞こえる。無造作な発音。
2. 「ヨレタ」乾燥した。枯れる寸前になった。
3. 「アツタンケャ」 [attanjkeæ] 終助詞「カ」 + 「ヤ」の融合形。
4. 「トモジーサン」友吉(人名) + じいさん。
5. 「ムギコムギガ ハエル」刈り取った大麦・小麦が乾燥できないヒ芽が出てしまう。
6. 「テンキノ ビリビリ シテルノニ ミノカサテ」天気が良くて日がカンカン照っているのに、雨が降るようにと願って蓑笠姿で雨乞をする。なお、この発話は途中でぬじれており、「ドーショモネツテ」までは天気祭に関して、その後は雨乞に関して述べられている。
7. 「オラー …… ショーガネーガ アノ …… アルベー」OはKと別の内容の発話をKと重複しておこない始めたが、それを「ショーガネーガ」までで言いさし、Kの発話に応じた内容に切り替えた。
8. 「バシャート」擬態語で表情音(母音[a]を無声化させている)。
9. 「ソレカラ」早口で曖昧。
10. 「アメ フツタツケ」早口で曖昧。
11. 「スットキ」曖昧で意味不明。
12. 「マエノ ヒ」早口で不明瞭。
13. 「フ」 [Fur]。言いなおしのために通常あらわれない子音の後の休止がみられる。
14. 「キータヨ」 [ki:tajo]、無造作な発音。
15. 「オヨメゴト」大世迷言。ただし、大いに困ったの意。「ヨメーゴト」は泣き言、千葉県香取郡と『分類方言辞典』にのっている。
16. 「ソーソーソソソソ」徐々に低く、弱く発音されている。
17. 「キーガ」 「キー」は人名、喜市の略。
18. 「ダカー」 [dakaː] ダカラの弱まり形。
19. 「フリタツテカラ」 [r]の音は弱く、「ウイタツテカラ」のよう

にも聞こえる。

20. 「コンラ」「ユラー」の言い誤り。
21. 「カッパピア」遊び場のあるプールの名前。
22. 「ダカー」ダカラの弱まり形。
23. 「ソーダッペー」急押し。
24. 「アレダペ」[aredapɔ]
25. 「テンキマツッテナ」無造作な発音。「テンキマツリッテノワ」はより丁寧な形式である。
26. 「テンキマツリワー」雨乞の方ではなく、天気祭の方はと強調した発話のために「リ」にふたつめのアクセントの山ができています。
27. 「タイコナン」無造作な発音。「タイコナンカ」はより丁寧な形式。
28. 「ズブロクニ ヨッパラッテ ミンナガ」「皆がへべれけに酔っ払っ」の倒置法。
29. 「オツツァレル」[ɔ ttsaɣerɯ]とも聞こえる。[ɾ]の発音のための舌の持ち上がりは少なく、舌背が軟口蓋に近づいて摩擦をおこなっている。
30. 「サトーゲンガ」「サトーゲン」は人名、佐藤源次の略。
31. 「イチニ」「イチ」は人名、高橋一郎の略。高橋氏は佐藤源次氏の兄。
32. 「サイキンナ」「最近は」の連声形。
33. 「キーチャンナ」「キーちゃんは」の連声形。
34. 「オボエワ ネーカナー」「記憶にないかな」の意。
35. 「コレガ マレルカラ」杯を持つしぐさをしながら。「酒が飲めるから」の意。
36. 「サケノ マド」人が集まって酒を飲むときに提供する会場。
37. 「ソレ ユー コト」「ソレワ」と言いかけて「ソーユー」と言いなおそうとして「ソー」の部分の先に言いかけた「ソレ」で代用した。
38. 「ソシタラ コンド キオツケマス」。。。の部分はささやき声。
39. 「イマンッテ」「～と言う」の意の「ッテ」は撥音の後にもあらわれる。撥音の後に足音が続く音節構造が存する。例外的。

40. 「オレガ ムカシッテ コター ネーケドサー」この部分はA. D
の笑いと重なっている。
41. 「ムカシガ ツエンダカラ」 「昔のことをよく知っているから」の
意。「酒が強い」と同じ構造の表現。
42. 「ハルゴ」五月上旬掃立の蚕。
43. 「シューコ」七月下旬掃立の蚕。
44. 「ンマノ」 [mmano]、撥音が形式の頭位に立っている。
45. 「サ」 [sa] 文末の弱まり形。
46. 「キッカケ」中耕。砂をすくって豆の木に寄せる作業。
47. 「バンシュー」 「晩秋蚕」のこと。八月下旬掃立の蚕。
48. 「トモロコシダカラ」 「玉蜀黍も作るのだから」の意。

養蚕に関しては『群馬県の養蚕習俗』群馬県教育委員会事務局、昭和
47年3月を参照。

2 壮健芝居

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

A ダカラ ソノ ジブン ヒマダカラ シバイヤ スビャー シバイ
 だから その 時分 暇だから 芝居屋 しょう、芝居屋
ヤ カッテ クビャー ナンテ (K ソーダネー) ワケーシワ ワケ
 買って こよう なびと (そうたぬえ。) 若衆は
ーシデ ソーケンシバイヤ ブツベージャ ネーカナンテ ソイデ
 若衆が 壮健芝居屋 しょうではなかなびと そうして
ヤッ タンダヨ。
 やったのだよ。

K ソーケンシバヤッ テナ
 「ソーケンシバヤ」というのは【何】?

A ソーケン。
 壮健。

K ソーケンチュナ。
 「ソーケン」というのは【何】?

A ソーケンチュナ ニジューゴカラ ウー⁽⁴⁾ サ_{xxx} サンシジューマデ
社 健 といのは 二十五から ええと 三・四十までの

ノ ワケー テガ。 チューネンノ ソー。
若い 連中が。 中年の 社。

K アー ソカ ソカ。
ああ そうが そうが。

A ソーシノ ソー。 ケンダ。 タテルダ。⁽²⁾ (↑_ンー) ソーケン。 ハー
社士の 社。 「ケン」だ。 建てた。 (なるほど。) 社健。

ドーシテ イセーガ ヨカッタダ。 オラガ ジーサマナンゾガ
どうして 威勢が よかったのだ。 俺の いい 格などか。

イセ_{xxxx} イセーノ イー トキワ ドーシテ ソーケンシバヤ スビ_{yy}⁽³⁾
威勢の いい 時は どうして 社健 芝居屋 しよう

ーナンテ。 ソイデ ミンナ カク ムラムラテ⁽⁴⁾ ハナー サケー
など。 それで 皆 各 村々で 花に 酒を

イットーダナンテ オラーホーエモ イットー ア_{xxx} アゲロナン
一斗 だなど。 俺の おへも 一斗 あげるなど

テ ドーシテ エラーイ⁽⁵⁾ サーギダッタ。
どうして えらい 馬騒ぎだった。

K アー ソレー アゲテ ソレ オワッテ ウチアゲテ⁽⁶⁾
ああ それを あげて、 それを 飲って 打ち上げて？

A ソーサー。
そうさ。

O ソイデ ミンナ カク ム_{xxx}ラ_{xxx}デ アノー ウチデ ミンナ セキハ
それで 皆 各 村で、 あの 衆で 皆 赤飯を

ン タイテサー キタ シトニ ミンナー オキヤクニ セッタイ
炊いてさ、 来た 人に 皆 お客に 接待

シテ ヒラガ^一ーカラ キタ トキ カ^{xxx} カミ コーゴロ^一 (T
して 平川 [地名] から 来た とし 上の 鴻五郎

コッ^一チー キテカラダイ) コーゴローノ アスコニ (A^一 コージロー
(こちら [追戻] に 来てからだね。) 鴻五郎の あそこに (鴻次郎の
ノ トコロ⁽⁷⁾デ) シ^一 コージローノ アスコニ アッタ トキデ^一 ~
所で) うん、 鴻次郎の あそこに あった ときぞ

*
~

A アレガ サイゴ^一ダッタカシンネーナー。オラガホージャ ソーケン
あれが 最後だったかしのいな。 俺の方では 壮健

シバイヤチュノ。テヌグイマデ ソメヌイテ テヌグイマデ ソー
芝居居居というの[をやったのは]。 手拭まで 染め抜いて、 手拭まで 壮健

ケン オックイソーケンチュ イデタチオ シテ (0 ハナー シタ
道具 壮健 といふ 出で立ちを して (花を した

シトニ ユー ク⁽⁸⁾バツ) ハナー シタ シトニ ハナゲージ (0
人に こう 配) 花を した 人に 花返し。

ハナゲージ)。
(花返し。)

K イツゴロダヨ ソレワ。
何時頃だよ それほ。

T ハー。
なるほど

A シー⁽⁹⁾。
何だっ?

K イツゴロ。
何時頃?

O サ レガ (A イツゴロダッ ペナ →) マダ オレガ ト カ ジュ
まあ、私が (何時頃だろうな。) まだ 私が 十[歳]が
ニサン トキ ジャ ネ カ ナー。

十二・三の ときではないかな。

A オラ ナンド ガ コドモ ノ ジブン ダ カラ ズイブン、
俺などが 子供の 時分だから ずいぶん

O ジュ ニサン グ レ ダ カ シン ネ。

十二・三[歳]位 だか しれない。

T ダ モ ノ マダ オボ エ ワ ネ マ ネ ネ。(6)

それどもの まだ 覚えは 無いやね。

A オボ エ ワ ネ。

覚えは 無い。

O ウ マ レ ネ モ ノ オ メ ニ ジュ ニ サン チ ツ チ エ ン ダ モ ノ。(11)

生まれもないもの、おまえ、十三[年] 小さいのだから。

T オボ エ ワ ネ マ ネ ネ。

覚えは 無いやね。

K ソ ケ ン シ バ イ ヤ ナ ン チ ユ ナ コ レ ニ モ ノ ツ テ ネ マ ネ ナ ネ。

壯健 芝居屋などというのは これにも 載っていないやな。

ソ ソ ン シ ニ モ。

xxx

村 誌にも。

O ス ン ナ ノ ネ カ ッ ペ ー。 ソ レ ッ カ ラ オ レ ガ ジュ ニ シ ゴ ン ナ ッ

そのようなものは 無いだろう。 それから 私が 十四五[歳]に

テ ッ カ ラ (A ハ ド ー シ テ) チ ドリ テ サ ー。 ア ノ タ メ ッ コ ワ モ

な。それから (どうして【どうして】) 千鳥でさ。 タメッ小間物の

ノ ウ ラ デ ア ノ イ マ ノ ミ サ ガ オ ヤ ジ ノ ゼ ー ア ニ ー ガ シ

裏で 今の 美左の 親父の 善右にい が

ンゼカギシバイダイ。(間) ヤッタッタイ。

身代限 芝居 だよ。 ヤったこびがある。

K ソラー ナニ イツゴロ ヤルソ。

それは 何時頃 やるの？

A イマゴロー ヤルノサ。ハー マメカリ アレガ オエテ⁽¹⁷⁾ シュー
今頃 やるのさ。もう 豆刈, あれが、終つて 秋蚕が

コガ オエテ (↑ アー マメノ サクキリが⁽¹⁸⁾ オワッテ。) マメワ
終つて (ああ, 豆の さくきりが 終つて。) 豆は

サクキリワ オワッテ (↑ ヒトイキマ ツクトネー。) (K^ア ↓) フ
さくきりは 終つて (一息 つくヒね。) (なるほど)

サ^{xx} クサムシリワ オイルシサー (K^ン ↓) チョード ヒマナンダ
草取り は 終るしよ (うん。) ちょうど 暇なんだよ

ヨ ドコダッテ。

どこでも。

K スト⁽¹⁹⁾ ハチガツノ チュージュンゴロ[↓]。

その時 八月の 中旬頃がね。

A チュージュンゴロ。

中旬頃。

O ンー ハチガツノ チュージュンカラ クガツー マー サブク
ん, 八月の 中旬から 九月 まあ 寒く

ナンネー チョード マー イー ジキダナンチュ。

ならない ちょうど まあ いい 時期だなどという。

A マーダ マメカリワ ネーシ イッコー⁽²⁰⁾ イ^{xxx} ホレコソ ヨーワ

まだ 豆刈は 無いし ますり それこそ 用は

ネーシだ。

無いのだ。

O ママタアタリカラ テングレンチュノ (Tヘー.) (Kタノンデ²¹)
沼田 [地名]あたりから 天狗連中の (へえ) (頼んでかぬ。)

タノンデ キテ。

頼んで 来る。

K ソデ²¹ ドコデ ヤッタン バショワ。

それで どこで やったのかね、場所は。

A バショワ ドコツチュワ ネー。ソノ バショニ ヨツテ。

場所は どこというこは 無い。 場所によって。

K ジンジャトカ ソーイ トコジャネン。

神社とか そういう 所ではないのか。

A ジンジャ⁽²²⁾ デ ヤ

神社で

O カーラデ カーラヨーノ コイガ ブテオ キズイテサ⁽²³⁾。

河原で 河原用の これが 舞台を 築いてさ。

A ソーラ ヨーイジャ⁽²⁴⁾ ネンダイ ミンナ ホソキー カエツイテ⁽²⁵⁾

それは 容易では 無いのだよ 皆 細木を 担いで

コーユニ ミンナー⁽²⁶⁾ シテ ヨシズー ハツテサ⁽²⁷⁾ ブテツフルン

こういう風に みんなで 葺簾を 張ってさ 舞台を 作るのだ

ダモノ。

もの。

K ヘー。

へえ。

O タニジューノ テガ ミー クルダカラ (Aタニジュー) デーッケー

谷中の 連中が見に来るのだから (谷中) 大きい

スイデ アスコマテ⁽²⁸⁾ ニジューマテ ツフルダカラ。コーメグ

それで あそこまで ニ魚まで 作るのだから。こう

リジュー コーニ。(K アーソーカ) ソイダカラ ドーシテ ダサ
回り中 こうに。(ああ そうか。) それだから どうして [どうして]

ジキ⁽⁶⁾ (K サジキセキ ツクルダ イワユル) ダカラ サジキガ オ
機敷 (機敷席を 作るのだね、いわゆる。) だから 機敷が

ッ タナンテ ユーダカラ。ミーシミテ サジキガ オチルンサー。
落ちたなびと 言うのだから。大勢のって 機敷が 落ちるのさ。

サジキガ オッ タナンテ サーギ アッ タッ ペ。ダカラ ソレヨリ
機敷が 落ちたなびと 馬糞が あったろう。だから それより

メーガ ハタヤノ カンバテーニ ムカーシ アッ タンネー。オ
前が 幡谷(地名)の 上幡谷に 昔 あったね。

ラガ ヤット オボエル ジブン。⁽⁷⁾
私が やって 覚える 時分に。

T
へー。
へえ。

K ジーナンカ ジューサンチューカ タイジョー キューネンゴロテ
じい なびが 十三(歳)と いうが 大正 九年 頃で
オワリカー。ソイジャー。
終りが。 それでは。

A ソノ ジブンダナー。
その 時分だなあ。

K ソダナー。
そうだなあ。

A シー。
ん。

K ソラ ナニ トシワ
それは 何、 年 齢は?

A ソーケングミツチュナ ハー ワケー イマデ イエバ セーネン
壮健組と云うのは 若い、今ど 言えば 青年
カイノ ワケダイナー。

会の わけだ な。

K ワケーシ セーネンカイノ ワケカ。

若衆、青年会の わけか。

O オックアイワ ソーダカモ⁽²⁸⁾

追戻は そうだかも

A セーネンカイヨリヤー ソノカーシ トシガ オックモーケド。

青年会よりは そのかわり 年が 大きいけれど。

K デックケー テーマデ ハバガ ヒロカッタン。

大きい テーマで 幅が 広がったの【だね】。

A ソーダカラ ハバガ ヒレーカラ。

それだから、幅が 広いから。

O ヒラガアタリワ_{xxx} モヨリノ シトサーネー。

平川 あたりは 最寄の 人さね。

A アー[↙] エライ コトダ。

そうそう たいへんな ものだ。

K ソラー アレダ^{xxx} ワ ワケーシ オトコモ オンナモダッ タダッ ペ

それは あれだ 若衆、男も 女も だっただろう

ソラ。

それは。

A オトコッキリサ。

男だけさ。

K オトコッキリダッ タダ。

男だけだったのが。

O オトコンガ ヤッ タンサ。
男衆が やったのさ。

K ジャ オンナシワ イッ ショケンメ ジャー セキハン タイタリ
では 女衆は 一生懸命 では 赤飯を 炊いたリ
アレ シタダ。
あれを したのだね。

O ンー セキハンタキ。
うん 赤飯炊き。

K ソーイ セツ チョーダ。
そういう めんどろなのだね。

A ハー ミンナ ハナー シテ ミンナ ソーケン アレダ (ミ
皆 花を して 皆 壮健, あれだ

ンナ ダカラ テヌグイ アレ シナクッ チャー ケーサナクッ チャ
(皆 だから 手拭を あれ しなくては , 返さなくては

ナンネー カラ ネー。) サケー ミンナ ダシテ カッ テ キテ カ
ならないからぬ。) 酒を 皆 出して 買って きて

ッ テ ダカラ ナシー イッ テ コナク チャ ナンネー ツンデ ミン
買って だから 返しに 行って こなくては ならないというので 皆

ー ナ アレサー ハナー スル ダッ タイネー。
あれさ, 花を するのだったよね。

K ンー。
なるほど。

A ソノ カーシ マタ オー ヨーデ ヤレバ オー ヨーデ ヤレ⁽²⁹⁾ オ
そのかわり また 大楊(地名)で やれば, 大楊で やれば

ッ カイノ テガ ソー ケン グ ミテ マタ サケ イッ トー ダラ イ
追員の 連中が 壮健組で また 酒を 一斗なら

ットー アゲルンサ ホイデ ソノー ソースリヤー サケナンゾ
ー斗 あげるのさ それで モの そうすれば 酒もど

イッ トー アゲリヤ - モー ダカラ オツカイノ ソーケンセ
ー斗 あげれば もう だから 追貝の 壯健席

キ スイタ セキ トットイテ ソーヅテ ドーヅテ ドンチャン
敷いた 席を 取っておいて そうして どうして【どうして】 どんちゃん

サーギダイ。シバイン ナケー サケー モチコンテ。ムラジュー。
騒ぎだよ。 芝居の 中へ 酒を 持ちこんで。 村中【の人が】

0 ンーナ ムラジュー ネコサーナー (A ンー ↓ ネコダー。) ミンナー
皆 村中 ゆるむろさ な (えろそう ゆるむろさ だ。) 皆

ネコー ダシテ スイテ。
ゆるむろさ 出して 敷いて。

K マ ソレガ ナツノ ユイーツノ タノシミダツタダッペネー。
まあ それが 夏の 唯一の 楽しみ だった だろうね。

T ムカシノ シトノネー。(間) イマミテニ ゴラクガ ナカッタカ
昔の 人のね。 今の ように 娯楽が 無かった
ラネー。
からね。

A ゴラク ナカッタ。
娯楽は 無かった。

0 イマー ハー ガシキー テレビガ アルシネー。アレダカー ソ
今は もう 座敷に テレビが あるしね。 あれたから

ーイ コター アンマリ スタイタケドサー。エーガニモ アンマ
そういう こゝは あまり 腐れたけねじさ。 映画にも あまり

リ イガネー イマネー。
行かない、 今はね。

T マダ カツドーシャ シンナンテ ユー ジダイジヤ ネンカイ。
まだ 活動写真 なビヒ いう 時代 ではないのかね。

K 笑

O ソーソー カツドーシャ シン。
もうそう , 活動写真 。

T ナツタ トコカイ ゲントーカイカラ。
なつた ところかね , 幻 燈会 から 。

O カツドーシャ シンモ ナカツタッペ。
活動写真 も ^{重1}無がったろう。

A マダ ナカツタッペ。ゲントーカイガ
^{重1}まだ 無がったろう。 ^{重2}幻 燈会 が ⁽³²⁾

T ゲントーカイカイ。
^{重2}幻 燈会 かね。

A ゲントーカイダツタッペ。
幻 燈会 だつたらう。

O ゲントーカイ。
幻 燈会 。

T ソーダネ オレ コドモノ ジブンニ アノー カイゾージニ ⁽³³⁾
そだねえ , 俺は 子供の 時分に あのう 海蔵寺に

O カイゾージニ アツタッペー。
海蔵寺に あつたらう。

T シ ゲントーカイ ヱチュンガ アツテ (⁰オラー ヒラガーカラ
ん , 幻 燈会 というのが あつて (私は 予川から

キタツタモノ。) ミー イッタ コト アツタケド。
来たこひがあるもの。) 見に行つた こひが あつたけれど。

K ソラ ナツマツリナンカニワ カンケーナク ヤッ タワケダ。ソラ。
それは 夏祭 などには 関係なく やったわけだね。それは。

A ソーサー。
そらさ。

O ソーイニ カンケーネー。
そいう事に 関係無い。

K ゼンゼン ベツニ。
全然 別に【やったのか】?

O ゼンゼン カンケーネーサネー。
全然 関係ないさぬ。

A ハー スキナ テガ オメー⁽³⁴⁾ イマゴロン ナルト ヒマン ナル
もう 好きな 連中が、おまえ、 今頃に なると、 暇に ちると
ト シバイヤ カイー イグベヤナンテ。オラガ ジーサマナンゾ
芝居 を 買いに 行こうよなとて。俺の じい様など、
オマイ シバイヤ アレダイ シンサンダノ⁽³⁵⁾ アレダノ サトサ
おまえ、 芝居屋、 おれだよ 新さんや おれや 哲さんや
⁽³⁶⁾ ンダノ アスコデ⁽³⁷⁾ ヤッテ カンゾーガ⁽³⁷⁾ ムコーデ⁽³⁸⁾ モーテ ヤッ
あそこで やって、 勘三の 向うで やって
テ エレー ソン コイタ (皆笑)。

ムビく 損を した。

O ミンナー シバヤ ヤッテ モーケタ シトワ イッコー ネーヤ
皆 芝居屋を して 儲けた 人は 全然 ないよぬ。

ネー。([↑]ク[↑]ン[↑]。) ミンナ ソンサネー。ノムダモノ ソンニ キマ
(なるほど。) 皆 損さぬ。飲むのだから 損に きま。

ッデルヨネー。
ているよぬ。

A ハナー モラエバ ハナゲーシツチュノ ミンナ シナクツチャナ
花を もらえば 花返しというのを 皆 しなくてはならない。
ンネー。

O イマー ヒヤクサイイジョーノ テノ ジブンワ ジシバヤダネー。⁽³⁹⁾
今 百歳以上の 連中の 時分は 地芝居屋だね。
ヒラガワ サカンデ (Aソレガ ジシバヤ、~~~~) 千ドリノ オヤ
平川は 盛んで (それが 地芝居屋) 千島の 親父
ジナンガー ジシバヤガ スキデ マー マイートシ ヨーク ヒ
などは 地芝居屋が 好きで まあ 毎年 よく
マガ アツタト オモネー。ヨク ヤ⁽⁴⁰⁾
暇が あたと 思うね。 よく や

T アーイ コター ヒマー ツクルンジャネンカイ。
ああいう こはは 暇を 作るのではないのかね。

A ツクルンサネー。
作るのさね。

T ダカラ ヒラガノ シトワ カブキー オレノ オボエテッカラマ
だから 平川の 人は 歌舞伎を 俺の 覚えてからまで
デ⁽⁴¹⁾ マッタイネー。(Aヤッタヨ。) オフドーサマニ (Oヤッター。)
やったよね。(やったよ。) お不動様に (やった。)
タムケ。
手向け。

A オフドーサマー ヨク マッタイ。
お不動様に よく やったよ。

O イマ オセール シトガ ハー シンジマッテ ネーカラ ヤンネ
今は 教える 人が もう 死んでしまって いないから

ーケドネー。オフドーサマニ ヨク ヤッタンサネー。

やらないけれどね。お不動様に よく やったのさね。

T ヤッタネー。

やったね。

A ヒラガーワ カブキ ヨク ヤッタ。

平川は 歌舞伎をよく やった。

O ダカラ ムカシカラ スキダッタダイネー。

だから 昔から 好きだったのだよね。

T スキダッタダ。

好きだったのだ。

A オックアイワ シバイワ アンマリ シナカッタナー。

追々は 芝屋は あまり しなかつたな。

O オラ⁽⁴²⁾ンゾガ フジンカイデ 又マタノ テングレン アゲテ イ

私などが 婦人会で 沼田の 天狗連を あげて

ツカイ ヤッタツケ。フジンカイデ。

一回 やったっけ。婦人会で。

T へー。

へえ。

O ソン シタ (〇笑)。(皆笑)

損をした。

K ドーモ ソン シタ ハナシバーダネ。モーカータ ハナシワ ネ

どうも 損をした 誰はかりだね。儲かった 誰は

ーダネ。

ないのだね。

O モーカンネーサ[↓]。フジンカイデ ヤッタ[↓]ンダ。トシヨリー ヨン

儲からないさ。婦人会で やったのだ。年寄と 招待して

デ ヨロコバシタダケダモノ。ケローカイニ ヤッタン。
喜ばせただけだもの。 敬老会に やったの。

T シー↓。ケローカイニネー。
なるほど。 敬老会にね。

K モットモ ケローカイダラ ソレ⁽⁴³⁾アレダ ヨロコ~~ン~~デ~~ヨ~~ ヨ
もっとも 敬老会なら それは あれた、

ロコブ シトガ イレバ イーダカラネー。マー ソレガ アレダ
喜ぶ 人が いれば いいのだからね。 まあ、 それが あれた

イナー。ナカナカ ズイブシ ジダイノ ホーガ カーツテ キタ
よな。 なかなか ずいぶん 時代の 方が 変わって きた

シカネー。イロイロ ハツタツシタカラネー。
のさね。 いろいろ 発達したからね。

T ソーダネー。
そうだね。

A オランゾガ ワケシニ ナツテ ソーケンシバヤチュナ アズマ
俺などが 若衆に なって 壮健芝居屋というのは 東

カンデ イッカイ ヤッタカナー。
倉で 一回 やったかな。

T アレワ アズマカン ナ~~ン~~ ナンネンゴロ デキテルンダイ。
あれは 東 館付 何年頃に できているのだね。

A イクネン デキテルイ。
幾年に できているね。

T デキタノワ ワカンネーケド ナ~~ン~~ センジチューニ (間) ダイトー
できたのは わからないけれど 戦時中に 大東亞で

アデ ツブシタ ワケカイ。
潰した わけがね。

A ソーダイネー。

T アレ ネバザー イッタッタネー。

あれは 根羽沢(地名)に 行ったのだね。

A ソー ソー ソー ソー。モッテッタンダイナー。

そう そう そう そう。 持っていったのだよな。

T アントキ オレノ ウチニ カイー キタッテ ユーケド ウレバ

あのとき 俺の 家に 買いに 来たとき 言うけれど 売れば

ヨカッタネー。(T.A笑) アーン ガランノ デッカイ ウチジヤ

よかったね。 みたいな 伽藍の 大きい 家では

ドーショーマネーカラ。

どうしようも ないから。

O アズマカンチュデ オラー 4ドリカラ アノーネー エーガ

東館というので 私は 千鳥から あのうねえ、 映画を

ミーキタダ。モートーク⁽⁴⁴⁾。

見に来たのだ。

T アー ソー ソー ソ。

ああ そう そう そう。

O イマノ アレカ アスコノ マサルサンノ⁽⁴⁵⁾ メーニ ナルダヨネー。

今の あれが、 あそこの 優さんの 前に なるのだよな。

T アッタンダ。アノー キチゴローノ⁽⁴⁶⁾ スグ アトダ。

あったのだ。 あのう、 吉五郎の すぐ 後だ。

O ノーキョーノ ソーコノ。

農協の 倉庫の

T ソーノ[↓] ノーキョーノ ソーコン トコニ アッタダ。

さん 農協の 倉庫の 所に あったのだ。

O アッ⁽⁴⁷⁾コ チーット ハーッ^トタヨーン トコ^ネー。
あそこ 少し 入った ような 所ね。

T アラー ズイブン ミー イッ^タッ^タヨ。
あれは ずいぶん 見に行つたものだよ。

O アー ズイブン イッ^タイ^ネー。チ^{ドリ}カラ ヨク キタモ^ンダト
あみ ずいぶん 行つたよね。 千鳥から よく 来たものだト
オ^モナー。イ^マ カンゲールト (0 笑)。ヒ^クサ^カリ^ーナ^ンゾ
思ふな。 今 考えると。 干草刈に など
ア^キー イッ^テ キテ ソイ^デ クタビ^レテ^ルッ^{チュ}ンニ キタ^モ
秋に 行つて きて それで 疲れているというのに 来たものだ
ンダ ヨル。
夜。

T ソレ タノシ^ミダ^ッタ^カラ^ネー。
それが 楽しみだつたからね。

A ソーダ。
そだ。

O ソ^レッ^キリ ネーダ^カラ。
それしか 無いのだから。

T ゴラク^ッテ^ガ ネー^カラ^ネー。
娯楽というのが 無いからね。

注

1. 「ウ——」考えていて思わず出た声。
2. 「タテル」壮健の健の字を建と混同している。
3. 「ソーケンシバヤ」「ソーケンシバイヤ」の弱まり形。
4. 「ハナ」祝儀の意。
5. 「エライ」[era'i]
6. 「ソレ オワッテ」「芝居が終つて」の意。
7. 「コージローノ トコロデ」鴻次郎の家を借りて壮健芝居をやった。
8. 「クバッ」次のAの発話によって途切れたために促音が音節末尾にあらわれるという例外現象が生じている。
9. 「シー」Kの問いがTの発話と重なったためもあってAは問いの意味が聞きとれず、問い返した。
10. 「オボエワ ネーヤネー」「記憶にないやね」の意。
11. 「オマー」人稱代名詞ではなく、間投詞的用法。
12. 「ナッテッカラ」Aの発話と重なったため、自己の発話を印象づけ、続けるために「カ」の部分が高く、強く発音した。
13. 「タメッコワモノ」これは「タメッコマモノ」であり、「タメゾー」という人が小間物屋をやっていたのでその家を「タメッコマモノ」と言う、ということであるが、録音では「タメッコワモノ」と聞こえる。
14. 「ミサ」(井上)美左夫の略。
15. 「ゼーアニー」(井上)善次郎の略+アニー。年上の人、目上の人を「アニー」と言う。
16. 「シンゼカギシバイ」身代を片付けるときにおこなう芝居。
17. 「オエテ」[oete]
18. 「サクキリ」土を細長く掘りおこす作業。
19. 「スト」無造作な発話。「スルト」または「ソースルト」が明確な形式。
20. 「イッコー イ ホレコソ」途中で言い換えをおこなった。
21. 「ソデ」無造作な発話。「ソレテ」が明確な形式。

22. 「ジンジャデ ヤ」次のDの発話によって途切られた。
23. 「キズイテサー」 [kidzūitesa:] 形式の中位で破擦音があらわれている。ただし、「ズ」は形式の中位では概略摩擦音の [z̥] である。
24. 「ネンダイ」 [nendaɪ] 「ダイ」の部分は二重母音的。
25. 「カエツイデ」 [kætsūide], 「カツイデ」の言い間違い。
26. 「サジキ」 [sɕajiki], 軽い口蓋化が観察される。以下「サジキ」に関して同。
27. 「ヤット オボエル ジブン」 「ヤット知っている時分」の意。
28. 「ソーダカモ」次のAの発話によって途切られた。
29. 「ヤレア」 [jarēa]
30. 「シーナ」 [n:na], 無造作な発話。「ミンシーナ」が明確な形。
31. 「ネコ」藁で編んだむしる。「ネコー カク」(むしるを編む)。
32. 「ゲントーカイガ」次のDの発話によって途切られた。
33. 「カイゾー ジニ」次のDの発話によって途切られた。
34. 「オマー」問投詞的用法。
35. 「シンサン」人名, 新一郎の略+さん。
36. 「サトサン」人名, 哲の略+さん。
37. 「カンゾー」人名, 勘三。
38. 「ムヨーデ」向うの場所で。
39. 「ジシバヤ」近所の人々が練習をしてやる芝居。
40. 「ヨク マ」次のDの発話によって途切られた。
41. 「オボエテッカラマデ」知っている頃まで。
42. 「オラーンゾ」 [oraːnzo].
43. 「ソレアー」 [sorēa],
44. 「モートーク」曖昧で意味不明。
45. 「マサルサン」人名, 優+さん。
46. 「キチゴロー」人名, 吉五郎。
47. 「アッコ」小さい声で。
48. 「アキー」干草刈は彼岸秋に行く。

3 干草刈り

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

D 小林上志系 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

K ダラ ソツ子ノ ホ-マデ ヒクサカリ イグニャー アレダッ
 だから うちの 方まで 干草刈に 行くには あれだろ
 ぺー ズイブン アサゲ ハヤク オキテ イグダッ ぺー。
 ずいぶん 朝 早く 起きて 行くのだらう。

A アサゲ クレ-ンニ オキテグンサ。 ヨガ アケルノ マッテ テ
 朝 暗いのに 起きていくのさ。 夜が 明けるのを 待つて

カケタモノ。

出かけたもの。

O ヤマ イグ トキニワ クレ- ~~~~
 山に 行く ときには 暗い

K オランカニ ナッテッカラ ゼンゼン ナンネンカ。
 俺などに なってから 全然 行かないのか。

O ソ- オレガ キテ イチネンシカ イガネ-モノ。
 うん、私が 【追貝に】来て 一年しか 行かないもの。

K ダラ⁽¹⁾ アスコワ ンーマ⁽²⁾ シター トーッテッタ ワケ。
物だ あそこは 馬は 下を 通っていった わけだね。

A ミンナ シター トーッテグン。 コモリ アガッテ ソレカラ。
皆 下を 通っていくの。 小森(地名)を 上がって それから。

T ジューニサマ ガ アル ジューニサマ ト^{xxx} トーッテ シタエ オ
ナニ 木々が ある ナニ 木々【の所を】 通って 下へ
リテ コーニ グネグネ マガッタ ミチオ コモリ アガッタダ
降りて こう ぐねぐね 曲った 道を 小森に 上がったのだから。
カラ。 ヨーク ウマ オトシタンダ ネー。
よく 馬を 落したのだね。

A ソーダ。
そうだ。

O ソーユ トキ クレーヨーナニ⁽³⁾ イグダカラ マー (A ヤキモチ—
もういっ とき 暗いようなときに 行くのだから まあ (焼餅を
マイテ) イッダ コトガ ネー トコイ ツイテガレルテ マー
焼いて) 行った こヒガ 無い 所へ 連れたいがれるので まあ
マナ オモイ シタサ—。
いやな 思いを したさ。

A オランゾワ タイガイ カナヤマイモ イッタイナー。 カナヤマノ
俺などは 大概 金山(地名)へも 行ったよな。 金山の
オクノ トコ イッタ。
奥の 所へ 行った。

O チドリニ イル ウチワ オラ ヤナギダヤサー。 アスコノ コモ
千鳥に いる うちは 私は 柳平(地名)さ。 あそこの 小森の
リノ メール トコノ (T ン—) アスコガ ワリチダカラ。
見える 所の (ああ、あそこだね。) あそこが 割地だから。

A イチバーン トマックチガ ミサブローサン⁽⁴⁾ ウチノ デーダカ
一番 はいり口が 巳三郎さんの 家の 割地だから。
ラ。 ソン ツギー センジサン⁽⁵⁾ ダンバー。 モリヤマノ デーワ⁽⁶⁾
その 次が 仙次さんだろう。 森山の【連中の】割地は

T モチバガ アツタンカイ。
持場が あったのかね。

A ン。
↑
なんだって？

T モチバガ アツタ ワケカイ。
持場が あった わけかね。

A モチバガ アルヨ。 タイガイ キメトクモノ マイトシ。 ハー
持場が あるよ。 大概 決めおくもの 毎年。 もう
ソイデイト ジトガ イガネ ウチニ イッテ ハー ヒー モ
そでいて【他の】人が 行かない うちに 行って もう 火を 燃や
ジテ ヨノ アケルノ マッテルン。
して 夜の 明けるのを 待っているの。

T ヘ。
↑
なほど。

A オーイッテ ナッテ ミテ イナケリヤ ソコエ イッテ (⁰ タ
「おおい」と 呼んで みる【誰も】いなければ そこへ 行って
マニ ソコ カルンサネ (笑) メーノ ヒニ イッテ イト ホ⁽⁷⁾
(たまに ぞこを 刈るのさね。) 前の 日に 行って 火を
(⁰ ナカデモ。)
(なかども。)

T ヨク タキビオ トメッタネ。⁽⁸⁾
よく 焚火を 燃やしたね。

O ベツニ ワケチジヤ ネーガネ。

【道具は】ベツに 分け地では ないよ。

A ワケッチジヤ ネー。

分け地では ない。

O 千ドリナンガー ミンナ ワケッチサー。

千鳥などは 皆 分け地さ。

T アーソーカ ワケッチジヤ ナクッテニ。

ああ そうか 分け地では なくて。

A オラーホーワ ミンナ ワケッチジヤ ネーン。バシヨ イッテ

俺の 方は 皆 分け地では ないの。場所へ 行ッス

ハー (ト~~~~) ソコエ アレー スル。ソイテ^レ カモーコター

もう 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇

ネーカラ⁽⁴⁾

ないから

O 千ドリワ 千ドリワ モトワ ワケタジヤ ナカッ タケドサー ハ

千鳥は、千鳥は 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

ソーユージャーネー コマルデ ミンナ (A ヒラガーワ ミン

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

ナ) 千ドリノ テワ ミンナ (T オソク ナルト カレネーモンネ

千鳥の 者は 皆 (遅く なるヒ 刈れないものね。)

一) ヤナギ マナギダヤッチュ コトニ キマッチャッタンサ。キ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

マンネー ウチワ オランゾワ スイギョージノ テッペン。コッ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

チー ミテ アノ ハチマキガ アルベ⁽¹¹⁾。 (T アー) アスコイ

見て あの 鉢巻さが あるだろう。 (あるね。) 〇〇〇〇〇〇

ッ¹チャー オラー カッ²タダイ。ニ³ネン⁴ ヤ⁵ アスコ⁶ チット⁷ コ⁸
行¹ってけ 私²は 刈³ったのだよ。 二⁴年⁵ あそこ⁶に ちょっ⁷と

デーラガ アルダイ。
小平¹が ある²のだよ。

T ソコワ スイギョー¹ジノ オテラノ² アッ³タ トコカイ⁴。
そこ¹は 水²行³寺⁴の お寺⁵の あった⁶ 門⁷がね。

O ソー¹ダッ²タ。
もう¹だった²。

A ソー¹ダ イ²チバン ウ³エダ。
そ¹うだ 一²番³ 上⁴だ。

O イドノ¹ アト²モ アルヨ。
井¹戸²の 跡³も ある⁴よ。

K ン¹ー。
そ¹うがね。

O オラー¹ アスコ² ニ³ネン ツイテ⁴グレタ⁵モノ。
私¹は あそこ²に 二³年⁴ 連れて⁵いかれたもの。

T アスコ¹モ ドー²チュー アル³ネー。ヒラ⁴ガー⁵ ヒナ⁶タカラ⁷ダラ。
あそこ¹も 道²中³が ある⁴ね。 日⁶向⁷(地名)からなら。

A ヒク¹サカリ イッ²シュ³ーカ⁴ングレ⁵ー シ⁶タダ。
千¹草²刈³を 一⁴週⁵間⁶ ぐら⁷い した⁸のだ。

O マーズ¹ イ²グンガ³ ク⁴タビ⁵レルンダ⁶ イ⁷グンガ⁸。ケ⁹ーッ¹⁰テ ク¹¹ル
まず¹ 行く²のが 疲³れる⁴のだ 行く⁵のが。 帰⁶って くる

ト¹キヤー ク²ダリ³ダカラ ト⁴ット⁵ット⁶ット⁷ット⁸ ク⁹タビ¹⁰レ¹¹タッ¹²テ キ
とき¹は 下²り³だから と⁴っ⁵と⁶っ⁷と⁸っ⁹と¹⁰ 疲¹¹れても 【帰¹²って】

ラ¹レルケド イ²グンガ³ ミ⁴ンナ ノ⁵ボリ⁶ダッ⁷ペー ア⁸ノ⁹ ヤ¹⁰マー
来¹られるけれど、 行く²のが 全³部 登⁴り⁵ださう、 あの⁶ 山⁷を

テッ ペンマデ ノ ホルダモノ。

天 辺まど 登るのだもの。

K ヒクサワ クガツダッ ペー。

干草は 九月 だろう。

A ヒガン (クヒガン) ヒガンノ アキノ アイタ ヒガ (クアキガ)
彼岸 (彼岸) 彼岸の 開の , 開いた 日が (開が)

カマアキッテ ユーン。

鎌開と 言うの。

K カマアキダッ ペー。

鎌開 だろう。

O ソ。

そう。

A ソーサー。 ソレ メーニ イッテ カッ チヤー ナンネンダ。

そうさ 。 それの 前に 行って 刈っては ならないのだ。

O ヤマガ アレルトカ ナントカ。

山が 荒れるヒが なんヒが 【言って】。

A ソレトー ソレ メーニ カルナラ ウマデ カルダラ イーン。

それヒ , それの 前に 刈るなら 馬で 刈るなら 良いの。

(ク ンー) ダンガリ ダラ ドコー カッ テ⁽¹⁴⁾

(なるほど) 段 刈らなら どこを 刈って

O ヒッ ツケテ クルダラー ケド。

付けって くる なら 【良い】けれど。

K ダンガリ アー ソーカー イチダン。

段 刈 ? ああ そうが 一段。

A イチダン ロッ ツオ クッ ツ ロッ ツオ クッ ツ ツ ケテ クルン。

一段 六束 ずつ 六束 ずつ 付けて くるの。

K ツケテ クルダラ イツ カッテモ イーヨカッタ ワケダー。
付けて くるなら いつ 刈っても 良かった めけたね。

O ムカシマア アサクサカリッチューデ クレー ウチニ オキテネ
昔は 朝草刈 いろいろの 暗い うちに 起きてね、
— ミンナ ウマノ アル シトワ アレダ (「イッダネー。’)
皆 馬の ある 人は あれた (行ったね。)

アサハンメーニ ミンナ イチダンツ ハーモ オキマリデ カ
朝飯前に 皆 一段ずつ もう お極りで

ツテ キタモンダ⁽¹⁵⁾モンネー。ソイデ コムギ ツクル ジブンナ
刈って きたものだものね。 それで 小麦を 作る 時分は

コムギカリダッテ ムギカリダッテネー ミンナ アサハンメーニ
小麦刈でも 小麦刈でもね 皆 朝飯前に

イッダモンダ。
行ったものだ。

注

1. 「ドラ」この部分はAの発話と重複。Aの発話は聞きとれない。
2. 「ンーマ」 [m:ma]
3. 「クレーヨーナニ」 [kure:jo:napi] [k] は閉鎖の後の気音が著しい。
4. 「ミサブローサン」人名, 巳三郎+さん。
5. 「センジサン」人名, 仙次+さん。
6. 「モリヤマノ テーワ」次のTの発話によって途切られた。
7. 「イト ホ, Oと重複しているので途中で言いさした。
8. 「タキビオ トメッタネー」 「トメッタ」の意味不明, 文脈から「燃やした」の意であると判断される。焚火をたいて陣をしいた。
9. 「カモコーターネーカラ」次のOの発話によって途切られた。
10. 「キマッチャッタ」 [kimattʃatta] [k] は閉鎖の後の気音が著しい。
11. 「ハチマキガ アルベー」急押し。
12. 「オテラノ アッタ トコ」水行寺山という山になっている。
13. 「アノ」指示代名詞であって間投詞ではない。アクセントのふがな
いのは「文イントネーション」に支配されているため。
14. 「ドコー カッテ」次のOの発話によって途切られた。
15. 「カッテ キタモンダ」 「き」は [k] の閉鎖の後の摩擦が激しい。
[ʃi] のようにも聞こえる。

4 菓

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O アキチャング ハチガツ ジューニニチニ シンダダツタケドモ。ジュ
 アキ(人名)ちゃんが 八月の 十二日に 死人だのたつたけれども。

ーイチンチノ ヒダツタッペ。ト^{xxx} イマノ トヤマダツケガ アス
 十一日の 日だつたらう。 今の 石底山(地名)だつたらうか

コエ ウンマー ヒーテ クサカリ イツタノ[↑] サー ドコ イッ
 あそこへ 馬を 引いて 草刈りに 行ったのを さま ビこへ 行ったのか

タノ ワカンネー。トヤマジュー ナエアルツタ。テ⁽⁷⁾ デンポーガ
 めからない。 石底山中 呼び歩いた。 電報が

キタデ⁽²⁾ キドクノ デンポーガ キタデ ソイテ ソノ ツヤ^{xxxx}
 来たので、 危篤の 電報が 来たので それで その、

ツヤオ ショツテカ ホイデ モー アスコエ イマノ イシバタ
 艶(人名)を おぶってだったが それで もう あそこへ、 今の 石畑さ。

⁽³⁾ ケサー。アスコノ カシラナシノ オカシナ ハタケ カッコーノ
 あそこへ 頭無(地名)の おかしな 火畑、 かこのの

イー ハタケ。アスコエ ソバー マイタデ ソコー ハー コ
 いい 畑。 あそこへ 蕎麦を 蒔いたのぞ モこを もう
 ーニ ミンナ キッ カケテ アノー クサー スクヨーニ シトイ
 こう みな 砂寄をして 草を 敷くように しておいてさ
 テサー ソイデ クサー カルンデ アスコー キテルカナート
 それぞ 草を 刈るので あそこに 来ているかなと
 オモッテ アスコマデ トンデッテ ミタラ キテネーデ ハー
 思って あそこまで 走って行って みたら 来ていないぞ もう
 イキセキ キッテ トヤママノ⁽⁴⁾ ミチ カサー ハイアガッテサー⁽⁵⁾
 息せき 切った 砥山の 道を 草を分けて 這いよってさ
 イーッショケンメ ヨバツテ キトクノ デンポーガ キタデ
 一生懸命 呼んで、 危篤の 電報が 来たのぞ
 ソイデ ヨドーシ デテッタンサー。(↑ヘー)ソイデ オタジバ
 それぞ 夜通し 出ていったのぞ。(なるほど) それぞ おたじばあ
 ーサマノ⁽⁶⁾ トコマデ イギツツイテ ホタラ ハー ビョーニンワ
 様の 所まで 行き着いて、 そうしたら もう 病人は
 シッテ⁽⁷⁾ タチューモンネー。キタツチューガ ワカッタラ イキガ
 知っていたというものね。 来たというのが めかたら 息が
 キレタツチュモノ。(↑ヘー)ダカラサー ドヒノ オバサンガ
 切れたというもの。(なるほど)だからさ、 土肥(人名・名字)のおばさんが
 イッテテ ネーサン、ダレカ コレ イナカカラ クルダデ イ
 行っていて、 姉さん 誰が これは 田舎から 来るのだよ、
 ナカカラ クルノ マッテルジメ ネーカッテ ユッタケド オバ
 田舎から 来るのを 待っているのでは ないかと 言ったけれど おばあは
 ーワ アレダモンダカラ ナニガ⁽⁸⁾ イナカカラ クルッチュ。ソー
 あれだものだから 何が 田舎から 来るというものが。

ジャー ネー クルジャー ネーカッテ デ ヤッタンサ。ソーシ
もうどは ない , 来るのでは ないが ヒ 。

タラ オジーガ タマゲチヤッテ イケーレン オコジチヤッテサ
おじい が 魂 消え しまっ て 胃 瘻 瘻 を おこ して しまっ て さな。

ナー。オジーワ イゲネンサ。クニマツジサン。(「ア クニマ
おじい は だめ な の さ。 国 松 じい さ ん が。 (ああ 国 松

ツオジーカイ。) ヒデー メニ アッタデ。オヤジワ デテグ ソノ
おじい が ね。) ひどい 目に あったよ。 おやじは 出 いく , その

アトデ オジーワ イケーレンデ フタバノモ ミバンモ ネネ
後で おじい は 胃 瘻 瘻 で ニ 晩 も ミ 晩 も 寝 ない の だ。

ーダ。(「ハ[↑]。)クルシガッテ、ソイデ ドーショーマネーデ チ
(「へえ。) 苦し が る , それで どう しよう も ない の で ,

ドリノ ジーサマモ イッショニ イッタンサナー。シューゴサン
千鳥の じい 様 も 一 緒 に 行 っ た の さ な。 修 吾 (人 名) さ ん と

ト イッジュニ シンダデ アトカラ イッタンサ。ホーイデ チ
一 緒 に , 死 人 だ の で 後 から 行 っ た の さ。 それで

ドリノ オーバーガ ルスイニ キテタケド ミズー クレチマー
千鳥の おばあ が 留守 屋 に 来 た け れ び 水 を や っ て は

ナンネー ゴハン クレチマー ナンネー ッテ。アノ イマノ タ
ならない ご飯 を や っ て は ない と。 あの 今 の

カシチャンノ オヤジガ イジマノ トキデ アノ シトガ (「ア
敬 (人 名) さ ん の おやじ が 医 者 の ヒキで あの 人 が (ああ

コバマシセンセーガ。) ソイデ キテ モラッテ ソシテ クンネ
小 林 先 生 が。) それで 来 て もら っ て , そして やら ない ぞ

ーデ クレツタカラ ハイッテ。ホテ⁽⁹⁾ イジマガ イブツチュート
くれ と 言 っ た から 「はい」と [言 っ た] , そして 医 者 が 行 く と い う と

⁽¹⁰⁾ ヨシー ミズ モッテ ⁽¹¹⁾ コイ。イジャガ ユツタダカラ ノマネ
 よし 水を 持って こい。 医者が 言ったのだから 飲まない
 - ヨーニッテ、ノマナキヤ ⁽¹²⁾ シンジマウ ッツンデ オヤワンニ モ
 ようにと。 飲まなければ 死んでしまうといふので 茶碗に
 ッテ キサシテ ⁽¹³⁾ ゴクゴクゴク ホースト モー ピタット ブツ
 持って こきして ゴクゴクゴク もうすると もう ピタッと ぶつかって
 カッテ ソーレコソ クルシー。アセ カイテ ⁽¹⁴⁾ クン。ホイデ イ
 それこそ 苦しい。 汗を かいて くる。 それで
 ジャー トンデッテ イマミタイニ オラ ユーセンガ ネーカラ
 医者へ 走って行って 今の様に ほら 有線【電話】がないから
 イジャエ コンダ トンデッテ クルン、ソイデ イジャガ ト
 医者へ 今度は 走って行って くるの。 それで 医者へ
 ンデ クルン。ソイデ 千ドリノ オバーガ ミテ ノンダッペ
 走って くるの。 それで 千鳥の おばあが 見て、 飲んだらう
 ダメダメダメ ⁽¹⁵⁾ ダメダメ ウソー イワッシャルナ コンター イ
 駄目 駄目 駄目 駄目 駄目 嘘を お言いなさるな あなた、
 マ オマワンデ ノンダッペー。ソーユダッタヨ。イッコー ユー
 今 茶碗で 飲んだらう。 そういうことだったよ。 全然 言う
 コト キカネンダモノ ソイデ オバーガ ケーッテ キテ ⁽¹⁶⁾ ア
 こを きかないのだから、 それで おばあが 帰って きて ち
⁽¹⁷⁾ ー コンダー アノー カカガ ⁽¹⁷⁾ ツイーヨ。ゼッタイ クンネー
 今度は 嬢が 強いよ。 絶対 やらないから、
 カラ ユー コト ヒトツモ キカネーカラ。ソイデ クンネーデ
 【おじい】の言うことを ひつつも きかないから。 それで やらないで
 ナオッタクドサー。オレガ ⁽¹⁸⁾ ヨメゴノ ユー コト ゼー ンゼン
 治ったけびさ。 私の、 嫁の 言う ことは 全然

キカネーデ (0 笑)。 マーズ ソイデ ソントキ アレダッ タナ
きかないで。 まず それで そのとき あれだったな。

一。 クーシューケーホーダナンテ フルカラネー。(「ソーダネー。)
空襲警報 だなどいって 工廠が疎るからぬ。(そうだね。)

ソイデー オラー オーイオ カケテー メグリジュー ムシロナ
それで 私が 覆いを 掛けて 巡り中 筵などいつのを

ンツ ツルシテ クラーク シテサー。ホーイダケド オレガ コ
吊して 暗く してさ。 それだけれど 私が

一。 クラク シルツ チュート ビョーニダッテ コーニ エバ
こゝ 暗く するといふと 病人だとして ころに 威張るの。

ルン。ソイデ ゼンサクサンガ ヌーニ イテ ゼンサクサンガ
それで 善作(人名)さんが 前【の場所】に いて 善作さんが

トンデ キタダヨ。オバヤンガ アノー カンビョーズカレデ ネ
走って きたのだよ。 おばあさんが あのう 看病 疲れて

ブッテルダト オモッテ キタン。ソージャ ネーサー オメー
眠っているのだと 思っ 来たの。 そうでは ないさ、 おまえ、

クレー コーユノ カケルト オジーガ コー ヤッテ トッチャ
黒い こういふものを 掛けると おじい が こう やって 取ってしまうの

ウンダモノ ビョーニンガ イルンダッテ クーシューケーホーモ
だもの 病人が いるのだと言っ、 空襲警報も

ナニモ アルモンカ。(「ン。)ソイデ ゼンサクサンガ アノ
なにも あるものか。(「ん。) それで 善作さんが あのう

一 マツフジオーサー センジダシテ ア アノー ユテ ソバガ
松籐をさ、 煎じ出して あの 湯で 蕎麦掻きと

キー シテ クレルト ソノ イケーレンワ ネダエニ ナルツチュ
して やると そのう 胃瘻 嚙は 板絶えに なるというので

ンデ (K マツフジ[↑]) シ[↓]。(T ハ[↑]) ソー イッテ ゼンサク
(松 藤?) うん。(ハエ。) とう 言ッテ 善作さんが

サンガ オセータデ マツフジ⁽²⁵⁾ センジ コノ ツル アレ
教えたので、松藤を煎じ、蔓をあれ

サ トッテ キテ クレテ ソイデ ソレオ センジダシテ ソ
取ッテ きて くれそ めれで めれを 煎じ出して

バガキ シテ クワシタ。ソレデ ナオツタンダ。ソレッキリ イ
蕎麦掻きを して 食べた。 めれで 治ったのだ。 めれヨリ

ケ レン オコサナカッタヨ。(T アー ソーカイ。) ヤッパリ (T ハ
胃疼 嚙を 起こさなかつたよ。(ああ そうかぬ。) やはり

ツミミダナー。) キータダイナー。(T ン[↑]) フタクチベー クッ
(初耳だな。) 交いたのだよな。(そうかぬ。) ニロはカリ

タラ イラネ⁽²⁶⁾ ッナンテ ツキダシタツタケド。(T ン[↑])
食ったら いらない などと 突き出したのだけれど。(そうかぬ。)

K マ マツフジ センジテカ ソノ シルデー ソバカキ シテ。
^{xxx} 松藤を 煎じてか、その汁で 蕎麦掻きを して。

O ソー マツフジ ッチューノ マツミテ ヨーナ (A ツルガ アルダ)
とう、松藤というのは 松の様な (蔓が あるのだ。)

ツルガ アルダイネー。
蔓が あるのだよぬ。

T ツルノ ガチガチノ ホイテ^ハ ハダガ ソコカラ⁽²⁷⁾ ハダ。
^{xxx} 蔓が ガチガチの、そして 樹皮が ガサガサの 樹皮。

O コンナクレー フテー
このくらい 太い

A ハビノ ハダ (T ン[↓]) ハダミテ ヨーナ アンナヨーナ
蛇の 肌 (そうそう。) 肌の様な 似た様な

O ソノ ツル⁽²⁸⁾
その 蔓

T ソイデネー マツ⁽²⁹⁾
そいでね 松

A ~~オ~~ーヨーノ ヤマ イグト イックラモ アル。
大 楊(地名)の 山に 行くと いくらでも ある。

T チョット ニオイ スルンサネー。
少し 白いが するのさね。

O ソレ ゼンサクサンガ ヤマカラ トッテ キタ。
それを 善作さんが 山から 取って きた。

T アーユノ ムカシ オフロ イレタネー。
あいつのは 昔 お風呂に 入れたね。

A フロエ イレルト ヌクトマルナンテナー。
風呂入 入れると 温 まるなびきな。

O アレ ヌクトマルツチューネー。
あれは 温 まるというね。

A タダ イレルト マックロノ ミズガ デテナー。
ただし 入れると まっ黒の 水が 出こな。

T ソーダネー。
そうだね。

O アレー ホシトイタ ヤツ センジダシテサー ソースト ショー
あれを、 干しておいた のを 煎じ出してさ、 そうすると 醤油

ユノヨーナ イロノ⁽³⁰⁾
のようね 色の

T アレ デルンダイネー。
あれは 出るのだよね。

A オラー ホーノ ヤマニワ ネーケド オーヨーノ ヤマニワ イ
俺の 方の 山には 無いけれど 大場の 山には

ックラモ アル。

いくらでも ある。

O ソイデ⁽³¹⁾ ソレー センジテ アノー ソノー ユ⁽³²⁾ ネータタテ ア
それぞ それを 煎じて あのう そのう、湯を 煮え立たせて

レサー ソバガキ シテ クワシタダッタイ。

あめさ、蕎麦掻きを して 食べたのだったよ。

T ヘー ソースト イケーレンガ イー ワケダ。

へえ そうすると 胃瘕^{胃腸}に 良い わけだ。

O イケーレンガ ネダエニ ナルツテ センサクサンガ ユツタダヨ。
胃瘕^{胃腸}が 根絶えに なると 善作さんが 言ったのだよ。

ソノ セーダガナ マー ドーユーダカ。

その せいだが まあ どういうのだか [治ったよ]。

T イヤ イマデモ ソーユー ヤツオ ツカッテルダネー。キノー
いや 今でも そういう ヤツを 使っているね。 昨日

ケーフンオ モライー キタ オレンチー。

鶏糞を 貰いに きた、俺の家に。

O ヘー。

そうがね。

T ナンテダッタラ ジニ インダソダネー アレー。

どうしたと言ったら 疼に 良いのだ そうだね あれは。

O ヘー↓。

そうなのがね

T アレオ フクロニ イレテサー コーヤッテ ヤルト アノー
あれを 袋に 入れてさ こうやって やると あのう

O ナゼルン。
 撫でるのが。

T ナンダソーダヨ ソコエ コーニ イレテ シ_xタス_x シ_xタスンダト。
 なんだそだよ , そこへ こうに 入れて 浸すのだった。

K ア_↓ ナルホド_↓。
 ああ なるほど。

T ケーフンテ コト バフンテ コター キータケド ケーフンテ
 鶏糞ということ, 馬糞ということは 聞いたけれど 鶏糞という
 コト (A 笑) バフンワ _{xxx}ズ アノ カンブエ ツケルンダソーダヨ。
 こゝ 馬糞は あの, 患部へ つけるのだそだよ。

O へー。
 へえ。

T ダカラ イーッテ コト キータケド ケーフンワ シラナカッ夕
 だから【馬糞は】良いという ことを 聞いたけれど 鶏糞は 知らなかったな。
 ナー。

K ネー ケーフ _{xxxxx} バフンワ インカネー_↓。
 ねえ, 馬糞は 良いのかね。

T バフンワ イーラジー。
 馬糞は 良いらしい。

K イー マエッカラネー。
 良い, 以前からね。

T バフンノ アノー マダ アッ_xタカイ_x アッ_xタカイ_x ヤツ (A 笑)
 馬糞の あの まだ 暖かい ヤツ

ユゲガ_{xxxxx} ユゲガ タッテル。
 湯気が 立っている【のを】。

A ボ³³タント シ³³タヨ³³ーナ ヤツ
ボタンと した様な ヤツ

O ン³⁴→ ボ³⁴タモ³⁴チ。(笑)
うん、牡丹餅。

T ン³⁴→ ア³⁴レオ ヌ³⁴ノニ ツ³⁴ツ³⁴ン³⁴デ³⁴ ガ³⁴ー³⁴ゼ³⁴ニ
ん、あれを 布に 包んで、 ガーゼに

K イ³⁵マ イ³⁵ネ³⁵ー³⁵カラ ダ³⁵メ³⁵ダ³⁵イ。
今 いないから だめだね。

A ン³⁶ー³⁶マ³⁶ワ³⁶ナ³⁶ー ソ³⁶ー³⁶ワ イ³⁶ガ³⁶ネ³⁶ー³⁶ヤ³⁶ナ³⁶ー。
馬はな、 そろは いかないやな。

T ソ³⁷ー³⁷サ³⁷ー ン³⁷ー³⁷マ³⁷ワ ミ³⁷エ³⁷ネ³⁷ー³⁷モ³⁷ノ³⁷ネ³⁷ー。
そろま、馬は 見えないものね。

A イ³⁸ネ³⁸ー³⁸モ³⁸ノ³⁸ー ホ³⁸ッ³⁸カ³⁸イ³⁸ド³⁸ー³⁸エ³⁸デ³⁸モ イ³⁸ガ³⁸ナ³⁸ケ³⁸リ³⁸ャ³⁸ー。
いないもの、 北海道へでも 行かなければ。

O カ³⁹ー³⁹バ³⁹ジ³⁹ャ³⁹ー コ³⁹グ³⁹ソ³⁹ー ト³⁹ッ³⁹ト³⁹イ³⁹テ ア³⁹レ³⁹ワ ナ³⁹ン³⁹ノ ク³⁹ス³⁹リ³⁹ダ³⁹
川場(地名)では 蚕糞を 取って置いて、 あれは 何の 薬だ、
ケ³⁵ツ³⁵ア³⁵ツ³⁵ノ
血圧の

A ケ³⁵ツ³⁵ア³⁵ツ³⁵ノ ク³⁵ス³⁵リ³⁵ダ³⁵。
血圧の 薬だ。

O ケ³⁵ツ³⁵ア³⁵ツ³⁵ノ ク³⁵ス³⁵リ³⁵ダ³⁵ッ³⁵テ³⁵ネ³⁵ー。ア³⁵レ³⁵ー ホ³⁵ッ³⁵ト³⁵イ³⁵テ³⁵ネ³⁵ー
血圧の 薬だってね。 あれを 干しておいてね

K ケ³⁵ツ³⁵ア³⁵ツ³⁵ノ ク³⁵ス³⁵リ。ソ³⁵ノ³⁵カ³⁵ー³⁵ジ³⁵ イ³⁵チ³⁵レ³⁵ー³⁵ノ カ³⁵イ³⁵コ³⁵ノ コ³⁵グ³⁵ソ³⁵
血圧の 薬。 そのかわり 一令の 蚕の 蚕糞

ダ³⁵ネ³⁵ー。イ³⁵チ³⁵バ³⁵ー³⁵ン³⁵ チ³⁵ッ³⁵チ³⁵ー。
だね。 一番 小さい。

O アレー ホジトイテネー。
あれを 干しておいてね。

K ヤスミメーノ。
休み前の。

T シー。
そうがね。

O アー ソレコソ コマックエーヤネー、メーネー。
ああ、それこそ 細かいヤね 見えな。

A キレーダヨ ソノカーシ。
きれいだよ そのかわり。

T ソーダネー イチレーダラ。
そうだね 一令なら。

A ソースト ハダガ ヨクナルナンテ ユワネーカ。
そうすると 肌が よくなるなどと 言わないか。

O ハダモ ヨクナルサーネー。
肌も よく なるさね。

K ハダー ヨクナルサ。アレー イワユル ヨー (ヨーリョクソダ
肌は よくなるさ。あれは 所謂 (葉緑素だからね)
カラネ) ヨーリョクソダカラ。
葉緑素だから。

A トキョーノ アレワ オバサン トカー ソレ ノンデルダナン
東京の あの人は、おばさんの ことは それを 飲んでいるのだなどヒ
テ。

【言っている】。

注

1. 「ナエアルッタ」明確な形は「ナリアルッタ」。 「ナル」は呼ぶの意。
2. 「キドク」明確な形は「キトク」。 すぐ後で「キトク」という形式も出てくる。
3. 「イシバタケ」石の多い畑。
4. 「トヤマヤノ」「トヤマノ」と言うところを調子を整えるために「ヤ」の音節を添えた。
5. 「カサー ハイアガッテ」「カサカサと草をかきわけて這いよって」の意。
6. 「オタジバーサマ」「タジ」は人名。
7. 「シッテタ」[ʃit̚t̚ta] [t̚]は音節主音的。
8. 「ナニガ イナカカラ クルッヂュ」ささやき声。反撥的表現。
9. 「ホテ」「ソーシテ」がラ次のように縮約された。ソーシテ > ホーシテ > ホシテ > ホテ
10. 「ヨシー」人名よ志忍の略称。
11. 「ヨシミズ モッテ コイ」ささやき声。直接詠法で。
12. 「ノマナキ シンジマウ」ささやき声。直接詠法で。
13. 「ゴクゴクゴク」ささやき声。擬声語。
14. 「クン」「クルン」(くるの)の縮約形。
15. 「ダメダメダメ ダメダメ」ささやき声。低く早口に。
16. 「ハア」[xa:]摩擦は弱い。
17. 「カカガー」嬢こそはの意。
18. 「オレガ ヨメゴノ ユー コト」「私の言うこと」と言いかけて立場を考慮に入れ、「嬢の言うこと」と言いなおした。
19. 「ビョーニンダー」ささやき声。直接詠法。
20. 「ビョーニンガ イルンダッ」ささやき声。直接詠法。
21. 「クージュ ケーホーモ ナニモ アルモンカ」ささやき声。直接詠法。
22. 「センジダシテ」[sẽ̞ʒi daʃite]無造作な発音。

23. 「アノー」指示代名詞。思い出しながら話しているために尾位の拍が長呼されている。
24. 「ソノ」間投詞的用法。
25. 「センジ」[sẽ̞ʒi] 無造作な発音。
26. 「イラネーッ」強く発音。直接話法で。
27. 「ソコカラノ」不明瞭。「ガサガサノ」という樹皮の形容らしい。
28. 「ソノ ツル」次のTの発話によって途切られた。
29. 「マツ」次のAの発話によって途切られた。
30. 「イロノ」次のTの発話によって途切られた。
31. 「センジテ」[sẽ̞ʒite] 無造作な発音。
32. 「ネータタテ」「ネータタシテ」の言い間違い。
33. 「マツ」次のCの発話によって途切られた。
34. 「ガーゼニ」次のKの発話によって途切られた。
35. 「ケツアツノ」次のAの発話によって途切られた。

5 昔の商店

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林志志 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O マーズ ムカシマ - ホーントニ オッカネー ンダッテネー アキ
 ます 昔は 本当に 恐ろしいのだからね
 ネーヤガネー ナンゲンモ ナカッタ ヲチュ - カラネー (T ナカッ
 商店がね 何軒も なかったというからね。 (なかったね。)
 タネー。) センコー カウニワ ヨロズマダケシカ ナカッタ ヲチュ
 線巻と 買うには 万屋だけしか なかったといったものね。
 ヲタモノネー。

T ソーカシンネーネー。
 そうかしないね。

O ソーダチッタヨー。
 そうだと言ったよ。

T コドモン トキニワ ソコニ ア カネコサンチニ (A ソーダ。)
 子供の 時には そこに 金吾さんの家に (そうだ。)

ツ アノ一 (A モリガ モリサンガナ一。) ッテ ヤッ タネ一。
xxx あのう (森が 森さんがな。) xxxxx やったね。

A ソーダ。
もうだ。

O ソレ オレナンゾガ⁽¹⁾
それは 私などが

A オレナンゾガ オベータノガ⁽²⁾
俺などが 覚えたのが

T オレナンゾガ オベータッカラダ⁽³⁾
俺などが 覚えてからだ。

O ソー オレナンゾガ (A ソントキニ ナレバ ハー) ガッ コーエ
らん, 私などが (そのときに なれば もう) 学校へ
フル ジブンノ
来る 時分の

T シタエ ダイブ ミセガ テキタ。
下に だいつ 店が できた。

A ダイブ アキネーガ テキタッダ。
だいつ 商店が できたものだ。

K ドンナ モンガ アッタダヨ オジーナンカノ トキニワ。
どんな ものが あったのだよ, おじいなどの [子供]時代には。

A アブラヤガ イッケント ヨロズヤガ イッケングレーサ。アトワ
油屋が 一軒と 万屋が 一軒ぐらいさ。あとは
ノミヤガ アッタグレー。
xxx 飲屋が あったぐらい

O アキ キンペーサンガ⁽⁴⁾ アッタヨネ一。
xx ああ 金平さんが あったよね。

T キンペーサン アッ タネー。
金平さん あったね。

A ソツツギガ キンペーサンダッペー。
その次が 金平さんだろう。

O ソレトー アノー カイツァンノ オヤジガ コオサンガ⁽⁵⁾ アレ
それと あの 嘉一さんの 親父が、 光さんが あれを
ー ヤッタダイネー。
やったのだよね。

A ソレツカラ ズット ノチニ ナッテダ。
それから ずっと 後に なってだ。

O ゴフクマオ ヤッテ。
呉服屋を やって。

T ンー ゴフクマ ヤッタネー。
うん 呉服屋を やったね。

A ソレ メーニ トーフマオ サンペードンガ ヤッタダ。
その 前に 豆腐屋を 三平さんが やったのだ。

O サンペードーフクマデ。
三平豆腐というので。

A トーフマ ソレガ⁽⁶⁾
豆腐屋、それが

T カドヤカラネー アノー ナガイマデ ナガイノ イリグマデ
賀登屋からね あのう 長井(名空)まで、 長井の 入口まで

ゼンブ タンボダッタダ。
全部 田圃だったのだ。

A タンボダッタダ。
田圃だったのだ。

0 タンボダッ タンサネー ソデ ナガイワ ナガケードーデ ⁽⁷⁾ ズーッ
 田圃だったのさね、 それで 長井は 長街道で ずっ
ト エレモンダッ タンネー (↑ エレモンダッ タネー。) リョーホ
 たいしたものだったね、 (たいしたものだったね。) 両方が
ーガ デッ ケー (↑ イケガ アッ テ) タンボデネー (↑ タイシタモ
 大きな (池が あって) 田圃でね、 (たいしたもの
ンダッ タネー。) ホーン トニ。
 だったね。) 本当に、

A タイシタモンダ。
 たいしたものだ。

0 ムカシャ ー ヤタラー アノ アレダッ タモノ ヨベナカッ タツ チュ
 昔は 滅多に あの、 あれだったもの、 呼ぶなかつたという
ーモノ ネー。(↑ ソーラシー ネー。) チャー ント オトリツギガ ナケ
 ものね。(そうさしいね。) ちゃんと お取り置きが
リャ ー (↑ シ。) オクノ ハヤニ イテ トーレナカッ タチュ ー ネ
 なければ、(うん。) 奥の 部屋に いて、 通れなかつたというね。

T ソーラシー ネー。
 そうさしいね。

A ン ー サダヨシドンチュ ー シトワ アレダカラ。
 そうさ、 定義さんという 人は あれだから

0 サダヨシドンチュ ー シトワ ネー。
 定義さんという 人はね。

T ソノ シトガ ケンカイギ イン ヤッ タンカイ。
 その 人が 県会議員を やったのかね。

A ソノ シトが ケンカイギイン ヤッタンサ。

その 人が 県会議員を やったのさ。

O オマツツァン^(B)ノ アニーカイ。

おまつさんの 兄かぬ。

A アニーダ。

兄だ。

T ソーダネー オマツツァンノ ニーサン~~ダツタネー~~。

そだね おまつさんの 兄さんだね。

A イゲンガ アッタイ カオニ ヒゲガ ハイテ。ケンドーノ セン

威厳が あったよ 顔に 髭が 生えて 剣道の

セーデ ホーシンリュノー センセーデ。

先生で、 法神流の 先生で。

O オトリツギガ ナケリヤ ゼンゼン アエナカッタダツチューモノ

お取り次ぎが なければ 全然 覚えなかったのだとらものぬ。

ネー。イマワ ハー オトリツギズラ ネー (D 笑)。

今は もちろん お取り次ぎどころではない。

T ~~~~~~~~ キヤスク イエルヨーダ。

気安く 言えるようだ。

A ~~~~~~~~

O デーッケー ウエキ アッタッテ ウエキー オイタッテ ナンニ

大きい 植木が あったも、 植木を おいても 何にも

モ ナンネーチューデ ナカチヤンガ ⁽⁹⁾ズイコン ズイコン ミー

ならないというので なか(名)ちゃんが ズイコン ズイコン

ンナ イー マツガ アッタノニ ミンナ モトカラ ズックリケ

皆 いい 松が あったのに、 皆 もとから 挽いて倒して

ー ⁽¹⁰⁾ シ ~~キ~~ ャ ッ タ。

しまった。

A モッ テ ネー ヨー ダッ タイ ナー。

勿体ないようだったよな。

T アカ マツノ イー ンガ アッ タ ネー アス コニ ネー。

赤松の いいのが あったね あそこだね。

A アカ マツ イー ンガ アッ タ。

赤松の いいのが あった。

T イ ケ バ タニ ネー。

池端だね。

O ソイ デー ナ カ キ ヤ ン ガ ズッ ク リ ケー シ キ ヤ ッ タト。 オ マ ツ ツ ア

それで なかちゃんか 抱いて倒してしまっただ。 おまつさんが

ン ガ キ テ オ コッ タッ チ ユー ケ ド オ コッ タ ラ クッ ツ ケ ラ ッ サ

来て 怒ったというけれど、 怒ったら、 おつけなさい七

⁽¹¹⁾ イッ テ ユッ タ チ ド ⁽¹²⁾ ドー シ ョー モ ネー。

言ったというけれど どうしようもない。

K ソレ モ ジ ダ イ ノ ナ ガ レ ダ シ ョー ガ ネー ダ ッ ペ ソ ラ。

それも 時代の 流れだ しかたがないだろう、 それは。

O ソ コ ン チ ノ ム ス メ カ ズ コ ア ノ ズ イ ッ キ ル ダ カ ラ ドー シ ョ

そのうちの 娘が あの ズイコン 切るのはだから どうしようも

モ ネー ネー。 (↑ ン ↓) オ マ ツ ツ ア ン キ テ オ コ ッ タ ッ チ ッ タ。

ないね。 (うん。) おまつさんが 来て 怒ったと言った。

T へー。

へえ【もうかね】。

注

1. 「オレナンゾガ」次のAの発話と重複したので途中で言いさした。
2. 「オレナンゾガ オベータノガ」 「俺などの記憶にあるのが」の意。次のTの発話によって途切られた。
3. 「オレナンゾガ オベテッカラダ」 「俺などの記憶にある頃からだ」の意。
4. 「キンペーサン」 雑貨屋の名前。田中金三郎という人がやっていた。
5. 「コオサン」 少しつまって「コ」と「オ」を独立に発話した。[ko²osaŋ]。人名、光一の略+さん。
6. 「ソレガ」 次のTの発話によって途切られた。
7. 「ナガケードー」 長い門内の道。
8. 「オマツツァン」 接頭辞「お」+人名、マツ+「さん」。
9. 「ズイコン」 擬声語。木を挽く音を表わす。
10. 「ズックリケーシチャッタ」 「ズックリケース」は「ズイコン」と「ヒックリケース」のコンタミネーション形か。
11. 「クツケラッサイ」 「ラ」の部分は[dza~ɕa]のように聞こえる。破擦音的弾き音。明確な形は「クツケラッサイ」であると言う。「シャル」系敬語の命令形である。
12. 「ユッタチド」 明確な形は「ユッタッチューケド」。「~という」の意の「チュー」は時に直音化して「チ」となる。

6 昔の菓子・飴売りのおばあさん

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 屋野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

K ソノ オジ^ニーナンカノ チ^ツチュ^ー トキワ アレキ^アー ソノ
 おじい^のビ^の 小^{さい} とき^は あれ^がよ、
 アメ^ナンカ ド^ーユー アメ^ダトカ ソ^ンナ モ^ナー ア^ッタダ^ッ
 飴^なビ どう^いう、 飴^だと^か せん^な も^のは あ^った^だち^うけ^れど^き。
 ペ^ケド^サー。

A ア^ッタ^サー。

あ^った^さ。

K ソ^ーユ^ー ア^レワ⁽¹⁾

そ^うい^う あ^れは

O マ^ック^ロナ ア^メダ^マツ^チユ^ンガ^ネー イ^チエ^ン カ^ウト ト^ッツ
 真^黒な 飴^玉と^いう^のが^ね 一^円 買^うと 十^粒ぐ^らい

ブ^グレ ア^ッタ。

あ^った。

A イワダマト ネジッタ ヤツト。
岩玉と 換った ヤツト。

T ソイデ オランカノ オランカ オランカッテ コター ネーケド
それで 俺などの、 俺など 俺など っていう コレは ないけれど、
サア アノ ジブン ブッカミ ブッカキアメッ テンガ アッタ。
あの 時分 ×××××× バッ欠き 餅というのが あった。

O ブッカキアメ。
バッ欠き 餅。

A ブッカキアメ。
バッ欠き 餅。

T ヒツヨニ オージテ アント イッセンテ ユートネー アノー
必要に 応じて 一錢と 言うかね
イター イタニ ノシテ アンダヨ (0ソーダ) (Aソーソー)
××××× 板 板に 伸して あるのだよ。(もうだ。) (もうもう。)

ウドンノ アノー ヤツミテニネー バンノ ウエテ ノシテネ
うどんの あのう やつみたいだね 板の よど 伸してね

ー コノクレー アツク ナッテンダヨ。ソレオ アノ ノミデ
このくらい 厚く なっているのだよ。 それを あのう、 巻で

コツン コツン ゲンノーデ タタイテ (0コン コン タタイチヤ
コツン コツン 玄 翁で 叩いて (コン コン 叩いてね。)

ーネー) ソイデ テキトニ ウッタんだいネー。
それで 適当に 売ったのだよね。

O ソーソー。
もうもう。

K ハー。
へえ。

O ブツカキアメバーサマツ チュテ オヨシバーガ⁽³⁾
 ぶっつき 餡ばあ様 いろいろの おヨシは あが

T ンー ヨシオバーガ ヤッタ ンダ。
 ンん ヨシおばあが やったのだ。

A ハタゴヤエナンゾ トマツテテサー (ツシ) ソイテ ホコノ⁽⁴⁾ ハ
 旅籠屋へなび 泊ってさ (ンん。) それで その

シラエ ブツケテ コワシチャ ー ノバシチャ ー (ツノバシテ)
 柱へ ぶつけて 壊しては 伸しては (伸して

ンー ンー ンー) ンー ヨル (ツツバキ ツケテ ネー) (〇 笑)
 ンん ンん ンん。) ンん, 夜 (手唾を つけてね。)

ン ヨル コセー チャー ソテ アー シタダ テツバキ ツケ チャ
 ンん 夜 作っては それで あれ したのだ, 手唾を つけては。

K ノシテ ソイテ ノシテ。
 伸して, それで 伸して【かぬ】。

A ソイテ ノシチャ ー コーニ ~~~~
 それで 伸しては こうに

O コマヨセノ シンノジョ ーガノ オヤジガ ソレテ シタダノ キ
 駒寄(地名)の 進之丞の 親父が それで したの,

リギリ アメツ チュンテ コーニ ギリギリギリギリ ~~~~⁽⁵⁾
 ギリギリ 餡いろいろの こうに ギリギリギリギリ

A ソレワ マタ ミズアメサー ソレワ ミズアメ ブツカキアメト
 それは また 水 餡さ, それは 水 餡, ぶっつき 餡と

ミズアメワ チガウン。
 水 餡は 違ふの。

O ソイデ アスコ キテ ヤッタン。 ソナンガ ミンナ ハジマリ
それで あそこへ 来て やったの。 そんなのが みんな、 はじまりだね。
ダイネ。

A ウドンゴナテ アレ マゼテ ソレデ ブツカキアメ。 トミチャン
うどん粉で あれを 混ぜて それで ぶつ切餅。 富ちゃんが
が ユーノウ ブツカキアメ。
言うのは ぶつ切餅。

T ブツカキアメ。
【モロ】 ぶつ切餅【だ】。

A ギリギリッ チューナー ハシー カランデ。
ギリギリ【餅】というの。 箸を からんで

T ン ハシー カランデ (ソレー ミズアメデネー) ミズアメ
らん 箸を からんで (それが 水餅だね。) 水餅、
イマノ アサダアメダ カンニ ハイッテル アサダアメ。
今の 浅田餅だ 罐に 入っている 浅田餅だ。

A アサダアメト オナジダ。
浅田餅と 同じだ。

O イッセン ヤッテ イクラッテ コーニ アレ スルシナ
一銭 ヤマ 幾らと こうに あれを するからな。

K ソノ コロ イッセンダ ヤッパリ。
その 頃 一銭だ ヤはり？

O イッセンサ ヨ アノ ヨシバーサマ ガ アノ ブツカキアメ デ
一銭さ、 あの、 ヨシばあ様が あの、 ぶつ切餅だね。
ネー (ブツカキアメ ソーダ) ヒ ヘ ヒ ヘ ナンテ
(ぶつ切餅 そうだ。) ヒー ヘー ヒー ヘー なびね。

ネー アレー アノ カサッ カキカイ。
あれは あの、 かさかきかぬ。

T 4、 - シヨカッ タネー。
調子よかったね。

A カサッ カキダ カサガ カイタンダ。
かさかきだ、 かさかきになったのだ。

O カサッ カキダ ハー コンシヤ ハー ⁽⁴⁾ イ マニモ キレ イ
かさかきで ハー コンにちは ハー と今にも
キガ キレソーネー。
息が 切れそうね。

T ソイデ ^{xxv} キ キレナカッタネー。(苦笑)
それで 切れなかったね。

A ソイデ ニクマレバーサマデナー。
それで 憎まればあ様ごな。

O ハシゴッパ シッテ クレナンテ ネー ビー [↑] [↑] ゴーナンテネー
梯子、尻を、ムッて くれなどと ね、 ビー、 ビー などとね、
ピッピッピナンテ コレワ クサビダナンテ マー (° 笑)。
ピッピッピなびと これは 楔だなびと まあ。

T デ アノ シトノ ユッタンガ オレ イマン ナッテ ソー オ
で、 あの 人の 言ったのが 俺 分に なって そう
モッタクドサー アレ イーズカケートーナンダヨ。オレノ オフ
退ったけれびさ あれ 飯塚系統なんだよ。 俺の
クロノ テドコノ ナンダ イーズカ ナンダッタカネー。
御袋の 出所の なんだ、 飯塚 何だったかね。

A スリブ4ノカー。
摺瀧のか。

T シ↓。

うん。

O ハー↗。

へえ。

T ホーイデ オレワ アノー シンダラ オメー セワン ナルンダカ
それで、 私は 死んだら おまえの 世話に なるのだから

ラチュート ヒトツズツ ヨケー クレター オレニ (〇ハ→)。
と云うと 必死で よけいに くれたよ 俺に (へえ。)

ヒトツカケズツネー。ソースト ホーントニ オレガ ハカモリン
一欠ずつね。 そうすると 本当に 俺が 墓守に

ナッチャッタ。オレ シトリダヨ。(〇ハ→)。(10) オテノ セドニ
なってしまった。俺 一人だよ。(へえ。) お寺の 裏に

ポツント アノー (〇アルンカイ。) (Aツダッペー) アルケドネー。
ポツト (有るのかね。) (そうだろう。) 有るわけだね。

ボントネー ショーガ_{xxxxxxx} ショーガツ オガムノ オレツキリダヨ。
盆だね 正月 拝むのは 俺だけだよ。

O アンナ アクダレバーサマー アレダナー ドンナ シニガマ シ
あんな 悪たれはあ様は あれだな どんな 死に様

ルナンテ ミンナ ワルクチ イツタケド コロリ シンデネー
するなごじ 皆 悪口を 言っただけで コロリ 死んでね

テーテー イー シニカター シタダ。
たいへん 良い 死にかたを したのだ。

A イー シニカタ シタダ。
良い 死に方を したのだ。

K ヤッパリ ソー ヤッテ ウリアルツタダッペー。
やはり そう やって 売り歩いたのだらう。

O ウリアルツタ (↑ウリアルツタ) ジョイアルツター。

売り歩いた (売り歩いた。) 背負い歩いた。

T ジョツテサー ダーラ アノ ゼンソクニ イマ イマニモ イ
xxxx

背負ってさ だから 喘息に 今にも

キガ キレソーナンダヨ。 オテラノ ダイモン アガッテ クルト

息が 切れそうなんだよ。 お寺の 大門を 上って くと

モ イマニモ イキガ キレソーテ ソイテ ワルクチワ イ

もう 今にも 息が 切れそうで それで 悪口は

ツタンダカラ。

言ったのだから。

A ワルクチベ。

悪口ばかり。

O ア ソレコソ ワルクチノ イーホーデー。

そなた、それこそ 悪口の 言い放題。

A アノ ジトガ ホム ホメルナンチュ コト ナカッタ。

あの 人が 誉めるなどという こと 無かった。

O アガリハナ キテ イナケリヤ ア コー ヒッ パタイテ ホイ

上がり端へ 来て いなければ もう こう しゃばたいさ それで

デ ハー アメ カウ カウ エツ チュンテ (A カエツ チュー デー) ハ

もう、 飯を 買えというので (買えというので)

チドリナンゾ クルツチュート ハー ノ ケセ ヒッ クルケ

もう、 千鳥 などへ 来るというヒ もう あおむけに しゃくりかえって

ツテ アガリハナエ キテ チドリノ ジトナンゾガ キ ネテル

上がり端へ 来て、 千鳥の 人などが 寝ているのだ。

ダ カイコドキナンゾ キタツテ イソガジーカラ ソンナ カサ

蚕時など 来て 忙しいから、 そんな

ッカキノヨーマ コエダカラネー キケーネーカラ ショ キケーテ
がさがきのよゝな 声だからね 聞こえないから、 聞こえても

モ シラバックレテルンサー。ソー スルトー アクダレ ユツテフタ
しらはくれているのさ。 そうすると 悪たれを きては

(12) リ ナツテルダイ。ソノ ヘンナ コエデ。シラバックレテルンサ
大きな声を出しているのだよ。その 変な 声で。 しらはくれているのさ。

ー。

K ソラ コツクテ ツクッテ。
それは こちらで 作ってかぬ?

T ジブンデ ツクッテ (A ジブンデ ツクッテサー) (K ジブンデ
自分で 作って、 (自分で 作ってさ) (自分で
ツクッテ。) ジブンデ ツクッテ ショイアルツタン。ダーラ ソノ
作ってか。) 自分で 作って 背負い歩いたの。 だから その
ショイカゴツテンガ ザマツカゴー イマー ソーユ スガタ
背負い籠というのが ざま籠を 今は そいつ 姿は

ナク ナツタケドサー アノ カゴノ フチガネー テア テアカ
無く なったけれどさ あの 籠の 縁がね 手垢

ツチュンカ テアブラデ (A シ アブラデナー) (D ヒカッテタ)
というのが 手油で (うん 手油でな) (光っていた。)

クロク ヒカッテタ。(K へー。)ソレ セナカエ アノー アタル
黒く 光っていた。(へえ。)それを 背中へ 当る

トコダケ ヌノ オツツケテサー。ソイデ ショイアルツタンダ
所だけ 布を つけてさ。 それで 背負い歩いたのだよ。

ヨ。

K ナルホドネー。

なるほじぬ。

O ソノ ザマツカゴ イレルー ナダネ イロンナ モノ ブッコ

その さま 籠入 入れる 何だね いろいろな ものを ぶっ込んで

ンデ ソノ ウエー コー ハコー アゲテネー ソノ ハコノ

その 上に こう 箱を 上げてぬ その 箱の

ナカニ ブツカキアメガ アルンサ。

中に ぶっつき餌が 有るのさ。

T アルンダヨ。

有るのだよ。

K イクジュルイモ ドーセ イレテルダツペ、イクツカ

幾種類も どうせ 入れているだろう。 幾つか

O ソイデ ゴマナズー シメーニャー イレテネー。

それで 胡麻などを 終いには 入れてぬ。

A ゴマー イレテ ゴマモ ヨク イレタ。

胡麻を 入れて、 胡麻も よく 入れた。

O イレテ ヤツタンサネー、シトイロツキリサー。⁽¹⁵⁾

入れて 食べたのさぬ。 一色だけさ。

A シトイロツキリサ ナニモ アリャー シネー。

一色だけさ 何も【他には】ありは しない。

O ソレツキリ モウアルクン、ソイダカラ ヨツポド ヨシットデ

それだけを 持ち歩くの。 それだから よほど 生きていたのだよな、

ナツノト⁽¹⁴⁾ キヨシサンガ クルトキ キマツタツチタラ テー

清(人名)さんが 来る とき、 決まったと 言ったさ

ラジュー⁽¹⁵⁾ キテ ワルクチ イッテ アルツタツチュデ オキンサ

平中 来て 悪口を 言っ 歩いたし いうのご お金さんがぬ

ンガネー クヤシガッテ (「ンー ンー ンー ニシヨーノ)ニシヨ
悔しがって うん うん うん 西屋(地名)の。

ーノ オキンサンガ クヤシガッテ マー オヨシバーサマが ソ
西屋の お金さんが 悔しがって まあ、 おヨシは「あ様が

ー イッテ アルッダッチューケド アノー オラガ ウチワ ケ
そう 言って 歩いたというけれど、 あのう、 私の 家は

ツカラ ハイリコムヨーダッテ ミンナニ ユッテ アルッタンサ
穴から 入り込むようだと 皆に 言って 歩いたのさね。

ネー。キヨシガ ウチワ アノー ケツカラ ハイリコムヨーナ
靖の 家は あのう 穴から 入り込むような

ウチダッテ ユッテ アルッタンサー。
家だって 言っく 歩いたのさね。

A コンチワーッテ、ユエバ セドエ デル ~~~~~ コンチワーッチュ
こんにちは と 言えば 裏へ 出る こんにちめと 言えば

エバ セドエ デルヨーナ ウチダッテ ユッタ。
裏へ 出るような 家だって 言った。

O ソー イッテ ユッタッチューデ マー。
そう 言って 言ったというので まあ。

A ヨシバーサマが ~~~~~
ヨシは「あ様が

O ヨシバーサマが ソーニ キテ ユッタタンサ オラガ チーアタリ
ヨシは「あ様が そうに 来て 言ったのさ、 私の 家あたりにも

モ キテネー (Kシ↓)オレガ ホー イチネン サキー キタン
来てね (うん。) 私の 方【には】一年 先に 来たのかな

カナー ホーイデ ヨシバーサマ ソー イッタダッチューデ オ
それで、 ヨシは「あ様が そう 言ったのだというので

キンサン クヤシガッテ (0 笑)。

お金さんが 悔しがって。

K ドーゼ スイブン ソーユヨーナ ウチダッテ アッタダッペナー
どうせ ずいぶん, そろいのような 家だって 有っただろうな,
ムカシダカラネー。

昔だからね。

T ムカシマァー イロイロ キョクタンダッタカラネー。

昔は いろいろ 極端だったからね。

K ネー。キル モンカラ クー モンカラチュエバ イロイロ ガツ
ねえ。着る ものから 食う ものから といえば いろいろ 雑
ダッタペーカラ。

当たってるから。

O ンー ↓ ガツダッタサー。

そっだよ, 雑だったさ。

注

1. 「アレワ」次の「 」の発話によって途切られた。
2. 「コソ 」二度目の方がヤ>高い。
3. 「オヨシバーガ」次の「 」の発話と重なったため途中で言いさした。
4. 「ホコノ」[xokono] [xコ]は軟口蓋摩擦音。
5. 「ギリギリギリギリ」歌うような調子で。
6. 「カランデ」次の「 」の発話によって途切られた。
7. 「イッセンダ」円より下の「 」二銭という単位だったのか。
8. 「ヒー　へー　ヒー　へー」擬声音。「ヒー」の部分には息を吸って喉を鳴らしている。「へー」の部分には息を吐いて喉を鳴らしている。
9. 「 　 　 　 」押さえたかすれ声。ものまねをするように。
10. 「 」無声喉頭摩擦音。
11. 「カウエッチュンデ」「カウ」と言いかけた「カエ」と言いなおしたために「ウ」の音が弱く残った。
12. 「ユツテフタリ」話者の説明では「ユツテツチャー」（言っている）と言っている、ということである。
13. 「シトイロ」一種類。
14. 「ヨシットデ　ナツノト」話者の説明では「イキテタダイナー」と言っている、ということである。
15. 「テラジュー」森山（地名）の中の平という組中。
16. 「イッテ　アルツタ」言い廻ったの意。
17. 「コンチワーツチュエバ　セドエ　デルヨーナ　ウチダツテ　ユツタ」この部分突いながら。

7 病気見舞の品物

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O アーメシナンザ^① カラーメシデ^② アワワ コメー イレナクモ ク
 粟飯などは 空飯で 粟は 米を 入れなくても
 エルブレード^③ チュ オシエタモノ^④ ジョーダンジ^⑤ ネーヨ。イマ
 食えるく^⑥らいた^⑦という【こども】 教えたもの、 冗談ではないよ。
 ナンザ^⑧ ハナシ^⑨
 今などは 話

A アーメシワ コメー イレナクモ クエル。
 粟飯は 米を 入れなくても 食える。

O ハナシン ナンネーヤー。
 話には ならないや。

A ムギメシン ナケー アズ^{xxxx}アズキー イレルトカ アズキー イ
 麦飯の 中へ 小豆を 入れるとか、 小豆を
レテ クエバ テーガ イーヤ。
 入れて 食べば 見栄えが いいや。

T オホシサマッ タダカラネー。

お屋様と言ったのだからね。

O シ、 オホシサマサー。

うん、 お屋様さ。

T ビョーニンノ マクラモト イッテ タケツツニ コメー (〇オコ
病人の 枕元に 行って 竹筒に 米を

メダ オコメダッ テレバ ビョーニンガ ナオルツツン。) ビョーニ
(お米だ お米だと言ってれば 病人が 治るといふの。) 病人が

ンガ ナオルツツマー ソンナ キョクタンナ ハナシダケド
治るといふ まあ そんな 極端な 話しだけれども

モ ソーダッ タソーダカラ ソノクレー キチョーダッ タラジヨ。
そうだったから そのくすり 貴重だったらいいよ。

O ンー キチョーダッ タダネー。⁽³⁾

うん 貴重だったのだから。

A ダッテ コノ モリヤマダッ テダッペ タンボノ アッタノワ キョ
だつた この 森山(地名)でも だるう 田圃の あったのは

クガ マー イチバン アルッキリテ オテラガ アルシー キョ
【郵便】局【の家】が まあ 一番 あるだけで お寺が あるし

シガ トコガ サンメー ウシオザイニ アッタッキリダッ タッペ
清(名)の ところが 三枚 後田に あったきりだったろう。

ー。ダレモ ホカノ シトナンガー タンボノ タノジモ アリヤ
誰も 他の 人などは 田圃の 田の字も ありは

ー シネー。

しぬい。

O ダカラ イマワ ボンモ ショーガツモ ネー ミンナー アレダ
だから 今は 盆も 正月も ない、 皆 あれた

ケド ムカジャ一 ナ モノビッチエバ ウレシカッタンサネー。
けれど 昔は 物日といえは 嬉しかったのさね。

オサンヤサマダトカ ジューニサマダトカ ソノ タッピニ タイ
お三夜様だとか 十二様だとか その 度に

シタ モンジャ ネンサー アズキゲートカ マー スイトンダイ
たいた ものでは ないのさ 小豆粥とか まあ、 水団だよね。

ネー。マー ソーメン カッテ クル。シニカカッタ シトガ ソ
まあ 素麺を 買って くる。死にかかった 人が

ーメン クーグレーサネー。
素麺を 食うぐらいさね。

T ソーダネー。(T.A.K笑)
そうだね。

K ノドエ トーンネーカラカー。、
喉へ 通らないからか？

O ソーサー。
そうさ。

T タマゴガ モー ビョーニンダケダッ タモノネー。ビョーニント
卵が もう 病人だけだったものね。 病人と

アカンボダッ タカネー。
赤ん坊だったかね。

A シトン ビョーキミメーニ クズガ クズノ コレ コノックレー
人の 病氣見舞に 葛が、 葛の これ このくらいの

ノ ヤツニナー マルクッテ コノクレーナ イマノ カンズメグ
ヤツは な、 めくら このくらいのな、 今の 罐詰めぐらいな

レーナ ヤツ。
ヤツ。

T ア クズ コッ テンガ アツ タ ネ。

ああ 葛粉 いろいろの が あったね。

O クズ コッ チュンガ アツ タツ ペ。

葛粉 いろいろの が あったろう。

T チョ ード アノ ボール ガ ミノ チャ ズツ ダ ヨ。

しょうど あの ボール 紙の 茶 筒だよ。

O ソー コレ ニ ヒ キー モツ ダ グ レー ナ ネ。

もう これに 気を 持ったぐらいな【本さの】ね。

A コレ ヨリ フ テ ー ヤ。

これより 太いよ。

O シ。

ん。

A イ マ ノ カ ン ズ メ ダ (〇 ソ ン ナ ヤ ツ ミ ミ) ニ ホ ン カ ー サ ン

今の 罐詰だ, (そんな ヤフ) ニ本が 三本

ボ ン ダ イ ナ ー ビョ ー キ ミ メ ー。

だよな, 病氣見舞【に持っていくのは】。

O サ ン ボ ン コ ー ニ ビョ ー キ ミ メ ー モツ テ ク ル ン。

三本 ころに, 病氣見舞に 持って くるの。

T ダ ツ テ ニ ジュ ー アレ ガ ネ ー ニ ジュ ー ニ ジュ ー ゴ セ ン カ ナ ー。

ども

あれがね

二十五 銭かな。

(^〇笑) ヨ ク カ イ ー ツ タ ヨ ー オ レ ア ラ ー。

よく 買いに 行ったよ 俺は, あれは。

A ビョ ー キ ダ ナ ン テ

病氣だなどヒ

O ソ レ ト サ ト ー オ ネ ー コ ー フ ク ロ ダ ケ ワ デ ー ツ ケ ー フ ク ロ

それヒ 砂 砂糖をね こう 袋だけは 大きい 袋でね,

デネー (↑ ↓) アーユ マツ ミンナ サトーネー クレタダ
(うん。) あいいう せつ 皆、 少糖をね くれたのだ

ッ タイネー ビョーキミメーニ ミンナ。
ったよね、 病気見舞に、 皆。

A ビョーキミメーサ。

病気見舞さ。

O オボエテルヨ。

覚えているよ。

K ソレ ユイツノ ビョーキミメーノ シナモノダ ↓。
それが 唯一の 病気見舞の ^{重1} 品物だ？

O ユイツノ ユイツノ ビョーキミメーサ ↓。
^{重1} ^{重2} 唯一の 病気見舞【の品物文】。

A ソレ ユイツダカラ。
^{重1} ^{重2} それが 唯一だから。

O ソイデ^{xxx} ヨメゴニ クルト ソノ トシマ^一ー 毛^一 セッ キニ
それで 嫁に 来ると その 年は 毛の 季節の終りと
シ⁽⁶⁾ョ チューデネー。
暑中だね。

K ン[↑]。
何だって？

O ヨメゴニ クルトサ^一ー ソノ トシワ ミンナ アノ^一ー シキセ^一ー
嫁に 来るヒサ、 その 年は 皆 あのう 仕着せ、
(↑ ↓) ハルサキワ ホラ ヤマ^一キト 毛モヒキネ^一ー キセテ
(うん。) 春先は ほん 山着と 股引ね 着せて
ソイデ^一 ナツワ マ^一ー ヒトエモノ イチメ^一ー フユワ マ^一ー
それで 夏は まあ 単衣 一枚 冬は まあ

アレダ アワセー キセタモンカーネー。

あれだ、 衾を 着せたものさね。

T ソーダッ タネー。

そうだったね。

O シン ハジメテノ トシダケワ タビ イッ ツォク ゲタ イッ ツォ
ラム、 初めての 年だけは 足袋 一足、 下駄 一足。

ク。 タビ イッ ツォク グレー カッテ モラッ タダケデ オメー
足袋 一足ぐらい 買って もらっただけで おまえ、

ヒトフユジュー ハケルモンジャーネー。

一冬中 穿けるものではない。

注

1. 「オシエタモノ」この部分小声で。
2. 「ハナジ」次のAの発話によって途切られた。
3. 「シー キチョーダッ タネー」発話全体小声で。
4. 「オサンマサマ」お月様をまつる行事。
5. 「ジューニサマ」山の神様。
6. 「セッキニ ショチュー」話者の説明では「セキイショー」と言っている、というこゝである。その意味は暮に正月の着物を買ってくれるこゝ、である。ただし、この後のOの発話を追ってみると、季節の終りと暑中に着るものや身につけるものを買ってくれるこゝの意でも矛盾はない。

8 出稼

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志忍 女 明治40年7月19日生

T 屋野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

T ソノ ジブン デカセギッ テンガ アッ タダイネー。(A ソー ソ
この 時分 出稼というのが あったのだよね。(そう ころ)
ー。) イマデ ユー デカセギガー。
今で 言う 出稼が。

O ソーサーナー。
そさな。

K シン。
さん。

T アン ジブン イチバン フケーキダッ タネー。(A フケーキダッ
あの 時分 一番 不景気だったね。(不景気だったよね)
タイナー。) ムラニ シゴトガ ネンダカラ。
村に 仕事が ないのだから。

A オラガ ホージャ アシオドーガンニ イッ タダ。
俺の 方では 足尾 金山に 行ったのだ。

T ンー。
そうかね。

A ン。アシオドーザン イッタリ ネバザー イ ネバザー ジャ
もんだ。 足尾 銅山に 行ったり 根羽沢(地名)に、 根羽沢では
ネー ナメ ナメザワ。アシオドーザンニワ ナン ナンネンモ
ない、 奈々沢(地名)【に行ったのだ】。 足尾 銅山には 何年も
イッタイ。イカリヤノ ミチサント イッ タイ。
行ったよ。 「カリヤ」の 未知さんと 行ったよ。

T へー。
そうかね。

A ン。アスコニ アル アノ ゲンノーナンガー アシオドーザン
ン あそこに ある あの 玄翁 などは 足尾銅山から
カラ ジーサマ ショッテ キタダ。
じい様が 背負って きたのだ。

O デッケー ~~~~
大きい

T コノ ヤマ コシ タンカイ。
この 山を 越したのかね。

A コノ ヤマ コシ テッタンサー。
この 山を 越していたのさ。

T ンー。
そうかね。

A シニッパグレニ アウヨーニ シテ (ンー) ロクリンパンノ コ
死ぬような 思いをして (ふうん) 六林 到王を
シテッタンサー。
越していたのさ。

K イマノ リンドーノ アスゴノ オクノ (A シー) ロクリンパン
 今の 林道の あそこの 奥の (せうだ) 六林班を
コシテカイ。
 越してかぬ。

A ロクリンパンノ コシテ コーシンザンニ デテ ソイデ ギンザ
 六林班を 越して 庚申山に 出て それで 銀山に
 ンニ デテ。
 出て【行ったのだ】。

K オモニ アシオトカ ソんな コーザンガ オーカッタ ワケダ。
 主に 足尾とか そんな 鉾山が 多かった わけだ。

A コーザンガ オーインサ。
 鉾山が 多いのさ。

O オラガ デーシ ナッテ コンダー コンダ キリュノ ウメダ
 私の 代に なって 今度は、 今度は 相生の 梅田へ
エ カセギニ⁽⁴⁾ オジナンゾ イッタ。
 穢ぎに おじいなどは 行った。

A オラナンザ ムラダッテ セーカツヒニ⁽⁵⁾
 俺などは 村でも 生活費に

O マイトシ イッテ カンノ⁽⁶⁾ ショーワ ニ_{XXX} ニネン イッテ ソイ
 毎年 行って 昭和 二年に 行って それで
デ カラダガ マイツ チャッタ。
 身体が まいってしまった。

T アー ショーワ ニネン。
 ああ 昭和 二年かぬ。

O シン オジー イチネン ミズン ナカデ シゴト シトフユジュ
 シン おじい 一年、 水の 中で 仕事を 一冬中だもの

ーダモノ タマラネーサネー。

たまらぬさね。

I^{ov} ウメダワ ナニニ イッタン。

梅田は 何[の仕事]に行、たの？

A ゴガンコージダツタネー ヒサカタマチー。

護岸工事だったね、 久方町に。

K アー カーラノカー。

ああ 河原のか。

I キ_{xxx} キリュー^ノ (A^ノ) キタノネー。

桐生の (うん) 北のね。

A ソー^ノ ソー キタノ。

うん、そう そう 北の。

I ソー。

そうだったの。

O シマ^ウ シンガー ショワン イクタレ

写真が

A ノコッテルカ シンネーナー。

残っているか しれないな。

O ノコッテルカ シンネーナー。

残っているか しれないな。

I ジャー キリューガワノ ゴガンコージ。

では 桐生側の 護岸工事【だね】。

A ソーダツタイネー。アレガ アレテ トキノ ゴガンコージダツタ。

そうだったよね。 あれが 荒れて、 時の 護岸工事だった。

O ソレガ ナキヤー ウジー ヒーテ ドダツ⁽¹⁹⁾ ヒキダモノネー。

それが なければ 牛を 引いて ぶたっ引きだものね。

T ソーダネー。

もだね。

O ンー。

もっさ。

A ウンソーヒキガ ドタッピキ。

運送引きが

どたっ引き。

O ウンソーヒキガ ドタッピキ。

運送引きが

どたっ引き。

T ソノゴー コツ子ノ サボーコージガ ハジマッタ ラケカネー。

その後

こちらの

砂防工事が

始まった

わけかね?

コノ シガキ⁽¹⁾ノ シガキ シガキダッケ シライワカー。

この

白岩(地名)か?

A シライワ ハー ソー ナッテ クルト ズット アタラシク ナ

白石

もっ

もっ

なっ

くら

ずっ

新しく

ッテ クルナー。

なっ

くらな。

T アタラシク ナッテ クルダネー ショーワン ナッタカラ。

新しく

なっ

くらだね、

昭和に

なったから。

注

1. 「イカリヤ」旅館の屋号。
2. 「ミチサン」人名、未知造の略+さん。
3. 「ロクリンパン」場所名。菅林署がある。
4. 「カセギニ」働きにという意味も含まれている。
5. 「セーカツヒニ」次の〇の発話によって途切られた。
6. 「カンノ」意味不明。
7. 「I」調査者、上野勇。
8. 「ショワン イクタレ」意味不明。
9. 「ドタッピキ」材木の頭に銚のようなものをうちつけて縄で牛に引かせる運送法。「荷の運搬と牛の扱い」の項参照。
10. 「シガキ」話者の説明では平瀧という地名ではないかとのこと。「シガキ」という地名はない。

9 荷の運搬と牛の扱い

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 屋野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O アサマドノ ナニ カシラナシカー アスコノ オテラノ ジシヨ
 浅間戸(地名)の 何だっけ、 頭無(場所名)が、 あそこの お寺の 地所は
 イマ アレカー ダレガ ツクッテル。インヤナンゾガ ツクッ
 今 あれが 誰が 作っている。 石屋などが
 テルンカ。アノー カジューオケノ⁽¹⁾ アノ ワキー キョクノ カ
 作っているのか。 あの 架魚桶の あの 脇に 【郵便】局の
 ラマツダツケカ デーッケーガ アツタイネー アレー キッテ
 唐松だっけか 大きいのが あったよね、 あれを 切って
 ソイテ オジ_{xxxx} オヤジガ ダスッチュッタクド オレガーニ コー
 それで 親父が 出すと言ったけれど 私に こう
 カター アガンネーダイ。コドモガ ネーカラ ヤダ (A オテラ
 肩に 上がらないのだよ。 子供が ないから いやだ、 (お寺の
 ノ カラマツダツタッペー。) ヤダッテ オーダッテ イガナクチャ
 唐松だったろう。) いやでも おうども 行かなくては

ナンネー。ソイデ キッ チャー オヤジガ ココ アゲテ クレ チャー
 ならない。それで 切っは 親父が ここに 上げて くれては
 ー テメーデ アトカラ イッ チャー モッテ チャー ウンソー
 自分で 後から 行っては 持って行っては 運送に
 エ ツケ タダイ。(Kシー) ソナ オモイ シタ (0 笑)。
 付けたのだよ。(そかぬ) そんな 思いを した。

K ウンソー ア ウンソーガ デテ カラ ダイブ アレ カー。
 運送, あ, 運送が 出てから だいつ あれか?

A ハー ウンソーガ デテ カラ ダイブ ヨク ナッタ。ソレ メ
 もう 運送が 出てから だいつ 良くなった。その 前は
 ー ワ ミンナー ジゴロ デ ヒク トカ ドタッ ピキサ ー。
 皆 「ジゴロ」ぞ 引くとか びたっ引きさ。

I ⁽³⁾ ドタッ ピキ ッ テナー。
 ドタッピキ というのは【どういうやり方で引くの】?

A ウシノ セナカ ケツイ アノ ー ドッ コイ ッ チューノ イッ ツケ
 牛の 背中, 穴に あのう 「ドッコイ」というのを 縫いつけ
トイテ ソイデ ナワ イレテ アノ カス カス ゲー ミテ ナー ノ
 ておいて それで 縄を 入れて あの 金送のようなものを
コー イニ ブッ テネ ソイデ ヒク ン。
 こういふ風に 打ち込んでね, それで 引くの。

I ン。
 なるほど。

A ソイデ ジョ ート ダッ ダ。(5) ジョ ース ン ナッ テ ハナ ゾ リッ チュー
 それで 上等だった。上手に なって 端櫃 っていうのを
ノ シテ ソイデ ヒク ヨー ニ シタ ダッ ダ。ホッ カ イ ド ー ナン ゾ
 して それで 引くように したのだった。北海道など

デワ¹⁶⁾ コナイダマデ ソレ ヤッタ ワケダイネー。ユナイダ リョ
では この間まど それを やった わけだよね。 この間

コーニ イッタ トキ ホッ カイドー ミンナ ソレ ヤルダッ タ
旅行に 行った 時 北海道は 皆 それを やるのだと高
ッケー。カガッテ アッ タッケー。カイコン トキノ アレダナン
たっけ。 飾って あったっけ。 開墾の 時の あれだまじと。

テ。ハナゾリッテ キーサー ソリサネー。ソコエ アノ ハナダ
端機^機というのは ふさい 機^機さね。 モニハ あの、 端だけ

ケ アゲトイテ ソイデ アトワ スルズル ズルズル (クウンマ
上げておいて それで あとは ズルズル ズルズル (馬が
が ヒーテグ) ウンマデモ ウシデモ ヒーテ ウンマダイネー
引いていく【のか】?) 馬でも 牛でも 引いて、 馬だよね

ホッ カイドーワネー。オラ ホーウ ウシデ ヒータン。ソーデネ
北海道はね。 俺の オは 牛で 引いたの。 そうでない

ー トキチャー タダノ ドタッピキサー。キマワジ^mツチャーノ イ
時は ただの どたっ引きさ。 キマワジ ヒラうものを

クツモ ツケトイテ ソイデ ナンボンモ。アー ソシチャー 又
いくつも 付けておいて それで 何本も【引いた】。 そうしては

ケチャー ウシガ トビダシテサー (I.A 笑)。
抜けるは 牛が 脱臼出してま。

K ガイモク オイテ キチマウヨーダ 又ケテテ。
材木を 置いて きてしまうようだ 抜け出る。

A オイテ クルヨーダ 又ケチャー オイテ クル (I.K 笑) ソース
置いて くるようだ 抜けるは 置いて くる そうするほど

ルダー マター ウシー トツツカマエチャー アレダー マター
また 牛を とっ掴まえては あれだ また

ヒッパッテ キチャー。

引っぱって きては。

T アノ ウシワ マダ カイリョー シテ ナカッタロ。アノ ジブ
あの 牛は まだ 改良 して なかったろう。あの 時分の

シノ ウシワ ツオカッ タイネー (A ツイー。) ツノノ イー ツフ
牛は 強かったよね (強い。) 角の、 良い 角を

ー モッチャッ テネー。

持っていてね。

O シー ツノ モッ テネー。

うん、 角を 持ってね。

T アノ ウーチャ⁽⁹⁾ンチノ タメサクサンガ コノ ウエデ⁽⁹⁾ ウシニ
あの、 卵ちゃんの家⁽⁹⁾の 為作さんが この 上で 牛に

アノー カベツトン トコロ オジツケラレチャッ テネー。

あいう 壁のある場所の 所で 押しつけられてしまってね。

A ソーダ ソーダ。

そだ そだ。

T コノ (A チョーセンウシダッ タケドナー。) エー シ⁽⁹⁾ チョーセンウ
この (朝鮮牛だったけれどな。) え【何とまった?】うん、朝鮮牛

シ イー デッカイ ウシダッ タネー。

XXXX

良い、 大きい 牛だったね。

A デッカイ ウシダッ ター。チカラガ アッタイ。

大きい 牛だったよ。 カガ あったよ。

O イー ヨク ウウシニ ツキトバサレタダヨネー。

XXXX

よく 牛に 突き飛ばされたのだよね。

T ツキトバサレタネー。

突き飛ばされたね。

O マーッタク。

まったく。

T デモ ウシッテモ ニンゲンノ セーカ アノー スコーン アノ
でも 牛といっても 人間の 所為か あのう 少し あのう
- エサー クレルト カゲン スンダカ ツノト ツノノ アイ
餌を やると 加減を するのだが 角と 角の

ダイ ハサンジャ ンダネー。

間へ 挟んでしまうのだね。

A ンー↓。

もうそう。

I ン↓。

うん。

T ツノワ カケナイスヨ⁽¹⁰⁾。

角は 掛けないです。

A ツノワ カケナイ。

角は 掛けない。

I ココロエテル。

心得ている。

T エ⁽¹¹⁾ソレダケ カン_{xxxx} カンガエテンダ ムコーモネー。アレ ツノ
ええ、それだけ 考えているのだ むこうもね。 あれ 角で

デ ヤラレタラ イッパツダネー。

やられたら 一発だね。

A ン↓ イッパツダ。

うん、一発だ。

O アノ デッケー アタマデ オシツケルノ イデーヤネー (↑イテ
あの 大きい 頭で 押しつけるのは 痛いやね (痛い。)

一.) ツノデ¹²⁾ ネーッ¹²⁾ タッ¹²⁾ テ. サッ¹²⁾ キリ シニ ノブガ¹²⁾ コーニ ア
 角で なくとも . さくきりを しに のぶが¹²⁾ こうに
 トカラ イグッ¹²⁾ チュー¹²⁾ ト リコーダ¹²⁾ カラ¹²⁾ ネー¹²⁾ ナニモ¹²⁾ ネー¹²⁾ トコ
 後から 行くというし 利口だからね 何も ない ところでは
 ジャ シネー¹²⁾ ケド¹²⁾ コ¹²⁾ コンナ¹²⁾ デッ¹²⁾ ケー¹²⁾ クワノ¹²⁾ キガ¹²⁾ アル¹²⁾ ト
 しないけれど¹²⁾ こんな¹²⁾ 大きな¹²⁾ 桑の木が¹²⁾ ある¹²⁾
 コエ ハ クワノ¹²⁾ キガ¹²⁾ アル¹²⁾ トコエ イグナー¹²⁾ ット¹²⁾ オモー¹²⁾ ッ¹²⁾ チュ
 ところへ、もう 桑の木が¹²⁾ ある¹²⁾ ところへ 行くなと 思うというし
 ート モー¹²⁾ コー¹²⁾ ヤッ¹²⁾ テ ツノ¹²⁾ モッ¹²⁾ テ クル¹²⁾ ダ。アーノ¹²⁾ カ
 もう こう やって 角を 持って くるのだ。 あの
 ラサワノ¹²⁾ ハタ¹²⁾ ケー¹²⁾ イグ¹²⁾ トキ¹²⁾ メー¹²⁾ ノ¹²⁾ エー¹²⁾ トモガ¹²⁾ コー¹²⁾
 唐沢(地名)の 畑に 行く とき 前の 日に 友が¹²⁾ こう
 ヒッ¹²⁾ ヒッ¹²⁾ パッ¹²⁾ テ アル¹²⁾ ッ¹²⁾ タラ¹²⁾ オッ¹²⁾ カナ¹²⁾ カッ¹²⁾ タダ¹²⁾ ト ダカラ¹²⁾ ア
 引っはって 歩いたら 恐ろしかったのだから、 だから
 シター¹²⁾ シネー¹²⁾ ッ¹²⁾ テ トモガ¹²⁾ ナク¹²⁾ ンデ¹²⁾ ソイ¹²⁾ ジャー¹²⁾ カー¹²⁾ チャン
 明日は しないし 友が 泣くので それでは 母ちゃんが、
 ガ¹²⁾ ダカラ¹²⁾ シュ¹²⁾ -ガ¹²⁾ ネー¹²⁾ コー¹²⁾ ニ ニ¹²⁾ グラ¹²⁾ ノ マン¹²⁾ ナカ¹²⁾ エ コー
 だから しかたがない こうに 荷鞆の 真中に こうに
 ニ ロッ¹²⁾ プ¹²⁾ ハサ¹²⁾ ンドイ¹²⁾ テ¹²⁾ ネー¹²⁾ キノ¹²⁾ トコ¹²⁾ エ イ¹²⁾ キソ¹²⁾ ーン¹²⁾ ナル
 ロープを 挟んでおいてね 木の ところへ 行きそうに なるし
 ト アト¹²⁾ カラ¹²⁾ オシ¹²⁾ テグ¹²⁾ シト¹²⁾ ガ ノブ¹²⁾ ガ¹²⁾ グー¹²⁾ ット¹²⁾ コー¹²⁾ ニ ト
 後から 押していく 人が、 のぶが¹²⁾ グー¹²⁾ ッヒ¹²⁾ こうに
 クン¹²⁾ ソー¹²⁾ シナ¹²⁾ ケリ¹²⁾ ヤー¹²⁾ アタ¹²⁾ マー¹²⁾ グー¹²⁾ ット¹²⁾ モッ¹²⁾ テ クル¹²⁾ ン
 引くの。 そう しないければ【牛が】頭を グー¹²⁾ ッヒ¹²⁾ 持って くるのだ。
 ダ。 マー¹²⁾ ズ¹²⁾ ロク¹²⁾ デ¹²⁾ ネー¹²⁾ ウシ¹²⁾ サ¹²⁾ ネー¹²⁾ ソー¹²⁾ ユ¹²⁾ ホ¹²⁾ ホー¹²⁾ ガ ツイ
 ます るくでもない 牛さね。 そういう 方が

ー ンダイネー ー ロクテネー (0 笑) ホーガ⁽⁵⁾。
強いのだよね、 ろくでもない 方が。

T 今カラ アルンダヨ。
カが あるのだよ

A 今カラワ アルンダ。
カは あるのだ。

K へー コドモガ バカニ スルンサーネー⁽⁶⁾。
なに 子供が 馬鹿に するのさね。

T バカニ スラーネー。
馬鹿に するよね。

A バカニ スルン。
馬鹿に するの。

T シトオ ミルヨ。
人を 見るよ。

K シン。
ん。

注

1. 「カジューオケ」屋号。
2. 「ジゴロデ ヒク」木を輪に切つて猫車で運ぶ。この前の運搬法は「ジグルマ」で、これは盾に縄をかけて引く方法であった。
3. 「」調査者上野勇。
4. 「ドッコイ」横棒。
5. 「ジョートダッタ」 [dʒo:tó datta]。[t] の発音は、破裂の後の気音がめだつ。
6. 「デワ」「デ」の発音の子音部では破裂がほとんどなく、舌先と歯茎との間の狭めがあるだけである。
7. 「キマワシ」木に打ち込む管。ハーケンのようなもの。
8. 「ウーチャン」人名卯作の略+ちゃん
9. 「カベツト」壁のある所。「何々の所」を「〜ツト」という。
10. 「カケナイスヨ」外来者であるIに対して話している。丁寧意識から「デス」の縮約形「ス」を使っている。
11. 「エ」応答詞「エ」は共通語的、これもやはりIに対する丁寧意識による。
12. 「ノブ」人名のぶ。
13. 「トモ」人名、友子の略。
14. 「グーット」擬声語。カをこめて発話。
15. 「ホーガ」この部分笑いながら。
16. 「コドモガ バカニ スルンサーネー」子供を牛が馬鹿にするという内容の発話になるべきところ。

10 狼

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O マーズ ムカシー メージ アノ 千ドリノ オジーンゾガ ホ
ます 昔、 明治、 あの 千鳥(地名)の おじいなどが
ラ メージ ガンネンダケード アノ オジーンゾガ ワケーシ
ほら 明治 元年【の生まれ】だけねど あの おじいなどが 若い
ノ ジブンワ オーカミガ ウーント イタダッ チューモノネー。
時分は 狼が たくさん いたのだというものね。

A オーカミガ イタ。
狼が いた。

K シー。
ふん。

T シー。
ふん。

A ソリヤー ウーント イタッ チッ タイナー。
それは たくさん いたと言ったよな。

O ウーント イタダッ チッ タヨー。(↑ハー) ツイデ イマノ タミ
たえん いたのだといたよ。(へえ) それで 今の、

ゾーガ ウチノ ヒーオジー
民蔵の 家の 會おじい

K オーカミヨカ イノジシガ デタジャ ネン。
狼よりか 猪が 出たのでは ないのか?

O ヒーオジーガ (A オーカミモ イタシ イノジシモ イタサ) アタリ
會おじいが (狼も いたし 猪も いたさ。) あたり

ガネ ホラ (A アスコニ イマ トヤマニ アルノガ ミンナ イ
がね ほら (あそこ、 今 深山に あるのが 皆 猪)

ノジシ ~~~~~.) オイガミノ シンジュバヤシッ チュ (K ~~~~~ シンマイッ
老神【地名】の 心中林という (

チュンガ アルネー.) アレガ ソーダッ チュケドサー (A アレガ
というのが あるね。) あれが そうだというけれどさ (あれが

ミンナ ~~~~~ シンマイ.) アスコデ シンジュ シタダッ チュケド ソレ
皆) あそこで 心中 したのだというけれど それを

オ ヒラガーデーヒラガーデーガ ミンナ カツイデ クルダッ タッ
xxxxxxx
平川の連中 平川の連中が 皆 担いで くるのだった

チューケドネー (↑ン) オーカミガ デテ モー ヒドカッ タッ チュ
というけれどね (そうかね。) 狼が 出て もう いじかったというよ。

ーヨ。 オッカナクッテ ミーンナ サキー タツンモ ヤダシ ア
こめくて 皆 先に 立つのも いやだし

トエ タツ タツンモ ヤデ^{xxxx} ミンナーナ ゴチョ ゴチョ ゴチョ ゴ
後に 立つ、 立つのも いやで 皆 ごちよ ごちよ ごちよ

チョ ゴチョ ゴチョト フターリオ カツイデ クルダッ タッ チー
ごちよ ごちよ ごちよと 二人を 担いで くるのだったというけれど

ケド (↑シ↓) オッソロシカッ タッ チュッタ オッカナクッテ。
(うん。) 恐ろしかったといた、 こめて。

A オーカミワ アンマリ イテ ドーショ モネーチューデ ソイデ
狼は あまり いて びょうしようもないというので、 それで
メージ ナンネンダッ ケナニ (0 テー—ンデ) ドク— クレタダッ
明治 何年だったに (てんで) 毒を やったのだらう。
ペ。ソイデ ミンナ シニ
それで 皆 死に絶えてしまった。

O オイガミカラ カツイデ キタラ ココノ ハー キョクノ ハカ
老神から 担いで きたら ここの 【郵便】局の 墓場の
バノ アスコン トコニ ウオン ウオン ウオン イテ ココ
あそこの ところに ウオン ウオン ウオンヒ いて ここを
ノボッタラ マタ イテ ホイデ イシガミサカ イッタラ イ
登ったら また いて それで 石神土坂(坂の名前)に行ったら
テ アレダッタモンネー ズーット コザカ イッタラ イテ イ
いて あれだったものね ずっと、 小坂(地名)に行ったら いて
マノ チ 千ドリノ メーノ アノ オンメサマン トコ アソコ
今の 千鳥の 前の あの お神明様の ところ、 あそこ
マデ イタ ツツイテ キタッ チューモノ。(↑オーカミガッ。)
まで いた、 付いて またというもの。(狼ががね?)

デ トート ロクシヤ ホントニ ロクシヤクモ ホッテ イケタ
それで とうとう 本当に 六尺も 掘って 埋めた

ッチケド トートー ホリダシタッ チューネー。(↑シ↓) モー イ
ヒいたけぬじ とうとう 掘り出したというね。(うん。) もう

ッタン ツカレタラ ドーユーニ シテモ トッテ クーッ チュー
一度 付かれたら どのように しても 取って 食うというぬ。

ネー。(↑ハ一 オクリオーカミッテ キータネー。) マーズ オッ
(ハえ、 送り狼七いづのを 聞いた【ヒガある】ね。) ます

カナカッ タッ チューヨー ジューゴロクダッ チッ タナー。

こわかったヒいうよ。

十五・六だといったな。

A ソコノ マサルクソノ イドソ ナケー オーカミガ オッテ ソ
そこの 優君の 井戸の中へ 狼が 落ちて
ンデ モサブローサンチ シトガ ハシゴ カケテ アゲテ クレ
それで 茂三郎さんという 人が 梯子を 掛けて 上げて やったら
タラ ソノ オレーニ シカオ オイテッ タナンテ ソンナ コト
その おれに 鹿を 置いていったなどヒいう そんな ことを
イッ タッ ケ。
言ったっけ。

K ソンナ ハナシガ ソンナ ハナシガ アルダ。
そんな 話か、 そんな 話か あるのだ？

A アルヨー アスゴニ イマデモ ツリイドガ
あるよ あそこに 今でも 釣り井戸が

O マサルサンノ ウラニ。
優さんの 裏に。

T シ ツリイド アル。
うん、 釣り井戸が ある。

A アレー オーカミ サラゲオチテ (↑ハ一)ソイデ アガレネーテ
おれに 狼が 落ちて (ハえ。) それで 上がれないで、
ニシマア アガレネーゲダーチューテ ハシゴー カケテ クレ
おまえは 上がれないようだヒいうので 梯子を 掛けて やったよ。
ター。ソシテ ソノ オレーニ シカー オイテッ タナンテ。^{*}
そして その おれに 鹿を 置いていったなどヒ。

T シー、シカモ イタソーダネー ココワ。
そらがね。 鹿も いたそらだね ここは。

A シカモ イタヨ。
鹿も いたよ。

I オボエテッカラ イマシタカ。
覚えてから いましたか？

A イマダッテ イルバー イックラデモ イルテ。
今でも いるだろう いくらでも いるよ。

I シカガ。
鹿が？

A ン ン。
うん うん。

T コノゴロ フエタンダネー アレネー。(A コノゴロ) キンリョー
この頃 増えたのだね あれね。(この頃) 禁獵,
キンリョー ナッテ。
禁獵に なって。

I ン。
そらがね。

A キンリョー ナッテ フエテ コンド オキノ ホーエ ジョソー
禁獵に なって 増えて、 今度 沖の オへ 除草剤を
ガイ マイタッペー。(I ン。) ソイテ ササ カラシチャッタ
撒いたろう。(うん。) もれて 笹を 枯らしてしまつた
モンダカラ ミンナ トマエ デテ キチャッタ。
ものだから 皆 [谷の]入口に 出て きてしまつた。

注

1. 「メージ ナンネンダッケナニ」 「ナ」は日、年を表わす語につく接尾辞。
2. 「ウォン」擬声語。
3. 「オキ」 奥の意。
4. 「トマ」 出入口の意。

11 配給と兵役

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林文志急 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O イマ- テーラテ ヤルケド アノ ジブンワ クミガシラダケテ
 今は 平等に やるけれども あの 時分は 組頭 だけで
 ヤルカラ ケツ キョク ソノ アレダッペ センキョ シタラ
 やるから 結局 あれだろう、選挙をしたら
 ソノ シトツキリニ コー ナッ チャウンサーネー。
 その 人きりに なってしまうのさね。

A クミガシラデ キメルカラ。
 組頭で 決めるから。

O クミガシラデ キメチャー シチマッタ。
 組頭で 決めては してしまった。

K ダカラ マーリノ シトワ ダマッテリヤ ヨカッタカラ スミヨ
 だから まわりの 人は 黙っていれば よかったから 住み良
 カッタ ダッペネー。
 かった、だろうねえ。

T ナニカ イエバ アタマ オサエチャッタ。
何が 言えは 頭を 押さえてしまった。

O ソーゼツタイフクジューダッタヨネー。 コメが キタッテ ク
うん、絶対服従だったよねえ。 米が 来たって
ミガシラが ハイキュースルダモノネー。
組頭が 配給するのだからねえ。

T ソーダネー。
そうだねえ。

A センソートージワナー。
戦争当時はなあ。

O ヒデー コトダッタデ。
ひどい ことだったよ。

K (笑いながら) ヒーデー⁽¹⁾ コトダッタ。
ひどい ことだった。

O ソイデ^T (ヒデー コトダッタナー) テーラニ アノー コメ
それ^{アッパ}で あれだろう (ひどい ことだったなあ。) 平らに 米
ハカルニ クボッタク カキオトセバ ヨーク ミテテ ヒト
を 計るのに 低く 掻き落せば よく 見ていて、^ヒ
ツカミダッテ ホジーダカラネー。 ハイキュー。 ハーゾーナ
掴みだって 欲しいのだからねえ。 配給[米]を。

ニ クニマツツァンガ クボーク ハカッタ ナンテ (皆笑)。イ^{xx}
国松さんが 低く 計った なんて。

マデモ^{xx xx xx} イマデモ イカリノ トモチャンガ クニマツツァンガ
今でも いかりや(屋号)の 七め(人名)ちゃんが 国松さんが

ハイキューメーオ^{xx} コ⁽²⁾ アノ コーニ クボーク ハカッタナンテ。⁽³⁾
配給米を こうに 低く 計ったなんて。

アノー ク⁽⁴⁾ボーク ハカッテ ニ⁽⁴⁾ショー ハカリダスノニ ドコ
低く 針って ニ升 針り出すのに どう

ヤッ⁽⁴⁾タッパ。

やったろう。

K モットモ⁽⁴⁾ネー ト⁽⁴⁾キノ ト⁽⁴⁾キダカラネー ヒ⁽⁴⁾トツツブダッテ ホ
もっとも、無い 時だからねえ、 一粒だって 本

ントニ シンケンダッタ。

当に 真 剣だった。

T ソノ クレーニ シネート アノー タンナカッタ⁽⁴⁾ンダヨ。

その 位に しないヒ 足りなかったのだよ。

A タリネンダヨ。

足りないのだよ。

O ニ⁽⁴⁾ニ⁽⁴⁾ショー ハカリダスノニ ドコ ヤッ⁽⁴⁾タッ⁽⁴⁾ペッテ ユーカラ
ニ升 針り出すのに どう やったろうと 言うから

オラ⁽⁵⁾ンダ モロー ケンリワ ネンダカラ タンボ ツクッテ

私などは 貴ラ 権利は 無いのだから 団圓をつかって

ルカラ ジブンデ⁽⁶⁾ トリマ⁽⁶⁾ーシネー。トコロガ アノー ミヤ⁽⁶⁾ショ
いるから 自分で 取りはしない。 ところが 「密の背死

ー⁽⁷⁾ノ ホラ ショー⁽⁷⁾ラガ アスケー キ⁽⁷⁾テタノニ ソイツオ キョ
の 正しが あそこへ 来ていたのに それを、 局

クデ⁽⁹⁾ ク⁽⁹⁾チョーデ トメサンニヤ⁽¹⁰⁾ー ヤン⁽¹⁰⁾ネーデ クレ⁽¹⁰⁾ッ⁽¹⁰⁾チュ
で 区長で 止さんには やらないで くれという

オコトワリダカラ ウ⁽¹¹⁾シオザイウチガ ツ⁽¹¹⁾ アノー アレ シ⁽¹¹⁾タダ
お断りだから 後田の家が あれをした

カラ ヤン⁽¹²⁾ネーデクレ。コ⁽¹²⁾コ キ⁽¹²⁾タベ⁽¹²⁾ーダカラ ヤン⁽¹²⁾ナク⁽¹²⁾ッ⁽¹²⁾チャナ
から やらないでくれ。 こへ 来たはかりだから やらなくて は な

ンネー。オラガ シーサマモ ハラニ アツタカラ シカターネー
らない。 私の じい様も 腹に あったから 仕方がない

テメーノ タナコダカラ トモジーサマニ⁽¹¹⁾ ニジョー ヤンナク
自分の 店子だから 友いさまに ニ升 やらなく
ッチャ ナンネーカラ クボ クボッタッテ⁽¹²⁾ ミンナ ハカルンサ
ては ならないから 低い 低いと言ったって みんな 計るのさ。

(笑)。ソイデ ハカリダシタノオ ミマノ ショザイ ヤッタン
それで 計り出したのを 「寝の 背戸」に やったの
サ。ソシタラ イカリノ⁽¹³⁾ オバーガ クニマツツァンノ アノ ハ
さ もしたら 川が【マ】のおばあが 国 松さんの あの 計
カリダシタノ ドコ ヤッタッペ (0笑)。ヤンナッチャワイネー。
り出したの を どこへ やったろう。 いやになってしまうよねえ。

ク マー エライ トキダ^{x x x x} トキダッペカラネー。マ チョード キョ
哉 たいはん な 時だるうからねえ。 ま、ちょうビ 今日
ーガ ソノ⁽¹⁾ キネンビダネー。⁽¹⁴⁾ ハイセンキネンビダ。
が その (記念日だねえ。) 敗戦記念日だ。

イ イー ハナジニ ナッテキタジヤナイ。
いい 話に 「なってきたではないか」。

0 ソーデ コツツァ⁽¹⁵⁾ シューセン ナッテカラ コツツァイ⁽¹⁶⁾ イリヨ
それで こんどは 終戦【に】 なるから こんどは 衣料
ーガ ハイキューダナー。ソーデ コッター。
が 配給 だなあ。それで こんどは。

ト アントキノ カネデ アイデ コマシカラ ナニカラデ ハチジュ
あの時の 金で あれで 肥しから 何からで ハ+

ーナンエン オレンチワ モラウマエ ミンナ タテカエタラシー
何円 俺の家は 貰う前に すべて 立て替えたらしい

ヨ (苦笑)。ホラ ウシダ⁽¹⁷⁾ フキワリジツ コークミアイテ⁽¹⁷⁾ サ モ
↓。 ほら 吹割 実行 組合 で さ 森

リヤマト ウシロダ⁽¹⁸⁾ ヤツ ヤツ タッ ペ。 ソデ アノ ソント
山此島比 後田 を ヤツが ヤつたろう。 それで その時

キ タテ カイト イテ アレ ガ アノ カ グ ソノ カネ モ ラ ワ
は 立て 替えておいて 俺が その 金を 貰ゆ

ナ カ ツ タ。 ソレ ミ ジ ユ ー ガ ハ チ ジ ユ ー ナ ン エ ン ダ カ ヒ ヤ ク ニ
な かった。 それ 末 4X が ハ + 何 円 だか 百ニ +

ジ ユ ー エ ン ア ツ タ ヨ。

円 あつたよ。

A タイ キン ダ ー。

大金だよ。

T タイ キン ダ ー。 アノ ジ ブ ン ダ ラ ネ ー。

大金だよ。あの 時分 ならぬ。

K ソ ー ダ ネ ー。

そうだよ。

O ン デ ケ ツ キ ヨ ク オ ー ビ キ ク シ ョ ー ノ テ ー ガ ホ ラ トル モン
それで 結局 大 名 姓 の 連中が 取るもの

ダ カ ラ チ ー ガ ナ ク ダ ツ タ ヨ ナ ー。 ダ ケ ド ケ ン ガ デ キ ル ト
だから チーが 泣くのだったよね。 だけれど 俺が できる

キ ダ デ オ ラ モ ハ ダ ギ ガ ホ ジ ー ダ ッ ペ ー チ ユ ン デ ア カ ッ コ ノ
時だから 私も 肌着が 欲しい だろう というので 赤子の

ハ ダ ギ ー ヤ ツ タ。 ソ ー ジ タ ラ オ ラ ガ ト コ デ ナ ニ ト ツ タ
肌着を やつた。 そうしたら 私の 所で 何か 取った

ダ ツ テ ユ ー カ ラ モ モ ヒ キ ダ ッ ケ ナ ニ カ ト ツ タ。 ア ニ サ ン ナ
の だ"ヒ" いうから、 股 辺 だけ 何かを 取った。 兄さん

ソガ デメーデモ ヨクー カイテ (0 笑) 。ダッテ ミンナーノ
などは 自分でも 欲を かいて 。 だって 皆の

ジョーダクノ モトニ トルダカラ シカタガネンサネー。

承 諾 の もとに 取るのだから 仕方がないのさね。

A ウント オービャクジョーダッテ ダイブ トッ タダモノ。
うんこ 大 白 姓 ども 取ったのたもの。

O マーズ ヒドカッタサ。
まが ひどかったさ。

K ナニワトモアレ イチバン ワリー トキダッ タダンネー。(21) ソント
何は ともあれ 一番 悪い 時だった だからね。 その
キヤーネー。
時は ね。

A ワリー トキダッ タサ。(22)
悪い 時だったさ。

O ソイデ イッコー シャーネーデ オラガッチワ ヘータイ デネ
それで 全然 知らないで 私の 家は 兵隊に 出
一カラ ヘータイ デネーカラッテ モリヤマデーガ キタノー
ないから 兵隊に 出ないからといって 森 山の 連中が 来たのを

ミーンナ ヒトセン ウント ジョッタシ。ソジタラ コット タ
ひとがっぎ 多く 背負ったの。 そうしたら 今度 反

ソベツニ オイテクル トキニ ナッタラ オラガ ウチワ グー
別に 置いてくる 時に ならたら 私の 家は ぐっと

ット スクナカッタ。バカッタラジー。ズーイブン オラー ホー
少なかった。 馬鹿馬鹿しい。 ずいぶん 私は 奉公

コー シタダゾ。(23)

したよ。

A トミチャンチダ⁽²⁴⁾ ヒデー メニ アッタサナー。メンセキガ モ
富ちゃんの家などは 広い 目に あったさな。面積が
ッテタカラナー。⁽²⁵⁾
持っていたからな。

T メンセキガ アッタカラネー。⁽²⁶⁾
面積が あったからね。

A トミチャン キョクガ ヒデー ~~~~~。
富ちゃん【それに】局が 広い 【目にあつた】。

T ツクル⁽²⁷⁾ シトガ ネンダカラ。
作る 人が ないのだから。

A ソーン ツクル シトガ ネンダ。
そうそう 作る 人が ないのだ。

O コンダ タンベツ スュー トキニャー コンダ ソー ナツタン
今度は 反別に する ときには 今度は ぞろ になったの
サネー。
さね。

A ソイデ ヤダッ チュテ ヤクバデ ヤッテクレッ チュテ ヤクバデ
それで いやだといふので 役場で やってくれといふので 役場で
ヤッテ ヨコッタラ ナーニ コンダ オラナンダ
やって よこしたら 何というこが 今度は 俺などは

O コンダ オラー ウーント スクナク ナツタ。ンデ コッター
今度は 私【の家】は 非常に 少なくなつた。それで 今度は

キョクデ ダセネッテッテ オレガ イバツテ キョクチョーガ
局で 出せないといふので 私が いばつて 局長が

リョーテオ ツイテ タノメバ オレガ ダスツチュエーデ イバッ
両手を ついて 頼めば 私が 出すといふので いばつた。

夕。ソシタ⁽²⁹⁾ キョ_{xxx} キュイヨシチャ⁽³⁰⁾ンダ トシ_{xxx}ア トシ_{xxx}アキジャネ。
もうしたら 清ちゃんだ 利明(人名)ではない

ー ミツガ⁽³¹⁾ キテ マー キョ_{xxx} フ_{xxx}チョーガ フトン カブッテ コ
光が 来て まあ 局長が ふんかぶって

ーサン シテルダカラ カンベンシテ ダシテ クンネーケー。ソ⁽³²⁾
降参 しているのだから 益か争して 出して くないかい。

ージマ⁽³³⁾ー アンマリ ジューク_{xxx}ーベ_{xxx}ー コクカラ キョ_{xxx} フ_{xxx}チョーガ
そうしたら あまり 文句ばかり 言うから 局長が

リョーテ_{xxx}ー ツイテ オネガイシマ_{xxx}スツテ イエバ マメ_{xxx}ー ハ
面手を ついて お願ひしますと 言えば 米を

ンタラ_{xxx} ミツガ ハンタラ オラガ ハンタラ ダセバ オツツク
光が 半俵 私が 半俵 出せば おいづく

ワケデ ソレデ オレガ キョ_{xxx} フ_{xxx}チョーガ コーサン シレバ ダ
わけで、 それで 私が 局長が 降参 すれば

シテ クレルッテ ユツタン。
出して やると 言ったの。

A ヤマカー ハタケー モッテッテ イッコ_{xxx}ー ツクンネーダカラ。
山も 畑も 持っていて 全然 作らないのだから。

O ウーント キダンサ。
たくん 来たのさ。

T ヨーイジャーナカッタネ⁽³⁴⁾ー。
容易では なかったねえ。

A ソノ⁽³⁵⁾ メー キョクワ ヒ_{xxx}デー_{xxx} ウマク ヤツタンサナー。
その 前に 局は うまく やったのさな。

O イッコ_{xxx}ー ダサズニ イタンダモノ。
まあ 出さないで いたのだから。

A イッコー ホケン ダシモシネーデ ソレデ アレ シタダカラ。
 まったく 保険を 出しもしないで それで あれ したのだから。
 メンセキガ アッテ。ミンナガ ソノカーシ ヒデー メニ アッ
 面積が あって。皆が その変わり ひびい 目に あった。
 タ。コンダ ヤクバデ マーッテ クレル ヨーン ナツタラ イ
 今度は 役場で 廻って くれる 様に なったら
 ッコー セワーネー。テメーノ ブンダケ ダセバ アトワ シラ
 まったく 世話がない。自分の 分だけ 出せば あとは 知らん
 ーン カオシテ ヤミー ウットバシテ。
 顔して 聞に 売りとばして。

T ソーダッタネー。
 そうだったねえ。

A マーズ ヒドカッタサー。ウーント ダセーッテ。
 まず ひどかったさ。たくさん 出せと。

T オレ ニジューイチネンマデ ソーイコト シラナカッタ。ジュー
 俺は 二十一年まで そういうことを 知らなかった。十
 ゴネンカラ ニジューイチネンマデ シラナカッタカラ。
 五年から 二十一年まで 知らなかったから。

I ドコ イッテマシタ。
 どこへ 行ってました。

T エー チュー_{x x x x} チューシー ハイッテ ジューゴネンマデ チュー
 えーと 中支へ 入って、十五年まで 中
 シ ハイッテ チューシカラ タイワン ナンシ フツイン シマ
 支へ 入って 中支から 台湾、南支 仏印 シム
 ム (I ⁽³⁶⁾ン) アノ ビルマノ アノー ヨシエサンノ オトート
 ビルマの ほう、よ志五(人名)さんの 弟の

ノ キューヤサンカー。(^クアー) キューヤサン ナクナツタ ジ
久 弥さんが。 久 弥さんが なくなった

ブンニ オレガ フツ アノー タイメンコッキョー コジテ ビ
時分に 俺が ^{××××} タイ面 国境を 越して ビ

ルマ オーエンニ イグ ワケダッタンダヨ。

ルマに 応援に 行く わけだったのだよ。

0 イガネーデ スンダンダ。

行かないで 済んだのだね。

T ソイデ イグ トチューデ アノ オラナンド アノ サキノ レ
とれで 行く 途中で 俺なぞ 先の

ンチューガネー ホリョー シューヨースル ニジューゴマングレ
連中がね 捕虜を 収容する、二十五万ぐらい

ー シューヨースル ⁽³⁷⁾ シューヨージョ ツクッタワケダ。ソコエ
収容する 収容所を 作ったわけだ。そこへ

イッテ シューセン ナツタ。ソノ ユーグンノ ツクッタ シュ
行って 終戦に なった。その 友軍の 作った

ーヨージョ エ オレタチ ハイッチャッタ (苦笑)。マインチ ア
収容所へ 俺達 入ってしまった。 毎日

ノー ヒコーキデネー テークシテキチャー ビラー マクンテ。
飛行機でね 低空してきては ビラを 撒くので。

(^クシー。) ヨコハマカラ トーキョーマデ モーシトガネー ミ
横浜から 東京まで もう 人がね

ンナ ゴロゴロ タオレテテ ミル カゲモ ネーナンテ。
皆 ゴロゴロ 倒れていて 見る かげも 無いなどヒ。

0 オカナンカ ⁽³⁸⁾ アノー アレダッペ。エーセータイダカラ ケンキュ
岡などは あれだろう。 衛生隊だから 研究

ーガイリョーニ ハツカネズミ トリー トーキョー ケーッテ⁽⁵⁷⁾
材料に 二十日鼠を 取りに 東京へ 帰って

きて シューセン ナッタ。
きて 終戦に なった。

ト オラガ ゲンエキダッ タカラネー。シナデ ショーカイセキト イ
俺が 現役 だったから ね。 支那で 藤介石 と 今の
マノ ショーカイセキ (笑いながら) (40) ショーカイセキ (笑いな
ショーカイセキ ショーカイセキ

がら)) チョック ケーグント ブツ ツイタンダカラ。ソーシテ アノ
魚 飛 軍 と ぶっ かった の だ から。 そ し て

ー アトカラ クル ホジューヘーニ。ソノー アスコニネー ホ
後 から 来る 補充 兵 に ； あそこ に ね

タルイシノネー アノー ケーキンゾク ヤクンダトカネー ツク
螢 石 の ね、 軽 金 属 を 作 る

ルンダトカネー ヒコーキノ ヒコーキオ ツクル ホタルイシッ
の だ ね ね 飛行 機 を 作 る 螢 石 と い う の が

テング カリョク アルンダソーダネー。ソレオ モシテ ケーキ
火 力 が ある の だ そ う だ れ ね。 そ れ を 火 燃 や し て 軽 金 属 を

ンゾク ツクル ヒコーキノ ゲンリョー ツクル ソノ イシオ
作 る、 飛行 機 の 原 料 を 作 る、 そ の 石 を、

ヤマガ ホシクッテ ソレオ ニホンガ センリョースル トキ
山 が 欲 し く て そ れ を 日 本 が 占 領 す る 時 に

ニ オレタチワ マー イッタ ワケダ。ソントキ マモッテタン
俺 達 は 行 っ た め け だ。 そ の 時 守 っ て い た の が

ガ ショーカイセキノ チョック ケーグンナンダイネー。ツオイダッ
藤 介 石 の 魚 飛 軍 だ よ ね。 強 い の だ っ た の だ。

タンダ。ソレオ コンダ マカシテ ソ_{xxx} センリョーシテ ソイテ
それを 負がして 占領して それで

ツイー ヤツ マカシタラ ヒトツギ タタネー ウチニ ホー
強い やつを 負がしたら 一月 たたない うちに

ジューハー トラレチマッタ。(A 突) ショーカイセキニ。ソレデ
補充兵が 取られてしまった。 藤介石に 。 それで

ソレ スマシテ コンダ アノ ムコーイ フツイン イツタダ。(問)
それを 寸ませて 今度は 向うへ、 仏印へ 行ったのだ。

O ナンダ キヨシサン クヤンガルノワ オラー ナイチニベー イ
何というか 清さん くやしがるのは 私は 内地にはばかり

タモンダカラ イマ イクンチテコター イエネーモンダカラ (A
居たものだから あと 幾日ということは 言えないものだから

イッコー モラエネーダ。) イッコー モラエネートカ ナントカナ
(全然 貰えないのだ。) 全然 貰えないヒガ 何ヒかなビヒ

ンテ マー ブツクダ ブツクダ。
まあ がつくさ がつくさ。

K ソースト トミチャンワ スト_{xxx} ショ_{xxx}⁽⁴⁾ ジューゴネンカラ[↑]。
そうすると 富ちゃん は すると 十五年からがね。

T ウン ジューゴネンカラ (K ジューセンマデー) ニジューイチネン
うん、十五年から (終戦まで) 二十一年

マデ。(K イタワケカイ) シューセン ナッテ イチネン ホリョ
まで。(いたわけがね) 終戦になって 一年 捕虜

ン ナッタ。
に なった。

K アー ソーカ ソースト マル ロクネン ジャナクッテ シチネ
あゝ そろが そろすると まる 六年、ではなくて 七年

ン。

T マル ロクネンキヤ ナラネンダケドモ (^k ロクネン ナル ワケ
 まる 六年 しか ならないのだけれども (六年に なる わけ
ダ.) ⁽⁴²⁾ シー . アジカケ (⁽⁴³⁾ ダラ ナナネングレ ン ナルンカ ナー .
 だ。) うん . あじかけ なら 七年 位に なるのかな。

K チョード イー トキノ ロクネンダカラ ナー .
 ちょうど いい 時の 六年 だ から ねえ。

T イー トキノ コージュ ゴカクナ ンカ ナッタ トキダカラ ナー .
 いい 時の , 甲 種 合 格 な じ に な っ た 時 だ から ね .
 (^o タマラ ネー ダ ナー .) ソー ジ タ ラ ソ ノ ア ト コ ン ダ ヒ ッ パ
 (た ま ら ね ー だ な ー .) そ う し た ら そ の 後 今 度 は 引 っ ぱ り
ラ エ チ マ ッ テ . ロク ガ ツ ニ チョ ー ヘ ケ ン サ デ サ ー コ ー ジュ ゴ
 ら れ て し ま っ て . 六 月 に 徴 兵 検 査 で き , 甲 種 合 格 の
ー カ ク ノ ハ ン モ オ サ レ タ ラ ソ ノ ジュ ー ニ ガ ツ ニ ヒ ッ パ リ
 判 も 押 さ れ た ら そ の 【 年 の 】 + 二 月 に 引 っ ぱ り

ダサレタン。
 出されたの。

K アー チョード ソイジヤ ー ハタチ ノ ケ ケンサ デ .
 ああ , ちょうど それでは 二十 歳の 検査で。

T ソー . ダカラ ハタチ デ ケンサ ジ テ (^k ソノ トシ ノ ジュ ー ニ
 そう . だから 二十 歳で 検査して (その 年の + 二 月 の)
ガ ツ .) マー カ ゾ エ ニ ジュ ー イ チ デ . (間) デ ソ ノ ト シ ニ
 まあ かぞえ 二十一【歳】で . それで その 年に

ヒッ パ リ ダ サ レ タ ン .
 引っぱり出されたの。

K チヨード ハタチス カラ ニジュ - ゴカ ロク シチ ハチ.
ちようど 二十歳 から 二十五か 六, 七, 八.

T ソイデ チヨード アノ ムコーノ ロコーキョーカラ ハジマッ
それで ちようど うちの 蘆溝橋から 始まって

テ ソコ タケナワ ナツタ ジブンデ イッセンテ キョーイク
たけなわに なった 時分 一線 教育

サレタダ。オラ。 テッポータマノ ジツダンノ クル ナカデ。
されたのだ。私は。 鉄砲玉の, 奥弾の くる なかで。

K ソー。 ジャー イマワ ジョージノ コロワ ソツチー イッテタ
なるほど。 今では 尚司 (人名) の 頃は そちらに 行っていた
ワケダ。

わけだ。

T イッテタ ワケ。
行っていた わけ。

K トジョー ネー。
そうでしょうねえ。

T ソノ ジブンワ シャンハイアタリ イタ ワケダ。
その 時分は 上海あたりに いたわけだ。

A ソー。

K イマー ジョージナンカ ユ ユーガタ ヤキョーナンカ ヤキョ
今は 尚司 などは タカ 野球

ーナンカ ヤッテルケド (可笑)。
など やっているけれど。

T アノ ジブンワ アケテモ クレテモ ピンタダケダッタ。
あの 時分は あけても くらても ピンタだけだった。

O アー ピンタダモノナー。

ああ、ピンタだものな。

K バット カツイデ ノンキ ヤッテルケドモ。

バットを 担いで 呑気に していきわけども。

T アーノ ジブンワネー。(〇ンーン!) シロイ モノが クレーツツ

【まったく】あの 時分はね。 そうそう。 白い 物が 黒いと

ツツッテ ハイハイツツッテタノガサー。⁽⁴⁶⁾

言ったって ハイハイ と言っていたのがき。

O ソーイコトダナー。

そういうことだな。

K テッポート バットジャ エレー チゲーダイネー(笑いながら)。

鉄 砲と バットでは えらい 遠いだよね。

T ソーデ ナニカ イエバ スグ ケンペータイガ キテ ケンペー

それで 何か 言えば すぐ ^{××××××××} ^{××} 憲兵

が キテ エバツテタ。

が 来て 威張っていた。

O ソーダガネー。

そうなのだよ。

K ダカラ タイジョーウマレノ シトツテナ イチバン ソーユー

だから 大正生まれの 人というのは 一番 そういう

ゲンエキテ タイヘンナ トコロー ヤッテジタ⁽⁴⁷⁾ ワケナンサーネ

現 役で 大変な ところを やってきた わけなのさね。

—。

T ソーダイ⁽⁴⁸⁾ネー。ダカラ イー トキ ナカッタ ワケダ。

そうだよね。だから 良い 時が なかった わけだ。

K ソデ アタマー メージノ シトニ アタマーカラ⁽⁴⁹⁾ オサエラレテ
もれど 頭を 明治の 人に 頭から 押えられて

~~~~~。

T ウン オサエラエル。ナオ アノ ジブンワ アレダッ、タカラネー。  
うん 押えられる。 まだ あの 時分は あれだ、たからね。

ホーケンジダイダッタカラ。

封建時代だったから。

K ソーダネー。スト チューカンニ オッパサマレチマッテ (Tソー)  
ぞうだね。 中間に はさまれてしま、て

ケーッテ キタラ コンダ~~~~。

帰って きたら 今度は

T ガーッテルカラネー コンダー。イツモ ワリー トコ デチャッ  
変っているからね 今度は。 いつも 悪い ところへ 出てしまったのさ。

タンサ。

K チョードネー。

ちょうだね。

O オレンチノ オバーガ オカチャンガ イル トキヤー ソレホド  
私の家の おばあが 岡ちゃんが いる 時は もれどど

ジャナカッタケド アブラマノ イワオチャンガ デテ アレダッタ  
ではなかったけれども 油屋の 巖ちゃん(人名)が 出て あれだ、たろう

ッペ ジギ アノ ホラ シューセン ナッタッペ。イワオチャンガ  
直に 終戦に なったろう。 巖ちゃんが

デタラ オラガ オバーガ ナクナッタイ。コンダー オラガ ト  
出たら 私の おばあが 泣くのだったよ。 今度こそは 私の

コイ クルツッテ (0 笑)。 (A コンダ オラナンゾガ~~~~) コン  
ヒコハ くるといって。 (今度は 俺などが) 今度は

ダー オラガ<sub>x x x x x</sub> イマ シトツキ タテバ オラガ ウチー クルッ  
もう 一月 たてば 私の 家に 来る

テユッ タラ オバーガ カミサマ イッ ショケンメー タノムダッ  
と言ったら おばあが 神様に 一生懸命 頼むのだった。

テ。オラガ ウチー コネーデ クダサイ。オラガ ウチ~~~~ (笑)。  
私の 家に 来ないで 下さい。私の 家

ソシタラ シューセン ナッタダト。(間) イワオチャナーニ クレ  
そしたら 終戦に なったのだった。 巖ちゃんに 来れば

バ オラガ ウチ クラーッテユッ テタン。  
私の 家に 来るよと言っていたの。

K アレガ イマ イチネン ノビレバ ズイーブン ヒドカッタデシ  
あれが もう 一年 延べれば 随分 仏びかったでしょう  
ーネー。(51) モットネー。  
ねえ。 もっとねえ。

T ヒドカッタネー。モー アトカタモ ナクナッタダッペ。  
仏びかったね。 もう 跡形も なくなつたろう。

A アー↓。イマ イチネン ノビタラ ヒドカッタ→。  
その通り。 もう 一年 延べたら 仏びかったさ。

T デモ オラナンドワ マケイクサッテノ シタ コト ナカッタカ  
でも 俺などは 負け戦といふのを した こひが なかったから  
ラサー。(K ンーン。)ダカラ ニホンワ マケルト オモワナカッ  
さ。 だから 日本は 負けると 思ひなかつた  
タナー。  
な。

K ソラ ソーダンベナー。ゼンゼン コツチガ ワカンネンダカラネ  
それは もうだろうな。全然 こちら【の様子】が わからないのだからね。

T ンデ フツインノ ナーニダイガクツタツケナー。アスゴエ ハイ  
それで 仏 印の 何という 大学といったっけな。 あそこへ 入った

ッタ トキニ ヤツラノ バクゲキノ ウマインニ タマゲテ マ  
ときに やつらの 爆撃の うまいのに 驚いて あ

ー コリャー モー ニホンモ アブネーカナー ト オモッテ ソ  
これは もう 日本も 危ないかなと 思って

ントキ オモッタツタケドネー。(K ン→) ソントキ ミナライジ  
そのとき 思ったけれどね。 そのとき 見習士官

カンガ キダンダヨ。(K ア→) ソントキ ミナライジカントー  
が 来たのだよ。 そのとき 見習士官と

Eー ショー ショエ ショー ショエ ツイタ トキニ ホシノサン  
x x x x x x x x x x x 小 哨へ 着いた 時に 星野さん

ダメダナ。マー ソノ ジブンワ カイキューワ ベツデモ メ  
だめだな。 その 時分は 階級は 別でも

シノ カズナシダカラ (A シ→) ミナライジカントー ガガネ ツケ  
飯の 数なのだから。 見習士官で 座金を 着けて

テサー トー カカエチャー ワルケレドモ ヤセンワ ハジメテ  
さ、 刀を 抱えては 来るけれども 野戦は 始めて

ナシダカラ (K シ→) コサンヘーノ メシノ カズノ オーイ ヤ  
なのだから 古参兵の 飯の 数の 多い

ツニャー シカタガネーヤ ホシノサン ホシノサンテ カン カ  
やつには 仕方が ないや、 星野さん 星野さんと



タッポワ マダ ブンショ - 4 ヲ デ ゴチョ - ダヨ . カシカンニ  
 片方は まだ 分哨長で 伍長だよ . 下士官に  
 ミナライシカンガ サン ツケタケドサー . (〇ンー)ニホン 下  
 見習士官が 「さん」を つけたけれどさ . 日本は  
 一モ アブネー アブネーカシンネーヨ . シンデ マー ヘータイデ  
 どうも 危ない 危ないかもしれないよ . それで まあ 兵隊で  
 ナイチ ヨースジテ キーテ キタダカラ . (A.O.ンー)ソレマ  
 内地の 様子を 聞いて 来たから . それまで  
 デ ソンナ アレ ナカッタケド ソントキ ハジメテ バクゲキ  
 そんな こと 無かったけれど そのとき はじめて 爆撃  
 サレタダヨ . (〇ンー)ソンデ ニホンノ ヒコーキヲ サー  
 されたのだよ . それで 日本の 飛行機は さーと  
 ット ヒッ コンジマウンド . (クンー) テキシューガ テキシュー  
 引っ込んでしまうのだ . 敵襲が  
 ガ アルト . ソントキニ オレ アノ ヨソエ アスビー デテタ  
 あると . そのときに 俺は 他所へ 遊びに 出ている  
 ンダ . (〇ンー)ソーシタラ カエッテ キタラ アノ カエロー  
 のだ . そうしたら 帰って きたら 帰ろうと  
 ト オモッタラ アノ アノ ナンダ チューガンダイガクツタカ  
 思ったら 何だ チューガン大学といったかな  
 ナ アノ ダイガクニ オランダ イタンダケドモ タテモン  
 あの 大学に 俺達は いたのだけれども 建物を  
 ゼンブ ツ ア タテモン ツブサズニ ドーロダケ ウマノ イ  
 全部 建物は 潰さずに 道路だけ , 馬の  
 ル トコダケ コー バタバタ バタバタ ゴジッキロバクダン  
 いる 所だけ バタバタ バタバタ 五十キロ爆弾を

オトシテ (クンーン) ホトンド ウマガ ゼンメツン ナツタンダ  
落として ほとんど 馬が 全滅に なったのだよ。

ヨ。オラナンカノ ブンタイガ サンジュー サンビマクゴジツト  
俺達の 分隊が 三十 三百五十頭

ーグレー イタンダモノ。(クンーン) ソノ ヤツガ サンワリ (間)  
ぐらい いたのだもの。 そいつが 三割り

グライ マー ノコッタノガ ヒャクハヒチハチ イタダッタネー。  
ぐらい、 まあ 残ったのが 百 七・八【頭】いたのだらたね。

## 注

1. 「ヒューデー」 [çi' de:]
2. 「コ」 [kɔ]
3. 「クボーク ハカッタ」 配給米を計るとき、杓の表面よりもくぼませで計った。
4. 「ニジョー ハカリダスノニ ドコ ヤッタッペ」 少しずつけずって計ってニ升分落がせるのにとこをどらやったのだから。
5. 「オランダ」 [ora' nda] オランダワ>オランダ。
6. 「トリヤーシネー」 [torja:βine:] 「シ」の摩擦の程度は弱い。
7. 「ミヤジョーノ」 「ミヤジョー」は客の背戸と呼ばれる家のこと。次頁にも「ミヤノ ジョガイ」として出てくる。やはり特定の家を指している。
8. 「ジョーラガ」 「ジョー」は人名。正。
9. 「キョクデ クチョーデ」 「郵便局を開いている家」を「局」という。郵便局をやっている家の人が区長で。
10. 「トメサンニャー」 「トメサン」は人名「止吉」+さん。
11. 「トモジーサマニ」 「トモジーサマ」は人名「友吉」+じいさま。
12. 「クボ クボッタッテ」 配給米の計り方が正当でないと言ったと被配給者が言っても。
13. 「イカリノ」 [ikarino]。[ikaino]とも聞こえる。[r]の音は弱い。
14. 「I」は調査者 上野勇。
15. 「コツツァ」 [kottsa']。コッタ>コツツァ。無造作な発音。
16. 「コツツァイ」 [kottsaï]。コッタ>コツツァイ。無造作な発音。[kottaï]とも聞こえる。
17. 「フキワリジックユークミアイ」 「フキワリ」の[r]の発音は弱い。
18. 「ウシロダオ」 「ウシロダ」の[r]の発音は弱い。地名。
19. 「チーガ」 「チー」は人名。小形千恵子。
20. 「ケンガ」 「ケン」は人名。憲三。
21. 「トキダッタダンネー」 ダカラ>ダーラ。ネーの前でダン。

22. 「サ」 [sa] 文末の弱まり形。
23. 「シタダツ」 [ʃi:tadazo] 摩擦音 [z] は文末の弱まり形。
24. 「トミチャンチダノ」 「トミチャン」 は人名 富司チちゃん。
25. 「メンセキガ モッラタカラナー」 「面積があった」と言おうとして「面積を持っていた」と途中で言いなおしたぬじれ文。
26. 「メンセキガ アッタカラネー」 助詞「ガ」の音は摩擦音の [ʃa]。「メンセキダッタカラ」 とも聞こえる。
27. 「ツクル」 [tsükuru] [r] の発音のための舌の動きはわずが。 [tsükurɯ:] とも聞こえる。
28. 「スュー」 [sü:] スル>スュー。無造作な発音。
29. 「ソシタ」 ソシタラ>ソシタア>ソシタ。「ラ」の子音が脱落して「ア」母音連続が「ア」長音となり、さらに短呼化されたもの。無造作な発音。
30. 「キューイヨシチャンダ」 [kjwi josi:tʃanda] キヨシチャンの言い間違い。
31. 「ミツガ」 「ミツ」 は人名 光美。
32. 「クンネーケー」 [kunne:ke:]
33. 「ジュークーバー コクカラ」 「文句を言う」の意で「ジュークーユー」と言う。
34. 「ヨーイジャーナカッタネー」 「大変だったねえ」の意。
35. 「ソノ」 [so.no]。「スノ」に近い音。
36. 「ゾーン」 [n:m]
37. 「シューヨーセル」 「シューヨースル」の言い間違い。または「ス」の音の調音点が前よりかつ低いため「セ」のように聞こえた。
38. 「オカナンカ」 「オカ」 は人名。岡司。
39. 「ケーッテ」 [ke:tte]。
40. 「イマノ ショーカイセキ」 先に話題になった「ショーカイセキ」という鳥の名と同じ音であるの意。
41. 「<sup>\*\*\*</sup>ジョ」 昭和と言いかけたやめた。
42. 「ナー」 [n:] 年数を考えている。思わず発した声。

43. 「(間)」、あしかけて何年になるかを考えているため間ができた。
44. 「ハタチス<sub>xxx</sub> カラ ニジューゴカ ロク シチ ハチ」「二十歳過ぎ」と言いかけてやめ、「二十歳から」と言いかえた。そのために「カラ」との間に息の休止もあらわれた。六, 七, ハは独言でも言うように年数を教えた。だんだん音量は小さくなっていく。
45. 「トジョーネー」 [t̚so:ne:]。無造作な発音。
46. 「サー」 [sa:]。
47. 「ヤッテシタ」 [jatteɕita] ヤッテキタの弱まり形。
48. 「ソーダイネー」 [so:daïne:]。
49. 「アタマーカラ」 「頭を」と言うつもりが「頭から」と言いなおした。「アタマー」は「頭を」の意。対象格を語末母音の引きのばれによって表わすことは当方言の特徴のひとつである。
50. 「ナクナッタイ」「ナクダッタイ」の無造作な発音。アクセントの型からも「泣くだった」の意であることがわかる。もし、「なくなつた」であればアクセントは「ナクナッタ」となる。
51. 「デジョーネー」「デジョー」はTに対する丁寧体。KはTよりも年下。
52. 「オモッタッタ」過去回想。

Ⅲ. 長野県<sup>かみ い な</sup>上伊那郡<sup>なかがわ</sup>中川村大字<sup>かづらしま</sup>葛島

収録・文字化担当者 馬 瀬 良 雄

# A 収録地点とその方言について

1 地点名 長野県上伊那郡中川村大字葛島

2 収録地点の概観 長野県上伊那郡中川村は伊那谷のほぼ中央、上伊那郡の最南部に位置する。明治22年(1889)に葛島村、大草村、四徳村の3カ村が合併し南向村と称したが、昭和33年(1958)片桐村を合併し中川村となった。天竜村をはさんで左岸に南向、右岸に片桐が位置する。大草がその中心である。人口5552人(昭51.3.1)、世帯数1308(昭51.3.1)、面積77.24km<sup>2</sup>。

調査地点葛島は中川村の最南端に位置し、西は天竜川に面し、南は小渋川によって下伊那郡と境を接している。上伊那地方にありながら、文化圏の上からは飯田・下伊那文化圏に属している。主産業はかつては養蚕、現在は果樹・蔬菜の栽培。人口995人(昭51.3.1)、世帯数223(昭51.3.1)。

## 3 収録した方言の特色

① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係 長野県の方言は、東条操氏の区画に従うならば東部方言の東海東山方言、都竹通年雄氏に従うならば東部方言のナヤシ方言(長野・山梨・静岡方言)に分類される。長野県の方言はさらに奥信濃・北信・中信・南信の各方言に区分される。南信方言は木曾、下伊那及び上伊那の南部の方言がこれに属し、中川村方言はこの中に分類される。南信方言では西部方言的特徴が長野県の他の方言と比較して多い。

② 音韻上の特色 葛島方言のモーラ体系は調査していないので、同じ中川村の片桐方言のものを示す。話者は松下大佐氏(明23年生まれ)。

|    |    |    |    |    |     |     |     |     |     |     |     |      |
|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 'u | 'o | 'a | 'e | 'i | 'ju | 'jo | 'ja | 'wo | 'wa | 'we | 'wo | 'wja |
| hu | ho | ha | he | hi | hju | hjo | hja | —   | —   | —   | —   | —    |
| ɲu | ɲo | ɲa | ɲe | ɲi | ɲju | ɲjo | ɲja | —   | —   | —   | —   | —    |
| gu | go | ga | ge | gi | gju | gjo | gja | —   | —   | —   | —   | —    |
| ku | ko | ka | ke | ki | kju | kjo | kja | —   | —   | —   | —   | —    |
| zu | zo | za | ze | zi | zju | zjo | zja | —   | —   | —   | —   | —    |

|    |    |    |    |    |     |     |     |   |   |   |   |   |
|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|---|---|---|---|---|
| cu | co | ca | —  | ci | cju | cjo | cja | — | — | — | — | — |
| su | so | sa | se | si | sju | sjo | sja | — | — | — | — | — |
| ru | ro | ra | re | ri | rju | rjo | rja | — | — | — | — | — |
| —  | do | da | de | —  | —   | —   | —   | — | — | — | — | — |
| —  | to | ta | te | —  | —   | —   | —   | — | — | — | — | — |
| nu | no | na | ne | ni | nju | njo | nja | — | — | — | — | — |
| mu | mo | ma | me | mi | —   | mju | mja | — | — | — | — | — |
| bu | bo | ba | be | bi | bju | bjo | bja | — | — | — | — | — |
| pu | po | pa | pe | pi | pju | pjo | pja | — | — | — | — | — |
| u  | o  | a  | e  | i  |     |     |     |   |   |   |   |   |

N

Q

共通語にないモーラについてかんたんに説明しておく。

/’we/ は次のような場合にあらわれる。

/’weeta/ [we:ta] (沸いた) cf. /’eeta/ [e:ta] (焼いた, 明いた)

/ka’wee/ [kawe:] (買いに) cf. /ka’ee/ [kae:] (代えに)

/’wo/ は次のような場合にあらわれる。

/hana’wo/ [hanawo] (鼻を) cf. /hana’o/ [hanao] (鼻緒)

/’wjo/, /’wja/ は次のような場合にあらわれる。

/hu’wjoo/ [Φuwjo:] (笛を) cf. /hu’joo/ [Φujoo:] (冬を)

/hu’wjaa/ [Φuwja:] (笛は) cf. /hu’jaa/ [Φujja:] (冬は)

/co/, /ca/ は次のような場合にあらわれる。

/’ogooqcoo/ [ogottso:] (お御馳走)

/’joodaocama/ [jo:dattsama] (雷様)

なお、この方言では、たとえば「嗅いだ」は [kaĩda] または [kajĩda] と発音され、木曾の山村 [kaida] とは発音が異なる。また、軽い敬意と親愛の気持ちをあらわす -ナンは、[nan] と発音されることは稀で、普通は [naĩ] あるいは [naĩ̃] のように発音される。そんなところからこの方言では口母音音素に対して鼻母音音素を認めるべきではないかと考えているが、疑問の点もあるので、上のモーラ表にはこの点を加えなかった。



音声上の特色として、まず連母音の特色をあげる。共通語の /a'i/, /a'e/ に対し /ee/ の対応する語が多い。たとえば、/eeso/ (愛想), /ee danara/ (間柄), /teegee/ (大概), /teeko/ (太鼓), /meeba/ (前歯), /'iidee/ (飯田へ) など枚挙にいとまがない。いわゆるサ行イ音便のハナイタ (話した), サイタ (差した) なども、この方言では /haneeta/, /seeta/ となる。

共通語の /i'e/ に対しては幾つかの語で /ee/ が対応する。たとえば、/ee/ (家), /keeru/ (消える), /meeru/ (見える) のように。しかし、「ひえ (稗)」、「知恵」などは /hi'e/, /ci'e/ であり、/hee/, /cee/ で対応することはない。

その他、共通語の /o'i/, /o'e/, /u'i/ などは共通語と同じであり、たとえば以上に対し、/ee/ や /ii/ が対応することはない。例をあげれば、/cu'jo'i/ (強い), /hido'i/ (ひどい), /kiko'eru/ (聞こえる), /'obo'eru/ (覚える), /sabu'i/ (寒い) など。

この録音で連母音の融合がそれほど認められないのは、この融合が近年しだいに行なわれなくなっている点のほか、話し手の学歴や彼等の属している階層が関係しているであろう。また、録音ということによって話し手が緊張していたこと、さらによそ者である調査者が同席していたことなどもこのことに関係があると思われる。

次に、母音の無声化。調査したのは次の諸語である。

北, 鹿, 下, 菊, 叱る, (頭の) ふけ, 拭く, 拭け, 突く, 突け, 口, 漬け物, つた (蔦), 靴, 月, 土, 鮭; 汽車, 吹く, 着く, 来た; 振った, 吸った; 降った, 食った; 奥, 松, 菓子, 書く。

3回発音してもらった。1回でも無声化の認められたのは次の諸語である。

鹿, 下, 叱る, (頭の) ふけ。

つまり、母音の無声化現象は極めて少ないことが分かる。そしてその認められた語は、すべて CiCV ~ CuCV (Cは無声子音音素) の /V/ が /e/, /a/ のように広い母音の場合であることが注目される。

この方言には「もともと促音のないところに促音を入れる現象」が認

められる。ハナツカミ（鼻紙），カラツカゼ（空風），ガケツプチ（崖縁），ウワッカー（上皮），ウツクシー（美しい），ヤヤッコシー（ややとしい）など。

金田一春彦氏の分類によって，内地方言の音韻を表日本方言，裏日本方言，薩隅式方言の三つに分けるならば，中川村方言は表日本方言に属することになる。また，榎垣実氏に従って表日本方言を東日本方言と西日本方言とに分けるならば，東日本方言的特徴と西日本方言的特徴とをあわせ持つ方言ということができよう。

アクセントについてちょっと觸れておく。この方言は東京式アクセントに属し，型及びその種類は東京語と同じであり，型に所属にする語も，東京語と若干の出入はあるものの，それに近い。

### ③ 文法上の特色

イ) 中川村は文法上東西方言対立の境界地帯に位置する。いま，この方言で東部方言的特徴を示すものを挙げれば，次のとおりである。

ソーダ<sup>(注1)</sup>（そうだ），アカウナル（赤くなる），カッタ（買った）  
(注1) ソーダはソーナともあらわれる。むしろーナの方が基底方言的かという。

次に西部方言的特徴を示すものを挙げれば次のとおり。

イカシ（行かない），イカナシタ（行かなかった），イカニヤ（行かなければ），デヨ（出る）。

指標の取り方にもよるが<sup>(註1)</sup>，ここに挙げたところでは西部方言的特徴の方がやや多いと言えそうである。

(注1) 以上のほかに，継続態としてフツル（降っている）を使い，フツルを使わない点，老耳層では（傘などを）サシタをセータと言っている点などは，西部方言的特徴として加えることができよう。また，継続態と結果態とを文法上区別しない点などは東部方言的特徴と見ることができる。

ロ) 敬語的表現がゆたかである。相手に寄ることを勧めるのに，敬意の程度により，次のような種々の言い方がある。

ヨレ — ヨリナ — ヨランカ — オヨリナ — ヨットクンナ —

オヨリナンエ — オヨリテ — オヨリトクンナ — オヨリナンシ  
ョ — オヨリトクンナンショ

上の中から特徴的なものにつき少し説明する。

i) -ナンショ 軽い敬意と親愛感をもって使われる。オヤスミナンショ（お休みなさい）、オトリナンショ（お取りください）、ゴメンナンショ（ご免なさい）など。

ii) オ — テ 上のオヨリテは、オヨリルという敬語動詞に助詞 -テが下接したもので、〈オヨリテ オクンナ〉やくオヨリテ オクンナンショ〉の後半部が省略されたともみることができる。この方言では言い切りがオ — ルであらわされる敬語動詞が頻繁に用いられる。たとえば、アル（ある）、ミル（見る）、ケール（帰る）の動詞を例にとると、それそれ、オア Ril、オミル、オケールとして用いられる。

以上のほか、敬語的表現として特徴的なものを、1、2 挙げる。

iii) アリマス この方言ではゴザイマス（古来ではゴザイマスル、ゴザリマスルも使われる）のほか、アリマスを使う。たとえば、〈コノトコロ オサブク アリマサムシ〉（このところお寒うございますね）のように。アリマスは丁寧さをあらわす補助動詞として、広く男性、女性の区別なく用いられる。

iv) -ナムシ、-ナム、-ナン これらは念を押し、余情を含み、敬意をあらわすのに用いられる。敬意は -ナムシが最も高く、-ナンは最も低い。なお、-ナムシ、-ナムは老年層の一部で使われるにすぎない。-ナムは [nam] と発音される。また、-ナンは [nã] または [nãw] と発音される。しかし、ここでは簡略表記を用い、これらを -ナンで表わした。

#### 4 その他

地点選定の理由としては、第1に馬瀬が中川村の方言について以前調査したことがあり、その方言についてかなりよく知っていることをあげる。第2には中川村が文法上東西両方言の境界地帯にあり、東西方言対立が実際の会話の中でどうあらわれてくるか、興味深かった点をあげる。その他、民話のすぐれた語り手がこの村にいる点も、ここを選ばせる理

由の一つになっている。

録音テープの聞き取りで不明な個所、方言の意味、用法で不審な点は、話し手のひとり、清水悟郎氏にお尋ねした。氏にはこのために長時間何回にもわたりご協力いただいた。また、氏には話し手の選定をはじめとして録音調査のもろもろのことについてご協力いただいた。この録音調査には沖裕子氏（東京女子大学文理学部学生）が同行し、その手伝いをした。氏はさらに録音テープからの資料の文字化、共通語訳で馬瀬を助けた。また、浄書は馬瀬則子が行なった。

## B 表記について

簡略音声表記の意味で片かなを用いた。それぞれの片かなの表わす具体音声は次にかんたんを示す。

ウ：[u] 円唇でなく、平唇。

オ：[o] 基本母音の[o]よりも高い。

ア：[a] 基本母音の[a]よりも後寄り。

エ：[e] 基本母音の[e]よりも高い。

イ：[i] 基本母音の[i]よりも多少調音点は低く、かつやや後寄り。上に述べた母音の具体音声の説明は、母音が子音とともに拍を作った場合にもあてはまる。

ユ：[ju]

ヨ：[jo]

ヤ：[ja]

ヲ：[wo] ~ [ʷo]

ワ：[wa]

フ：[ɸu]

ホ：[ho] 母音間では往々[h]は[h̥]となる。ハ、ヘの場合も同じ。

ハ：[ha]

ヘ：[he]

ヒ：[çi]。[çi]の摩擦は共通語のように強くはない。ヒュ、ヒョ、ヒャの場合も同じ。

ヒュ：[çy]

ヒョ：[ço]

ヒャ：[ça]

グ：[gy]

ゴ：[go]

ガ：[ga]

ゲ：[ge]

ギ：[gi]

ギユ : [ɲju]

ギョ : [ɲjo]

ギヤ : [ɲja]

グ : [gu]

ゴ : [go]

ガ : [ga]

ゲ : [ge]

ギ : [gi]

ギヅ : [gju]

ギョ : [gjo]

ギヤ : [gja]

ク : [ku]

コ : [ko]

カ : [ka]

ケ : [ke]

キ : [ki]

キヅ : [kju]

キョ : [kjo]

キヤ : [kja]

ズ : [dzɯ, -zɯ]。一般に母音間では摩擦音 [z]、他の位置で破擦音 [dz] があらわれる。他のザ行の拍でも同じ。共通語におけるような母音の中舌化は認められない。ただし、[dzɯ] の摩擦音 [z] が弱い個人がいる。[dʷikin] (頭布) のように。

ゾ : [dzo, -zo]

ザ : [dza, -za]

ゼ : [dze, -ze]

ジ : [dzi, -zi] ただし、[dzi] の摩擦音 [ʒ] が弱い個人がいる。[dʲiki] (時期) のように、ジヅ、ジョ、ジャ の場合も同じ。

ジヅ : [dʒɯ, -ʒɯ]

ジョ : [dʒo, -ʒo]

ジ : [dʒa, -ʒa]

ツ : [tʃu] 共通語におけるような中舌化は認められない。ただし、[tʃu]の摩擦音 [ʃ] の弱い個人がいる。[tʃu tʃu] (筒) のように。

ツォ : [tʃo]

ツァ : [tʃa]

チ : [tʃi] ただし、[tʃi]の摩擦音 [ʃ] の弱い個人がいる。[tʃi tʃi] (乳) のように。なお、チュ、チョ、チャの場合も同じ。

チュ : [tʃju]

チョ : [tʃo]

チャ : [tʃa]

ス : [su] 共通語におけるような母音の中舌化は認められない。

ソ : [so]

サ : [sa]

セ : [se]

シ : [ʃi]

シュ : [ʃju]

ショ : [ʃo]

シャ : [ʃa]

ル : [dru, -ru] 一般的に母音間では弾き音 [ɾ] があらわれ、他の位置では弱い破裂音で始まる。個人によってはふるえ音を用いる。あるいはこの音の方がこの方言では古いのかもしれない。以上は他のラ行のかなの場合も同じ。

ロ : [dru, -ru]

ラ : [dra, -ra]

レ : [dre, -re]

リ : [dri, -ri]

リュ : [drju, -ru]

リャ : [drja, -tja]

ド : [do]

ダ : [da]

デ： [de]

ト： [to]

タ： [ta]

テ： [te]

ヌ： [nu]

ノ： [no]

ナ： [na]

ネ： [ne]

ニ： [ni]

ニュ： [nju]

ニョ： [no]

ニャ： [nja]

ム： [mu]

モ： [mo]

マ： [ma]

メ： [me]

ミ： [mi]

ミョ： [mjo]

ミャ： [mja]

ブ： [bu] 母音間ではしばしば [β ~ β̣] があらわれる。この点は他のバ行のかなについても同じ。

ボ： [bo]

バ： [ba]

ベ： [be]

ビ： [bi]

ビュ： [byu]

ビョ： [byo]

ビャ： [bya]

ー： 引き音をあらわす。

ン： 語末にあっては [N]。ほかに, [honto] (本と), [hommo]



(本も), [hoj̥ŋa] (本が), [hoũwa] (本は) などの [ŋ] [m̥] [j̥]  
[ũ] などをあらわす。なお, 文末助詞として用いられる [na:ĩ] [naũ]  
の [ĩ] [ũ] も, 前に述べたように「ン」であらわす。

ッ: [iʃso:] (一層), [iʃpen] (一遍), [it̥to:] (一等), [iʃso:]  
(一升), [it̥to:] (一町) などの [ʃ] [p̥] [t̥] [ʃ̥] などをあらわす。

その他必要に応じて本文の注で述べる。

## C. 話者・録音環境など

- 1 タイトル 「縞手本の話」
- 2 録音年月日 昭和50年11月15日
- 3 録音場所 長野県上伊那郡中川村大字葛島字渡場 (片桐としゑ氏の自宅)
- 4 話し手 清水悟郎氏 男性 明治37年生まれ。  
片桐としゑ氏 女性 明治39年生まれ。

清水悟郎氏は長野県の旧制中学校教諭を経て信州大学教授となり、退官後、郷里に近い飯田女子短期大学の教授となり、現在に至る。就学、就職のため、よそでの生活は約45年。したがって、多少録音には共通語の影響が見られないわけではない。話し好きであり、話しの速度は普通程度。

片桐としゑ氏は同じ中川村であるが、大字片桐の生まれ。とついで22歳の時から現在地に住む。葛島の方言と片桐の方言は厳密に見ると異なる点がないわけではないが、大きく見てほぼ同一と考える。職業は農業。方言の保有度はこの年代の女性の普通程度。話し好きであり、話しの速度は普通程度。

5 録音環境 同席者として調査者がいた。二人の間柄が義理の姉と弟の関係であるので、また、録音場所が片桐氏の自宅であることもあり、話題も昔の思い出話しであるためもあって、話の進行状況はスムーズであった。

- 
- 1 タイトル 「幼いころの遊び」
  - 2, 3, 4, 5 は「縞手本の話」に同じ。

- 
- 1 タイトル 「昔の嫁入り」
  - 2 録音年月日 昭和50年11月15日
  - 3 録音場所 長野県上伊那郡中川村大字葛島字渡場 (小池千勢氏の自宅)
  - 4 話し手 小池千勢氏 女性 明治32年生まれ  
清水悟郎氏 男性 明治37年生まれ

小池千勢氏は元地主階級の家生まれ。中川村に近い赤穂(現駒ヶ根市)にとつぎ、その後、夫の転任により松本市に一時住む。夫の死後、再び中川村に戻り、家を継ぎ、現在に至る。よそでの生活は約15年。無職。話し好きであり、かなりのスピードでてきばきと話された。

清水悟郎氏については「繕手本の話」の4を参照。

5 録音環境 同席者として調査者がいた。話しはもっぱら小池千勢氏が話し、清水悟郎氏は聞き役、あるいは話しの引き出し役を勤めた。昔からの知り合い同志であり、録音場所が小池氏の自宅であるため、小池氏はリラックスして、てきばきと話された。

# 1 縞手本の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 清水悟郎 男 明治37年生まれ

B 片桐としゑ 女 明治39年生まれ

A オネーサマー<sup>(1)</sup> コネータ<sup>(2)</sup> ゴモシン<sup>(3)</sup> シトイタ シマチョー<sup>(4)</sup> モッ  
あ義姉様、この間 お頼み しておいた 縞手本を 持って  
テ キテ オクレタ。  
来て くださった？

B ハイ。<sup>(5)</sup> アノー アリマシタモノデナン。<sup>(6)</sup> ニサンサツ ココエ  
はい。 あのう (捜したら) ありましたものですからね。2, 3 冊 ここへ  
ダシテ<sup>(7)</sup> オキマシタノ。<sup>(8)</sup> ( A アリマシタ。 )  
出して おきましたの。 ( ありましたか。 )

A ホーカナ。<sup>(9)</sup>  
そうかな。

B ハイ。 オゴラ<sup>(10)</sup>ンテ。  
はい。 御覧になって。

A ワシワ アレオ ミルトナー<sup>(11)</sup> ナクナツタ オカーマン<sup>(12)</sup> コトー  
私は あれを 見るとなあ、セくなった お母さんの ことを  
オモイダシテサ ウーント ウレシーンナ。<sup>(13)</sup>  
思い出してさ、 とっても 嬉しいんだ。

B ハイ。<sup>(14)</sup> ココニ オジサンカ キモノニ シタリ ハカマニ シタ  
はい。 ここに おじさんが 着物に したり 袴に した

ノカ<sup>(15)</sup> アリマスラ。

のが あるでしょう。

A アール アル。 コレーガ ハカマダ。 コレカ チューガッコー  
あーる ある。 これが 袴だ。 これが 中学校へ

イッタ トキニ ヤツデナ。

行った 時に (はいた) やつてな。

B ハイ。

はい。

A フーン<sup>(16)</sup>。 コレワ ミンナ オカーマカ オッタ ワケジャー ナ  
ふうん。 これは みんな お母さんが 織った わけでは

クッテ……。

なくて……。

B ゼーンブ オリマシタノ。 (A ソーカナ。) ソエデ<sup>(17)</sup> コノ キ  
全部 織りましたの。 ( そうかな。 ) それで この

レオ ヨソエ アゲテ。

布を よそへ 上げて。

A フーン。

ふうん。

B コ<sub>xx</sub> ヨッチノ ホンワ ヨソノー イタダイテ キタトカ ソー ユー  
こっちの 縮手本は よそのを 頂いて 来たとか そういう

フーニナン ウチデ オッタノカ (A ハハー ナル……。) コレデ<sup>(17)</sup>  
ふうにね、 家で 織ったのが ( ははー なる……。 ) これで、

( A フン ) ヨソカラ イタダイタノカ コレツチュヨーニ (   
ふん ) よそから 頂いたのが これっていうように (

A ナルホド。 ) アノ キメテ コー ユーノヲ マタ ヨソエ  
なるほど ) あの 決めて こういうのを また よそへ

ワケテ アゲテ ヨソカラモ コレ イタダイテ キトリマスワケ。  
分けて あげて よそからも これを 頂いて 来ておますわけ。

A コレア ソノー ソーモクゾメツテユーカー クサキノゾメツテユーカー  
これは そのう 草木染めっていうか くさき染めっていうか  
シランケード ソー ユー コトテ ソメタンダナー。  
知らんけれど そう いう ことで 染めたんだなあ。

B ハイ ヤリマシタ クルミゾメトカナン (A ア クルミテ)  
はい。(他にも)やりました……。くるみ染めとかね。 (あ, くるみで)  
ソレカラ ハイ スミ ケシズミヲナン (A ハハア) アノー  
それから はい 炭, 消し炭をねえ (ははあ。) あのう  
イレテ ソレテ スミテ ソメテ。  
入れて それで 炭で 染めて。

A コレテ コー チカチカ ヒカトルワー キヌイトズラ。  
これで こう チカチカ 光っているのは 絹糸だろう。

B キヌイト。  
絹糸。

A コレア ミンナ ジブンノ ウチテ トツタ イトダナー。  
これは みんな 自分の 家で とった 糸だなあ。

B エー。 オバーチャンカ アノ イッショケンメー サクリツチュ  
ええ。 おばあちゃんが あの 一軒懸命 座繰りという  
ーノテ トリマシテナン。  
ので とりましてねえ。

A アノー シクタトカ アノー (B ソーソー) ジョーマユワ ウ  
あのう シクタとか あのう (そうそう) 上繭は 売  
リニ ダシチマッテ (B ウリニ ダシテ タマトカナ) チューマイモ カイガ  
りに 出しちまって, (売りに出して, 玉繭とかな) 中繭も 買いが

キテ、ダ~~~~ タマダトカ モト シクタッテ ユーカナー (B  
来て、 玉繭だとか もと シクたって 言うかなあ、  
ハイ) アレデ トッタンジャ ナイノ。  
はい) あれで とったんじゃ ないの。

B トリマシタノ。 オバーサン ジブンデナン (Aフーン) ザク  
とりましたの。 おばあさんが 自分でねえ (ふうん) 産線  
リッチューノデ テデ マワシテ<sup>(21)</sup> コー アノー テデ マワシテ  
リというので 手で 回して こう あのう 手で 回して  
ナン (A アレデナン) トッテ。  
ね。 (あれでねえ) とって。

A ソレジャ アノ トキニ アノー ナン イイトノ コー クチョー ダ  
それじゃ あの 時に あのう 何の 糸の こう 口を 出  
スノニ (B ミゴデ) エーミゴデ ヤッタシナー アノー……。  
すのに、 (みごで) ええ、みごで やったしなあ あのう……。

B ア ウツギ。  
あ、うつき(9P木)。

A ウツギ。 (B ウツギノ ハッパテ) ウツギノ ハカ チョット  
うつき。 (うつぎの 葉っぱで) うつぎの 葉が ちょっと  
ヒッカカルンナ。  
引っ掛かるんだ。

ロ ソーソー。  
そうそう。

A ソレデ トッテ キテ クレッチュートナー (Bハイ) トクイ  
それで とって きて くれていうなあ (はい) 得意に  
ニ ナッテナー トッテ キテ。 アレ ヤルト コー……。  
なってなあ とって きて。 これ やると こう……。

B ケッコー トレマシタナン。  
結構 とれましたねえ。

A トレテ ( Bハイ ) ヤリマシタナー。  
とれて。( はい ) やりましたなあ。

B ソーソー。  
そうそう。

A ソーシテ<sup>(22)</sup> コノー キヌイトヲ ムカシノ シトダツタカラ<sup>(23)</sup> オケ  
そして このう 絹糸を 昔の 人だったから お蚕<sup>××</sup>  
ーコ オケーコサマカ<sup>××</sup> ハイットルトカ。 ソシテ ウント ソノ  
お蚕さまが はいっているとか。 そして うんと その  
キヌイトバカリダト オケーコゾツキ<sup>(24)</sup>チュッタ ジャー ナイ。 オ  
絹糸ばかりだと オケーコゾツキ って言った(じゃあない)。 オ  
ケーコゾツキノ キモノ。( B笑 )  
ケーコゾツキノ 着物。

B ソーソー。  
そうそう。

A ゼンブ<sup>×</sup> オカイコサマノ ( Bハイ ) イトダツチュー。  
全部 お蚕さまの ( はい ) 糸だっていう(意味で)。

B キヌニ<sup>×××</sup> キヌオリモノヲナン。  
絹織物とねえ。

A オケーコゾツキチュッタナー。 エー ソックリ オカイコサマ  
オケーコゾツキ って言ったなあ。 ええと、ソックリ お蚕さまの  
ノ イトガ ハイットルツチューノカナ。  
糸が はいっているっていうのかな。

B ソーソー。  
そうそう。



A オケーコゾツキノ キモノダテ ジョートータゾツチュツタンナ。  
正絹の 着物だから 上等だぞって言ったんだ。

トコロカ コレオ イーダエ キテツテ ハズカシクテナー (B  
ところが これを 飯田へ 着て行って 恥ずかしくてなあ

ハイ) イーダノ シューナンカ ミンナ コンカスリジャ ネーカ  
はい) 飯田の人達 なんか みんな 紺餅(じゃ ないか

ナ。  
な。

B ソーソー。 ゴッ コレ キルト ゴ<sup>(25)</sup> ゴツイッ テューカナン ム  
そうそう。 <sup>x x</sup>ごっ これを 着ると <sup>xx</sup>ご<sup>xx</sup> ごっいって いうかね、  
カシノ。  
昔の。

A ソー。 ゴツイッテ ユーケドナー。 ソレデナー ワタシ コレ  
そう。 ごっいって 言うけれどなあ。 それでなあ 私が これを

キテツタラ ワラワレテナー ミンナニ。(笑) コンナノ キ コンナ  
着て行ったら 笑われてなあ みんなに。 こんなの き こんな

ハハオヤノ テオリノ シマノ モノ キトルノワ オ<sup>xx</sup> ワシッ  
母親の 手織りの 縞の もの 着ているのは わし

キリナ。(Bハイ) アトワ ミンナ コンカスリズラ。  
だけなんだ。(はい) あとは みんな 紺餅だろう。

B ソーソー。  
そうそう。

A ワラワレテナー。 ハツカシカッタダ<sup>(26)</sup>。 ソノ ウチニナー ソッ  
笑われてなあ。 恥ずかしかったんだ。 その うちになあ

コラジューノ オカーマカ<sup>(27)</sup> テオリテ<sup>(27)</sup> テオリツチュー コトバク  
そちら中の 母親が 手織りで、手織りっていう 言葉は

ムカシ アツタカ ドーカ シランケードモ ソレデ コリヤー ト  
 昔 あったか どうか 知らないけれども, それで これは  
 ートイ モンダ<sup>28</sup> アリガタイ モンダゾツテ シトカ ワラツテモ  
 尊いものだ, ありがたい ものだぞって, 人が 笑っても  
 ワタシワ (Bハ一) キトツテ チューガクヲ ソツキョー シ  
 私は (はあ) 着ていて, 中学を 卒業 し  
 タ トキニ ハオリダケ オカーマカ コンカスリヲ ユサエテ  
 た ときに 羽織だけ お母さんが 紺緋のを こしらえて  
クレタ。  
 くれた。

B コンカスリ カツテ モラツテ。  
 紺緋を 買って もらって。

A ウン。 ソレデ トーキョーエ イッタ トキモナ コレヲ キテ  
 うん。 それで 東京へ 行った ときもな, これを 着て  
 ッタンダカラ。  
 行ったんだから。

B ジミダツタワナン。  
 地味だったわねえ。

A ウン ソーナ。 コレヲ キテツテ。  
 うん, そうだ。 これを 着て行って。

B (笑) ジミナ ムスコデ。  
 地味な 息子で。

A ウン ソレデ オカーマカ コサエテ クレタモンダデ トートイ  
 うん, それで お母さんが こしらえて くれたものだから 尊い  
 ゾツチュー キモチカ<sup>(28)</sup> アツタモンデ (Bハイ) キテッタンダナー。  
 そという 気持ちか あったものだから (はい) 着て行ったんだなあ

B ソーソー。

そうそう。

A コレ ドーダナ オネーサマ コレ。

これ どうだな。お義姉さま これ。

B ワカイ ジブンニワ カナシー ハズカシートカ (A ソ ソー)  
若い 時分には 悲しい, 恥ずかしいとか (そう そう)

オモイマスケド チョット オーキク ナツテクリャ…………。

思いますけれど, ちょっと 大きく なってくれば…………。

A イマ ミリャ ドーダナ コノ イー ガラノ ヨサ。

今 見れば どうだな, この 良い 柄の 良い。

B オヤノ<sup>(29)</sup> コシラエテ モラッタ モノワナン。

親に こしらえて もらった 物はねえ。

A イー ガラジャ ネーカナー。

良い 柄じゃ ないかな。

B イー シマオ イッショ ケンメー カンガエテ。

良い 絹を 一所懸命 考えて。

A ミンナ キノ キータ タイシタ モンダ。

みんな 気の 利いた 大した ものだ。

B ホントニナン。

本当にねえ。

A コレオ ソメタリ キヌイト イレタリ シテ。タイシタ モンダ

これを 染めたり 絹糸を 入れたり して。大した ものだ

ナー。

なあ。

B オトコバッカ ヨニンヲ ソイテモ ハカマニ ハオリニ (A ソ)

男ばかり 4人を, それでも 袴に 羽織に (そう)

一ナ) キモノト (Bソー) ミンナ オッテ キセタンダデ  
だ。 着物と (そう) みんな 織って 着せたんだから

ムカシノ シトワ エラカッタナン。

昔の 人は 偉かったねえ。

A ウン ソーナ。 ゼーンブ テオリテ (Bハイ) ヨニンノ コ  
うん, そうだ。 全部 手織りで (はい) 4人の 子

ドモニ キ ナンシテ クレテ タビダッテ ミンナ.....  
供に <sup>xx</sup> 何して くれて 足袋だって みんな.....

B ジブンテ ヌッテ。  
自分で 縫って。

A ウン。 タビモ ジブンテ (Bハイハイ) コサエテ クレタ。  
うん。 足袋も 自分で (はいはい) こしらえて くれた。

ハカマワ シタテヤサン ダシタケレドモ ハカマノ タタミカタ  
袴は 仕立屋さんに 出したけれども 袴の 畳み方も

モ オシエテ クレテ (Bハイ) ワシ チューガク イッ  
教えて くれて, (はい) わしが 中学に 行って,

テ オトコノ クセニ チューガク イチネンデ ジューサン  
男の子の くせに 中学 1年で, 13か

カ シデ (Bハイ) ハカマ タタンダラ ミンナ ビックリ  
4で (はい) 袴を 畳んだら, みんなが びっくり

シテナー。

してなあ。

B ショーシシャ <sup>(30)</sup> デ。  
尚志社で。

A ウン キレーニ タタンダニー。  
うん, きれいに 畳んだよ。

B ハー。  
はあ。

A ハカマノ ヒボノ ムスビカタナンテ ムズカシーモノ。  
袴の 紐の 結び方なんて 難しいもの。

B ハイ。ソーソー。(A フン) アノー ナンタ" イシダタミニ ムスン  
はい そうそう。(ふん) あのう なんだ, いし畳みに 結ん  
デナン。  
でねえ。

A ソーナ。(B ハイ) アー ユー コト チャント オボエーテ<sup>(31)</sup>  
そうた" (はい) ああ いう こと ちゃんと 覚えて。

B ソエテ オボエテ オイデル。アノ タビヲ ヒボタビヲナン (A ウン  
それで 覚えて いらっしやる。あ、足袋を, 紐足袋をね, (うん,  
ヒモタビ) ヌイテ コシー コー ブラサケテ (A ソーソーソ  
紐足袋) 脱いで 腰へ こう ぶらさげて (そうそうそう  
ーソー ウン) アルイトツタ ジャネー。(A エー) アツク ナルト ヌイテ コ  
そう, うん) 歩いていたじゃない。(ええ) 暑く になると 脱いで  
シエ ブラサケテ。  
腰へ ぶらさげて。

A ソレカ" ウツトルノワ タイタイ コハゼテ コハゼ。  
それが 売っているのは 大体 ~~xxxxxxx~~ こはぜで, こはぜ。

B コハゼテ。  
こはぜで。

A テ" ヒモタビナンカ ナイモンテ アレモ (B ナイモンテ)  
で 紐足袋なんか 無いものだから, あれも (ないものだから)  
ハズカシカッタ ケードナー (B ソーソー) ソノ ウチニ マー  
恥ずかしかったけれどなあ (そうそう) その うちに まあ

オカーマワ<sup>(33)</sup> コドモよ オモッタカ<sup>(34)</sup> コサエテ クレタモンダ<sup>(35)</sup>テッチ  
お母さんは 子供と 思ったか こしらえて くれたものだからと

ッテ オシマイニワ モー ホコリッテ ユーカネー<sup>(35)</sup> (B ユー  
いて、 終わりには もう 誇りと どうかねえ (B ユー

ソーダナン ハイ) カンシャッテ ユーカ ソンナ キモチダナ  
そうですね はい) 感謝と どうか そんな 気持ちだな、

イマカラ カンカエテ ミルト。 (B ソーソー) ソンナ キ  
今から 考えて みると。 (B そうそう) そんな

モチデ ヤッ ヤットリマシタナー。 ワシャ イマ ミテモ コ  
気持ちで<sup>xxx</sup> やってましたなあ。 わしは 今 見ても

ーンナ ガラ イー ガラダト オモナー。 こんな 柄 悪い 柄だと 思うなあ。

B アリマスニ イマモ。 コンヤ モッテ クリャ ヨカッタナー  
ありますよ、今も。 今夜 持って くれれば よかったなあ、

アノ クラニ。  
あの 蔵に(あるのを)。

A ソーカナ アリヤー……。  
そうかな あれは……。

B ネマキデモ コシラエテ センセンテモ<sup>(36)</sup> キテ イタダキャ ヨ  
寝巻でも こしらえて 先生にでも 着て いただけは よ

カッタト オモッテ。  
かったと 思って。

A ソーカナ。 コリャ ダイジニ シマツキナヨ。 コリヤー ト  
そうかな。 これは 大事に しまっておきなさいよ。これは

ートイ モンダニー。  
尊い ものだよ。

B アノ シマノ ~~~~~  
あの 縞の .....

A ドノ ウチニモ アルラカ コー ユー モナ  
どの 家にも あるのだろうか; こう いう ものは。

B サー ミナミノ<sup>(37)</sup> アタリニワ マダ アノ フトンヲナン (A フー  
さあ、 南の あたりには まだ あの ふとんをねえ、  
ンフン) ヤッパリ ジオリノ フトンヲ コシラエテ オイデマ  
ふんぶん) やっぱり 織りの ふとんを こしらえて いらっし  
スニ。

やいますよ。

A ハー。 シマツノ イー ウチジャ .....  
はあ。 始末の いい 家では.....

B ソーソー。  
そうそう。

A トットイタワナー。  
取って置いたよなあ。

B ハイ。  
はい。

A コリヤー トータイ モンター。  
これは 尊い ものだ。

## 注

- (1) BはAの実兄の妻にあたるのでこう呼ぶ。オネーサマよりも少し敬意を低くし、親愛の気持ちとこめた呼び方はオネーマ。
- (2) 語源的には言うまでもなく「ご無心」。
- (3) シマチョーは「縞帳」で「縞手本」のこと。縞織物の切れ端を貼りつけた見本帳。
- (4) オールであられる敬語動詞の過去形。「収録地点とその方言について」の「3.収録した方言の特色」の中の「③文法上の特色」を参照されたい。
- (5) [hai]
- (6) [nãi]。「A.収録地点とその方言について」の「B表記について」の関係部分を参照。
- (7) もっとも年長の者ではデーテ [de:te] が聞かれる。いわゆるサ行イ音便はこの方言では以前はかなり行なわれていた。
- (8) 共通語の文末助詞「の」の用法に近く、断定表現に用いられ、語調をやわらげる。ただし、共通語とは異なり、男性も使い、-ノヨヤ-ノネとなることはない。
- (9) 同じようにソーシテ、ソレデなどもホーシテ、ホイデなどとなる。-カナは話し手の清水氏によれば目上、目下の区別なく使われるという。
- (10) ゴラン(ご覧)に対して、注(4)で述べたオールの敬語動詞の形式をあてはめたもの。ただし、オゴラントのみで、オゴランルやオゴラントなどの形はない。
- (11) 義姉であるBに対してAはかなり尊敬表現を使っているが、Bがこの部分に-ナンを使って敬意を示すのに対し、Aはほとんどの場合-ナーを使い、-ナンは1・2の例外を除き使っていない。これは、男性と女性との違いか。あるいはこの地方の中心都会飯田市を中心に新たに起こりつつある軽い敬意をあらわす-ナーをとり入れたものか。
- (12) 注(1)参照。「祖父」「祖母」「父」は、それぞれ、オジーマ、オバ



ーマ, オトーマ。

- (13) -ナは断定をあらわす助動詞の言い切り。-ダも用いられるが、-ナの方が古いという。また、-ダに比べ断定をやわらげ、詠嘆の気持ちを多少こめ、ていねいさを加えるという。-ナは形容動詞の言い切りにも次のようにあらわれる。コノヘンワヨルワシズカナ(この辺は夜は静かだ)。
- (14) [hə:ë]のように聞こえる。この種の音声もハイで表記した。
- (15) -ラは推量を表わす。この方言では推量を表わすものとして、-ズラも用いられる。-ラと-ズラの相違は、-ラの方が確実性が高く、-ズラの方が低いという点にある。
- (16) [hũ:ĩ]。応答のことばはこのほかにもかなりかな表記の具体音声と離れているものがある。
- (17) [kireo]。助詞の「を」はていねいに発音されるときは、どのような環境にあっても[wo]。しかし、助詞「を」は清水、片桐両氏とも会話では広い母音[e], [a]の次では[o], [o]の次では[hako:](箱を)の場合のように長母音、狭い母音[i], [u]の次では[wo]で現れることが多い。
- (18) 一番品質の悪い繭。
- (19) タマは玉繭。2匹の蚕がいっしょに作った繭。
- (20) -ノを男性が使っている例。注(8)参照。なお、ナイは在来の方言ではネーとなるのが普通。ナイに限らず、この方言では、共通語の連母音の-アイ、-アエにあたるには-エーがあらわれるのが一般的だったという。
- (21) もっと年長の者ではマウエーテ[mawe:te]となる。いわゆるサ行イ音便形は今回の録音ではあらわれなかった。注(7)参照。なお、この点についての指摘は以下省略する。
- (22) 共通語のhiにこの方言のsiの対応する例はこの方言では少ない。「人」のほか「一つ」「ひとり」などに認められるにとどまる。
- (23) -カラは共通語的。在来の方言では-デヤ-モンデを使う。会話の中に-カラのあらわれることが時どきある。この点についての指摘は

以下省略する。

- (24) -ゾッキは「ばかり」を意味する接尾語。オケーコゾッキは正絹の意。
- (25) 「ごっごっした」の意。
- (26) 前にはハズカシクテとあるが、ここはハツカシカッタ。清水氏(B)は録音のこの部分を聞いて、後者は使わない言い方だと内省している。ハツカシカッタダは中川村在来の方言の言い方にはない。ハツカシカッタナあるいはハツカシカッタナダとなるべきところである。
- (27) この文はここで中断され、意味的に次には続かない。
- (28) [kimotʃiã]。
- (29) オヤニの言い間違い。
- (30) 清水氏(B)が通学した旧制飯田中学校の自主祭。飯田市上飯田にあった。
- (31) 言いよどみがあり、このような発音となる。
- (32) 今のこはぜの代わりに紐で結んだ足袋。
- (33) [oka:ma~] あるいは [oka:maya] のように聞こえるが、話し手の清水氏がオカマワだと聞き取られたため、本文ではそのように扱った。
- (34) よく聞きとれない。話し手である清水氏は本文のようではないかと言われる。
- (35) -ネーは共通語的。清水氏の発話には時折-ネーが混じる。ただし、この点についての指摘は以下では省略する。
- (36) 録音時に同席した馬瀬を指す。
- (37) 家号。「3.昔の嫁入り」の話し手小池氏の家の家号。

## 2 幼いころの遊び

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 清水悟郎 男 明治37年生れ

B 片桐とし子 女 明治39年生れ

A アリヤ ムカシワ ドーダツツラナー。アノー オトコノコト  
 あれは 昔は どうだっただろうなあ。あの 男の子と  
 オンナノコト イッショニ<sup>(1)</sup> アソンダ<sup>(1)</sup> コトモ アッタシ ベツベ  
 女の子と 一緒に 遊んだ ことも あったし、別々に  
<sup>(2)</sup>  
 ツニ アソンダ<sup>(2)</sup> コトモ アツタカ ナカニ アノー オトコノコ  
 遊んだ ことも あったが、中に あの 男の子で  
 デナー (B 笑 ハイ) ヨク オンナノコンナカエ ハイッテクト  
 なあ、 (はい) 良く 女の子の中に はいって行くと  
 オ ナンダツタヤー ナントカ イッチョ<sup>x</sup>ンチョ<sup>x</sup> イッチョ<sup>x</sup>ンチョ<sup>x</sup>  
<sup>x</sup> 何だったなあ、 何とか イッチョ<sup>x</sup>ンチョ<sup>x</sup>ン  
<sup>(3)</sup>  
 ントカ ナントカ イッテ フラッタ<sup>~~~~~</sup>ジャンカ。オトコノ ナカ  
 とか 何とか 言って 笑ったではないか。 男の 中  
 /.....。  
 の.....。

B オートコノ ナーカニ マメイリヨ。<sup>(4)</sup> (A イッチョ<sup>x</sup>ン。ウン。)  
 男の 中に 豆入りよ。 ( イッチョ<sup>x</sup>ン。うん )  
 ナー 「オートコノ ナーカノ マメイリ」。  
 なあ 「男の 中の 豆入り。」 何とか 言う。

A ナントクデ イッチョ<sup>ン</sup>チョ<sup>ン</sup>ントカ ( B 笑 ) イッテ カラカ  
何<sup>と</sup>か<sup>で</sup> イッチョ<sup>ン</sup>チョ<sup>ン</sup>と<sup>か</sup> 言<sup>っ</sup>て <sup>か</sup>ら<sup>か</sup>

ッタナー。  
ったなあ。

B ソーソー。  
そうそう。

A ソースト<sup>ー</sup> コンドワ<sup>コ</sup> オトコ<sup>デ</sup> オンナノ<sup>ノ</sup> ナカエ<sup>エ</sup> ハイッ<sup>タ</sup> ヤ  
そう<sup>す</sup>ると 今<sup>度</sup>は 男<sup>で</sup> 女<sup>の</sup> 中<sup>へ</sup> は<sup>い</sup>った <sup>や</sup>

ツカ<sup>ハ</sup>ズカシ<sup>ガ</sup>ッテ<sup>カ</sup> エッ<sup>テ</sup> キ<sup>テ</sup> イッ<sup>シ</sup>ョニ<sup>ニ</sup> ナッ<sup>テ</sup> コ  
つ<sup>が</sup> 恥<sup>ず</sup>か<sup>し</sup>が<sup>っ</sup>て 帰<sup>っ</sup>て 来<sup>て</sup>, 一<sup>緒</sup>に な<sup>っ</sup>て

ンドワ<sup>コ</sup> オトコ<sup>ワ</sup> タカシ<sup>カ</sup> タカシ<sup>ッ</sup>チュ<sup>ッ</sup>タナー<sup>タ</sup> タケウ<sup>マ</sup>ノ<sup>ノ</sup>  
今<sup>度</sup>は 男<sup>は</sup> タカシ<sup>か</sup>, タカシ<sup>と</sup>い<sup>っ</sup>た<sup>な</sup>あ, 竹<sup>馬</sup>の<sup>こ</sup>と

コト<sup>タ</sup>カ<sup>タ</sup>カシ<sup>。</sup> ( B タケウマノ コトオナン。 ハイ。 )  
と<sup>タ</sup>カシ<sup>。</sup> ( 竹<sup>馬</sup>の<sup>こ</sup>とを<sup>ね</sup>え。 はい。 )

タカア<sup>シ</sup>ダ<sup>ナ</sup>ナー<sup>ア</sup> リヤ<sup>ー</sup>。 タカシ<sup>ニ</sup> ノッ<sup>テ</sup>ー<sup>ソ</sup>イ<sup>カ</sup>ラ<sup>ア</sup>  
タカア<sup>シ</sup>(高<sup>足</sup>)だ<sup>な</sup>あ あ<sup>れ</sup>は。 タカシ<sup>に</sup> 乗<sup>っ</sup>て <sup>そ</sup>れ<sup>か</sup>ら

リヤ<sup>カ</sup> タア<sup>シ</sup>ト<sup>ビ</sup> アリヤ<sup>シ</sup>ン<sup>ゴ</sup>ロ<sup>ッ</sup>チュ<sup>ッ</sup>タ<sup>カ</sup>ナ<sup>オ</sup>ト<sup>コ</sup>ノ<sup>ノ</sup>  
あ<sup>れ</sup>は 片<sup>足</sup>跳<sup>び</sup>, あ<sup>れ</sup>は シン<sup>ゴ</sup>ロ<sup>と</sup>言<sup>っ</sup>た<sup>か</sup>な, 男<sup>の</sup>子<sup>は</sup>。

コワ<sup>シ</sup>ン<sup>ゴ</sup>ロ<sup>テ</sup> ドコ<sup>マ</sup>テ<sup>イ</sup>ケ<sup>ル</sup>カ<sup>シ</sup>ン<sup>ゴ</sup>ロ<sup>ノ</sup> キョ<sup>ー</sup>ン<sup>ノ</sup>  
シン<sup>ゴ</sup>ロ<sup>で</sup> ど<sup>こ</sup>ま<sup>で</sup> 行<sup>け</sup>る<sup>か</sup> シン<sup>ゴ</sup>ロ<sup>の</sup> 競<sup>争</sup>を

ニ ( B ハイ ) <sup>(5)</sup>シル<sup>ト</sup>カ<sup>ナ</sup>ナー<sup>。</sup> オン<sup>ナ</sup>ノ<sup>コ</sup>ワ<sup>ド</sup>ン<sup>ナ</sup> コ<sup>ト</sup>  
はい) <sup>す</sup>ると<sup>か</sup>な<sup>あ</sup>。 女<sup>の</sup>子<sup>は</sup> ど<sup>ん</sup>な <sup>こ</sup>と<sup>を</sup>

シツ<sup>ラ</sup>。  
した<sup>ら</sup>う。

B オン<sup>ナ</sup>ノ<sup>コ</sup>ワ<sup>ナ</sup>ン<sup>エ</sup>ー<sup>オ</sup>テ<sup>ダ</sup>マ<sup>ト</sup>カ<sup>オ</sup>ハ<sup>ジ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ナ</sup>ン<sup>。</sup> ヤ  
女<sup>の</sup>子<sup>は</sup>ね<sup>え</sup> え<sup>え</sup> お<sup>手</sup>玉<sup>と</sup>か お<sup>は</sup>い<sup>き</sup>と<sup>か</sup>ね<sup>え</sup>。

リマシタナ。

やりましたね。

A ウン オハジキ ヤッタナ。

うん、おはじき やったな。

B ソノ オハジキモ イマワ アノ イロイロ ウットリマスケドナ  
その おはじきも 今は あの いろいろ 売っていますけれどね、

ン ( Bウン ) ムカシワ ナイテ ソノー サッキモ イッタヨ  
( うん ) 昔は、無いから、その さっきも 言った

ーニ コ コシブノ カワニ<sup>(8)</sup> キレーナ イシカ アッテ アブラ  
ように<sup>xx</sup> 小波の 川に きれいな 石が あって、油石

イシツチューノ ヒロツテ キテ ( Aアー ソーソー ) アレテ  
こののを 拾って 来て ( ああ そうそう ) あれで

オハジキ ヤリマシタンナ。 ソシテ アノー ( A イシー ヒロツテ  
おはじきを やりましたの。 そして あの ( 石を 拾って

キタナー ) オマネキツ チュッテナン ( Aウン ) コノ テノヒラエ  
来たなあ ) オマネキと言ってねえ、 ( うん ) この ？のひらへ

ノセテ コー ヤッテ コー スルノー オマネキツ チュイマシタ  
乗せて こう やって こう するのと オマネキ と言いましたよ。

ニ。

A ウー ウーン アッタ アッタ。 ( B笑 ) アノー ソレワ オ  
うー うーん、 あった あった。 ( ) あの それは

ハジキデ<sup>(10)</sup> オイテ タクサン ニキッテ ( Bハイ ) コヤッテ  
おはじきを 置いて たくさん 握って ( はい ) こうやって

コー ヤルツテ ( Bハイ ) ソーソーソーソー。 ミトツタ。  
こう やると、 ( はい ) そうそう そうそう 見ていた

B オマネキツチュイマシタンナ アレナソ。 (A フンフン) タク  
オマネキと言いましたんですよ、あれね。 (ふんふん)

サン トツタ シトカ  
たくさん とった 人が。

A アレオ タクサン タクサン よっしゃ... (Bハイ) ソレカラ ナ  
あれを <sup>xxxxxxxx</sup> たくさん とった... (はい) それから  
ニカ コー ポロポロト コボシテ マタ ナニカ ヤラナンタ。  
何か こう ぼろぼろと こぼして また 何か やらなかつた。

B コボシテワ ドーダツタカ オボエトリマセンケドナン。  
こぼしては どうだったか 覚えていませんけれどねえ。

A アリヤ コー ヤッテ コー ヤッテ, オレ オトコモ ヤツタ  
あれは こう やって, こう やって, <sup>xxxxx</sup> おれ, 男も やったな。  
ナ。

B ウン。 ソレワ オハジキ。  
それは おはじき

A オハジキデ ヤッテ イチバン サイゴワ ニカイ ヤラニヤ イ  
おはじきで やって 一番 最後は 二回 やらなくて  
カナクテ<sup>(11)</sup>。  
いけなくて。

B ソノ アタッタノワ トツテ。  
その あたったのは とって。

A ツギワ..... (12) トツテ。 イチバン サイゴ ミンナ ヤル  
とって。 一番 最後に みんながやる

トキニワ サイゴワ コー ニカイ コ ヤッテ (Bハイ)  
時には, 最後は こう 二回 こう やって (はい)

ニカイ セーコー スレバ トッテ ( B トッテ ) アレワ オ  
ニ回 成功 すれば とって ( とって ) あれば

トコノコモ ヤッタナ。

男の子も やったな。

B オトコノコモ ヤリマシタカシラナン ハイ。

男の子も やりましたかしらねえ、(はい)。

A ヤッタナ。 イッションナッテ。 ソレカラ アノー トキドキ  
やったんだ。 一緒になって。 それから あの 時々、

一 キット トーキョーノ キンジョエ イッタ シトカ モツ  
きつと 東京の 近所へ 行った 人が 持って

テ キタンダカ アルイワ オイセサマエ イッテ カエリ<sup>(13)</sup>カ  
来たのが、 あるいは お伊勢さまへ 行って 帰りに

ッテ キタンダカ ( B ハイ ) カイカラテ オハジキ ヤツラ。  
買って 来たのが、 ( はい ) 貝がらで おはじきを やったぞう。

B アー カイヲナ。 アノ ナンチュイマシタッタ。 キシャゴ<sup>o</sup> シ  
ああ 貝をね。 あの なんて言いましたか。 キシャゴ 知

ッテ オイデマスカナ。 ( A ウン シットル アノ ) コー コノ  
って いらっしゃるかな。 ( うん、知っている。あの ) こう この

クライ チーサクテ ( A ウン チーサクッテ ) コー キリキリ  
くらい 小さくて ( うん 小さくて ) こう キリキリ

キリット ( A ウン ) アノ ( A アレデ ) キシャゴ<sup>o</sup> ヲツチュイ  
キリット、( うん ) あの ( あれで ) キシャゴって 言い

マシタナ。 ( A アレデ ヤリマシタナ。 ) アレヲ ヤリマシタ  
ましたね。 ( あれで やりましたな。 ) あれを やりました

ナ。 アレワ チーサクッテ タクサン コー ノサツテナン。  
ね。 あれば 小さくて たくさん こう(てのひらに) のってねえ。

A ソーソー。アレヲ フッ オミヤゲニ カッテ キタンダナー  
そうそう。あれを <sup>xxxx</sup> お土産に 買って 来たんだなあ、  
キット コドモノ。  
きっと 子供の。

B フクロイ ハイッテナン。  
袋へ 入ってねえ。

A ウン。フクロイ ハイッテ オリマシタナー。  
うん 袋へ 入って いましたなあ。

B ハイ。イマノヨーニ キレーナ ホカノ オモチャ ナイテ アー ユ  
はい。今のように きれいな ほかの おもちゃが" ないから、ああ い  
ー モノガ オモチャデ オミヤゲダッタナン。  
ものが おもちゃで" おみやげ"でしたねえ。

A ソーソー。ソーダナ。アリマセンデシタナ。 (Bハイ) ジブ  
そうそう そうだな。 ありませんでしたな。 (はい) 自分  
ンデ マー クフー シテ ヤッタ<sup>ン</sup>ダナー。  
で まあ 工夫 して やったんだなあ。

B ソーソー。  
そうそう。

A ソレカラ オトコノコワ ソレ ケン<sup>(14)</sup> ケンチュッタケドナ。  
それから 男の子は、 それ、 ケン、 ケンと言ったけれど"な。

B アー ソーソー。アレ ナンチュイマシタッタネ。<sup>(15)</sup> イマノ シ  
ああ そうそう。あれを 何と言いましたっけね。 今の  
ユーニ イワセルト。  
人達に 言わせると。

A イマノ シューワネ ナントカ ユンダワ。アレオ ヤッチャ  
今の 人達はね、 何とか 言うんだわ。 あれを やっては



イカンチュッテ (Bハイ) ソレカラ モー シトツ オトコ  
 いけないと言って、 (はい) それから もう 一つ 男の子  
 ノコガナー クキノ ナカイ クキノ ゴスノクキノナンカラナー (   
 かなあ くぎの、長い 釘、5寸釘などをな、  
 Bハイ) ジエ コー ウチコンデー。  
 はい) 地へ こう 打ち込んで。

B アリヤ ナンテユイマシタッタナン。(16)  
 あれは 何と言いましたかねえ。

A アリヤ ナンチューチッタッタカナー。(17)  
 あれは 何と言ったかなあ。

B コドモア ヨク ヤリマシタニ。  
 子供は よく やりましたよ。

A ソーシテ ソレヲ ジブンテ ウチコンテ アイテノー タオス  
 そうして それを 自分で 打ち込んで、相手のものと 倒す  
 ヤツ ヤツテ。 (Bハイ) ソレガ ジブンノ アシー ササ  
 やつを やって。 (はい) それが 自分の 足に 刺さ  
 ッタリ スルモンダカラ アブナイカラ (Bハイ) ヨセヨナン  
 ったり するものだから 「あぶないから (はい) よせよ」など  
 チュッテ (18) センセーニ イワレタノーオー (19) オモイダシマスナー。  
 と言って 先生に 言われたのを 思い出しますなあ。

(Bハイ) アレワ ナンチュー アソビダッタナー。  
 (はい) あれは 何という 遊びだったかなあ。

B ナントカ ユッタナン。 ソレカラ アノ ボーカクシトカ ユッ  
 何とか 言いましたねえ。 それから あの 棒隠しとか 言ッ  
 テナン (Aソー) アノ イシ ツチベタエ コー ボーテ (   
 ねえ (そう) あの xxx 地面へ、 こう 棒で (

A カクズラ ) アナオ コシラエテ ソンナカエ ボーオ コ  
書くんだらう) 穴を 作って その中へ 棒を

イレテ ( Aウン カクシテ オイテ) ソシテ チョット コー  
入れて ( うん 隠して あいて) そして ちょっと こう

ナゼテ カクシテ ( Aウン ) ボーカクジツチューノオ ヤリマシ  
なせて 隠して ( うん ) 棒隠しというのと やりまし

タンナ。 ( Aウン ) ドコニ カクレトルカナンテ。  
たのよ。 ( うん ) 「どこに 隠れているかな」など

A ソー。 ソレカラナー ボーカクシニ ニタノデナー アノー シ  
そう。 それからなあ 棒隠しに 似たのでねえ あの

ベン ジベ ジベ タオ フカーフ ホツテ コンナ ( Bハイ )  
地面を 深く 掘って、 こんな ( はい )

マル カイタリ シカク カイタリ シテ ( Bハイ ) ホーシテ  
まるを 書いたり 四角を 書いたり して、 ( はい ) そして

コー カクシテイテ ( Bハイ ) ソーシテ ドコニ ナニカ  
こう 隠しておいて ( はい ) そうして どこに 何か

カイト アルカッテ ユーノーネー アテッコー シテ ( B  
書いて あるかと いうのをねえ、 当てっこを して、

ハイ ) ソノ トリー コー イイクカ ドーカ ソレモ  
はい ) その 通り こう 行くか どうか、 それも

マタ <sup>(20)</sup> アレオ オトコノコワ ヤッタナー。 ソレ……  
また あれを 男の子は やったなあ。 それ……

B オンナノコワ ヤラナンダ ナン ソレワ。 ハイ。  
女の子は やらなかったね、 それは。 はい。

A エー オトコ ソー オンナノコワ ヤラナカ <sup>(21)</sup> ナンダ。 ア ソ  
ええ そう、 女の子は やら なかった。 あ

レカラ アレワ ナンナ ゴーリヲ (B ウーン) ケ アノ ケ  
それから あれは 何だ, そーりを, うらん) <sup>xx</sup> あの 跡心

アゲテ。  
上げて。

B ゲータ ゲタ コンボトカ イーマシタワネ。  
「げた げた コンボ」とか 言いましたわね。

A アーソーカ。アレワ ナニカナ。ウラカ デルカ オモテカ  
ああ そうか。あれは、何かな。裏が 出るか 表が  
デルカツチュ アテッコ シタノカナ アリヤー。(B ソーソー)  
出るかという 当て合いを (たのかな, あれは。 そうそう)

アレヤッタナー。  
あれを やったなあ。

B アノー アレ オシ<sup>x xx</sup> アシタ オテンキニ ナレトカ イッテ。  
あの, あれ, あした お天気に なれとか 言って。

A ウーン ソーソー。  
うらん そうそう。

B オ<sup>xx</sup> オモテガ デタラ オテンキデ (A ウン) ウラガ デタラ  
表が 出たら お天気で, うん) 裏が 出たら

アメフリダヨッテ ソーユー コトモ ヤリマシタンダニ。  
雨降りだよって そういふ ことも やりましたんですよ。

A ウン ソーダ ソーダ。(B ハイ) アレ ゴーリバキテ ソー  
うん, そうだ, そうだ。(はい) あれは そーりばまで, そーり

リッチャー ミンナ ソレ ムカシア ミンナ コドモ ミンナ  
といえは みんな, それ 昔は みんな, 子供は みんな

ゴーリダ<sup>ッ</sup>タンテナ。(B ハイ) ゴーリバキテ ヤッテ ソレ  
そーりだ<sup>ッ</sup>たからな。(はい) そーりばまで やって, それを

ヤリマシタナー。アレ オトコノコモ オンナノコモ ヤリマシタ。  
やりましたなあ。あれを 男の子も 女の子も やりました。

B オンナノコモ ヤリマシタ。  
女の子も やりました。

A ヤリマシタナー。  
やりましたなあ。

B ハイ。ソレデ ソノ オンナノコワ オテダマ (Aウン) オトコノ  
はい。それで その 女の子は お手玉, (うん) 男の  
シューア ケケンノ コト ナンテ ユッタッタカナ。イマノ  
衆は<sup>xx</sup> ケンの 事を 何で 言ったっけかなあ。今の  
コトバデ ユート アレワ (A エー アレワネー) ナントカ ユッタナー。  
言葉で 言うと あれば (ええ, あればねえ) 何とか 言ったなあ。

A ココラジャ ケンテ ユーケドネー イータノ マワリデワネー  
こころへんでは ケンと 言うけれどねえ, 飯田の 回りではねえ  
(B ハイ) ナントカ イッタナー。イマ コドモ ベチャッ  
はい) 何とか 言ったなあ。今 子供は ベチャと  
チュー トコモ アルナー (B笑) ペチャット コー ウツカラ ペ  
言う所も あるなあ) ペチャット こう 打っから  
チャツチュー コドモガ アルケードモ。  
ペチャツという 子供が いるけれども。

B アレ マタ ハヤツテ オリマシタニ コノコロ。  
あれが また 流行って ありましたよ, この頃。

A ソーカナ。  
そうかな

B フユンナルト。  
冬になると。

A アレワネー ガッコーデワ シトコロ シテ イケ…ネーナンテ<sup>(22)</sup>  
あれはねえ、学校では ある一時期 には いけ ないなどと  
センセーカ ユツター。  
先生が 言って。

B アレ カケトイテ トリマステナン。  
あれは、賭けておいてから 取りますからねえ。

A ソーソーソーソー。アー トルモンテ トツタリ (B ハイ)  
そうそう そうそう。 あゆみに とるので、 とったり、 (はい)  
マケタリ カッタリ (B ソーソー ハイ) スルモンテ ウン。  
負けたリ 勝ったリ (そうそう はい) するものだから、うん。

B カケゴトノヨーナ。  
賭けごとのような。

A ソー ソレデ<sup>(23)</sup> イカンツチュツタンダナー (B ハイ) ソンナ  
そう それで いけないと言ったんだなあ (はい) そんな  
コト アリマシタナー。  
ことが ありましたなあ。

B ソレデ ソノ オタマノ ウタオナ (A ウン) アノー…  
それで その お手玉の 歌をな、 (うん) あのう…

A オボエテ オイデル。  
覚えて いらっしゃる。

B シットリマスニ。 ヤツテ ミマスカ。  
知っていますよ。 やって みますか。

A ヤツテ ミナ チョット。  
やって みな、 ちょっと。

B アノー コー タクサン ヤツテ カッ カッタ シトコナン (A  
あのう、 こう、 たくさん やって 勝った 人がねえ)

ウン) アレ ヤリマスワケダ。(Aウン) ソレテ 「オシト  
うん) あれと やりますわけです。(うん) それで 「オシトツ(あつ)

ツ オロシテ オロシテ オサライ」 ッテナ (Aウン) ソレカ  
オロシテ オロシテ オサライ」 とね、(うん) それから

ラ 「オミーンナ オサライ」 ソレカラ 「オーテバサミ オー  
「オミンナ オサライ」 それから 「オテバサミ(お手挟み)

ーテバサミ オーテバサミ オロシテ オッサーライ」 デ コンタ  
オテバサミ オテバサミ オロシテ オサライ」 それで、今度は

コユビデ コー ハサムノワ オツリンコ ッチュイマスンナ。(A  
小指で こう 挟むのは オツリンコと言うんです。

フン フーン) 「オツリンコ オツリンコ オツリンコ オロシ  
ふん ふうん) 「オツリンコ オツリンコ オツリンコ オロシ

テ オサラ……」 ソレオ ズート ヤッテナン (Aウン) マ  
テ オサラ……」 それを ずっと やってねえ (うん) まだ

ダ アノー (Aツズ……) 「オーキナ ハーショ コブレ」  
あのう (続……) 「オオキナ(大きな)ハショ(橋を) コブレ(くぐれ)」

トカナン (Aフンフン) ヤリマシテ。  
とかねえ (ふんふん) やりました。

A ツズケルダケ ツズケルノ カナー。  
続けられるだけ 続けるのかなあ。

B ハイ。 ズート ツズケテナン (Aフーン) ドコマテ イッ  
はい ずっと 続けてねえ、(ふうん) どニまで いっ

タカワ アマリ オボエトリマセンケドナン (Aフン) 「チー  
たかは あまり 覚えておりませんけれどねえ、(ふん) 「チイサナ

サナ ハーショ コブレ」トカ コー ヤットイテ (Aフン)  
(小ね) ハショ コブレ」とか、 こう やっておいで (ふん)

アタマ アゲテ オテダマ ムコーエ オクットイテ チャット  
頭を あげて お手玉を 向こうへ 送っておいで、 すばやく

ウケマスナ コー ヤッテ。 (A フンフン) 「オーキナ  
受けますのです こう やって。 (ふんふんふん) 「オオキナ

ハーショ コクレ チーサナ ハーショ コクレ トカ ユツテ  
ハショ コクレ, チイサナ ハショ コクレ とか 言つて

(A フンフン) ソー ユノー ズット ヤリマシタニ。 ハイ。  
(ふんふん) そう けうのを ずっと やりましたよ。 はい。

A ハー オトコノコダカラ オボエトラナカッタカ ソー キー  
はあ、 男の子だから 覚えていなかったが そう <sup>xx</sup> 聞いた  
タヨーナ キカ スルナ。  
ような 気が するな。

B コー ミンナ ヨツテ キテ イ エンカワナンカデ ナン ヤリマスノ。  
こう、 みんな 寄って 来て、 縁側などでねえ、 やりますの。

A フンフン ウン ウン ハー エンカワノ ヒナタボッコ (B ハ  
ふんふん うん うん, はあ、 縁側の 日向ぼっこ は  
イ) シナカラ <sup>(24)</sup>  
い) しながら。

B ソーソー。(A フンフン) ホテ アノ キョクトリツチューノモ ヤリ  
そうそう。(ふんふん) それで あの キョフトリというのよ

マシタナ。(A ホーホー) ミツツテ ヤツタリ ヨツツテ  
やりましたのです。(ほうほう) 三つで やったり 四つで

ヤツタリ (A フーン) デキン シトワ フターツテ コー ヒ  
やったり (ふうん) できない 人は 二つで こう

ヨイヒョイト (A フンフンフン) ヤリマシタケドナン。  
ヒョイヒョイト (ふんふんふん) やりましたけれどねえ。

A イマノ ソノー ウタオネー アノー キートツテ ワシナー オ  
 今の その 歌をねえ、 あのう 聞いていて わしなあ  
 モイダシタノワ アノー コー ユー ウタ オボエテ オル オ  
 思い出したのは、 あのう こう いう 歌を 覚えて いる、  
 イデルカナ。  
 いらっ(やるかな。

B ハイ。  
 はい。

A 「ヤマ コシテ カワ コシテ コーヤノ オコンサ ホイ」  
 「ヤマ(山)コシテ カワ(川)コシテ コウヤ(紺屋)オコンサ ホイ」

B アーリマス アリマス。(25) ハイ。  
 あります、 あります。 はい。

A アレワナー アレワ ナニウタツチューカ シランケド コドモノ  
 あれはねえ、 あれは 何歌というか(どうか) 知らないけれど 子供の  
 ウタツタ ワラベウタダケドナー。 (Bエー) アレナー カシ  
 歌った 童歌だけれどなあ。 (ええ) あれなあ 柏  
 ワバラ(26) = コーヤカ アツツラ。  
 原に 紺屋が あつたろう。

B ア ハーハーハー。 オコンサンチュー シト アリマシタノ。  
 あ、 はあはあはあ おこんさんという 人が いましたの。

A ウン アツタンナ。 コーヤカ アツタン。  
 うん、 あつたんだ。 紺屋が あつたんだ。

B フーン フン。 (27) デ アリマシタナン。  
 ふうん ふん。

A ソコデナー。  
 そ でなあ。



B アレナー 「ヤーマ コシテ カワ コシテ カワラノ オコンサ  
あれなあ , 「ヤマ コシテ カワ コシテ カワラ(川原)ノ オコンサ  
ホイ アンベ イカンカナ」ツテ コー イッタダナ。  
ホイ アンベ(遊び)イカンカナ(行かないかね)と こう 言ったんだな。

A フーン。  
ふうん。

B アーソボニ イキマシヨツチュ コトナンダナ アンベ イカーン  
遊びに 行きま(よう)という ことなんだね, 「アンベ イカンカナ」  
カナツテ ( Aアンベ フン ) ソレカラ ツレテクノ。  
と呼んで ( アンベ ふん ) それから 連れていくの。

A ワシノワナ オモシロイニ。  
わ(のは)な おもしろいよ。

B ハイ。  
はい。

A 「ヤーマ コシテ カワ コシテ コーヤノ オコンサ ホイ」  
「ヤマ コシテ カワ コシテ コウヤノ オコンサ ホイ」  
ツテエートナー。  
というとなあ。

B ハイ。  
はい。

A 「マダ」ネテ オルニ」ツチュツテ 「ネボータナム」ツチュツテ。  
「マダ」ネ(寝)て オル(いお)と いって 「ネボウタナム(寝坊だ)ね」といって。

B アッ ソーソー。  
あっ そうそう。

A ソレカラ ソノ ツキ マタ 「ヤマ コシテ カワ コシテ コ  
それから その 次は, また 「ヤマ コシテ カワ コシテ

ーヤノ オコンサ ホイ ヲツチュート 「イーマ カオ アラット  
 コウヤノ オコンサ ホイ」っていうと, 「イマ カオ(顔) アラット  
 ルニ ヲツチュッテ 「オネボ-ダ」ナム ヲツチュッテ 「ヤマ コシ  
 ル=(洗っているよ)」って 「オネボウダ」ナム」といって, 「ヤマ コシテ  
 テ カワ コシテ コーヤノ オコンサ ホイ ヲツチュット 「イ  
 カワ コシテ コウヤノ オコンサ ホイ」というと 「イマ  
 マ オマンマ タブトルニ ヲツチュ。 「オネボ-ダ」ナム ヲツチュッ  
 オマンマ(ご飯) タブトル=(食べているよ)」と。 「オネボ-ダ」ナム」といって  
 チャッナエ。(28) ソーシテ オトノノデモネー (「ハイ」) アノー  
 はねえ。 (「男の子(ども)もねえ, (「はい」) ああう  
 ガッコ イキカケニ ソーシテ ユンテ」) アライタノ。  
 学校、行きがけに (「さうして 呼んで」) 歩いた。

B ハハハ。 アノー ムカシ アソビー テオ ツナイテ”イ  
 は、は、はあ。 ああう 昔は、遊びに 手を つないで

ツチャナン コー オーゼ”テ” 「ヤマ コシテ カワ コシテ カ  
 行ってはねえ (「大勢で」) 「ヤマ コシテ カワ コシテ

ワラノ オコンサ ホイ。 アンビ イムンカナ ヲツチュ。 アツオ  
 カワラノ オコンサ ホイ。 アンビ イムンカナ ヲツチュ。 ヤツを

ヤリマシタンナ ハイ。  
 やりましたの, はい。

A ア-ア- ソツカラ キタンダナー。  
 ああ、ああ, そこから きたんだなあ。

B ソレデ” カワラノ オコンサ”ツタケード” コーヤノ オコンサ”ダ”ツ  
 それで” 「カワラノ オコンサ」といったけれど” 「コーヤノ オコンサ”だ”た

タカモ シレマセン。  
 かも しれません。

A ソレデ エッ チョード イー コトニネー (B エッ) カシワバラニ  
 それで <sup>xxxx</sup> ちょうど 良い ことにねえ, (ええ) 柏原に  
 コーヤが アッタ ワケ。(B 笑) コンヤ コンヤッチュー ヤツ コ  
 紺屋が あった わけ。 ( ) コンヤ, コンヤという やつを  
コーヤッチェッタナー。  
 コーヤと言ったなあ。

B エー コーヤッチューノ アリマシタ。 キツツアッチュー オジ  
 ええ, コーヤというの , ありました。 「きつつあ」という おじさま  
サマデナン。  
 じねえ。

A ソー。 アノー ハクオバサマ<sup>(29)</sup>ノ ムコーノ ミチシタノ ウチカ  
 そう。 あの はまおばさまの 向こうの 道り下の 家が  
コーヤデナー ( B エー マエデ ソーソーソーハイ ) ソ  
 紺屋でなあ ( ええ, 前で, そうそうそうそう はい )  
 エダモンダカラ ソレ オボエテカラナー ソコエ ( B ハイ )  
 それだものだから, それを 知ってからなあ, そこへ ( はい )  
 イッテ オーキナ コエデ<sup>(30)</sup> ユートナー オバーサンニ オコラレ  
 行って 大きな 声で 言うとなあ おばあさんに 叱られて,  
テ ( B 笑 オコラレ…… ) ソンナ コト オモイダス ウン。  
 ( 叱られ…… ) そんな ことを 思い出す, うん。

B ヘエー。 ムカシワ ソンナヨーナ アノー ウタオ ウタッテナ  
 へええ。 昔は そんなような , あのう, 歌を 歌ってねえ。  
 ン。

A ソー ホントーノ ワラベウタデナー。  
 そう, 本当の 童歌でなあ。

B ソーダ<sup>32</sup>ナン。  
そうですね。

A エ。 ミンヨートシテノ ワラベウタツチューノカ<sup>(32)</sup> (B ハイ)  
ええ。 民謡としての 童歌というのが (はい)  
アツタトモナー。  
あつたと思うなあ。

B ソーソー。 ナンカ ナニカ アツタヨーナ キカ スルケド。  
そうそう。 何か, 何か あつたような 気が するけれど。  
ナニカ コメノ インマニ トート ソエテ トカエーノカ プリ  
何か 「コメ(米)ノ マンマニ トト(魚) ソエテ」 とかいうのが あり  
マシツラ。  
よ(に)び(は)。

A エー ソー ムー モナ ノツタ ウン。  
ええ そう いう ものが あつた, うん。

B アツタ。  
あつた。

A トト ソエテッテ シロイ マンマニ トト ソエテッテ シロ  
「トト ソエテ」って, 「シロイ マンマニ トト ソエテ」って, 白  
イ マンマニカ ムカシア タベレナカツタモンデ。  
ご飯なんか 昔は 食べられなからなものだから。

B ソエテ ダイジニ シテ クレタツチュ トダ<sup>32</sup>ンダ<sup>32</sup>ナー ウン。  
それが 大層に (て) きれにという ことなんばなあ, うん。

A ソー ムー コト ソー ムー ムト。 トト ソエテ ナンテ  
そう いう こと, そう いう こと。「トト ソエテ」なんて  
(B エー) トト ナンカ オシヨーカツシカ ツガンジャ ネー  
(ええ) お魚, なんか お正月(か) 付かないじゃ ない

カナー。

かなあ。

B ソーダナン。

そうですね。

A ウン。

うん。

B ムカシワ ホント アノー オコメノ ゴハンナンカ タベルッテ  
昔は ほんとうに あつ、 お米の ご飯なんか 食べるという

エ コト アリマエナシダテ A ソーソ エー ムギメシダト  
ことは ありませんで(だから、) とうそう えーノ 麦飯だとか

カ ヒエメシダトカ。

ひえ(稗)飯だとか。

A エー ソーデスネ。 アノ シロイ ゴハン タベタノワ……。

ええ、 そうですね。 あつ 白い ご飯を 食べたのは……。

じ オショーガツト……

お正月と……

A オショーガツト……。 カゾエル ホドシカ ナカツタナ。

お正月……。 数える ほどしか なかったな。

B エー。

ええ。

A <sup>(33)</sup>  
ダカラ シロイ マンマニ トト ソエテ ナンテ エーバ オー  
だから、 白い ご飯に お魚を 添えて なんて 言えば、 大

ゴチソーテ……。 <sup>(34)</sup>  
ウスヒキノ バンニ シンマイヲ ハクマイテ  
ご馳走で……。 白ひきの 晩に 新米を 白米で

タベタナ。

食べたな。

B ハイ。

はい。

A ソレカラ アト オショーカーツ サンカゲツ<sup>(35)</sup>ライト アトワ ゼ  
それから あと お正月 3ヶ月ぐらいと、あとは  
ンブ ムキメシダナ。  
全部 麦飯だな。

B ソーソー。

そうそう。

A エッ。アノ ハノマイ ノボマセン。(Bエー) エッ デ" ミンナ  
ええ。あの は米 食べません。(ええ) ええ。ど、みんな  
ムキオ ツクツテ オリマシタデ" (Bソー) エッ ムキメシオ  
麦と 1作( 作りましたので、\ せい) ええ、麦飯  
タバテ (36) プリマシメ。  
食べし やりました。

B ムキヲ ツクツテ アウヲ ツクツテナン。 エー。  
麦と 1作( 粟と 作りかえ、 ええ。

A アウモ タバタシ ノシヒチナンテ 「サエテナー。  
粟も 食べたし、粟食并なん(こいうことなの。

B コノコー ホシヤ (Aエー) ナントカ ユーノカ アッタジャ  
「コノユ(この子と)ホシヤ(欲しいな)ええ) なんとか 言うのが あったじゃ  
ナイカナン。  
ないですかね。

A ウン ソレモ アル。ウーン アノコー ホシヤ コノコー ホ  
うん、それもある。ううん、「アノコヲ ホシヤ コノコヲ ホ  
シヤトカ。 ミンナ ウタツタ ンダナー。  
シヤ」とか。みんな 歌ったんだなあ。

B コレモ アノ ヨク カンガエテ オリヤー オモイダシマスケー  
これも あの よく 考えて いれば 思い出しますけれ

ドナン。 (Aソーソー) チョット ニワカニワ (Aソー)  
ぢねえ。 (そうそう) ちよっと 急には (そう)

オモイダセマセンケド ナカナカ ムカシワ イロイロ アリマシ  
思い出せませんが、 なかなか 昔は いろいろ ありまし

タニ ソンナヨーナ ウタカ。  
たよ、そんなような 歌が。

A アーリマシタ アリマシター。(Bエー) ソンナ ジブ<sup>ン</sup>ノ  
ありました、 ありました。(ええ) そんな 時分の

イツショニ アソシタ シトカ ゴロクニン アツマッテー ミン  
一緒に 遊んだ 人が 5, 6人 集まって み

ナデ イツショニ<sup>(37)</sup> ウダツトル ウチニ ダレカ スューシズツ  
んなで 一緒に 扱っている うちに 誰かが 少いアッ

オモイダシテ フルツチュ コトカ アバナー。 ウン。  
思い出して くるという ことが あればなあ。 うん。

E ソー スルト オモイダシマスガナン。 ウン。  
そう すると 思い出しますがね。 うん。

## 注

- (1) [iſsoĩ]
- (2) [betsubetsui].
- (3) 話し手の清水氏は [warattazane:ka] と言ったつもりだと言われる。  
-ジャンカは若い人たちの間で使われる。
- (4) 話し手はこの辺をなかば歌っている。
- (5) 在来の方言ならばセル。
- (6) 在来の方言はオタマ。
- (7) 在来の方言はオハンジキ。
- (8) 小波川。上伊那郡と下伊那郡との境界を流れる川。録音した集落葛島の南縁を流れる。
- (9) 話し手の清水氏によれば、青黒いつるつる滑る感じのする石だという。
- (10) オハジキヲと言うべきところであろう。
- (11) 在来の方言ならばイカナンデ。
- (12) よく聞き取れない。この部分は清水氏の認定に従った。
- (13) [kaeriĩ]
- (14) めんこの方言。
- (15) -タツタは過去の回想をあらわす。-ネは共通語的な言い方。
- (16) いわゆるネッキ（根木）の遊びである。
- (17) ナンチュッタッタカナーとあるべきところであろう。
- (18) -ヨセヨナンテあるいはそれと類似の表現でないと、ヨセヨナンチュツテでは正確には文意が続かない。
- (19) 言いよどみがあってこうなる。
- (20) [mat] と聞こえる。
- (21) ヤラナカタと言いかけて、在来の方言の言い方のヤラナンダに言い変えたもの。
- (22) [ike ne:] と中にポーズを置いて発音している。なお、在来の方言ならばイカン、またはイケン。



- (23) 次のBの発話と重なり聞き取り不能。
- (24) -ナガラは共通語的。在来の方言ならばシシナのように-シナをとる。
- (25) コンテキストからいうと、〈オリマス オリマス〉とあるべきところ。
- (26) 中川村大字葛島の中の集落名。
- (27) Aの発話と重なり文字化不能。
- (28) -ナエはこの地方在来の方言ではない。-ナエは上伊那郡中部以北で行なわれる。
- (29) ハマオバサマのマの子音は'口を不完全に閉じた鼻音に聞こえる。
- (30) 在来の方言はオーバーサマ。
- (31) [hontto: no]。
- (32) [warabewtattʃu: noã]。
- (33) 共通語的な言い方。在来の方言ならばダモンデとかダデ。
- (34) 臼をひいてもみを落とす作業。せいぜい20俵か30俵程度の量で、5、6軒のユイでやり、ほとんど1日で終わったという。
- (35) サンガニチ(3ヶ日)の言いそこない。
- (36) 〈ムギメシオ タベテ シゴトオ ヤリマシタ〉ということか、それとも〈ムギメシオ タベテ オリマシタ〉とあるべきところを、こゝう言い違えたものか。
- (37) [iʃʃoĩ]。

### 3 昔の嫁入り

話(手)

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 小池千勢 女 明治32年生れ

B 清水悟郎 男 明治37年生れ

B ソレデモ ドーダナ チセマ。(1) ムカシト イッコー カワランチ  
 それでも どうだな、千勢さん。 昔と izzooに 変わらないと  
 ユーヨーナ タトエバ マー コトバノ モンダイデモ ニンジョ  
 いうような、 たこえば まあ 言葉の 問題でも 人情の  
 ーノ モンダイデモ カンコンソーサイノ モンダイデモ ナニカ  
 問題でも 冠婚葬祭の 問題でも 何かは  
 ワ ヤッパシ ナニカ ノコットルワ ノコットルナー。  
 やっぱり 何か 残っていることは 残っているな。

A ノコットリクハフカ。  
 残っているものは。

B ダンダン ナクナッチャー イクガナー。  
 だんだん なくなっては いくがなあ。

A オソーシキノ ケーシキ ケーシキ ジャナイ ヤリカタ ナンカモ  
 お葬式の 形式、 形式じゃない、 セリカ なんかも

{ B ソーソーソーソー } ズイブン チガッテ キマシタシナーン。  
 { そう、そう、そう、そう } 随分 違って 来ましたしね。

B エーエー。 ウン。  
 ええ、ええ。 うん。

A ソレニ ダイイチ ソ コンレーノ ヤリカタワ モー ゼンゼン チ  
それに 第一 初 婚礼の ヤリ方は もう 全然

ガッテ シマイマシタシナン。

違って (まいりましたしね。

B フンフン。 フンフン。

ふん、ふん。 ふんふん。

A イマ モー リョーホーデ<sup>(1)</sup> リョーリヤミタイナ トコエ イツテ  
今 もう 両方で , 料理屋みたいな ところへ 行って

ヤルツチュエーノニナン。 ( B エー サヨー サヨー サヨー )  
やるといふのにね。 ( ええ, 左様, 左様, 左様 )

ムカシワ ソノ ムコイリダ<sup>(2)</sup>トカ ( B エッ エー サヨー エッ ) ナ  
昔は その 婿入りだとか ( ええ, ええ 左様, ええ ) な

ンダ<sup>(3)</sup> ロードーダトカ ( B エッ ) ソー ユー コトワ モー  
んだ 郎党だとか , ( ええ ) そう いう ことは もう

( B エッ ) ゼンツゼン<sup>(4)</sup> ヤリマセンシナ<sup>(4)</sup>ン。 ( B エッ ) ナ  
( ええ ) 全然 やりませんしね。 ( ええ )

ーニカ ノコットル コトガ アルカナ<sup>(5)</sup>ン。 ( 笑 )  
何か 残っている ことが ありますかね。

B ソーデスネー。 アノー ミンナ ウチノ ザシキデ<sup>(6)</sup> ミンナ ナ  
そうですねえ。 あつう, みんな 家の 座敷で みんな

ツタ ワケゾ。 ( B ハイ ) ムカシ。  
やった わけだ。 ( はい ) 昔。

A ソーデ アリマスニ。  
そうで ありますよ。

B ダレモ ドッカノ リョーリヤエ モチダシテ アルナンテ ドッ  
誰も どこかの 料理屋へ 持ち出して やるなんて

カ シンゼンケツコンナンカワ イーケードモ リョーリヤデモ  
どこか 神前結婚なんかは いいけれども 料理屋でも

シンゼンケツコンナンテ ユーダケレドモ (B エー) ドーモ ア  
神前結婚なんて 言ったけれども (ええ) どうも あ

レワ キニ イランナ (笑)  
れは 気に 入らないな。

A マー ドックニナー チョット マツッテ アルカ ナンダカ シリマセンケドナン  
まあ、どこかにな、ちょっと 祀って あるか なんだが 知りませんけどね、

(笑) (B キニ イランナー アレワ) シキノ ホーフ モー (笑) (B サ  
気に 入らないなあ、あれは) 式の 方は もう ( ) (左

ヨーサヨー カンタンデ。 ムカシトワ ホント<sup>(7)</sup> オコンレー  
様、左様、簡単で。 昔とは 本当、お婚禮

ダケワ ホント<sup>(8)</sup>ニ チガッテ シマイマシタナー アー。  
だけは 本当に 違って (まいりましたな、 ああ。

B チガイマシタナー。 ソレデモ コチラワ マー オウチモ フル  
違いましたなあ。 それども こらうは まあ おうちも 古い

イシ ナンテ ホーボ<sup>(9)</sup>ノ オギリカ タイヘンデ (A ハイ)  
し、それで 方々の お義理が 大変で (はい)

オアリルラ。  
ございまいしょう。

A イヤ アノ ダンダン スクナク ナッテ キマシタシナン。 ソ  
いや、あの だんだん 少なく なって 来ましたしね。 そ

レカラ (B エー エー エー) ウチワ ヤッパリ ソー イフ  
れから (ええ、ええ、ええ) うちほ やっぱり そう いう

ーニ フコーナ コトガ アリマシタテ ナンテ イーマスカ ソ  
ふうに 不幸な ことが ありましたので、 何と 言いますか、 そ

ノー オチューニンチュー コトー シテ オリマセンノ ワリア  
のう お仲間という ことを して ありませんの、 割合

イニ。  
に。

B ハー ハイ ハイ ウン。  
はあ、 はい、 はい、 うん。

A ソレデ<sup>(9)</sup> アノー オチューニンコッテユー モノカ<sup>(9)</sup> ナイモンテ  
それで あのう オチュウニユという ものが ないもんだから、

(Bハイ ハイ アノ ズット オギリモ スクナク アリマス。  
はい、 はい) あの ズっと お義理も すぐのう ございます。

(Bウンウンウン) チチノ ダイモ シトリマセンシナン。(Bウ  
うん、うんうん) 父の 代も してありませんしね。(う

ンウン) アタシノ トキモ ヤッパリ<sup>(10)</sup> ワリアイ ハヤク シュ  
んうん) 私の 時も ヤッパリ 割合 早く 主

ジンカ<sup>(11)</sup> ナクナリマシタデ (Bエーエー) マツモトニ<sup>(12)</sup> オリマ  
人が なくなりましたので (ええ、ええ) 松本に ありま

ス トキ マー ミクミバカ アリマシタケド ソレワ マタ チ  
す 時、 まあ 3組ばかり ありましたけれど、 それは また ち

ヨット エンポーデ アリマスルシナン (Bエーエー) ソレダ  
よつと 遠方で ございますしね。(ええ、ええ) それだ

モンテ ユコホド アノ オツキアイ シマセンシ (Bエーエ  
ものだから こゝほど あの お付き合いを しませんし、 (ええ、ええ

ー) ソレデ ワリアイニ スクナインデ アリマスニ (Bフン  
それで 割合に 少ないので ございますよ、 (ふん

フン) エー。 アノー イチューニンオ イフツモ シトリマス  
ふん) ええ。 あのう お仲間を 幾つも してあります

トナーン ( Bサヨー サヨー ) ソー スト ソノ オチューニ  
とねえ, ( 左様, 左様 ) そう すると その オチュウニコ  
ンコッテ ユーノカ ホーホーニ デキマシテナン。  
と いうのが 方々に できましてね。

B エー ソーデ アリマス。  
ええ, そうです。

A ソー ユーノカ ナカナカ ソノ オツキアイニ タイヘンデ ア  
そう いうのが なかなか その お付き合いに 大変で ござ  
リマスケドナン。 ( B エー エー エー ) ワライニ スク  
いますけどね。 ( ええ, ええ, ええ ) 割合に すく  
ナク アリマスケドナン。 ソレニ<sup>(13)</sup> マー ウチカラ デタ オバ  
のう ございますけれどね。 それに まあ うちから 出た おほ  
タチモ モー タンダン ナクナッテ シマイマシタシナン。 フ  
達も もう だんだん 亡くなって (まいましたしね。 本  
ントーニ スクナク ナリマシタケド。 ソレデモ ヤッパリ イ  
当に すくなく なりましたけど。 それでも やっはり  
ナカワ ナカナカ オギリガ タイヘンデ アリマスナン。 (笑)  
田舎は なかなか お義理が 大変で ございますね。

B サヨー サヨー エー。 オギリワ タ<sup>ク</sup> ナンチュッテモ タイヘ  
左様, 左様, ええ。 お義理は <sup>ク</sup> 何と言っても 大変  
ンデ アリマス ( A ホント ) マチバト チガイマシテナー。  
で ございます。 ( 本当 ) 町場と 違ひましてなあ。

A エー。  
ええ。

B エー。 \*  
ええ。

A ムカシワ アノ マー リョーケテ<sup>14</sup> ハナシカ マト マリ マストナ  
 昔は あの まあ 両家で 話が まとまりますとね、  
 シ モチロン マー ミアイ ミアイモ ワタシドモナンカ シナ  
 もろろん まあ <sup>xxxx</sup> 見合いも 私どもなんか しな  
 (14) イクライテ (笑) シャシンモ ミナイクライテ (笑) アリ  
 いくらいで ( ) 写真も 見ないぐらいで ( ) ごさ  
 マシタケド ウチト ウチトデ マー ハナシヲ キメマスラ。<sup>\*</sup>  
 いましたけど うちと うちとで まあ 話を 決めますでしょう。  
 リョーケテ アー ソノ イロイロ イマワ コンレーニ ツイテ  
 両家で ああ その いろいろ 今は 婚礼に ついて  
 ソーダンナンカオ イタシマスナン。 ソレヲ モー ムカシワ  
 相談 なんかを 致しますね。 それを もう 昔は  
 ゼンゼン ソー ユー コトー シマセンノ。 ナカエ ソノー  
 全然 そう いう ことを しませんの。 中へ そのう  
 オチューニンサマツテ ユー ナコードカ タツテ コチラエ イツ  
 お仲人様と いう なこうどが たって、こちらへ 行っ  
 テ ユー ユヨー ソレデ<sup>15</sup> コチラエ イツテ コー ユヨー マ  
 て こう いうようです、それで こちらへ 行って こう いうようです、  
 タ コー ユヨーダソーデスヨツ チュヨーナ コトー キーテ ソ  
 また こう いうようだそうですねと いうような ことを 聞いて、そ  
 ノー リョーケテ アツテ ソノー シタソーダン スルナンテ  
 のう 両家で 会って ソノー 下相談を するなんて  
 ユー コトワ ゼツタイ ソノ アノ ケッコノ ヒマデ<sup>16</sup> アリ  
 いう ことは 絶対 その あの 結婚の 日まで あり  
 マセンノ。 (笑)  
 ませんの。 ( )

ダーカラ ソイデ" イヨイヨ マー コンレーノ ヒニ ナリマス  
だから それで いよいよ まあ 婚礼の 日に なります

ト ムコイリッテ イーマシテナン コー ヨメノ ウチエ ムコ  
と 婿入りと 言いましたね、 こう 嫁の うちへ 婿

サンカ オチューニンサマノ アンナイテ" ソシテ ソノ マイリ  
さんが お仲人様の 案内で、 そして その 参り

マス。 ホイデ" ソコデ" マー アノ ソレニワ ソノ ロードー  
ます。 それで そこで、 まあ、 あの それには その 「ロウドウ」

ッテ ユーノカ オトモノ イミテ" ロートーッテ ユー イミカ  
と いうのが、 お供の 意味で 「ロウトウ(郎等)」という 意味

モ シレマセンケドモ アノ ロードーッテ コノ ヘンデワ イ  
かも 知れませんが、 あの 「ロウドウ」と この 辺では

ニ マスケド ソノ マタ シンセキノ マー オジサントカ ソー  
言いますけれど、 その また 親戚の まあ おじさんとか そう

ユー ムコサンニ ツッテ <sup>(15)</sup> チカイ シトカ ゴロクニン オトモ  
いう 婿さんに ついて (血の繋がりの)近い人が 5,6人 お供に

ニ ツイテ アノ ソノ マー シンプノ イエー キマシテナン。  
ついて、 あの、 その、 まあ、 新婦の 家に 来ましてね。

ホイデ" シンプノ イエー キテ コンダ" シンプノ シンプワ  
それで 新婦の 家に 来て 今度は ~~xxxxxxx~~ 新婦は

シマセンケード" シンプノ リョーシン キョーダイト アノー  
(ませんが、 新婦の 両親、 きょうだいと、 あのう

オ オヤコノ サカズキヤ シンセキノ サカズキヲ スル ワケ  
親子の 盃や 親戚の 盃を する わけ

デ ゴザイマスナン。

で ございますね。



ソーシテ マー ソコデ マー ゴチソーカ デテ ソエデ コン  
そうして まあ、 そこで まあ、 ご馬走が 出て、 それで 今度

ドワ アノー カエリマスナン シンローフ。 ジブンノ ウチノ  
は、 あのう 帰りますの、 新郎は。 自分の うらの

ホーエ<sup>(16)</sup> ホエデ ソノ トキニ オチューニンサマワ コッチニ  
方へ。 それで その 時に お仲人様は こっちに

ヨメノ ウチニ ノコッテ オリマシテ (Bウンウン) コンド  
嫁の うちに 残って、 おりまして、 (うんうん) 今度は

ワ ユーカタ オヨメサンオ ツレテ コンドワ シンローノ  
夕方 お嫁さんを 連れて、 今度は 新郎の

ウ<sup>(17)</sup> ソレコソ ホントーノ オヨメイリデスナン。<sup>(18)</sup> デ ソノ トキ  
それこそ 本当の お嫁入りですね。 で、 その 時

ワ ヤッパリ ソノー シンフノ<sup>(19)</sup> アノー ロードーカ ツイテ  
は やっぱり そのう 新婦の あのう 郎等が ついて

イキマシテ ソレデ オヤワ イキマセンノ ドッチモ ゼンゼン。  
行きて、 それで 親は 行きませぬの、 どっちも 全然。

ソレデ ムコーエ イッテ コンドワ マー アノ フーフノ サ  
それで 向うへ 行って 今度は まあ あの 夫婦の

カズキカラ ミンナ ソノ イマノヨーニ アノー シンセキズキ  
盃から みんな その 今のように あのう 親戚づき

ノ<sup>(20)</sup> サカズキ ムコーノ ゴリョーシントノ オサカズキヲ マー  
の 盃、 向うの ご両親との お盃を まあ

ヤッテ ソレデ マー コンレーノ ゴリョーシントノ オサカズ  
やって、 それで まあ 婚礼の、 ご両親との お盃

キヲ マー ヤッテ。 ソレデ マー コンレーノ オシキワ オ  
を まあ やって。 それで まあ 婚礼の お式は 終

ワル ワケデ アリマスナン。

わる わけで ありますね。

ソーシテ ソノ サッキノ オハナシノヨーニ ソノー フツカメ  
そうして その さっきの お話しの ように、 そのう ニ日め

ワ ダイタイ ムラマワリ マチマワリッテ イーマスカ シンセ  
は 大体 村回り、 町回りと 言いますか、 親戚

キマワリッテ イーマスカ アノー オチューニンサマノ オクサ  
回りど 言いますか、 あのう お仲人様の 奥さん

ンカ ツレテ アルイテ クダサツタリ シテ マー シンセキオ  
が 連れて 歩いて 下さったり して、 まあ 親戚を

マワッテ。 ソイデ ミツカメニ コンドワ アノ サトカエリッ  
回って。 それで 三日めに 今度は あの 里帰りと

テ イーマシテナー オヨメサンカ ハジメテ アノ ウマレタ  
言いましたなあ、 お嫁さんが 初めて あの 生まれた

ウチエ カエルノニ カエルッテ ユーカ マ カエルノニ コン  
うちへ 帰るのに、 帰ると いうか、 まあ、 帰るのに、 今

ドワ ソチラノ ムコサンノ ゴリョーシンカ ツイテ キテ ソ  
度は そちらの 女婿さんの ご両親が ついて 来て、

ノ トキ ハジメテ ソノ リョーケノ マー オヤタチカ アウ  
その時 初めて その 両家の まあ 親達が 会う

ワケデスネー。<sup>(21)</sup> マー チ<sub>xx</sub> チカケリヤ イーケド。 ソレデ ソ  
わけですねえ。 まあ、 近ければ いいけれど。 それで そ

ノ トキニ ヤッパリ アノ サトカエリト シュートイリッテ  
の 時に やっはり あの 里帰りと しゅうと入りと

イーマスノ。 ソノ トキワ シュートカ ハジメテ コッチー  
言いますの。 その 時は しゅうとが 初めて ちっへ

キマスノ。 ソレデ サトガエリト シュートイリ。 ソレデ  
 来ますの。 それで 里帰りと しゅうと入り。 それで  
 ソノー マタ アノー コチラデ マー チョット ゴチソー  
 そのう また あのう どちらで まあ ちょっと ご馳走  
 シタリ シテ ソシテ ソノ シンローノ シュートタチワ カ  
 したり して、そして その 新郎の しゅうとたちは  
 エリマス。 ホイデ シンローワ コチラノ ウチ ヨメノ ジ  
 帰ります。 それで 新郎は どちらの <sup>xxx</sup> 嫁の  
 ッカニ ノコッテ ソーシテ マタ イツカメニ コンドワ コ  
 実家に 残って、そして また 五日めに 今度は こ  
 チラノ ヨメノ ホーノ リョーシンノ シュショ <sup>xxxxxx</sup> シュートイリ  
 ちらの 嫁の 方の 両親の しゅうと入りと  
 ト イッショニ カネテ マー シンフーフワ ソッチノ ウチエ  
 一緒に 兼ねて まあ 新夫婦は そっち うちへ  
 カエッテ ソレデ マー イッサイノ ギョージガ° オワルンデス  
 帰って、 それで まあ 一切の 行事が 終わるんです  
 ノ (笑)。<sup>\*</sup>  
 の。

イマカラ カンガエテ ミマスト ヨク マート オモッテ。(笑)  
 今から 考えて みますと、よく まあ(やった)と思つて。

B エー。  
ええ。

A イマノ ワカイ カタタチ ミタラ ( Bエー ) ホント ゼッフ  
 今の 若い 方たちが 見たら ( ええ ) 本当に びっく  
 リ ナサルケード。 イエト イエトノ ハナシデナー。 ソーシ  
 リ なさるけれど。 家と 家との 話してなあ。 そうし

テ……。  
て……。

B ソレガ ネーサマ ネー ムカシワ マユカイニ キタ シトカ  
それが 姉さま、ねえ、昔は 蘭買いに 来た 人が

( A エー ) コー ユー ムスメワ ドーダ。 ( A エー  
ええ ) こう いう 娘は どうだ。 ( A エー  
ええ、

ソー ) ホレカラ ……  
そう ) それから ……。

A アノ ウチエ ドーダローツチュ コトデナーン。 ( B ソーソー  
あの うちへ どうだろうという ことだね。 ( B ソーソー  
そう、そう、

ソー。エッエー ) ホレデ チョード イー ムスメダカラトカ チ  
そう。ええ、ええ ) それで 丁度 いい 娘だからとか、

ヨード イー ムスコダカラツチュヨーナ ハナシニ ナリマシテ  
丁度 いい 息子だからというように 話しに なりまして

( B エー エー エー エー ) ソエデ ヤッパリ マキキアワテ  
( B エー エー エー エー ) それで やっぱり 両方で相談し

<sup>(22)</sup>  
イテ リョーホーデ マー ソー ユー ナカデ ハナシオ シテ  
合つて 両方で まあ そう いう 中で 話しを して

クレル シトカ アルト マー オタカイニ シラベル コトワ  
くれる 人が あると、まあ お互いに 調べる ことは

シラベル ワケデ アリマス。 アッチノ ウチノ ムスコワ ド  
調べる わけで ございます。 あちらの うちの 息子は

<sup>(23)</sup>  
ーダ ロートカ コッチノ ウチノ ムスメワ ドーダ ロー ソー ユ  
どうだろうかと、こっちの うちの 娘は どうだろう、そう 言

ッテ フレタケレドッテ ユ ワケデ シラベテ マー イーカ  
って くれたけれどと いう わけで、調べて まあ いい

ラ ソイジャ ヤリマス モライマスツテ ユー コトシナリマシ  
 ら それでは (嫁に)やります, 貰いますと いう ことになりまし  
 テモ リョーケガ イッション ナツテ ソノ イマノヨーニ エ  
 ても, 両家が 一緒に ナツテ, その 今のように, ええ  
 ー コンレンノ<sup>(24)</sup> ヒワ イツ<sup>(25)</sup> キママショー ドンナ クライナ  
 婚礼の 日は いつ 決めましょう, どんな くらいな  
 コトニ シマショーナンチュー コトワ ゼツタイ シマセンデ  
 ことに (しょうなどという ことは 絶対 (ませんで,  
 モトヨリ ソノー シンローシンアダカ (笑) ソノー コンヤ  
 もとより そのう 新郎新婦だか, ( ) そのう 婚約  
 クシャノ デイトナンカ モチロン アリヤ シマセン。 (A笑)  
 者の デートなんか もらろん ありは (B) しません。

\*  
 B ホントダツタラ カオモ シラズニナー。  
 本当だったら 顔も 知らずになあ。

A ソーデ アリマスナ。 ヨク マート オモイマスニ。  
 そうで ございますよ。 よく まあと 思いますよ。

B ソレカラ キマルト サケガ ハイルツチュツテ (Bハイ) オ  
 それから 決まると 酒が はいるといって (はい)

チューニンサマ サケオ モツテ キマシテ (Bエー) ワタシ  
 お仲間様が 酒を 持って 来まして (ええ) 私も

モ ジューイククミ ヤッタ コト<sup>(26)</sup> ~~~~~ ダイツタイ ソ  
 十幾組を やった こと~~~~~ 大体 そ

/ ホーシキデス。  
 の 方式です。

A アー サヨーデ アリマスラ。(Bエー) ソシテ コンダ ユ  
 ああ 左様で ございます(よう)。(ええ) そして 今度は

イノ一オ イタダイテナン。  
結納を いただいてね。

B サヨー サヨー。  
左様, 左様。

A アー。ソレダッテ ミンナ オチューニンサマカ モッテ クル  
ああ。それだって みんな お仲人様が 持って 来る  
ダケデ アリマスデナン。 ( B エー ) ソーシテ ソノ トキニ  
だけで ございますね。 ( ええ ) そうして その 時に

ハジメテ ヒワ イツニ シマショ一トカ ユツテ ( B エーエー )  
初めて 日は いつに ( ましょうとか 言って, ( ええ, ええ )

ホレデ ダイタイ ム ムコカタノ ホーワ コノ イコーダカ  
それで 大体 婿方の 方は この 意向だか

コチラ ドーデスカッチュー。 コチラー コチラデ マダ コー  
こちらは どうですかという。 こちらは こちらで まだ こう

ダトカ ユツテ ( B エッエー ) ソコデ マー ダイタイ ヒヲ  
だとか 言って ( ええ, ええ ) そこで まあ 大体 日を

キメマスケド ソレダッタッテ オチューニンサマカ ナカニ ハ  
決めますけど, それだったって お仲人様が 中へ は

イッテ アーデスカ ( B エーッ ) コーデスカッチューッテ ( B  
いって ああですか ( ええ ) こうですかといって (

エー ) キメテ フダサル ワケ。 ( 笑 )  
ええ ) 決めて 下さる わけ。

B サッキノ ハナシミタイニ オチューニンサマツチューノワ <sup>\*</sup>ウー  
さっきの 話しみたいに お仲人様というのは

ント <sup>(27)</sup>ダイジニ スル ワケ。

うんと 大事に する わけ。

A ソーデ アリマスノ。 ソレデ<sup>28</sup> マタ ホント ダイセキニンデ<sup>28</sup> アリマス  
そ<sup>28</sup>うで ござ<sup>28</sup>いますの。 <sup>28</sup>それ<sup>28</sup>で <sup>28</sup>また <sup>28</sup>本当 <sup>28</sup>大責任<sup>28</sup>で ござ<sup>28</sup>います

モノナー カンガエテ ミレバ<sup>28</sup>。  
ものなあ、 考<sup>28</sup>えて 見<sup>28</sup>れば<sup>28</sup>。

B ウット エー ウーント ダイジニ スル ワケ。  
うんと、 ええ うんと 大<sup>28</sup>事に <sup>28</sup>する <sup>28</sup>わけ。

A リョーホーノ コト イッサイ ヒキウケテ。  
両<sup>28</sup>方<sup>28</sup>の <sup>28</sup>こと<sup>28</sup>を <sup>28</sup>一切 <sup>28</sup>引<sup>28</sup>き受<sup>28</sup>けて。

B エッ。 ソレデ<sup>28</sup> オチューニンサマ オ<sup>(28)</sup>シテ モラッタ トコエ  
ええ。 <sup>28</sup>それ<sup>28</sup>で <sup>28</sup>お仲<sup>28</sup>人<sup>28</sup>様<sup>28</sup>を <sup>28</sup>して <sup>28</sup>貰<sup>28</sup>った <sup>28</sup>ところ<sup>28</sup>へ  
イッテ コドモカ デキルト コドモワ ショーカツ オボンニワ  
行<sup>28</sup>って、 <sup>28</sup>子<sup>28</sup>供<sup>28</sup>が<sup>28</sup> <sup>28</sup>でき<sup>28</sup>ると、 <sup>28</sup>子<sup>28</sup>供<sup>28</sup>は <sup>28</sup>正月、 <sup>28</sup>お盆<sup>28</sup>には、  
ショークツワ カナラズ オモチオ ショッテ イク ワケネ。  
正月<sup>28</sup>は <sup>28</sup>必<sup>28</sup>ず <sup>28</sup>お餅<sup>28</sup>を <sup>28</sup>背<sup>28</sup>負<sup>28</sup>って <sup>28</sup>行<sup>28</sup>く <sup>28</sup>わけ<sup>28</sup>です<sup>28</sup>ね。

エッ。  
ええ。

A オモチヲ ショッテ イキマシテナン。 エー。 ( B エ  
お餅<sup>28</sup>を <sup>28</sup>背<sup>28</sup>負<sup>28</sup>って <sup>28</sup>行<sup>28</sup>きま<sup>28</sup>して<sup>28</sup>ね。 ええ。 )  
え

B イマデモネー ワタシ イーダ<sup>(29)</sup>ノ シトオ<sup>(30)</sup>ト サクノ シトオ バ  
今<sup>28</sup>でも<sup>28</sup>ねえ、 私、 飯<sup>28</sup>田<sup>28</sup>の <sup>28</sup>人<sup>28</sup>と <sup>28</sup>佐<sup>28</sup>え<sup>28</sup>の <sup>28</sup>人<sup>28</sup>を <sup>28</sup>媒

イシャク シタノワネー ( A エー ) イーダ<sup>(29)</sup>ノ チクマチノ フ  
酌 <sup>28</sup>した<sup>28</sup>のは<sup>28</sup>ねえ、 ( ええ ) 飯<sup>28</sup>田<sup>28</sup>の 知<sup>28</sup>久<sup>28</sup>町<sup>28</sup>の 古

ルイ ショーカ<sup>(31)</sup>ダモンテ ( A エー ) ウーント カタイ カタイ  
い 商<sup>28</sup>家<sup>28</sup>な <sup>28</sup>もの<sup>28</sup>だ<sup>28</sup>から、 ( ええ ) うんと <sup>28</sup>堅<sup>28</sup>い

ウチデネー。 ( Aへー ) チャーント キマス。  
うちでねえ。 ( へえ。 ) ちゃんと 来ます。

A ハー ( Bエー ) ソーテ" ゴザイマスカ。  
はあ、 ( ええ ) そうで ございますか。

B トコロガ コンドアー アノー イマノ <sup>(32)</sup> アネヲ ジツカデ" フタ  
ところが 今度は あのう 今の 姉を 実家で ニ人  
リ シタケードモ シンルイダ"モンダカラ ( 笑 )  
したけれども、 親類だものだから

A エーエーエー ( 笑 ) ココロヤスイデ" ヤッパリナン ホント (   
ええ、ええ、ええ ) 心安いから やっぱりねえ、 本当。 (   
笑 ) 。

B ソコワ イッコー ソソーニ ソー シトルケード"モ マー ソレ  
そこは いっこう 疎略に、 そう、 しているけれども、 まあ それ  
ワ ソレデ" イート シマシテモネー ソレダケ ダイジニ シマ  
は それで いいと しましてもねえ、 それだけ 大事に しま  
シタナ。  
したな。

A ホント ソーテ" アリマスニ。  
本当に そうで ございますよ。

B マツモトワ ソノ カネツケオヤオ <sup>(33)</sup> ダイジニ スルネー。  
松本は、 その、 鉄槩親を 大事に するねえ。

A アへー。  
ああ、へー。

B コンレーニ イキマスト シンローシンプノ トナリガ カネツケ  
婚礼に 行きますと 新郎新婦の 隣りが 鉄槩親



オヤ。

A へー。

はい。

B ソノ トナリカ バイシャクニソ。 ( A へー ) コー ナッテ  
その 隣りが 媒酌人。 ( はい ) こう なって

イマスネー ヤマベノ<sup>(34)</sup> キンジョウ ( A へー ) エー。 ミクミ  
いますねえ、山辺の 近所は。 ( へえ ) ええ。 3組

イー サンカイバカ ヨバレマシタケード ミンナ ソー ナッテ  
3回ばかり 招かれましたけれど、みんな そう なって

マス。 オチューニンサマカ エッ シンローシンフノトナリテ  
います。 お仲人様が、えっ、新郎新婦の 隣りで

ナクテネー ソノ リョードナリ カネツケオヤテ"スワ。  
なくてねえ、その 両隣りが 鉄漿親ですよ。

A へー。コノ ヘンジャ イマ カネツケオヤナンチューー コト イ  
へえ。この 辺では 今 鉄漿親なんていう ことを 言  
ーマセンナン。

いませんね。

B エッ アンマリ イーマセンナ。

ええ、あんまり 言いませんな。

A ハイ。

はい。

B ワタシドモン トキニワ マダ<sup>(35)</sup> アノー オクマオーバーナカ カ  
私どもの 時には まだ あのう お熊ばあさんなんか

ネツケオ シテー。

鉄漿を して。

A エー。  
ええ。

B デ ミンナ アノー オハグロ ソメテマシタカラ エッエー。  
で、みんな あのう お歯黒を 染めていましたから、 ええ、ええ。

A オハグロー ツケル カワリニナン エー ヤッパリ オハグロノ  
お歯黒を つける 代わりにね、 ええ やっぱり お歯黒の  
ザイリョーオ (B エー) チョット オクツタリ シマシタケド  
材料を (ええ) ちよっと 贈ったり (ましたけど)  
ナン。  
ね。

B エー。  
ええ。

A ホントーニワ ツケナクテモ。  
本当には 付けなくても。

B サヨー サヨ一。  
左様 左様。

A ケド イマワ モー カネツケオヤナンテ キータ コト アリマ  
けれども 今は もう 鉄槌親なんて 聞いた ことが あり  
センサー。  
ませんなあ。

B イーマセンネー。  
言いませんねえ。

A イーマセンニ コノ ヘンデワ。 カンタンニ ナリマシタンダ。  
言いませんよ、 この 辺では。 簡単に なりましたんです。

B アノ ロードーツテ ユーノワ オジ オイ オジチュ一ヨ一ナ  
あの ロウドウと 言うのは おじ、甥  
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

シトカ オジツチューヨーナ シトカ イツタ ワケダナー。  
おじというような 人が 行った わけだなあ。

A エー オジデ アリマス。 タイテイ (B エー) マー オンナ  
ええ, おじで ございます。 大抵 (ええ) まあ 女

ワ ソー ユー トキ イキマセンモンデナー (B エー) エー  
は そう 言う 時 行きませんものですからなあ (ええ) ええ  
オジ……。  
おじ……。

B ロードーデ ツイテ イツテ マ ゴエ ゴエーデ (笑) (A  
ロウドウで ついて 行って ま, 護衛で  
エー) ミトドケテ キタンダナ。  
ええ) 見届けて 来たんだな。

A ソー ユー コトデ アリマス ダナ。  
そう いう こと で あります ですね。

B ソエデ ヒッターノ ロードーカ ホーコク スルンズラ。  
それで 筆頭の ロウドウカ 報告 する んだらう。

A ホーコク ソーデ アリマス スズラ キット (笑)。  
報告, そうで ございましょう, きっと。

B ツキソツテ イキマシテ コエデ ケーコーデ ブジ スミマシタ  
つき添って 行きました, これで 結構で 無事 済みました  
ツテ ホーコク スル。  
と 報告する。

A ハイ スミマシタツテ。 コッチー キテ ヤッパリ リョーシン  
はい, 済みましたと。 こっちに 来て, やっぱり 両親は

ワ ツイテ イキマセンモンデナン (B イカン……) ヤッパリ  
ついて 行きませんものだからね。 (行かない) やっぱり

マ シンパイ シトル ワケデ アリマスデナン。 (笑)  
ま 心配 している わけで ごめいすのでね。

B エッ エーエー。  
ええ, ええええ。

A ダカラ ムカシノ フントニ ゴコンレーッテ モナ タイヘンテ  
だから 昔の 本当に ご婚禮という ものは 大変で  
アリマシタ。 (笑)  
ごめいました。

B ソレデ ゼンブ ジブンノ<sup>(37)</sup> ヤ ヤ ヤ ヤリマシタ。  
それで 全部 自分の やりました。

A ソノ ゼンジツニ ニモツヲ マタ ハコブツタッテ イマミタイ  
その 前日に 荷物を また 運ぶと言っても 今みたい  
ニ トラックカ アル ワケジャ アリマセンデナン。 ミンナ  
に トラックが ある わけでは ありませんからね。 みんな  
コー カツイテ<sup>(38)</sup> イキマシタナ。  
こう 担いで 行きましたんです。

B サヨー サヨー。 ソーッ エー ミンナ カツイテ<sup>(38)</sup> イキマシタ  
左様, 左様。 そう, ええ, みんな 担いで 行きました。

ニ エー。 ココラ トーリマシタナ。 (A 笑 ホント)  
ええ。 ここらを通りましたなあ。 ( 本当 )

タンスカ イクサオ キタ (A エー) ナカモチカ キタッテッ  
簞笥が 幾棹 来た, (ええ) 長持が 来たと言っ

テワネー ココ トーリマシタネー  
てはねえ, ここを通りましたねえ。

A イクサオ キタナンテ イーマシテナン エー。 ミンナ カツイ  
幾棹 来たなんて 言いましたね, ええ。 みんな 担い

デ キマシタデ。<sup>\*</sup> ムカシノ オヨメサンノ ニモツッテ イー  
で 来ましたんです。 昔の お嫁さんの 荷物と 言い

マストナン マ タンス ナガモチワ モチロン ソシテ マ ヤ  
ますとね、 ま、 簞笥、 長持は もちろん、 そして ま、

グトカ ソー ユー モノモ アリマスケレドモ タラ<sup>xxxx</sup> ダイイチ  
夜具とか そう いう 物も ありますけれども、 第一

タライカ<sup>o</sup> ジョーケ イリマスワケ。(Bウン) アノ チョット シモノ  
たらいが 上下 要りますわけ。(うん) あの、ちょっと 下の

モノ アラウノト フタツプライワ モッテ イキマスノ。 ソシ  
物を 洗うのと ニつぐらいは 持って 行きますの。 そし

テ ハリイタッテ ユーノ ソレモ ヤッパリ ニ<sup>xx</sup> スクナクモ  
て 張り板と いうの、 それも やっはり すくなくも

ニマイプライワ モッテ タンジャ アリマセンカナ。(Bウン  
2枚ぐらいは 持ってったんじゃ ありませんかな。(うん

ウン) エー ソシテ アノー タチモノバンテ イーマスカ オ  
うん) ええ、 そして あのう、 裁ち物板と 言いますか、 お

サイホーニ ツカウ (Bアーハイハイ) マ オサイホーノ  
裁縫に 使う (あめ はいはい) ま、 お裁縫の

ドーグワ モチロシダケド ソノ (Bウンウン) コー ユー  
道具は もちろんだけれど、 その (うんうん) こう いう

オーキナ バンヲ モッテッタンデスネ。 ソー ユー オーキナ  
大きな 板を 持って行ったんですね。 そう いう 大きな

モノッテ ユット ソー ユー モノデ<sup>o</sup> アリマシタデナン。  
物と 言うと、 そう 言う 物で ごさいましたからね。

B ゲタバコナンカモ モッテ キタノ ミトツタケード……。  
下駄箱 なんかも 持って 来たのと 見ていたけれど……。

A エー ゲタバコワ モチロン モッテ マイリマス エー。  
ええ、下駄箱は もちろん 持って 参ります、ええ。

B モッテ キタ モッテ キタンダナン。  
持って 来た、持って 来たんだね。

A ソレカラ イマノヨーナ ハハナンカノ トキワ アノ センメンキ  
それから 今の ような、母 なんかの 時は あの 洗面器  
ナ.ンテ ユー モノワ イマ アーンナノワ ホント マダ アタ  
なんて いう 物は、今 あんなのは 本当に まだ 新  
ラシー (Bウ.ン) モノデ チョーズダライッテ イーマシテナ  
しい (うん) 物で、チョウスダライ(手水 盥)と 言ひましてね。  
ン。

B ソーソーソーソーソー。  
そうそう そう そう そう。

A コー ユー フーニ シテ シタニ アシカ アッテ ヨク アノ  
こう いう ふうにして 下に 足が あって よく あの  
テレビノ エーカナンカデ チョット アリマスナン。  
テレビの 映画なんかで ちょっと ありますね。

B アシノ ツイタ ソー フンフンフンフンフン。  
足の ついた そう、ふんふんふんふんふん。

A コンナフーン ナッテ。 アシノ ツイタ チョーズダライナンテ  
こんなふうになつて。 足の ついた 手水盥なんて  
ユー モノー モッテ キタヨーデ アリマスニ。  
いう 物を 持って 来たようで ございますよ。

B フンフンフンフンフンフン。  
ふんふんふんふんふんふん。

A ソレデ<sup>(39)</sup> ツリダイナンテ ユーノナカエ ソー ユー タライノ  
 それで 釣台なんて いうの中へ そう いう 皿のよ  
 ヨーナ モノオ イレテ キマシタノカナン。 ( B ウンウンウン )  
 うな 物を 入れて 来ましたのかね。 ( うんうんうん )  
 ソーシテ ソノー タンス ナガモチノヨーナ モノニワ ユタン<sup>(40)</sup>  
 そうして そのう 簞笥 長持のような 物には 油単  
 ッテ イーマシテナン ( B ウン ) ジョーモンノ ハイッタ コ  
 と 言ひましてね, ( うん ) 定紋の はいった こう  
 ー ユー モノー カケテ ( B カケテ ウン ) ソーシテ カッ  
 いう 物を 掛けて ( 掛けて, うん ) そうして 担い  
 イデ ( B ウン ) リョーホーデ ナカイ ボーデ ( B ソーソー  
 で ( うん ) 両方で 長い 棒で, ( そうそう  
 ソー ) ソーシテ カツク シトタチカ ヤッパリ オモイシ マ  
 そう ) そうして 担ぐ 人達が やっぱり 重いし, ま  
 ー ソレモ オイワイダ<sup>カ</sup>モンダカラ オーゼテ ツイテ キテ カ  
 あ, それも お祝いだものだから 大勢で ついて 来て,  
 ワッテ カツイデ クル ワケデ アリマスナン。  
 代わって 担いで 来る わけで ございますね。

B ウン。 ウン。  
 うん。 うん。

A ホーシテ ソノ ナカヤドッテ ユー トコカ アリマシテナン  
 そうして その 中宿と いう ところが ありましてね,  
 ( B ウン ) ソエデ<sup>(41)</sup> ソコエ ヨメノ ホーカラ モッテ キマシ  
 ( うん。 ) それで そこへ 嫁の 方から 持って 来まし  
 テ ホレカラ コンドア ムコカタカラ ソノ ナカヤドエ ア  
 て, それから 今度は 婿方から その 中宿へ あ

アノー キテ ソエデ<sup>1</sup> ソコデ<sup>2</sup> ウケワタシヲ シマスノ ニモツ  
あのう 来て, それで<sup>1</sup> そこで<sup>2</sup> 受け渡しを (ますの, 荷物  
ヲ。  
を。

B ウン ニモツノ サイリョー<sup>(42)</sup>  
うん, 荷物の 宰領。

A ウン ソエデ<sup>1</sup> ニザイリョー<sup>2</sup> ッテ ユーノガ ツイテ (Bニザイ  
うん, それで 荷宰領と いうのが ついて ( 荷宰  
リョー ハイ) キマシテナン。ホエテ<sup>1</sup> ソコデ<sup>2</sup> マタ コンダ  
領, はい) 来ましてね。 それで<sup>1</sup> そこで<sup>2</sup> また 今度は  
ムコカタノ ホーエ ワタシテ コンダ<sup>1</sup> ムコカタワ ムコカタテ<sup>2</sup>  
婿方の 方へ 渡して, 今度は 婿方は 婿方で  
ヤッパリ ソノ ニンフオ ツレテ イッテ コンダ<sup>1</sup> ヒキウケテ  
やっぱり その 人夫と 連れて 行って, 今度は 引き受けて  
モツテ ヤッパリ ソノ ニザイリョーガ アッタ ワケ。  
持つ やっぱり その 荷宰領が あった わけ。

B ウン。  
うん。

A ソエデ トチューデ<sup>1</sup> ソー ユフーニ マー ミチモ トーイシ  
それで 途中で そう いうふうに, まあ 道も 遠いし

カツイデ<sup>1</sup> フルノモ タイヘンデ<sup>2</sup> アリマスデナン。 (B ウンウ  
担いで 来るのも 大変で ございますのでね。 ( うんうん

ンウンウンウン) ソエデ<sup>1</sup> ソノ ウケワタシヲ シタ ワケテ<sup>2</sup>  
うんうんうん) それで その 受け渡しを (した わけて

アリマスンダ。ホエテ<sup>1</sup> ヤッパリ ソコデ<sup>2</sup> エバ<sup>(43)</sup> イッパイ マ  
ございますんず, それで<sup>1</sup> やっぱり そこで(何をするか)言えば, 一(はい) まあ



モチロン、(B サヨー サヨー) ドッカノ ウチヲ キメテ (B ウン) ソコデ  
もちろん、(左様, 左様) どこかの うちを 決めて (うん) そこで

イッパイ (B ウン) デタリ シテ ソーシテ コンダ マ  
一杯 (うん) 出たり して、そうして 今度は ま

タ アノ ムコカタノ ホーデ カツイデ キタ ワケデ アリマ  
た あの 婿方の 方で 担いで 来た わけで、ごさい

ス。(B フンフン) ソレデ マー ソノー ニモツヲ モツテ  
ます。(ふんふん) それで まあ そのう 荷物を 持って

クルッタッテ マー タイヘンナ コトデ アリマスナー。  
来ると言っても まあ 大変な ことで、ごさいますなあ。

B エー エー エー エー。  
ええ、ええ、ええ、ええ。

A マー オーゼーノ シトカ アリマシタデナン ムカシワ。(B  
まあ、大勢の 人手が ありましたのでね、昔は。(

ウン) ソレモ オイワイダモンテ マー オニキヤカニ ヤロー  
うん) それも お祝いだものだから、まあ お賚かに やろう

ツチュー コトデ ヤッタ<sup>ン</sup>ダト オモイマスケドナン。(B ウン  
という ことで やったんだと 思いますけれどね。(うん

ウンウンウン) イマノヨーニ トラックダノ (笑) ニグルマダノ  
うんうんうん) 今のように トラックだの ( ) 荷物だのが

カ アレバ オイーケレド (笑)\* ヤッパリ ソノー カコニ ノ  
あれば よろしいけれど。( ) やっぱり そのう、駕籠に 乗

ッテ クルツテューノワ マー ヨホドノ マー イエノ ムスメ  
って 来るといのは、まあ よほどの、まあ 家の 娘

デ アリマスナン。マ ウチノ ハハナンカワ ソノ カコデ  
で、ごさいますね。まあ、うちの 母なんかは、その 駕籠で

キタシ ワタシノ コツカラ デタ オバタチモ カゴデ イツタ  
来たし、私の ここから 出た おば達も 駕籠で 行っ  
ッテ イーмасケードモ。 アノー フツワ ヤッパリ ウント  
たと言いますけれども。 あのう 普通は やっはり うんと  
オムカシワ ウマデ<sup>(44)</sup> キタコトモ アツタヨーデ<sup>(45)</sup> アリマスナン。  
大昔は 馬で 来たことも あったようで ございますね。

B ハーハー。 ウソ。  
はあ、はあ。 うん。

A オークサカラ オークサノ<sup>(44)</sup> ナントカ ユー イマワ ワスレタケ  
大草の 何とか いう 今は 忘れたけど  
ド ナントカカイトカラ<sup>(45)</sup> キタ オバーサンガナン ムカシノ オ  
何とかがイトから 来た おばあさんがね、 昔の  
バーサマデ<sup>(45)</sup> アリマスカ ソノ シトワ ウマニ ノッテ キテ  
おばあ様で ございますが、 その 人は 馬に 乗って 来て、  
ソノ オバーサマノ ソノ ウマノ ウエニ カケタ フトンダト  
その おばあ様の その 馬の 上に 掛けた 布団だとか  
カ タズナダトカ マダ ウチニ アリマスケードナ。  
手紙網だとか まだ うちに ありますけれどもな。

B ホホー。  
ほほう。

A オムカシワ マー ソンナフーニ ウマデ<sup>(44)</sup> キマシタカ<sup>(45)</sup> アトワ  
大昔は、 まあ そんなふうには 馬で 来ましたが、あとは  
マー ダイタイ ソノー オカゴデ<sup>(44)</sup> キマシタノ。 ソエデ<sup>(45)</sup> モー  
まあ、大体 そのう お駕籠で 来ましたの。 それで もう  
チョット マー シタノー ウチダッタラ アノー ダイタイワ  
ちょっと、 まあ 下の うちだったら、 あのう 大体は

アルキマシタナン。 イマホド トーク アリマセンシ。  
歩きましたね。 今ほど 遠く ありませんし。

B アルイタンダ。 ハイハイハイハイ。  
歩いたんだ。 はいはいはいはい。

A ヤッパリ コーツーカー フベンダデ アンマリ トーフエ イキマ  
ヤッぱり 交通が 不便だから あんまり 遠くへ 行きま  
センデナン。  
せんからね。

B フン フン フン。  
ふん ふん ふん。

A ホイデ アノー <sup>xx</sup>キ イー キモノモ クット コー マフリアケ  
それで あのう 良い 着物も きりりと こう まくりあげ  
テ シタカラ ナカジュバンカナンカ ダスヨーニ シ トーク  
て 下から 長襦袢かなんか 出すように し、 遠く  
アルキマスンデナ。  
歩きますのでな。

B フン フン フン フン。  
ふん ふん ふん ふん。

A ソー ヤッテ アルイタリ (Bウン) ソレカラ… ソレカラ スコシ タ  
そう やって 歩いたり (うん) それから…、それから すこし 経  
ツテカラワ ジンリキシャニ (Bウン) アリマシテ<sup>(46)</sup> (Bウン) ソ  
ってからは 人力車に (うん) なりまして、 (うん) そ  
エデ ソー ユー トキモ ソノ マー フツノ ウチダツタラ  
れで そう いう 時も、 その まあ 普通の うちだったら  
ソノー オヨメサンカ シトリ ジンリキシャン ノルダケテ ア  
そのう お嫁さんが 一人 人力車に 乗るだけで ごさ

リマス。

います。

B サヨ一 サヨ一。

左様，左様。

A アトノ ソノー ロード一ノ レンチューワ ミンナ アルイテ

あとの その 郎等の 連中は， みんな 歩いて

イク ワケデ アリマス。 (B ウンウン) ソレデ シバラク タ  
行く わけで ございます。 (うんうん) それで (しばらく た

ッテカラ コンドワ ジドーシャナンカ デキテ アノ タダイマ  
ってから， 今度は 自動車などが できて， あの 先程の

ノ トシマカ<sup>(47)</sup> コノ ヘンノ ダイイチポーダッテ イ一マスネ。

登志恵さんが この へんの 第一号だったと いますね。

B クルマデ キタノ。

車で 来たの。

A ジドーシャデ オヨメイリ シタノワ。

自動車でお嫁入り したのは。

B ホ一ントカナ。

本当かな。

A エ一 ソノコロ ワタシワ ハイ ココニ オリマセナンダケード

ええ， その頃 私は もう ここに ありませんでしたけれど

ナン。 (笑)

ね。

B ホホ一 アレ一。

ほほう。 あれ。

A ジドーシャデ オヨメニ キタノワ モ一 コノ ヘンデノ ダイ

自動車でお嫁に 来たのは もう この へんでの 第

イチコーダッテ イーマス。 (笑) コンド アチラデ オキキ  
1号だって 言います。 今度 あららで お聞き

ナサリマセ。 (笑)  
なさいませ。

B ウンウン アレー。 ソリヤー タイシタモンダー。 (笑)  
うん、うん。 あれ。 それは 大したものだ。

A ソー ユー ハナシ キーテ オリマスケード。  
そういう 話しを 聞いて いますけれど。

B フーン。  
ふうん。

A ソレデ ワタシノ トキワ モー アノー ジンリキシャデ イキ  
それで 私の 時は、もう あの 人力車で 行き  
マシタ エー。  
ました、 ええ。

B エー。  
ええ。

A アー ソレガ マタ イマ ハナシテモ ホントニ オカシーンテ"  
ああ、それが また、今 話しても 本当に おかしいの  
アリマスケード" ワタシワ ジツワ ソノ オトートカ マダ" ア  
ですけれど、 私は 実は その 弟が また"  
リマシタノデナン。 イツタンワ ヨメニ イッタ ワケデ アリ  
(その時は)いたので。 いったんは 嫁家に いった わけで ござい  
マス シュジンノ トコロエ。 ソエデ ヤッパリ ソノ アカホ<sup>(48)</sup>  
ます、主人の 所へ。 それで やはり その 赤穂  
デ" イマノ コマカ<sup>(49)</sup>ネデ" アリマスケドナン ソエデ" ヤッパリ  
で 今の 馬匂ヶ根で ございますけれどね、それで やはり

アノー ソノ イマデ ユー アノ カミカタキリ<sup>(50)</sup>マデシカ (B  
あの その 今で いう あの 上片桐まで(か

エー ウン) デンシャカ キテ オリマセナンダ" ムコーカラ。  
ええ, うん) 電車が 来て いませんでした, 向こうから。

ソーデ<sup>(51)</sup> マダ コッチワ デンシャガ ナイン。 ソレデ ウチカ  
それで また こっちは 電車が ないんです。それで うちが

ラ ソノ ジンリキシャデ イキマシテ ホレデ カミカタキリノ  
ら その 人力車で 行きました, それで 上片桐の

エキカラ コンドア デンシャオ イッシャ カイキリマシテナン。  
馬車から, 今度は 電車を 一車 買いきりましてね。

ソーシテ ソレニ ノッテ (笑) (Bホー) ミンナデ ソノ  
そして それに 乗って, (ほう) みんなで その

ロードーカラ ナニカラ イキマシテ。 (笑) (Bへー)  
郎等から 何から 行きました。 (へえ)

ソーシテ アカホノ エキデ オリテカラ マタ アチラカラ  
そして 毎穂の 馬車で 下りてから, また あちらから

ムカエノ カゴカ キトリマシテナン。 ソエデ カゴニ ノッテ  
迎いの 駕籠が 来てましてね。 それで 駕籠に 乗って

イキマシタノ。 (笑) ホントニ ソノ ハナシヲ スルト コ  
行きましたの。 (ほん) とに その 話しを すると

ドモタチワ ゴーカバンナンテ (B ゴーカバンダ" 笑) ワライ  
子供達は 豪華版などと (豪華版だ) 笑い

マスケレド。 (笑) デンシャオ イッシャ カイキッテ。 (B  
ますけれど。 (電) 車と 一車 買い切って。 (

笑)

B へーへー。  
へえへえ。

A ノリマシタケドナン。 ソレデ ソノ トキワ マー リンリキシ  
乗りましたけれどね。 それで その 時は まあ 人力車も  
ヤモ オージマノ<sup>(52)</sup> アタリニ シゴダイワ アリマシタモンテ。  
大島の あたりに 4,5台は ありましたものだから。

B フンフンフン。  
ふんふんふん。

A ドーヤラ ソノー アノー ロードーマデ マー デンジャデ ノ  
どうやら その あの 郎等 まで まあ 電車で、 の  
トコマデワ ジンリキシヤデ イキマシタケド ( Bフンフンフン  
ところまでは 人力車で 行きましたけれど ( ふん,ふん,ふん,  
フン ) マー フツノーノ オウチデ マー オヨメサンガ ジン  
ふん) まあ 普通の お家では, まあ お嫁さんが 人  
リキシヤン ノルダケデ アトワ ソノー ロードーッテーバ オ  
力車に 乗るだけで あとは その 郎等 と言えは 男  
トコデ ( Bソーデスネ。エー ウンウン ) アリマスシ エライ ト  
で ( そうですね。ええ うん うん ) ごびますし, 大変 遠  
ーク アリマセンモンデナン ダイタイワ ミンナ アルイテ オ  
いのでも ごびませんものですからね, 大体は みんな 歩いて, お  
トEノ シトワナン イキマシタンダニ。  
僕の人ほね, 行きましたんですよ。

B ウンウンウンウン。  
うん,うん,うん,うん。

A ワタシワ マー チョット コマカネデ トークモ アリマスシ  
私は まあ ちょっと 馬匂々根で, 遠くでも ごびますし

ソー ユー コトデ アノー カミカタキリマデ<sup>〃</sup> アレデ イッテ  
そう いう ことで あの 上片桐まで あれで 行って、  
アト ソノ デンシャオ カイキッテ (笑) イキマシタケドネ。  
あと その 電車を 買い切って 行きましたけれどね。

B ヘーエー ムカシワ ホントダ<sup>〃</sup> エング<sup>〃</sup>ミワ ス アノー ナンダ<sup>〃</sup>  
へえええ、昔は 本当だ、縁組は あの 何です  
ナー アノー ココラワ ダイタイワ シモイナノ ホートカ<sup>〃</sup> オ  
なあ、あの、こら辺は 大体は 下伊那の 方が  
ーク オーク アリマシタナー。  
多う ございましたね。

A ハイ シモイナカ<sup>〃</sup> オーク アリマス。  
はい、下伊那(との縁組)が多う ございます。

B コチラノ ミナミノ<sup>(53)</sup> シン ゴシンルイモ ミナミノ ホーカ<sup>〃</sup> オ  
こちらの、「南」の 御親類も、南の 方が  
オーイナー。  
多いなあ。

A ハイ ウチデモナ<sup>〃</sup>ン オバタチワ ミンナ シモイナデ<sup>〃</sup> アリマ  
はい、うちでもね おばたちは みんな 下伊那で ござい  
ス。  
ます。

B ソーデ<sup>〃</sup> アリマスナー。  
そうで ございますなあ。

A カミイナノ ホーニワ マー ホトンド アリマセン。  
上伊那の 方には まあ ほとんど ございません。

B フーン ウン。  
ふうん うん。



A アノー タダ マー ハハノ デウチカ カミジマ<sup>(54)</sup> チョット コ  
あの ただ まあ 母の 出たうちが 上島, ちょっと こ  
コヨリ キタデ アリマスケドナン。

こより 北で ございますけれどね。

B フン エー ハイハイ。

ふん ええ はいはい。

A ソレデ ナナクボ<sup>(55)</sup>ニ イモートカ イ<sup>xx</sup> ハハノ イモートカ イツ  
それで セ久保に 妹が 母の 妹が いて

トリマ (Bウ<sup>ン</sup>ウ<sup>ン</sup>) マ ソノ テードデ キタノ ホートワ  
おります, (うんうん) ま, その 程度で 北の 方とは

ホトンド シンセキカ アリマセンノデナン。 (Bウ<sup>ン</sup>ウ<sup>ン</sup>ウ<sup>ン</sup>)  
ほとんど 親戚が ありませんのでね。 (うんうんうん)

アリマセンケド マー ワタシワ エンガ アッテ ソレコソ ( )  
ありませんけれど まあ 私は 縁が あって それこそ (

Bウ<sup>ン</sup>) ソノ アカホノ ホーエ マイルヨーニ ナリマシタ  
うん) その 赤穂の 方へ 参るように になりました

ノデナン。 (Bウ<sup>ン</sup>ウ<sup>ン</sup>ウ<sup>ン</sup>)  
のでね。 (うん, うん, うん)

A ホントーニ イマカラ オモエバ オカシーヨーデ アリマスガ<sup>ww</sup>  
本当に 今から 思えば おかしいようで ございますが。

カミカタキリマデシカ デンシャワ (Bエー) タツノカラ <sup>(56)</sup>キ  
上片桐までしか, 電車は (ええ) 辰野から 来

テ オリマセナンダ。 ムカシノ ムカシノ ハナシ。 (笑)  
て ありませんでした。 昔の 昔の 話し。

B ソレワー イマノー ソノ ゴーカバンワ イマ ハジメテ オキ  
それは, 今の その 豪華版は, 今 初めて お聞

キ シマシタケード (A笑) デンシャヲ カリキッタナンテ。  
き (ましたけれど, ( ) 電車を 借り切ったなどと。

(笑)

A (笑) デンシャオ イッシャ カイキリデ (笑) ホント (笑)。  
( ) 電車を 一車 買い切りで, ( ) ほんと。(笑)。

## 注

- (1) -マは軽い敬意をあらわす接尾語。敬意は-サマより低く、-サよりも高い。
- (2) 結婚式の前に、夫たるべき男性が媒酌人とともにはじめてその妻の生家を訪れること。
- (3) 結婚式の折、新郎新婦に同行する人達、3, 4人が普通で、多くそのおじが選ばれる。[ro:ʔo:]のようにも聞こえる。
- (4) [dzenddzɛn]
- (5) 終わりの部分は笑いで完全には聞き取れない。
- (6) [ʃindzɛŋkɛŋkõ]のように聞こえる。
- (7) [honːtto]。
- (8) [honːtto:]。
- (9) 媒酌をしてまとめた夫婦を、子供とみなしてこういう。
- (10) ちょっと聞くと、[ja<sup>b</sup>bari]と聞こえるが、話し手の清水氏の認定によりヤッパリとした。
- (11) ナクナリマシタンデとンのはいるのが、この方言の普通の言い方。
- (12) 長野県松本市。話し手の小池氏は夫の任地の松本にしばらく住んだ。
- (13) よく聞きとれない。
- (14) 共通語的言い方。在来の方言ならばセンとなる。話し手Bの清水氏もそうであるが、Aの小池氏でもときおり、在来の方言-ンに代わって-ナイが用いられることがある。すぐ次のミナイグライデの-ナイも同じ。
- (15) 「付いて」か。ただし、話し手Bの清水氏は「付いて」はツッテとはならないと言う。馬瀬の調査したところでも、「聞く」「引く」「敷く」などは、在来の方言ではキッテ、ヒッテ、シッテとなるが、「付いて」はそうならない。あるいはツイテとソッテ(添って)の偶発的な混淆か。
- (16) [ho:ʃe]。
- (17) <コンドワ シンローノ ウ>の発話はここで中断され、意味の上では次に続かない。「新郎のうち」と言いかけて途中で止めたものだろう。

- (18) -ナンは -ネのようにも聞き取れる。
- (19) [ʃimpuɲno] のように聞こえるが、清水氏に従い シンプノ とした。
- (20) [ʃiũsekizuki no]。シンセキズキアイノ と言いかけて途中でやめたのかも知れない。
- (21) 共通語的言い方。
- (22) <マキキアワセテ イテ> で「両方で相談しあって」の意味だろうか  
清水氏は言われる。
- (23) 共通語的な言い方。在来の方言ならば ドーズラ となる。すぐ次の  
ードロ も同じ。ほかに もこれと同じ類例がある。
- (24) [konreʃno] と聞こえる。
- (25) 「いつに」の意味でこう言ったものか。
- (26) 聞きとれない。清水氏によれば <ヤツタ コト アルケード> で  
はないかという。
- (27) [u:ntto]。
- (28) [otʃu:niũsama o] のように助詞を離して発音。
- (29) 長野県飯田市。
- (30) <イーダノ シトヲ バイシャク シタ> と言いかけて、佐又の人の  
のことを思い出して、シトヲトとトを加えたものであろう。
- (31) [kadai] と聞こえるが、話し手の清水氏に従い カタイ とした。
- (32) 清水氏の実家の義姉の娘を指す。
- (33) 仲人のほかにいて、仲人よりも責任は重く、式の時には新郎新婦の  
紹介から一切をとりしきる。そして親子の関係は一生続き、ことに生  
まれる子とも縁が撃がることになっているという。ただし、松本地方  
ではハネオヤと呼ぶのが普通のようなのである。
- (34) 長野県松本市大宇里山辺、同入山辺一帯を指す。松本市の東部に位  
置する。
- (35) 在来の方言ならば マンダ。
- (36) オバーは老婦人を親しんで呼ぶ時に用いられる。オバーマよりも敬  
意のない言い方。
- (37) ジファンノ では意味が続かない。

- (38) 中川村方言では [katswide] と発音する者と [katswĩde] と発音する者がいる。後者の方が古い発音らしい。二人の話し手は [katswide]。しかし、清水氏によれば「兄さん」は [aĩsama] であって、[apisama] ではないという。こんな場合に清水氏でも [ĩ] が聞かれる。
- (39) 物をのせてかっいで行く台。板を台とし、両端をつり上げてふたりでかつぐ。嫁入道具・病人などをのせて運ぶに用いる（『日本国語大辞典』）。
- (40) ひとえの布・紙などに油をひいたもの。唐櫃・長持などの覆い、燈台などの敷物として用い、水気や油などの汚れなどを防ぐ。（『広辞苑』）
- (41) [ˈsoẽde]。最初の子音 [s] の摩擦は弱い。
- (42) 荷物を運送する駄馬や人夫をひきつれ、その指揮・監督・警衛にあたること。また、その役。（『日本国語大辞典』）
- (43) 逐語訳すると「そこで言えば」となる。話し手の清水氏は「そこで何をするかと言えば」の意味だろうと言われる。
- (44) 中川村の大字。現在の村の中心はここにある。
- (45) ……ガイトという家名を持つ家。
- (46) ノリマシテの間違いであろう。
- (47) -マについては注(1)参照。
- (48) 長野県駒ヶ根市大字赤穂。旧上伊那郡赤穂町。
- (49) 長野県駒ヶ根市。
- (50) 国鉄飯田線上片桐駅。下伊那郡松川町大字上片桐にある。
- (51) ほとんど聞きとれない。
- (52) 下伊那郡松川町大字大島。国鉄飯田線伊那大島駅がある。
- (53) 話し手小池氏の家の家名。
- (54) 上伊那郡中川村大字片桐の集落名。
- (55) 上伊那郡飯島町大字セス保。
- (56) 上伊那郡辰野町。国鉄辰野駅がある。

昭和53年3月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3丁目9番14号  
電話 東京(900) 3111(代表)

## 国立国語研究所刊行書一覽

### 国立国語研究所報告

|      |                       |           |         |         |
|------|-----------------------|-----------|---------|---------|
| 1    | 八丈島                   | の言語調査     | 秀英出版刊   | 品切れ     |
| 2    | 言語生活                  | の実態       | 〃       | 〃       |
|      | ——白河市および付近の農村における——   |           |         |         |
| 3    | 現代語                   | の助詞・助動詞   | 〃       | 700円    |
|      | ——用法と実例——             |           |         |         |
| 4    | 婦人雑誌                  | の用語       | 〃       | 500円    |
|      | ——現代語の語彙調査——          |           |         |         |
| 5    | 地域社会                  | の言語生活     | 〃       | 品切れ     |
|      | ——鶴岡における実態調査——        |           |         |         |
| 6    | 少年                    | と新聞       | 〃       | 180円    |
|      | ——小学生・中学生の新聞への接近と理解—— |           |         |         |
| 7    | 入門期                   | の言語能力     | 〃       | 品切れ     |
| 8    | 談話語                   | の実態       | 〃       | 〃       |
| 9    | 読みの実験的                | 研究        | 〃       | 〃       |
|      | ——音読にあらわれた読みあやまりの分析—— |           |         |         |
| 10   | 低学年                   | の読み書き能力   | 〃       | 〃       |
| 11   | 敬語                    | と敬語意識     | 〃       | 〃       |
| 12   | 総合雑誌                  | の用語 (前編)  | 〃       | 〃       |
|      | ——現代語の語彙調査——          |           |         |         |
| 13   | 総合雑誌                  | の用語 (後編)  | 〃       | 〃       |
|      | ——現代語の語彙調査——          |           |         |         |
| 14   | 小学校中学年                | の読み書き能力   | 〃       | 400円    |
| 15   | 明治初期                  | の新聞の用語    | 〃       | 品切れ     |
| 16   | 日本方言                  | の記述的研究    | 明治書院刊   | 〃       |
| 17   | 高学年                   | の読み書き能力   | 秀英出版刊   | 〃       |
| 18   | 話しことば                 | の文型 (1)   | 〃       | 〃       |
|      | ——対話資料における研究——        |           |         |         |
| 19   | 総合雑誌                  | の用字       | 〃       | 〃       |
| 20   | 同音語                   | の研究       | 〃       | 〃       |
| 21   | 現代雑誌九十種               | の用語用字 (1) | 〃       | 〃       |
|      | ——総記および語彙表——          |           |         |         |
| 22   | 現代雑誌九十種               | の用語用字 (2) | 〃       | 〃       |
|      | ——漢字表——               |           |         |         |
| 23   | 話しことば                 | の文型 (2)   | 〃       | 〃       |
|      | ——独話資料による研究——         |           |         |         |
| 24   | 横組の字形                 | に関する研究    | 〃       | 〃       |
| 25   | 現代雑誌九十種               | の用語用字 (3) | 〃       | 〃       |
|      | ——分析——                |           |         |         |
| 26   | 小学生                   | の言語能力の発達  | 明治図書刊   | 2,100円  |
| 27   | 共通語                   | 化の過程      | 秀英出版刊   | 品切れ     |
|      | ——北海道における親子三代のことば——   |           |         |         |
| 28   | 類義語                   | の研究       | 〃       | 〃       |
| 29   | 戦後の国民各層               | の文字生活     | 〃       | 400円    |
| 30-1 | 日本言語地図                | (1)       | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ     |
| 30-2 | 日本言語地図                | (2)       | 〃       | 〃       |
| 30-3 | 日本言語地図                | (3)       | 〃       | 〃       |
| 30-4 | 日本言語地図                | (4)       | 〃       | 〃       |
| 30-5 | 日本言語地図                | (5)       | 〃       | 〃       |
| 30-6 | 日本言語地図                | (6)       | 〃       | 10,000円 |

|    |                                           |       |        |
|----|-------------------------------------------|-------|--------|
| 31 | 電子計算機による国語研究                              | 秀英出版刊 | 450円   |
| 32 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)<br>——親族語彙と社会構造——  | 〃     | 品切れ    |
| 33 | 家庭における子どものコミュニケーション意識                     | 〃     | 350円   |
| 34 | 電子計算機による国語研究(II)<br>——新聞の用語用字調査の処理組織——    | 〃     | 品切れ    |
| 35 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)<br>——マキ・マケと親族呼称—— | 〃     | 450円   |
| 36 | 中学生の漢字習得に関する研究                            | 〃     | 5,000円 |
| 37 | 電子計算機による新聞の語彙調査                           | 〃     | 1,300円 |
| 38 | 電子計算機による新聞の語彙調査(II)                       | 〃     | 2,800円 |
| 39 | 電子計算機による国語研究(III)                         | 〃     | 700円   |
| 40 | 送りがな意識の調査                                 | 〃     | 1,500円 |
| 41 | 待遇表現の実態<br>——松江24時間調査から——                 | 〃     | 900円   |
| 42 | 電子計算機による新聞の語彙調査(III)                      | 〃     | 1,200円 |
| 43 | 動詞の意味・用法の記述的研究                            | 〃     | 5,000円 |
| 44 | 形容詞の意味・用法の記述的研究                           | 〃     | 3,000円 |
| 45 | 幼児の読み書き能力                                 | 東京書籍刊 | 4,500円 |
| 46 | 電子計算機による国語研究(IV)                          | 秀英出版刊 | 700円   |
| 47 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)<br>——性用語彙と価値観——   | 〃     | 700円   |
| 48 | 電子計算機による新聞の語彙調査(IV)                       | 〃     | 3,000円 |
| 49 | 電子計算機による国語研究(V)                           | 〃     | 900円   |
| 50 | 幼児の文構造の発達<br>——3歳～6歳児の場合——                | 〃     | 品切れ    |
| 51 | 電子計算機による国語研究(VI)                          | 〃     | 1,000円 |
| 52 | 地域社会の言語生活<br>——鶴岡における20年前との比較——           | 〃     | 1,800円 |
| 53 | 言語使用の変遷(1)<br>——福島県北部地域の面接調査——            | 〃     | 2,500円 |
| 54 | 電子計算機による国語研究(VII)                         | 〃     | 1,000円 |
| 55 | 幼児語の形態論的な分析<br>——動詞・形容詞・述語名詞——            | 〃     | 1,300円 |
| 56 | 現代新聞の漢字                                   | 〃     | 3,000円 |
| 57 | 比喩表現の理論と分類                                | 〃     | 6,000円 |

#### 国立国語研究所資料集

|    |                           |         |        |
|----|---------------------------|---------|--------|
| 1  | 国語関係刊行書目(昭和17～24年)        | 秀英出版刊   | 45円    |
| 2  | 語彙調査<br>——現代新聞用語の一例——     | 〃       | 品切れ    |
| 3  | 送り仮名法資料集                  | 〃       | 〃      |
| 4  | 明治以降国語学関係刊行書目             | 〃       | 〃      |
| 5  | 沖繩語辞典                     | 大蔵省印刷局刊 | 3,800円 |
| 6  | 分類語彙表                     | 秀英出版刊   | 1,600円 |
| 7  | 動詞・形容詞問題語用例集              | 〃       | 1,700円 |
| 8  | 現代新聞の漢字調査(中間報告)           | 〃       | 500円   |
| 9  | 牛店安愚楽鍋用語索引                | 〃       | 1,500円 |
| 10 | 方言談話資料(1)<br>——山形・群馬・長野—— | 〃       | 非売     |

#### 国立国語研究所論集

|   |             |       |     |
|---|-------------|-------|-----|
| 1 | こ と ば の 研 究 | 秀英出版刊 | 品切れ |
|---|-------------|-------|-----|



|   |   |   |   |   |   |   |       |       |        |
|---|---|---|---|---|---|---|-------|-------|--------|
| 2 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 2 集 | 秀英出版刊 | 750円   |
| 3 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 3 集 | "     | 品切れ    |
| 4 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 4 集 | "     | 1,300円 |
| 5 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 5 集 | "     | 1,300円 |

国立国語研究所年報 (秀英出版刊)

|    |            |      |    |            |      |
|----|------------|------|----|------------|------|
| 1  | 昭 和 24 年 度 | 品切れ  | 15 | 昭 和 38 年 度 | 250円 |
| 2  | 昭 和 25 年 度 | "    | 16 | 昭 和 39 年 度 | 品切れ  |
| 3  | 昭 和 26 年 度 | 160円 | 17 | 昭 和 40 年 度 | 250円 |
| 4  | 昭 和 27 年 度 | 160円 | 18 | 昭 和 41 年 度 | 300円 |
| 5  | 昭 和 28 年 度 | 品切れ  | 19 | 昭 和 42 年 度 | 300円 |
| 6  | 昭 和 29 年 度 | 200円 | 20 | 昭 和 43 年 度 | 品切れ  |
| 7  | 昭 和 30 年 度 | 品切れ  | 21 | 昭 和 44 年 度 | "    |
| 8  | 昭 和 31 年 度 | "    | 22 | 昭 和 45 年 度 | 400円 |
| 9  | 昭 和 32 年 度 | "    | 23 | 昭 和 46 年 度 | 450円 |
| 10 | 昭 和 33 年 度 | "    | 24 | 昭 和 47 年 度 | 450円 |
| 11 | 昭 和 34 年 度 | "    | 25 | 昭 和 48 年 度 | 品切れ  |
| 12 | 昭 和 35 年 度 | 350円 | 26 | 昭 和 49 年 度 | 600円 |
| 13 | 昭 和 36 年 度 | 160円 | 27 | 昭 和 50 年 度 | 700円 |
| 14 | 昭 和 37 年 度 | 220円 | 28 | 昭 和 51 年 度 | 非 売  |

国 語 年 鑑 (秀英出版刊)

|            |        |            |        |
|------------|--------|------------|--------|
| 昭 和 29 年 版 | 品切れ    | 昭 和 41 年 版 | 1,100円 |
| 昭 和 30 年 版 | "      | 昭 和 42 年 版 | 1,100円 |
| 昭 和 31 年 版 | "      | 昭 和 43 年 版 | 品切れ    |
| 昭 和 32 年 版 | "      | 昭 和 44 年 版 | 1,500円 |
| 昭 和 33 年 版 | "      | 昭 和 45 年 版 | 1,500円 |
| 昭 和 34 年 版 | "      | 昭 和 46 年 版 | 2,000円 |
| 昭 和 35 年 版 | "      | 昭 和 47 年 版 | 2,200円 |
| 昭 和 36 年 版 | 800円   | 昭 和 48 年 版 | 2,700円 |
| 昭 和 37 年 版 | 品切れ    | 昭 和 49 年 版 | 3,800円 |
| 昭 和 38 年 版 | "      | 昭 和 50 年 版 | 3,800円 |
| 昭 和 39 年 版 | 980円   | 昭 和 51 年 版 | 4,000円 |
| 昭 和 40 年 版 | 1,100円 | 昭 和 52 年 版 | 4,500円 |

---

|                 |                      |       |      |
|-----------------|----------------------|-------|------|
| 高 校 生 と 新 聞     | 国立国語研究所<br>日本新聞協会 共編 | 秀英出版刊 | 280円 |
| 青年とマス・コミュニケーション | 日本新聞協会<br>国立国語研究所 共著 | 金沢書店刊 | 品切れ  |

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS

SOURCE X

TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS  
IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 1)

CONTENTS

**Foreword**

**Purpose and Outline**

**Text**

- Part 1 : YAMAGATA PREFECTURE (Hamlet Yati, Township  
Kahoku, District Nisimurayama)
- Part 2 : GUNMA PREFECTURE (Hamlet Okkai, Village Tone,  
District Tone)
- Part 3 : NAGANO PREFECTURE (Hamlet Kazurasima, Village  
Nakagawa, District Ina)

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
TOKYO JAPAN

1978